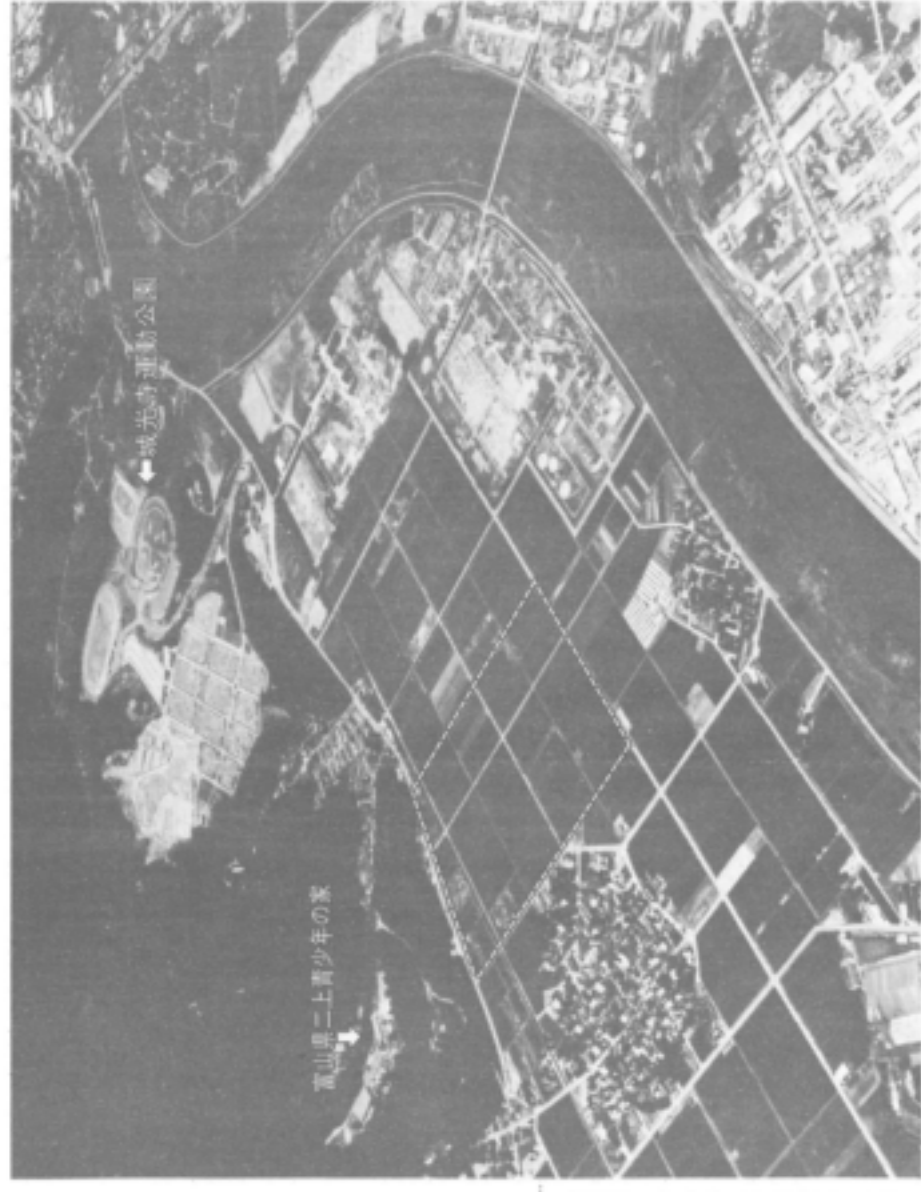


特色
一般教養
入試は
大の囲学
学生感
高岡短期

わが国唯一の国立高岡短期大学あす開学



高岡市二上地内の建設予定地

高岡短期大学の開学を祝す
富山県知事 中 沖 豊

教育立国として、明日も高岡市に誇りに感じられる人づくりを、高岡短期大学が果たすことを心から期待しております。高岡短期大学の開学を祝すとともに、高岡短期大学の発展を期すことを心から願っております。

高岡短期大学の開学を祝す
高岡市長 堀 健治

高岡短期大学の開学を祝すとともに、高岡短期大学の発展を期すことを心から願っております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。

高岡短期大学の開学を祝す
高岡市長 堀 健治

高岡短期大学の開学を祝すとともに、高岡短期大学の発展を期すことを心から願っております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。

明日、国立高岡短期大学学長に就任する大阪大学教授の横山 保氏(六)に聞く

「高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。」

「高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。」

「高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。」

社会人の推薦入学も

高岡短期大学の推薦入学制度は、社会人の推薦入学も受け付けています。高岡短期大学の推薦入学制度は、社会人の推薦入学も受け付けています。

《学科・定員》

学 科	入学定員	相 定 員
■産業理工学科	75人	150人
金属工業専攻	(20人)	(40人)
洋工専攻	(15人)	(30人)
木村工業専攻	(15人)	(30人)
産業デザイン専攻	(25人)	(50人)
■産業情報学科	125人	250人
経営情報専攻	(40人)	(80人)
情報処理専攻	(40人)	(80人)
ビジネス外語専攻	(45人)	(90人)
・英米コース	(30人)	(60人)
・中国コース	(15人)	(30人)
計 2 専 科	200人	400人



「国立高岡短大」開学までの歩み

「国立高岡短大」開学までの歩み

高岡短期大学の開学までの歩みは、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。

大事業、軌道に乗る

高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。高岡短期大学の開学は、高岡市の教育文化の発展に大きく貢献するものと期待しております。

高岡短期大学二十二年の歩み

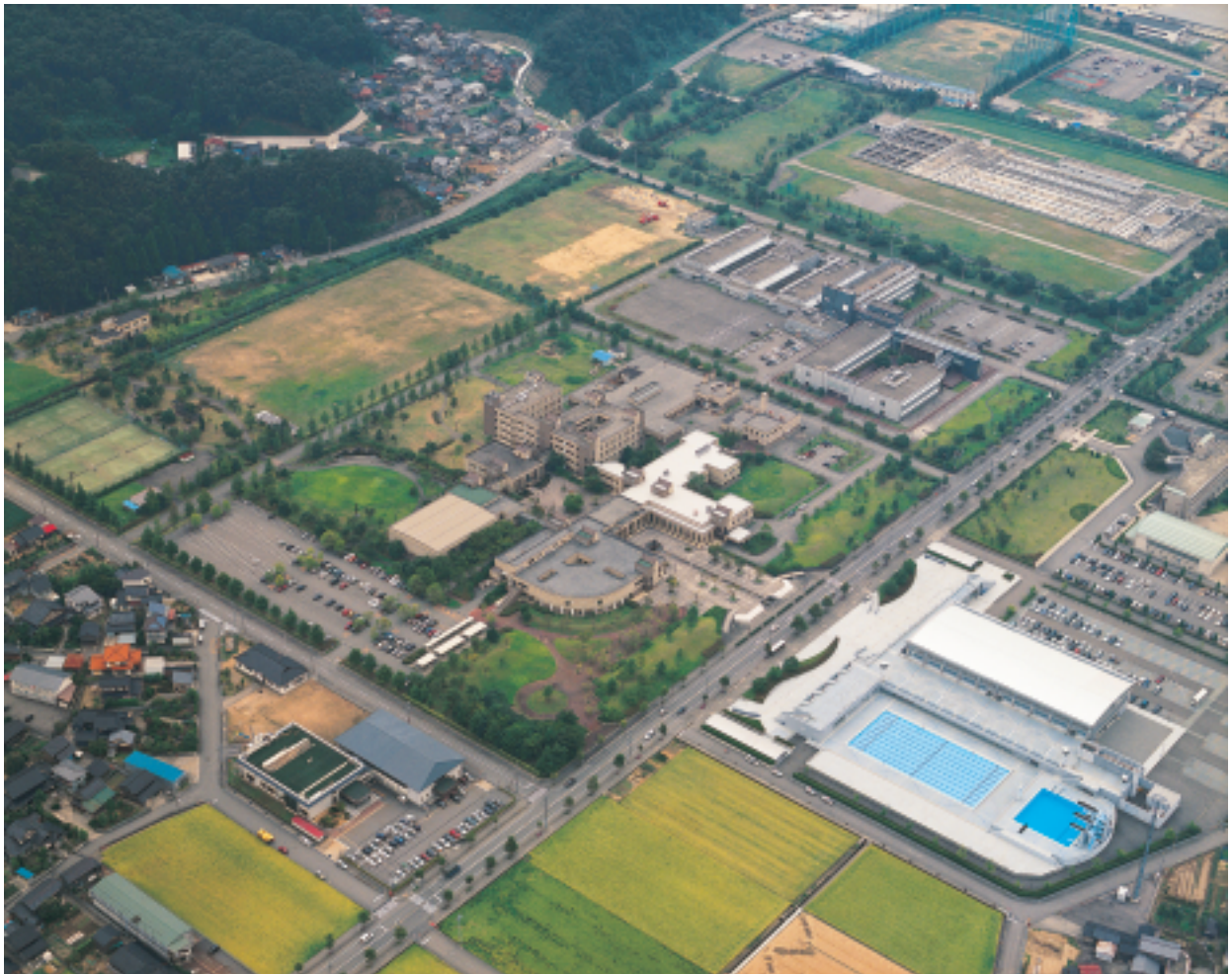


題字 西頭徳三学長





二上地区キャンパス予定地



上空から見た最近の高岡短期大学(平成16年9月撮影)

■卒業制作・卒業研究

■産業造形学科



金工・込型鑄造作品

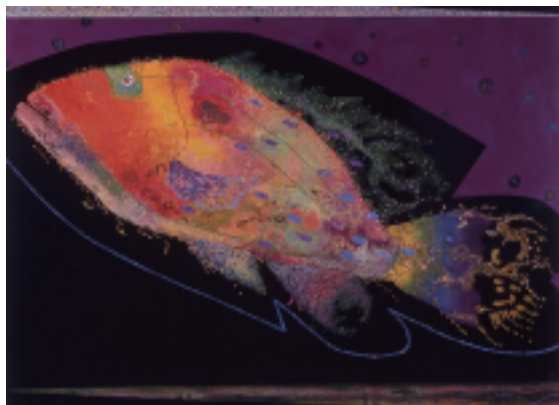


金工・蠟型鑄造作品



木工・指物作品

■産業デザイン学科



漆工・漆パネル



プロダクトデザイン・携帯電話

■地域ビジネス学科



卒業論文集

授業風景





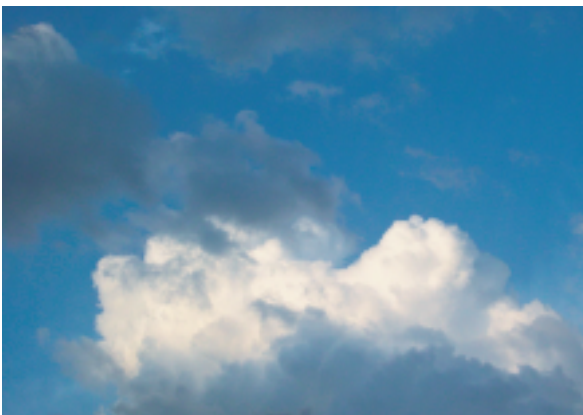
■二上の四季



4月



5月



8月



9月



10月



11月



1月



2月

二上キャンパスの輝き、永遠に

—記念誌の発刊に当たって—

高岡短期大学長 西頭徳三



昭和39(1964)年5月、富山大学評議会(大学における最高意思決定機関)は、ひとつの決議を行った。この決定が地元の各界を巻き込む一大運動に発展するとは誰もが予想しなかったに違いない。わが国は、東京オリンピック開催を目前にして、活気満ち溢れていた頃の出来事である。四十年も前のことである。

決議の内容は、富山大学工学部を高岡市中川から富山市五福に移すというものであった。戦後発足した新制・国立大学は、各地の既存高等教育機関を母体にし、いわゆる「タコ足大学」が多かった。そのため、大学本部キャンパスへの学部移転・集中の動きが急であった。富山大学工学部も大正末期設立の高岡高等商業学校を母体としており、この決議は、北陸の中核都市・高岡市が唯一の高等教育機関を失うことを意味していた。

高岡短期大学の歴史には、大きく三つの画期があると思う。すでに述べた、昭和39年5月の富山大学評議会の移転決議が第一の画期である。第二のそれは、昭和58(1983)年10月1日の地元の熱意が結実した高岡短期大学の開学である。そして、第三の画期は、平成15(2003)年5月の富山県内国立三大学の再編・統合の合意である。この間の詳細な歴史については、記念誌(第1分冊回想編)の記述に譲らざるを得ないが、ここでどうしても、第三の画期を開かれた蠟山昌一学長のことに触れておきたい。

蠟山昌一先生は、平成10(1999)年4月1日、本学の第三代学長に就任された。その頃は、国立大学の改革期に当たり、先生は、本学と富山大学、富山医科薬科大学との統合・再編問題で強力なリーダーシップを発揮された。ところが、新大学の発足を待たずして、ご病気のため急逝された。残念でならない。新・富山大学は、蠟山学長の先見の明なくしてはとうてい実現し得なかったに違いない。

平成17(2005)年10月1日、高岡短期大学は創立22周年を迎える。この間、本学は高岡市の歴史的文化的な伝統に支えられ、経済的な環境に育まれながら、約四千名もの人材を地域社会に送り出した。

このような教育・研究成果を挙げ得たのは、本学の設立、それ以降の大学運営にご協力を賜った、県・市など地元関係者、本学の旧・現教職員、そして卒業生・後援会の皆様のお陰である。特に、記念誌の発刊に当たり、ご多忙の中で古い記憶を活写して戴いた執筆者の皆様に厚くお礼を申し上げたい。

二上キャンパスの輝き、永遠たることを祈念して。

目 次

写真が語る高岡短大の思い出(i)	1
巻頭言 高岡短期大学長 西頭徳三	7
寄稿文 前富山県知事 中沖 豊	10
前高岡市長 佐藤孝志	12
理事 荒井公夫	14
高岡商工会議所会頭 南 義弘	15
座談会 「高岡短期大学の二十二年間を語る」	17
写真が語る高岡短大の思い出(ii)	33

第1章 高岡短期大学の黎明期と誕生 41

元創設準備室長 柳田友道(42)／初代学長 (故)横山 保(44)／初代副学長 徳平 滋(45)／第2代副学長 島田 治(46)／初代事務部長 江田晴夫(49)／元事務部長 川崎 晃(50)／名誉教授 麻生三郎(51)／名誉教授 阿部 統(52)／名誉教授 中川 宏(53)／名誉教授 黒岩靖司(55)／名誉教授 澤本正巳(56)／名誉教授 木村幸信(58)／産業造形学科教授 三船温尚(60)／産業造形学科教授 小松研治(61)／元保健体育助手 加藤敏弘(62)／地域ビジネス学科教授 磯部祐子(63)

卒業生の回想 情報処理専攻 高岡短大同窓会長 寺口克己(63)／ビジネス外語専攻(英米コース) 中村里恵子(旧姓 朝倉)(65)／金属工芸専攻 藪 元昭(66)／経営実務専攻 北川真里子(旧姓 福光)(67)／木材工芸専攻 片岸一利(68)／情報処理専攻 中村聡志(68)

第2章 高岡短期大学の成長期 71

第3代副学長 戸田成一(72)／名誉教授 後藤義雄(73)／名誉教授 尾崎秀男(74)／名誉教授 久保脩治(75)／名誉教授 小関利紀也(76)／名誉教授 林 暢夫(77)／名誉教授 蛭川 彰(78)／名誉教授 中野清治(79)／名誉教授 林 哲三(80)／元産業情報学科助教授 小郷直言(81)／地域ビジネス学科助教授 藤田徹也(82)／産業デザイン学科助教授 矢口忠憲(83)

卒業生の回想 金属工芸専攻 伊藤良治(84)／経営実務専攻 山本美智恵(旧姓 室谷)(84)／情報処理専攻 堀野幸一(85)／産業デザイン専攻 岡本博美(旧姓 牧野)(86)／木材工芸専攻 本多一郎(86)／専攻科 地域産業専攻 田中早苗(旧姓 遠藤)(87)／産業デザイン専攻 瀧澤 理(87)／専攻科 地域産業専攻 矢郷清孝(90)／金属工芸専攻 塚本京香(90)／情報処理専攻 遠藤久美子(旧姓 中川)(91)／情報処理専攻 竹田加奈子(旧姓 荒船)(92)／専攻科 地域産業専攻 片桐毅幸(92)

第3章 高岡短期大学の成熟期93

第2代学長 宮本匡章(94)／第4代副学長 大谷利治(95)／第5代副学長 高橋一之(96)／元事務部長 木野光郎(97)／元経営実務専攻教授 鶴田彦夫(101)／名誉教授 谷口義人(103)／理事・副学長 滝沢 浩(104)／保健管理センター所長 立浪 勝(105)／元産業デザイン学科助手 久湊尚子(106)

卒業生の回想 経営実務専攻 田村信子(旧姓 数間)(107)／木材工芸専攻 柳本久美子(旧姓 頭川)(108)／産業デザイン専攻 田中英興(108)／専攻科 産業造形専攻 田村尚子(109)／情報処理専攻 寺井義則(110)／専攻科 産業デザイン専攻 谷澤 悦(110)／専攻科 地域ビジネス専攻 坂下真理子(旧姓 新保)(111)／木材工芸専攻 開 裕美子(112)／経営実務専攻 梅木なつか(旧姓 平野)(112)／専攻科 産業造形専攻 上田由紀(113)／金属工芸専攻 小野周平・奈加子(旧姓 北川)(114)／漆工芸専攻 川田 勉(114)／情報処理専攻 勝間田瑠美(旧姓 吉田)(115)

第4章 高岡短期大学の発展と進化117

第3代学長 (故)蠟山昌一(118)／蠟山洋子(蠟山昌一前学長御令閨)(119)／第6代副学長 行田 博(120)／理事・副学長 水島和夫(121)／前事務部長 古屋 勇(126)／名誉教授 倉田久敬(128)／名誉教授 根本曠子(129)／産業造形学科助教授 齊藤晴之(131)／高岡短期大学長 西頭徳三(132)／事務部長 糺山登志雄(134)

卒業生の回想 専攻科 産業デザイン専攻 野田由紀子×升井チサ(135)／専攻科 産業デザイン専攻 清水亜利沙(136)／専攻科 産業造形専攻 藤田いづみ(136)／ビジネス外語専攻(中国コース) 宮本久美子(137)／経営実務専攻 北島のり子(138)／専攻科 地域ビジネス専攻 竹内麻美(139)／国際・英語コース 小橋千賀(140)／経営コース 古戸美佳(141)／国際・英語コース 田澤友里子(142)／国際・中国語コース 布目祥子(143)

第5章 高岡短期大学の閉学と富山大学・芸術文化学部への移行を控えて145

産業造形学科長 堀江秀夫(146)／産業デザイン学科長 森田 力(147)／地域ビジネス学科長 近藤 潔(148)

高岡短期大学2冠達成 産業造形学科教授 小松研治(150)／産業デザイン学科教授 長山信一(151)

新・富山大学芸術文化学部創設記念「東京シンポジウム」 産業造形学科教授 貴志雅樹(152)

速報 高岡短期大学 GP 第3弾達成！(154)

写真が語る高岡短大の思い出(iii)155

付録 新・富山大学芸術文化学部の紹介162

写真が語る高岡短大の思い出(iv)164

結言 高岡短期大学長 西頭徳三167

編集後記168

県民に親しまれる大学をめざして



前富山県知事 中沖 豊

1 知事初仕事としての誘致活動

私は、人づくりこそが県づくりの根本であるとの信念に立って、全力を尽くしてきました。この間、学校施設や運動場などを積極的に整備すること、発達段階に応じた特色ある教育や生涯学習を推進すること、美術館や文化ホールなどユニークな教育文化施設の整備などを進めてきました。

また、私は、若者の定着と流入を促進し、活力ある地域づくりを進めるためには、高等教育機関の整備が極めて重要であると考え、県内大学の整備に努力してまいりました。

私が知事に就任した当時、高岡市にあった富山大学工学部を富山市五福へ移転することや、その跡地に産業短期大学を設置することなどを盛り込んだ構想が進められていました。私は、かつて県の教育長をしていたこともあり、かねてからこの構想に高い関心を持っていたところでもあります。

11月11日に初登庁した私は、早速、同月24日から、堀高岡市長とともに、国に創設準備費の昭和56年度予算への計上を陳情しました。甲斐あって準備費は予算化され、翌年4月には、富山大学の中に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」が設置されました。私の知事としての初仕事は、高岡短期大学の開設に向けた、この確実な第一歩を刻むことであったわけです。

2 開学決定までの苦難

次の課題は、創設費の国予算への計上でした。私は、国に対し、高岡市二上地区に立地してほしいこと、富山大学工学部移転後の跡地は県及び高岡市で譲り受けたいことを申し出ました。しかし、当時は、臨調第一次答申において大学や学部の新増設は原則見送ることとされるなど、大学の新設には大変厳しい逆風が吹いており、結局、昭和57年度予算への創設費計上は見送られてしまいました。

高岡短期大学が実現するか否かの大きな節目となったのは、昭和57年度の国立大学統合整備等連絡協議会でした。全国の短大を統廃合するという大きな流れの中で、高岡短期大学の新設は、極めて厳しく予断を許さない状況でした。そうしたなかで、私は、二上地区での用地の確保、インフラ整備への協力、大学を支援するための財団の設立等を確約し、地元の熱意を強く訴えた結果、同年8月の協議会で念願の短大設置が決定されました。このときは、地元の熱い要望がようやく実ったと、関係者の喜びもひとしおでした。そして12月には、関係の国会議員の協力などもあり、昭和58年度予算案に開学経費が計上されました。また、翌年3月には国立学校設置法の一部を改正する法律が公布されました。これにより、高岡短期大学の昭和58年10月の開学と昭和61年4月からの学生受入れが、正式に決定されたのです。ここに至るまでには、国会議員の先生方をはじめ大変多くの皆様のご尽力とご協力をいただきました。

3 地元の期待

高岡短期大学には、地域に開かれた新しい形の大学、いわゆるコミュニティ・カレッジとして、地域社会の活性化、本県の産業や文化の振興など幅広い分野にわたり、各方面から大変大きな期待が寄せられていました。このため、地域の産業と連携した学科構成、社会人受入れのための推薦入学制の導入、民間からの教員の登用、試験研究機関や民間との共同研究など、地域に根ざし、県民に親しまれる大学となるよう、県からも様々な提案をしました。

例えば、学科構成については、当初は、産業工芸学科、産業経営学科、国際教養学科の3学科体制とされていましたが、私は、来るべきIT時代の到来を見据え、最先端の設備機器を利

用する情報学科が是非とも必要であると提案し、産業情報学科という方向へ結実していきました。

また、国際教養についても、これからの時代には実用的な外国語の能力が必要になると考え、文学中心ではなく、ビジネス外語を主とした学科とされるよう提案しました。

こうした地元としての期待が次々に盛り込まれ、昭和58年2月に、2学科7専攻2コースという最終的な基本構想が取りまとめられたことは本当に嬉しいことでした。

4 財団法人高岡短期大学協力会の設立

文部省に約束した協力の一つに、大学を物心両面から支える財団の設立がありました。

国の厳しい財政状況のもと、この大学を真に魅力あるコミュニティ・カレッジとして発展させていくためには、教育研究に必要な図書や実験・実習設備の整備に地元の協力が欠かせません。

このため、県や市町村、民間が参画し、開学直前の昭和58年9月に、財団法人高岡短期大学協力会が設立されました。当時の金利は6%弱でしたので、毎年継続的に2千万円程度の支援を行うため、総額3億円の寄付を募ることとしました。県や高岡市をはじめ各市町村が全面的に協力するとともに、民間企業からの寄付募集にあたっては、三協アルミ工業株式会社の竹平政太郎会長をはじめ地元高岡市の皆さんや富山県商工会議所連合会のご協力をいただき、募金活動が活発に展開されました。

5 開学から学生受入れへ

そしていよいよ、昭和58年10月、高岡短期大学が開学しました。横山保初代学長のもと、施設整備や教育課程の編成など学生受入れに向けた諸準備が進められることとなりましたが、厳しい財政状況を反映し、国の予算や定員措置はとても十分なものとはいえませんでした。このため、柳田富山大学長や横山学長と協議のうえ、優秀な県職員を大学事務局へ派遣しました。

また、地域に開かれた大学とするため、「富山県、高岡市及び高岡短期大学との連絡会議」を設け、施設計画や教員配置計画、カリキュラム、開放センターの位置づけ、学則の規定などについて、県からも随分多くの提案をさせていただきました。こうした地元の意向を十分反映されたからこそ、今日の高岡短期大学の姿があるのだと思っています。

横山学長も、地元のサポートがなければ大学は育たないとの思いから、昭和59年に、高岡市と富山市で懇談会を開催し、地元の意向把握に努められたのであります。

このような努力が実を結び、高岡短期大学協力会には、2年間で目標の3億円の募金が寄せられました。この多額の資金をもとに、現在まで支援を続けることができたのは、県民、企業、市町村のこの大学に対する期待の大ききの表れだと思っています。

昭和60年4月、講義研究棟の起工式が高岡市二上の地で執り行われました。まさに紆余曲折を経て設置が決定されたこの大学が、学生の受入れに向けて着実に整備されていることを感じ、胸を熱くした瞬間でした。

6 3大学統合に向けて

今、高岡短期大学、富山大学、富山医科薬科大学では、3大学統合に向けた準備が進められており、例えば、この高岡短期大学は4年制の芸術文化学部として生まれ変わろうとしています。

今後とも、①地域に根ざした大学として、県民に親しまれる交流拠点となること、②県内芸術文化団体など関係機関や団体との連携を密にし、多くの皆さんの期待に応える大学となること、③環日本海時代の到来などを踏まえ、対岸地域をはじめ世界各国との交流・連携を深め、世界に貢献する大学となることなど、常に高い理想を掲げ、その実現をめざし、世界に冠たる大学として大きく発展されることを心から念願しています。

これまで一生懸命に取り組んできました私たちとしましても、この大学の限りない発展を願ってやみません。高岡短期大学の大飛躍を心からお祈り申し上げます。

高等教育機関に寄せる 高岡人の熱き思い

前高岡市長 佐藤孝志



国立高岡短期大学のことを見聞きする高岡の人たちは、誰しも此の地にあった素晴らしい学校とその学生たちについて、懐かしい思い出を持っていることであろう。

私の場合は、戦争中の勤労奉仕で、農作業の手伝いに来ていた多くの学生さんが我が家で昼食をとり、幼児の私に夫々のお国言葉で話して貰ったことである。今考えてみれば、大正13年からあった高岡高商か、昭和19年に転換されたばかりの高岡工専の学生さんであったのだろう。戦後その学校は富山大学工学部となったが、此の地に高等教育機関のあることは、昔から商業・工業の町ではあるが、学問・文化も大事にして来た我が高岡人の大きな誇りであった。

私は小学・中学・高校と進み、この大学の前を通る際には、いつも伝統を感じさせる趣きのある校舎・官舎群、美しいポプラの並木道、また、構内やグラウンドにいる大勢の学生さんの姿を目にして、自然と大学なるものに進みたいとの向学心を誘われて行ったように思う。そう言えば、並木道の一部は今も残っていて、大学跡地に建てられた高岡高校の現校長は、テレビドラマ「冬のソナタ」に出て来る例の並木道のような並み木が本校にもあると、ユーモアたっぷりに話しておられる。

その後、大学生・社会人として故郷を離れていた頃、私が高岡出身と告げると、時に自分も高岡高商や高岡工専で学んだと言って、昔の高岡のまちのことを懐かしげに話してくださる学者や会社の幹部の方々にお会いして嬉しく思ったことがしばしばあった。

ところが当時の堀市長(ご自身が高岡高商第一回生でもあった。)を始め高岡を挙げての存続要望にもかかわらず、富大工学部が富山市内に移転統合させられたのは誠に残念なことであった。国立大学のキャンパスの分散例はいくらかもあり、例えば彦根市には高岡高商と同じ歴史を辿った彦根高商が滋賀大経済学部として、また、浜松市には浜松工専が静岡大工学部として夫々残っている。いずれも高岡市と同じく県内第二の都市である。

このような事情と地元の意向も考慮されてか、幸い高岡には国立高岡短期大学というユニークな大学が設置されることとなり、私は市長就任直後の昭和63年夏に、この大学のデザイン性に優れた立派な学舎と学長を始めスタッフや学生たちの意欲あふれる姿を拝見し、胸を撫で下したものであった。

そういうこともあって、高岡短大のいろいろな事業に市として出来る限りのご協力を惜しまず、勿論厳正な試験を経ての同大学卒業生の市職員への採用、進学希望のある市職員の同大学への留学派遣などを行って来たり、市政やまちづくりのための企画立案に際して、多くはそのための委員会・審議会の正副委員長や委員に同大学の先生方にご就任していただき、数多くの貴重なご助言を得たりした。個別の問題のご相談などで先生方の門を叩いたことも数限りない。そして嬉しいことには、大学自身が「広く地域社会に開かれた大学」を建学の精神として、公開講座、共同研究などを通じて、地元の住民や企業などに多大の恩恵を与えて下さっている。

市長の仕事の大事なものに、市内の各地域の住民、各界各層の人々などから、市政やまちづくりについてのご意見やご要望を伺うことがあるが、そのような場では、「高岡短大の四年制を」という声が数多く出された。二年間の修業期間では社会が必要とするレベルの技術・技法を中々習得出来ないのではないかという現状論から、今後の超少子化時代における大学間の激しい競争や女性の四年制大学志向の高まりの下では、二年制で女子学生の割合が極めて高い大学は生き残れないのではないかの懸念まであった。

そのような声が高まって来たことから、私たちは大学にとって第三者的立場に立つものであるが、私の市長三期目の平成9年に、県西部の市の代表、商工会議所、産業経済界の有識者など15人からなる「国立高岡短期大学の四年制移行を考える懇談会(会長高岡市長)」を設置した。

県内企業・高校進路指導主事・高岡短大在学生・同卒業者に対するアンケート調査、当時の蠟山学長からのお考えの拝聴、高岡短大をめぐる各種資料の詳細な分析などを基に、何度も意見交換を行い、平成11年に、様々な形の四年制移行を要望する旨の提言を行った。その中では、高岡短大当局の専攻科の一層の充実、大学の名称からの「短期」の削除などの実質四年制化のお考えも、四年制移行への前段階の方策として、これを地元としても支援することとしていた。

この提言が出された直後、私は高岡短大はもとより、富山県や文部本省に本提言を持参し、それぞれ要望を行なったが、その折りの反応は、趣旨として理解出来るものの実現は難しいというものであった。残念なことであったが、国立の短期大学という国にとって例外的、実験的な機関を国自ら改組する訳には行かないし、大学内部には現在の教授スタッフが四年制化のための有資格審査をどの程度クリア出来るかの問題があったのではないかと憶測している。

このたび、関係者の熱心なご検討を経て、高岡短大の現在の学科を残したままでの四年制化ではないものの、県内国立三大学の再編統合の中で、新しい理念に立った学部である「富山大学芸術文化学部」が現高岡短大のあるキャンパスに設置されることとなった。その意味では、私たち高岡人の四年制大学の要望が形を変えて実ったもので、嬉しく、かつ、ありがたく思っている。

およそ芸術・文化のことを学ぼうとする全国の有為の若者は、何よりも高岡の大学へ行かなければならないという程の存在価値の高い学部になり、この大学とその教授・学生の皆様が高岡を始め県西部の人々に親しまれる学問・文化の交流の場となることを期待している。そして、地元の産業経済界、市民、行政を挙げて、この新しい大学学部に出来る限りの支援がなされることを切に願っている。

「たかたん」と私



理事 荒井公夫

昭和33年春大学を卒業した私はそのまま東京で就職し、ずっと故郷高岡とは折々に帰省はするものの略無縁の生活を送っていました。その高岡へUターンして、所謂エンジニアリング系の小さな会社を創設したのが昭和47年の春、36歳になったばかりの頃でした。会社員時代は人間関係も限られ、又何度も転勤があったりして、自分の住む地域社会のことなどしっかり考えて見たことなどありませんでした。

しかし高岡で新しく会社を立上げたとなるとそうは行きません。地域社会と多様な繋がりを持つことがビジネスチャンスの拡大にもなるのではないかと考え、高岡青年会議所に入会しました。私にはJCでの活動は新鮮で、宝の山の中に居るようでした。国内各地での生活体験や当時としては機会の少なかった異文化に触れた経験などを活かして、主として街づくりや文化創造の分野で、市当局や商工会議所に様々な提案をしていました。その中の一つが富山大学工学部の富山市五福への移転後の高岡での高等教育機関をどう考えるか、という極めて大きな問題でありました。今想えば高岡短大とのご縁の始まりです。

私は高岡市の米国の姉妹都市であるインディアナ州フォートウェイン市をその頃すでに何度か訪れていましたが、同市にあるIUPUI・FW校(インディアナ大学パデュー大学フォートウェイン協同校舎)を視察して、これは地方都市におけるコミュニティカレッジの素晴らしい在り方だなと感じ、高岡で懸案となっていた国立高岡産業短期大学(当時)の学科と地域との関連性を考える上でおおいに参考になりました。

お陰さまで新会社の経営も軌道に乗り始めた昭和58年5月、私自身思ってもいなかったことが起きました。高岡市の助役に就任することとなったのです。市政運営に民間の経済人の感覚と手法を取り入れたいとの市長の主旨だったようです。その頃新大学問題は、場所も初代学長の人事も開学時期も決まっており、学科とその内容については未だ最終決定していませんでした。特に情報系と語学系は時代や地域のニーズに対応すべくカリキュラムを充実させなければならないと思い、富山大学にあった準備室に横山先生を訪ね、意見交換を何度かさせて頂きました。

そして昭和60年4月11日本学の新営工事安全祈願祭が現地で挙行され私は市助役として列席いたしました。瀟洒なキャンパスが完成し、翌年4月15日に本学第一期生の入学式が行なわれました。

日本中何処にもない、地域に開かれたユニークな短大は「たかたん」の愛称で市民に親しまれ、親しみやすいキャンパスの中での開放センター諸活動や産学交流も成果をあげてきました。昭和63年5月市助役退任後再び経済界に戻った私は、程なく高岡商工会議所副会頭となり、今度はその立場で短大と接することとなりました。万葉線の存続が議論されたときの故蠟山学長の力強いご発言は、存続の決定打となりました。

その小ささが逆に大きな力となっていた我が国立高岡短期大学は創設20年を経て本年10月新富山大学の芸術文化学部となりますが、建学の精神は永く継承されると信じています。

国立高岡短期大学の思い出



高岡商工会議所会頭 南 義弘

昭和39年に、富山大学工学部が富山市五福キャンパスへ移転する事が発表されて、以来、高岡市から、国立の高等教育機関がなくなると云う事で、大変な騒ぎになりました。

昭和50年代に入り、国立の4年制大学の開設は、困難と云う事で、当時としては、ユニークな「コミュニティ・カレッジ」構想による、国立高岡短期大学の開設が決まりました。

そして、高岡地域のニーズに応え、地域の産業、福祉、文化の向上発展に寄与する事といった機能を併せもつことを目的に「高岡短期大学」として、地域に開かれた、特色ある新しい短期大学が、昭和58年10月、めでたく開学いたしました。

私、自身、千葉工業大学の第1回の卒業生であり、昭和35年監事になり昭和36年より、現在まで、ずっと理事を務めております。

大学経営に参画して、いろいろな面で大変苦勞いたしました。幸い、現在では、大学院を備えた、学生一万人規模の工業大学になっております。

このような関係で、高岡での大学設置について、大変興味を持っておりました。

奇しくも、平成元年7月、私が、高岡商工会議所の会頭になりましてから、地場産業である高岡銅器や高岡漆器の振興や高岡クラフトコンペの運営、また、高岡のものづくりのデザイン開発にも大学のご協力を頂いて参りました。

歴代学長の横山保先生、宮本匡章先生、今は亡き、蠟山先生、そして現在の西頭学長さんとも親しくお付き合いをさせていただいております。

今迄、テレビ放送公開講座「身近なコンピューター」「木からのメッセージ」「いま、みつめよう国際化」「デザインの時代」等の講座をシリーズで、一般県民にもわかりやすく、放映され、大学開放センターの機能を遺憾なく発揮されました。

最近では、日仏景観会議の開催、また伝統産業界と連携した地場産業活性化事業や実践的のものづくり教育などにご尽力されており、経済界といたしましても敬意を表するとともに大変感謝しております。

「地方の時代」「自助努力」の言葉のように、国立大学の独立行政法人化、そして、国立大学の合併が進められておりますが、高岡短大も、今年10月より、富山大学芸術文化学部として、再出発することになっております。

少子高齢化社会を迎え、各大学は、地域に愛され、魅力ある、信頼される大学にしなければ、大学経営もうまくいかないでしょう。

正に、21世紀の大学経営は、産業界の経済原理と同じように、大競争時代に入ったと言えます。

二上山を仰ぎ見る抜群の教育環境のこの地で、芸術文化の旗印のもとに相集い、芸術文化を極める工芸家や芸術家の輩出する最高学府「芸術文化学部」になり、最高の勲章である「人間国宝」と呼ばれるような芸術文化人が、生まれることを心よりご期待申し上げます。

この上は、高岡市の伝統産業である銅器・漆器の振興と、あと4年で開町400年の高岡には国宝瑞龍寺を始め、たくさんの観光資源を持っております「商工観光都市高岡」が、大学のご指導を頂きながらますます発展する事を念じているところであります。

記念誌 「高岡短期大学二十二年の歩み」 発刊記念座談会

日 時 平成17年2月25日(金) 14:00~16:30

場 所 高岡短期大学 大会議室

出席者

柳田 友道

(元富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備室長)

水島 和夫

(高岡短期大学 理事・第7代副学長)

徳平 滋

(高岡短期大学 初代副学長)

滝沢 浩

(高岡短期大学 理事・副学長)

麻生 三郎

(高岡短期大学 名誉教授)

三船 温尚

(高岡短期大学 教授)

澤本 正巳

(高岡短期大学 名誉教授)

舘 昌邦

(高岡短期大学 専攻科産業デザイン専攻2年生)

木村 幸信

(高岡短期大学 名誉教授)

工藤 桂子

(高岡短期大学 専攻科産業造形専攻1年生)

寺口 克己

(高岡短期大学 同窓会長)

明石 佳奈

(高岡短期大学 地域ビジネス学科2年生)

西頭 徳三

(高岡短期大学 第4代学長)

横田 勝

(高岡短期大学 教授(司会役))



1. 開会挨拶

横田 今日は皆様方、大変お忙しい中を、お越しいただきまして本当にありがとうございます。とりわけ徳平先生には埼玉県の所沢市からはるばるお越しいただきまして、非常にありがたいと感謝しております。また、柳田先生も富山市からお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

はじめに、西頭学長からごあいさつのおことばをちょうだいしたいと思います。よろしく願いたします。

2. 学長挨拶

西頭 ただいまご紹介いただきました西頭でございます。本日は大変お忙しいところ、ご出席を賜りまして、大変ありがとうございます。

すでにご案内のとおり、今年10月1日をもって、高岡短期大学は新しい富山大学の八つの学部の一つ、芸術文化学部になります。先ほど聞いたところによりますと、来月の初めに閣議決定されて、それから国会に上程ということになります。すでにスケジュールはどんどん進行しております。

そこで、先ほどごあいさつがありました横田先生を中心に、創設22周年の「高岡短期大学の歩み」という記念出版の話が持ちあがりました。やはり記念出版でございますので、創設以降今日までいろいろとご苦労なされた先生方、あるいは卒業生の皆さん、そしてまた、今日来ていただいておりますが、学生の皆さんの生の声を収録したいということになりました。つまり、今日の座談会はそういう流れの中で出てまいりました。

今日いろいろなお話が出と思いますが、私が気づいた点の一つだけご紹介いたします。昭和55年5月、約25～26年前でございますが、創設準備調査室が正式にスタートしております。本日ご出席賜っております当時の富山大学長柳田先生がその室長にご就任いただいたということです。そこから現在の高岡短期大学の歩みが記録的には始まっているのですが、もう少し古い記録を見ますと、その20年前、昭和39年の5月、もう40年も前になりますが、富山大学の工学部と評議会が、高岡の地区にあった工学部を五福地区に移すという決議をしております。そのことが高岡短期大学の生まれる最も古い契機になったのだらうと、私は推測しております。それから、私はこちらへ参り、大変な紆余曲折や市民・関係者の皆様のご努力で、先ほど申し上げましたような準備室がスタートしたと聞いております。

今日は、創設当時のご苦労話やそれから途中で蠟山先



西頭徳三先生

生がお亡くなりになりましたことについて、水島副学長から伺いたいと思います。また、学生さんも来ていますので、現在の心境を語ってほしいと思います。できれば、過去・途中経過・現在・未来についても忌憚なくお話を伺えたらと思います。よろしく願いたします。

簡単ではございますが、ごあいさつに代えさせていただきます。

横田 ありがとうございます。

初めにお断りさせていただきたいことがあります。今回の座談会にご出席いただく予定になっておりました本学第2代目学長の宮本匡章先生はご多忙のためどうしても日程の調整がつかず座談会をご欠席されることになりました。まことに残念ではありますがよろしくご了承のほど願いたします。

3. 出席者近況報告

横田 続きまして、高岡短大におきますいろいろな時代の、しかもいろいろな方面から非常に貴重な方々にご出席いただいておりますので、お一人ずつにつきまして現況をお聞かせいただけたらと思います。

まず、柳田先生からよろしく願いたします。

柳田 現況といいますと、皆さんと違って毎日日曜日でございます(笑)。大正3年生まれで、病気はいろいろやりましたけれども、皆何とか助かりました。だから、もう入院は何回やったか分からなくて、医療費は元を取っております(笑)。そういうことで、毎日元気でやっております。

専門は昔、微生物学をやっていたのですが、今は趣味をやっております、スタンドグラスやパソコンを楽しんでおります。

徳平 私はこの副学長につづいて国立の小山高専の校長になり、本学の3月31日の入学試験の追試験の最中に逃げ出したようなことになり申し訳ない気がしますが、ただ、転任先の学校の入学式を控えておりましたので、

どうしても行かなければいけないということで止むを得ないことでした。そこで8年間校長をやりまして、その後いろいろな話がありましたが、あとは自分の好きにさせてもらいたいということで、現在は毎日日曜日ということでした。

幸いなことに、高岡短大以降、一回も大きな病気はしておりません。現在は専ら孫の相手をして、孫といってももう大学院に2人と大学に2人行っておりますけれども、それを相手に勉強のしかたやものの考え方について議論して嫌がられておるかもわかりませんが、何とか若い連中がまともな人間になるようにするのが私の今の生きがいでございます。

麻生 私は毎日日曜日を送っているような状態でございますが、先ほども澤本先生から「きみは相変わらず若いな」と言われました。というのは、ご存じのように私は真っ黒の毛をしているのですが、決して染めてはおりません(笑)。これはどういうわけか、親のせいだったのですか、どうも白髪というのはまだ生えないのです。ということは、まだまだ少年、幼年になるのかなと、そういうふうに思っております。

その割には、体は丈夫かといいますとそうではないので、ここを退官したときからどうも体の調子がまずくなり、病院にしょっちゅう出たり入ったりしていたような始末でございまして、ここ2～3年は少し順調になっております。このまうまくやっていたらいいのではないかなと、そういうふうに自分ながら頑張りたいと思っています。

そのようなわけで、私の大学時代の専門というのは、金工でございまして。金工というのはご承知のように地元といわゆる伝統産業で、もともと私の父親もそういう仕事をしていた関係で、跡を継いでやっていくのは宿命だというような形でやってきたわけですが、この大学に入りましてやはり金工を専攻にやってきました。

退官後も自分で何とかやっていきたいと考えて、してはいたのですが、先ほども申し上げたように、どうも病にやられまして、つつい制作なり仕事のほうもどうもうまくいきませんで、今は少し柔らかに動いているという程度です。あまり無理するとまた病にやられますので、ひとつのんびりとやっているような状態でございまして。以上のような現況でございまして。

澤本 20年前、私は、高岡短期大学における民間会社実務経験者第1号として任用されたのではなかるうかと思っております。その折は、横山初代学長と徳平初代副学長には大変お世話になりました。ありがとうございました。

今は、毎日が日曜日みたいなものですが、恥ずかしながら、老骨に鞭打って、週に1日だけ私立の短期大学の教壇に立っています。学校は私の立場をたてて客員教授

と呼称していますが、いうところの非常勤講師です。

家族から、「もう齢だし、辞めたらどうか」と言われていますが、私はせつかく声がかかるのだから、その期待に応えるのが当然と考え、客員教授を引き受けています。心のありようとしては、ボランティアの気持でやっています。何故、自分自身にボランティアといっているのかといいますが、つぎのような理由に基づきます。

かりに、若手教員の月給が30万円としますと、多分1年間の人件費が600万円ぐらいになるはずですが、私が、1授業科目を1年通してやったとしても35万円ぐらいです。単純に考えて、1人の先生が17科目持てるはずがありません。「いま担当してもらっている授業は、余人をもってかえ難いので是非お願いします」との煽てにのって、学校経営上の遣り繰りをおもんばかり、客員教授をやっている次第です(笑)。学校で若者と接触させてもらっているせいか、お陰様でいたって健康です。

木村 私は、順当にいってれば約1年前、去年の3月末でこの高岡短期大学を停年退官するはずだったのですが、ところが、今紹介されました澤本先生が富山短期大学でずっと頑張っておられますが、その富山短期大学と同じ富山国際学園に所属する富山国際大学に、地域学部を作るので来ないかという話がありました。私は、高岡短大を作るというときもそうなのですが、新しいもの好きという悪い癖がありまして、二つ返事で飛んでいくことになりました。こちらは停年3年前に辞めるということになりました。当時の故蠟山学長からは、「おまえは、独立行政法人とか富山大学との統合合併とか、ややこしいことになりそうになったらさっさと逃げ出すんだな」とおしかりを被ったのですけれども、現在、その新しくできた地域学部で経営コースにおります。

工学部出身の私が、ほかの文科系出身の先生を差し置いて、経営管理論、経営情報論、経営科学、経営戦略論といった経営関係の授業科目ばかりやらされています。ここにいたときは澤本先生や滝沢先生がいらっしゃるので私も出る幕がなかったのですけれども、そういう新しいところでやっています、何とか給料分だけの働きをしなければいけないと思って、頑張っている最中です。よろしく申し上げます。

横田 どうもありがとうございました。

続きまして、第1期生の卒業生、同窓会長であります寺口さんをお願いしたいと思います。

寺口 寺口です。よろしくをお願いしたいと思います。

私は第1回の社会人入学生でありましたので、卒業後は元の職場である高岡市消防に復帰しました。現在は119番などの緊急通報を受けて消防隊に出動指令を行う部署にいますが、消防も世の中の例にならってIT化が進

んでいます。私のいる部署では情報管理や消防隊の出動管理など、私にとっては難しいデータベースの理論ばかりなのですが、在学中に情報処理を学んだお蔭で何とか上面ぐらいは理解できるかなという感じです。ですから、仕事に関していえば、今の情報化のスピードに遅れないようにと、気持ちだけが空回りしているような状況です。

横田 どうもありがとうございました。

それでは、学内の方々に移りまして、お客様に対して簡単に現況をお話させていただきたいと思います。

水島 私は第7代の副学長でございまして、平成13年に就任したのですが、この4月で4年間と。3年半ぐらいまでやった人はおられるかと思えますけれども、いちばん長い副学長ではなかろうかなと思っておりません。この4年間の話はまた後ほどいたしますけれども、なかなか大変でございましたし、現在、滝沢副学長とそれぞれ、私が総務担当、滝沢先生が財務あるいは入試・広報を分担しています。私の担当の中には統合の関係がございまして、この10月の統合を目指して、いろいろ大変な状況ということでございます。以上でございます。

西頭 私は平成15年11月1日付でこちらに参りました。前任地は愛媛大学でございます。たまたま富山県福光町出身ということで、こちらに参ることになりました。

現在、両副学長の協力のもとで、再編統合問題も順調に進んでおります。先ほども触れましたが、もうすぐ国会に上程されますので、4月下旬あるいは5月中には、新富山大学法人法が通ると思えます。そうなりますと、あとは一気に10月1日に向けて、積み残された課題、例えば学長をどうするかについて詰めて、10月1日を待つということになります。そういう意味でも、今後ともよろしく願いいたします。

滝沢 私は、平成5年に2代目の宮本学長のときに、経済・経営系の教員として着任しました。初代の横山学長と親しい阿部統先生(東工大名誉教授)と、東京で縁があり、高岡短大のことは存じていました。阿部先生は、初め自分が学長候補として打診されたが、事情があり、親友の横山保氏を推薦したのです、と後に語って居られました。

着任当時は、宮本学長が専攻科を当時の1年制から2年制へと改革し、合せて専攻科棟を建設することに注力されていました。そのために、中堅教員のパワーを集結する運営をされていたことが想い出されます。

私は、経営実務専攻のリーダーであった石井先生(名誉教授・商学)やここにおられる木村先生(当時の学科長)など良い先輩に恵まれ、また良い学生に恵まれて楽しく過ごしてきました。

昨年4月に、理事となり、組織運営にかかわり、特に新芸術文化学部発足の準備に広報面で努力しているのが

現状です。

三船 三船です。私は、ここにあります本学における在籍期間の表を見ますと最長不倒距離で(笑)、この3月31日で20年間、この高岡短期大学に在籍することになります。振り返ってみますと、非常に短いというか、あっという間だったというのが正直なところですが、20年という長いように思うのですけれども、私にとりましては非常に短い20年だったと思います。

現況ということですが、私は今日も午前中、鑄造室で作業着に着替えて学生の鑄造をやっておりました。昭和60年の準備室にいた期間以外、それ以降はほとんど、ふだんは作業着で、鑄造室で学生と一緒に鑄造しているという、そういう繰り返しで20年がたちました。

簡単ですけれども。

横田 どうもありがとうございました。

続きまして、学生さんにも簡単な自己紹介をお願いします。

舘 産業デザイン専攻デザイン科の舘昌邦です。今日はよろしく申し上げます。

今、卒業制作の最終発表も終わったのですが、すごくやりたいことがいっぱいありまして、毎日が卒業制作みたいな感じの忙しさです。簡単に学生生活を言いますと、高岡短期大学の2年間で楽しむデザインというのを学びまして、専攻科でデザインを考えるとということ、制作プロセスなど、そういうことを学びました。就職が京都の島津製作所に決まって、最後にいい結果が出たという感じです。以上です。

工藤 専攻科産業造形専攻1年の工藤桂子です。よろしく申し上げます。本科では産業造形の金属を学びまして、そこで鉄などの溶接に興味を持ちましたので、専攻科に行って鉄の溶接などをしております。

勉強が苦手なもので、どちらかというとサークル活動に走ってしまっているのですが、現在のところ、バスケット部と、YOSAKOI部と、もう引き継ぎをしたのですが、学生会のほうで昨年は副会長をしていました。高岡に来て、現在一人暮らしをしているので、不安なこととかもいっぱいあるのですが、この学校に来て毎日楽しい学生生活を送っています。以上です。

明石 地域ビジネス学科2年の明石です。よろしく申し上げます。私はおとし、経営を勉強したくてこちらの大学に入りました。今後は東京の大学に編入学が決まりまして、4月からは新たな、東京という富山と比べると人がいっぱい出るので不安もあつたり、ずっと富山県に住んでいましたので、富山弁が抜けなくて心配ですけれども、新しい地で頑張って経営の勉強、会計の勉強をしていきたいと思っています。よろしく申し上げます。

横田 どうもありがとうございます。

3人の学生さんは学生会の代表としてこの席に来ていただいているのですが、おおむね高岡短大の生活に満足しておられるように感じました。皆さん方が学園生活を楽しんでおられるその背景には、この高岡短大の歴史、22年間、創設の段階からいろいろな方面の方々のご尽力があったわけです。例えば、当然日本国、文部省に代表されるように、その支持がなければ当然生まれなかった。と同時に、地方自治体の、例えば富山県や地元高岡市など地方自治体の熱い声援・ご尽力があったことも事実だと思うのです。また、地元民間企業の方々、県民の皆さん、市民の皆さん、そういういろいろな方面からご尽力いただいた結果、この高岡短期大学ができたと思うのですね。これを機会に、そういう長い22年間の歴史の中でいろいろな立場でご尽力いただいた先生方、先輩の皆さんから、どういういきさつで現在の高岡短大ができたかということ、とりあえず順を追ってお話を聞かせていただきたいと思います。



柳田友道先生

で、ほかの大学の工学部はどんどん学科増があったのですが、富山大学は移転問題があるということですので抑えられまして、富山大学の工学部というのは全国でいちばん小さい工学部という状態でした。

ちょうど学長に就任する前の年ぐらいから、県と高岡市がまず短大を作ってくれということを政府関係者に陳情しまして、綿貫さんや森さんなどの政治家も一生懸命にやってくれました。もちろん中沖知事もです。ところが、高岡市と富山大学、肝心の当事者どうしがうまくいっていないのです。高岡市長は堀さんという方でしたけれど、それまで学長が堀さんと話し合っていないのですよ。それがどうも僕には分からなかったので、私が学長になったときはこのところがいちばん重要だと思って、まず堀さんと話し合おうと考えました。

ところが、堀さんはそれまでにさんざん裏切られたというので文部省に不信感があるし、富山大学に対しても不信感を持っているし、もう話にならないので、私は学長になってすぐ、こちらから高岡詣でを繰り返しました。初めのうちは何を話していいのか分からなかったのですが、だんだんだんだん話しているうちに話が通じるようになって、1年ぐらいはかかっているのですけれども、雑談がどんどんできるようになりました。その間54年に、「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査会」ができたのです。

その調査会は名古屋工大の佐野幸吉学長が座長でした。当時、高岡市の要求は、伝統工芸を大切にしたいということで、伝統工芸を中心にした短大を作りたいとい

4. 本学に関する思い出

横田 最初に、高岡短期大学の創設の前後というのは非常に波乱に満ちた時代ではなかったかと思うのです。その中心となってご尽力いただきました先生として、柳田先生にその当時を振り返っていただきまして、高岡短期大学といえばまずこういうことが思い出されるとか、何かお話がありましたらご紹介いただきたいと思います。けれども、よろしく願いいたします。

柳田 実は、すでにご依頼がございましたので、文章で「高岡短大創設期の思い出」というのを書いて、『高岡短期大学十年史』に出しましたので、細かいことはそれを見ていただければいいと思います。ここでは私が創設時代に味わいました主な点をかいつまんで申し上げます。

まず、高岡短大の創設の動機になったのが富山大学工学部の移転問題でございまして、これは昭和41年に評議会決定ということになっています。その後、十数年も決まらずに、その間に学長が何代か交代しておりました。結局、そのころは経済の高度成長期にもかかったわけ

主な役員員の在任期間

年度	S.55	56	57	58	59	60	61	62	63	H.元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
創設準備調査室長 /準備室長	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道	柳田友道
学長				横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保	横山保
副学長				徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋	徳平 滋
事務部長				江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫	江田晴夫
産業工芸/ 産業造形学科長				川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃	川崎 晃
産業デザイン学科長				中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	中川 宏	
産業情報/ 地域ビジネス学科長				澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳	澤本正巳

う話だったので、佐野さんから私に伝統工芸を中心とした産業について調べてくれという諮問がありましたので、私は早速協議会を作りまして、芸大の先生4人と、小倉玄吾さんという富山大学の漆の先生と、高岡の鍍金の可西さん、それから宮崎辰兎さんという井波の彫刻の人、こういう人に数人集まってもらって議論しました。これが、高岡短大を作るときのいちばん核になった議論のような感じがします。

そこでいちばん議題になったのが伝統ということでした。伝統のことについては、『高岡短期大学十年史』にも書きましたけれども、結局、前田泰次さんの『現代の工芸』という本の中に立派な伝統ということについての記載がありまして、この線でいこうということになりました。要するに、伝統というのは昔からのものをただ守り続けるのではなくて、新しい概念をどんどん入れていくのが重要なのだという筋です。この考えはどうしても取り入れたいと考えたのですが、短大はたった2年ですので、伝統というのを学科目の名前に入れるほどの教育はできないだろう。だから、伝統という字は取ってしまっ、て、工芸を主にした名前をつけようということになりました。

4年制の大学では作家の養成が主なのですが、この大学では作家は無理と考えられるので、職人を育てると。職人すなわち技術者ですが、職人を育てるような大学という筋でいこうということが決まりました。

55年に私は創設準備調査室の室長になりましたが、高岡市の伝統工芸界の方々に集まっていたいただいて、皆さんの意見を聞く会をやりましたところ、皆さん熱心にやってくださいました。そして彼らがいちばん希望するのはデザインでした。つまり、技術は短大でも教えてくれるだろうから、デザインのところをいちばん力を入れて教育してくれということでした。さらに卒業生は必ず引き受けますとはっきり言ってくれたのですけれども、その後どうなったか知りません(笑)。

私は微生物学者なので芸術のことは何も知らないわけですから、これは本当に面食らったわけです。とにかく現場を見ることとし、輪島の漆のセンターがへ行って漆の名家の先生方のお話を聞いて、それから井波に行ってお話を聞いたり、高岡を回って見学したりしました。でも本当に面白かったですね(笑)。こんな楽しい世の中があったのかということを知りました。

こういう見学出張には小林武さんという事務官がついてきてくれました。彼が細かく、漆産業はどういう部屋でやるのか、周りにほりか立ってはいけな、だから木工の部屋が隣にあってはいけな。それから、漆を作るにはどんな道具が要る、彫刻には彫刻刀が何本ぐらい



創設準備室のスタッフ一同

要るかなど、計算まで全部やってくれました。こうしてこの55年でいろいろと固まってきたと思います。

57年になりますと創設準備会議というのが文部省にできまして、そこで、3学科6専攻2コース、入学定員225人という線がまず打ち出されました。ところが、1年たったあとの会議では、2学科7専攻2コースで入学定員200人ということになり、これで形が決まりました。その後、富山大学にも委員会を作りまして、もう一つの経営・経済の関係の方のことについて提案しました。

高岡短大の設置場所については57年の8月に二上地区に立地するということが決まりました。これは文部省の国立大学統合整備等連絡協議会で決まりました。これも、初めは高岡の工学部の跡地に作ろうかという案があったのですが、あそこの敷地内には鉄道が通っていて、そんな場所に短大を作るのはおかしい。もっといい所があるはずだということで、高岡市の堀さんを中心に二上地区の案が出されました。

ここでいちばん問題になったのは、この隣に下水処理場を作るという案があったことでした。しかしその下水処理場の上は公園にしてしまうと、臭気は絶対出さないとことでしたので、初め反対していた文部省にも十分理解を得ました。

もう一つ、伏木にパルプ工場があって毎年毎年夏になると臭気がするので、それが学校の方に来るのでは困るということでした。そこで1年間の風向きを調べたところ、学校はほとんど風上に当たるとことが分かって、これも文部省が納得してくれました。

実際に来てみると、後ろには二上山があって、とてもいい所で、土地も安く、この二上地区が決まりました。

その後も準備が進んでいって、58年にいよいよ学長を決める段階になってまいりまして、横山学長さんが候補者に上がったわけです。横山先生は東大の数学科を出て阪大の経済の教授になっているということで、非常にユニークな方だということに目をつけました。それと、かなり多面的な活動をやってらっしゃるということで、この方が候補に上がったのです。しかし、実はその前に、工芸関係を主目的にした大学というふう考えていたの

で、工芸関係の先生を学長にするか、それとも経済系の先生を学長にするかというので、いろいろと議論がありました。

そうすると、工芸関係というのはいわば芸術家なので、芸術家というのには管理職には向かないのではないかと皆さんもそう考えて、やはり学長は経済系の先生がいいのではないかとということで横山さんが挙がってきたのです。私は東京神田の学生会館でお目にかかって、もうすっかり気に入ってしまいました。それで皆さんに報告して、皆さんの了解も得られて、横山さんをお願いして、引受けて下さったのです。

横山さんは、最初は富山大学高岡短期大学創設準備室長になったわけです。私は室長職を解かれ、ようやく自由の身になれたわけです。そのあとは横山さんのお手伝いをやったわけです。その前に、ここにおられる麻生先生の採用人事というのは、私の準備室の時代にやらせていただきました。麻生先生は高岡の工芸高校の先生をやっておられたわけですが、あれはすごい学校なのですね。大先輩の偉い先生が大勢いらっちゃって、美術館みたいなものがあるのです。

麻生 青井記念館美術館です。

柳田 その青井記念館美術館に行ってみるとすごい作品がぞろぞろあるのですが、そういう学校の先生をやっておられる麻生先生にぜひお願いするということになりました。

それと、私がもう一つお手伝いしたのは、横山さんが学長になってから、デザインの黒岩先生をお招きしたことです。黒岩先生は旭川の東海大学芸術学部におられたので私は旭川まで行って、向こうの学長を談判してきたのです。そうしたら、だめだということです。向こうで困るというので、この問題はかなり時間がかかってしまいました。結局、説得に説得を重ねて黒岩先生の割愛要求が成立しました。

私が関係した人事はお二人でございます。そういうことで終わります。

横田 どうもありがとうございました。私も大学の創設直前の状況はほとんど存じていなかったのですが、非常にリアルにお話ししていただきまして、現実のものかなり出てきたような気がいたします。ありがとうございました。

続きまして、ただ今のお話で、初代学長横山先生のお名前が出てきたのですが、柳田先生がこの高岡短期大学の誕生に際して産婆さんの役目をしていただいたのかと思います。その高岡短大ができ上がったのは、横山先生が父親であるとするれば、初代副学長の徳平先生が女房役というような形で、最初の時期というのは大変だっ



徳平 滋先生

ただろうと。時には亭主よりも女房のほうが大変なこともあるかと思いますが、その辺のところを、先生、何か思い出話でもありましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

徳平 私が副学長として参りましたのは、59年の7月で、4月1日からという話もあったのですが、私は公立学校共済組合の理事をやっております、その担当は財務と労務でした。当時は労働組合が非常に強く、春闘の徹夜交渉が続いている最中に抜けられないものですから、その春闘が片付いてからということで7月1日にさせていただいたわけです。

富山駅の前に高志会館というのがありますが、あれは公立共済組合のもので、その建て替えの陳情を当時の中沖知事さん等から受けていて、県当局の方々を全然知らないわけではなかったということで若干役に立ったと思われまます。

ユニークな短大ができる、こういう構想だということを横山学長から事前に説明をうけ、私も勉強してここに来たわけですが、直接関係する人に会って話をすると分かるのです。私の知人が若干この地元にて、また青年会議所その他にもいたものですから、そういう人たちと話をしてみると、短期大学ができるということは知っていて、それは非常に喜ばしいということでした。ただ、その内容はどういうものかというのは、よく分かっていないのです。世の中のいろいろな事柄が進むときというものはこういうものなのだと感じました。

まず、ユニークな考え方というのはどこがユニークなのか、何がユニークなのかということを経元の人に理解してもらうことが大切なことと感じ、そのことを最初にしました。そのために、教育委員会の人とか高等学校長会等と話し合いを続けて、さらに、実際に学生を送り出してくれる高等学校の先生方によく分かってもらわないと困るので県下の東部地区と西部地区の高等学校の進路指導の先生方にそれぞれ集まってもらって、入学者選抜の方法についての説明をするともに、大学のユニーク

な考え方や構想等についても詳しく説明するなどいたしました。中身をまず知ってもらわないと、入ってきたら違っていたということでは困るものですから。それから、青年会議所の人たちがいろいろ高岡のことをやりたいということで声をかけてくれたものですから、その会合にはしょっちゅう出ていろいろな話をするなどして、直接の関係者以外の人に大学の中身を知ってもらうように努めました。

もう一つは、私が赴任したときには、教官は横山学長と麻生先生と黒岩先生の3人でしたので、横山学長といろいろ話しながら、結局何をするかというと、教員を集めることだということになりました。どんなユニークな考え方をかって組織を作っても、それを動かすのは人ですから、人間の営みというものを大切に考えなければ実際のことはできないということで、あらゆるつてを使っているいろいろな人の意見を聞きました。特に当時ありました運営委員会の先生方、それから地元の工業界や、鋳物、それから井波の、そういうところのいろいろな人たちに会って考え方を聞いて廻りました。先ほど柳田先生がおっしゃったのですが、学校というところは職人を作る施設ではないので、その基礎になるものの考え方なり見方なり方法論、勉強のしかたを教えて、本人がやる気になってそれを伸ばしていけるような、その基礎を作るところから。そういうことでいろいろな話をいろいろな先生方として、翌年の10月に、運営委員会に人事委員会というのを作ってもらって、その責任者に私になって、そして具体的な教官の選考に入っていったのです。

そのときに、当時、富山大学の図書館長をされていた平田純先生や、阪大の基礎工学部長の藤澤俊男先生、東京芸大の西大由先生、この3人の先生方には大変お世話になりました特に工学関係、デザイン関係には私はあまり縁がなかったものですから、西先生には大変お世話になりました。西先生は東京芸大の教授であられて、当時学生部長の職にあり、「副学長、一人一人廻るのは大変だから、私が世話してあげましょう」と言って、芸大出身者を東京芸大に集めてくれたうえ、学生部長室を提供しますということで、その室で10名位の人々を順番に一人一人面談することができました。そのときに先生がおっしゃったのは、専門的なことについては私が責任を持ちましょうと。だけど、人物や教育に対する考え方というのは、やはり副学長自身の目で確かめてくださいよということでした。

そのほか、現職のある人たちについては上司の方々にあいさつにも行くし、先ほど先生がおっしゃったように割愛してくれるかどうか、それから、職場での評価というものはやはり参考になりますから聞かなければいけな

い。そういうことで、随分人集めのためには飛んで歩いたということがいちばん思い出に残ることです。それでも、やはり大学設置委員会の教官審査の認可が出るまでは、こちらがかってに決めたものが果たして可となるのかどうかという、その心配は大変でした。今度振り返ってみますと、その辺が苦しくもあり、また非常に楽しい思い出ということになります。以上でございます。

横田 どうもありがとうございます。

先ほどから、初代学長横山先生のお名前が出てまいりましたけれども、残念ながら横山先生はご逝去なさっております。その当時の横山先生の人となり、どのような方だったかということをお断り願いたいと思うのですが、澤本先生、いかがなものでしょうか。

澤本 私が高岡短期大学へ赴任したのは昭和60年4月1日、仮校舎になっておりました富山大学の旧工学部です。すでに学科構成がきまっております。私が所属する産業情報学科には三つの専攻があり、私は経営実務専攻、木村先生は情報処理専攻そして石井先生はビジネス外語専攻を担当することになりました。むこう1年間で、二上キャンパスへ移転するための準備や翌年4月に第1期生を受け入れるための準備にとりかかったわけです。

秋ごろだったと思いますが、横山学長が私達のいる部屋へこられ「この3人の中からだれか1人学科の責任者になってもらわなくてはいけない」というのは「澤本先生どうでしょう」と鋒先がこちらへむけられました。「私は、いままでも高等教育機関で勉強してきたものではありませんから不適任です」といって固辞いたしました。学長が部屋を出ていかれた後、木村・石井両先生から「全面的にバックアップするから学科長をうけたらどうですか、年長者からやるのが順序です」という話があり、結果的に学科長をうけることにしました。

仮校舎にいた間は、各専攻それぞれ責任を持って準備をしておりましたので、学科長として職責を果たさなければならぬということは全くありませんでした。二上キャンパスへ移転してからは、開学してから間もないということもあり、いろいろの問題がでてきました。学科会議もその一つでした。会議の席上先生方から、もうそろそろ研究紀要をだしたらどうか、校内LANは何時から設置するのか、あるいは外国出張の旅費は確保してあるのか等々の問題が提起されましたが、いかんせん私にはそれに答えるだけの知恵や抱負経験もありません。学長のところへ行って、以上のことについて詳細に申しあげました。学長から「学科内で処理できることはどんどん処理し、他方で先生方の意見を吸い上げることはとても大切であるので、いまのような姿勢でこれからもやっていって欲しい」と逆に慰められ、かえって恐縮してし



澤本正巳先生

まいました。あるとき学長に「産業情報学科の会議にで
ていただいて先生方と懇談形式で話し合ってもらうこと
も有効だと思いますが」と言いましたら「分った。いいよ。」
ということで何回か顔をだしてもらいました。学長と産
業情報学科の先生方との間でコミュニケーションがとれ
たという意味では、大変よかったと思っています。

あるとき、学科の先生方が、事務スタッフの人たちに
対してある種の不信感をもっていることが分かりまし
た。こんな状態を放置してはいけなそうと思ひ、事務
部長にお願いして会議に出てもらい意見交換をしてもら
いました。時にはかんかんがくがくの議論になることも
ありましたが、お互いの真意を知ることができてよかつ
たと思っています。

学科長になってから1年間ぐらひは、以上のようなこ
とで、横山学長をはじめとして各先生方や事務部長の助
けを借りて、大変頼りない学科長でしたが、どうにかか
ろうじてその責を果たささせていただくことができました。

横田 どうもありがとうございます。

実を申しますと、澤本先生に横山初代学長の別の形の
ことを、話題を聞かせていただきたかったのですが。

澤本 洗心苑は横山学長の肝いりでできた施設だと思ひ
ます。宿泊施設がありますので、開放センターとタイアッ
プして、企業のマネジーに対する2泊3日の開放講座を
何回かやらせてもらいました。それ以外、教官同士の娯
楽として囲碁やカラオケやマージャンを楽しむために
利用しました。

1日の業務が終り、ホツとした気分で、研究室の窓ご
しに暮れなずむ様子を眺めていると「横山学長が洗心苑
で夕食を一緒にしようと言っておられますがどうです
か」と庶務課から声がかかります。そんなことが、
しばしばありましたが、毎回OKとって学長のご相
伴をうけることにしていました。

夕食会が済んだあと、横山学長から「これからマージ
ャンをやろうじゃないか」との提案で、しばらく楽しい一

時を過ごすわけですが、なぜか私が相手のときは、横山
学長が勝たれたためしがありません。そして、最後に「澤
本先生は勘がいいから、どうも勝てないな」と愚痴られ
るのが常でした。

第1回選抜入学試験の競争倍率の予測で、私が出した
数値が実態に最も近似していたということがあり、その
ことが横山学長の脳裡にあつて「勘がいいね」という言
葉になったんだらうと思ひます。

あとで宮本先生(2代目学長)から「横山学長は、大阪
大学時代負けるとぶら下つて勝つまで止めないという癖
があつた」という話をききました(笑)。私がメンバーに
入つてゐるときは11時頃にやめ、ぶら下られたことは1
回もありません。宮本先生の話をきいてから、あれだけ
横山先生にいろいろなことを教えていただきながら、遊
びとはいへ気の毒なことをしてしまったものだなと、後
になつて変な反省をしている次第です(笑)。

横田 どうもありがとうございます。

木村先生は横山先生と宮本先生両方の代をまたいでお
られるのですが、その辺、お二人について何か思い出で
もありません。宮本先生の話をきいてから、あれだけ
横山先生にいろいろなことを教えていただきながら、遊
びとはいへ気の毒なことをしてしまったものだなと、後
になつて変な反省をしている次第です(笑)。

木村 私は実は、横山先生にはずっと以前からお世話に
なつてゐました。その縁でこちらへ連れてきていただ
いたと思ひます。私の学生時代と助手時代を通じての恩師
であり、後に東工大の学長もされた松田武彦先生と横山
先生とが大の親友だつたのです。その関係があつて、
横山先生が例えば企業人を相手にセミナーをやるときに
私が呼び出されてお手伝いをするという形で、ずっと横
山先生からも伯父さんのような形でお世話いただいで
いました。

私は神戸にいたのですが、あるとき一度会いたから
大阪へ出てこいという電話を頂いたので。そのちょつ
と前に情報処理関係の研究会の話を伺つたことがあつ
たので、研究会を作る話だと思つて、そのお約束の時間
に大阪へ出向いたら、「きみ、わしが高岡短大の学長に
なつたのは知つてゐるだらうね。いよいよ本格的に動き
だすのだけれども、きみ、来ないかね」と(笑)。私も、
「新しいのを作るのです。それは面白そうですね」と
言つて、ほとんどのその場で承諾したみたいなのでし
た。

それ以前のおつきあいでは、先ほど澤本先生からもご
披露がされましたけれども、横山先生はとにかく大学関
係者相手の席ではマージャンもトランプも絶対負けな
い。絶対に負けないのはなぜかという、自分が勝つま
でやめないと(笑)。ゴルフもそうですね。私もゴルフの
お相手はちょつとしたことがあるのですが、マージャン
だけは「できません、できません」と言つてご勘弁願ひ

ました。

それで、横山先生の代に学科長の若返りということが出まして、工芸学科では蜷川先生が学科長になられて、産業情報学科はおまえやれということで、澤本初代学科長、石井2代目学科長に次いで3代目の学科長になりました。先輩お二人がレールを敷いているので大丈夫だろうと思っていたのですが、ちょうど私が学科長になった途端に横山先生の停年の時期が迫ってくる。それから、澤本先生と、私の恩師の一人である阿部先生と、哲学をやっておられた城村先生と、我々の関係だけでもその3人が停年退官される。それから、十年史をそろそろ作らなければいけないとか、開学10周年記念式典とか、それから、最初の卒業生が出るまでに専攻科も作らなければいけないということで、準備作業もやりました。また、開放授業の一環として、北日本放送のテレビで公開講座をやるという放送利用公開講座が始まって、そのまとめ役も学科長がやれということになりまして、もう非常に忙しい思いをしたのが印象に残っています。

宮本学長は阪大経済学部で横山先生の弟分みたいな存在で、そういう縁でこちらの学長になられました。いろいろ高岡短大の事情についてご下問いただいたりしてお話する機会が多かったのですが、教授会等で私が産業情報学科の利害を主張していろいろかみつくものですから、かなり宮本学長とは険悪な雰囲気になった時期もあります。例えば、今はどうか知りませんが、工芸の先生方が作品展示会をやるときに、開放授業の一環として会場費かパンフレット代でしたか、大学から補助してやろうということが決まっていたのです。それで私が教授会の席で「では産業情報学科の先生が個人で自費出版するときにも大学から援助をもらえるのですね」というようなことを言ったりと、私自身としては格差是正のつもりで随分逆らいました。

それから、かみついたといえ、徳平先生のときにはまだ私はそのような元気はなかったのですが、それ以降、水島副学長の前まで副学長いじめというのは随分やりました(笑)。というのは、副学長が開放センターの責任者なものですから、開放センターのことについて、規定と違うではないかなどしょっちゅう副学長室に怒鳴り込んだりして、何人かの副学長から文書つきで、自分が間違っていたという念書を頂いたこともあります。

あと、事務からも随分嫌がられたと思います。教授会の席上で、この漢字が違っているではないかとか、この文言はおかしいではないかと。あるときは文部省を通じて法務省まで問い合わせてくれた課長がいて、木村の言うことは合っているそうだとということで、わざわざそれを知らせにきてくれたまじめな庶務課長もいらっ



木村幸信先生

しゃいました。そういう、いろいろの面でひねくれ者ですから、横山先生はユニークな短期大学だから変なのが一人くらいいてもいいだろうと思って私に声をかけてくださったのだらうと思います。

横田 どうもありがとうございました。

宮本学長に続きまして第3代の蠟山学長ということになりますけれども、蠟山学長はご存じのとおり不治の病で倒れられまして、特に大学の法人化や県内国立3大学の再編統合ということで相当ご尽力されてきたわけです。

そういう非常に厳しい状況におきます女房役としましては、初めは行田先生、後半は、現在もそうですけれども、恐らく水島副学長は、蠟山前学長の女房役ということで比較的立場としては楽な状況ではなかったかと思いますが、突然の事態急変で、恐らく先頭に立たされて大変だったと思うのですが、そのあたりをぜひご披露したいと思います。いかがでしょうか。

水島 横田先生の今言われたとおりで、蠟山学長は大変有能な方であって、女房役としては、蠟山学長についていくということで、横田先生のおっしゃったのはあっていたかもしれません。

実際問題、ついていくというよりは蠟山学長からいろいろと教えていただきました。例えば大学の統合問題ですが、遠山プランということで、13年の6月に打ち出されて全国の大学が大騒ぎになったわけですが、その際蠟山学長は、遠山プランが示された国立大学長会議の帰りの列車の中で富山医科薬科大学の高久学長と同期して、「将来のことを考えたら、統合ということでいかなければいけない」と意気投合されたというような話を後から聞き、その後今日の3大学統合に至っているのですが、いろいろ蠟山学長から教えていただくことが非常に多かった。ついていくというよりも、むしろ教えていただいたというような感じであったと思います。

なお、先ほどマージャンの話が出ましたが、蠟山学長はスポーツ万能、食い道楽でもあられましたし、雑学など、何でも知っておられるという大変な方であっ



水島和夫先生

て、だれにもどの分野でも引けを取らないと自負されておられたのですが、マージャンだけは(笑)。例えば庶務課の歓送迎会などで、当初は民宿に泊まり込みでやっていた、それぐらいのんびりしていたということですが、宴会が終わったあとで、やろうかと学長自ら言い出されました。私なんか、自分でうまいと思ったことが一度もない、点数計算もできないほどですけども、蠟山学長に勝てるのですね(笑)。あれだけは学長も「水島君は強いね」などと言われました。ただ、先ほど「ぶら下がり」と言われましたけれども、「では、勝つまで」ということは、さすがにそこまではなかった。適度にされるというような感じであったと思います。

ちなみに、今の話は別として、テニスや登山、スキー、自転車など本当に万能で、少なくとも私が仕えた2年間のうちの最初の1年間は、多分高岡短期大学の先生方の中で一番アクティブな先生であったかと思っています。ですが、統合の関係や国立大学法人化の関係など、いろいろな事柄が最後の平成13年度から14年度の前半にかけて起きてしまって、なおかつ金融審議会など国の関係の仕事も14年度の夏ぐらいから大変忙しくて、そういう関係の過労がたまって、14年の秋、10月から入院となってしまいました。それから私は大変でございましたけれども、それまで1年半ぐらいいろいろ教えていただいておりますので、蠟山学長に比べると数分の1位の力しかなかったのですけれども、何とか学長の代理をやっていくことができましたと思っています。

横田 どうもありがとうございます。

それでは西頭先生に、愛媛大学から学長として来ていただきまして、ご感想をお聞かせいただきたいのですけれども。

西頭 私は愛媛大では副学長をやっていましたので、総合大学というのは大体分かっているつもりだったのですが、校舎がきれいで、女子学生が多いのに非常に面喰らいました。私がこちらに参りまして、まず水島先生と新学部設置の仕事をやってきたのですが、先ほど徳平先生

がおっしゃったように設置審について大変心配でした。三船先生なども大変苦勞されて、なるべく全員が資格審査を通ることに精力を注いできました。

もう1つは、これも徳平先生がおっしゃったことですが、大学は良い人材を集めることが大切です。学生も教官もです。私が来てからの前半は、人材集めというか教員選考に苦勞しました。いろいろな議論がございましたが、幸い今現段階では非常にいい先生方に来ていただけることになり、設置審も通りました。一人も脱落者が出なかったというのは、大変よかったですと思います。

それから、先ほど柳田先生のお話を聞きながら、なるほどなあと思ったことが二つあります。最も印象深いのは、まず現場に行ったということです。例えば能登の漆工房の見学に行ったとか、地元の人に直接話を聞くとか、そういうことをなされた。このことは私も大変重要と思っております、なるべく地元の方と話し合い、意見を聞きたいと思っています。

もう一つは、後でもし時間があれば詳しくお聞かせ願いたいのですが、高岡短期大学から芸術文化学部になる場合、大学の理念をどうするかという問題です。柳田先生は「伝統ということ」を再確認したとおっしゃいました。それは、前田泰次さんの本から導き出したということですね。というのは、先ほどの水島先生のお話にもありましたが、蠟山先生が中心となられた3大学の統合案が非常によくできているのです。ですから、私はほとんど苦勞することなく、事後処理的なことをやってきたというのが正直なところです。つまり、蠟山プランの新大学や新学部の理念が狂いのないものであったという気がしております。ただ、これから教育体制を具体的に作るのは、我々の責任と思っております。

木村 蠟山学長のことでこれだけは披露させていただきたいと思って来たのですが、4年前に富山国際大学に行きました。4月の終わりごろだったと思いますが、授業と授業の合間に事務室からいきなり電話がきまして、蠟山学長がお見えで応接室でお待ちですというので何事かと思って走って行きました。そうしたら、「この前の教授会であなたの名誉教授の称号が承認された。いろいろあるみたいだから、私が直接持ってきたよ」と。

いろいろというのは何かといいますと、教授会で通していただいた直後に、事務部からうちへ電話を頂いたのです。そのときは昼間で、もちろん私は留守ですから家内が電話を受けましたら、この前の教授会で名誉教授の称号を出すことにした、それを書いた置物があるから、いつでも都合のいいときにそれを取りに来るようにという電話だったのです。「はい、はい」と受けていればいいのに、うちの家内はまた、私の女房ですから、「名誉



滝沢 浩先生

教授はありがたいのですけれども、うちの主人がそんなものを受けるかどうか。まあ、本人が帰ってきましたら伝えておきます」と言って電話を切ったらしいのですね(笑)。それで多分蠟山先生は相当心配されて、あいつは変人だから断りかねない。自分が直接持っていったら、幾らひねくれ者でも断りようがないということで、事前に問い合わせ、私の授業時間割がどうなっているかまで調べて、私が必ず大学にいて空いている時間をちゃんと調べてからお見えになったのです。そういう、すごい心配りのできる方でした。お亡くなりになられたのは本当に惜しいと思っております。

滝沢 蠟山学長のことは、印象深いことがあります。

蠟山先生は、国の政策への貢献にくわえて、県や市の政策にも大きな貢献をされました。富山県の景観保全を図る県景観条例を決めた県審議会の会長であり、また高岡市と新湊市にまたがる路面電車(万葉線)を第3セクターの運営として存続する際にも万葉線懇話会の会長として、地域の合意形成に大きな貢献をされました。

私は、蠟山先生が学長候補の時点で、宮本学長から、貴方の大学同期の蠟山さんが来られる予定だが、彼はめっぽう議論に強いから、論争してもムダだよ、と言われた記憶があります。しかし、この万葉線の件では、敢えて学長室へ議論に行きました。

見解に一部違いがあるが、公共交通の復権が急務という点では考えが一緒だね、と話し合った思い出があります。

また、蠟山先生が特別講演のために呼んだ大原美術館理事長の大原謙一郎氏の講演当日に入院中で動けず、大原さんと私が病室にお邪魔しました。その際に、大原さんが素敵なお見舞いにお見舞いに渡され、先生が喜んでいた顔が思い浮かびます。

蠟山先生と大原さんは経済学部小宮隆太郎ゼミでの仲間、また私は、大原さんと教養学部時代の同級生であったということで、うち解けた会話ができた思いがあります。

横田 どうもありがとうございました。



三船温尚先生

非常に貴重なお話をありがとうございました。それでは続きまして三船先生に、高岡短期大学にかかわりが非常に長く、現在も現役教師でおられるということで、初期から中期、現在まで、学生気質というもの20年間で何か変わってきているのかどうか。その辺、もし何か感想をお持ちでしたら紹介していただきたいのですけれども、どうでしょう。

三船 随分難しいご質問ですね(笑)。いきなりそういう質問だったのですけれども、学生気質につきましては、これは不思議なことを感じています。1期生が入ってきて、学外の方がいろいろと見学に来られ、学生が授業や実習を受けている姿を見て、ここの学生というのは非常に一生懸命やるねということを目撃されましたね。それから、素直な学生が多いねというようなこともおっしゃられました。

私は最初だったのでよく分からなかったのですが、どうもそのあとをずっと思い返してみても、私がかかわった学生というのは本当に一生懸命やる学生が多く、素直な学生が多かったように思います。それが先輩から後輩に伝わっていくのか、入るときにそういう学生がよりすぐられて入ってくるのか、実はよく分からないのですけれども、恐らく両方が作用しているのかなと思います。学生の先輩・後輩のつきあいなどを見ても、必ず先輩の影響が後輩に伝わっているようすし、ここの入試には面接もしておりますので、そういった意味で、やはりそういった資質を持った学生が選抜されて入ってきているのだらうと思っています。

それがこの20年間で変わってきたかと言われると、節目節目がないものですから、ずっと同じように流れてきたとしか実は思えないのです。1期生がそういった評価を受けたように、やはり今の学生も、これは学科に関係なく、素直で一生懸命取り組む学生が集まっていると思います。

横田 どうもありがとうございました。そういう事情で、学生気質がよく分からないと(笑)。分からないので



寺口克己同窓会長

はなくて、その移り変わりが分からないと。

そういう観点から飛びまして、本学の第1期の卒業生であります寺口さんに。現在高岡市にお勤めで、同窓会をお世話になっており、高岡消防署関係で毎年いろいろお世話になっているのですけれども、寺口さんは第1期、学生時代を経験されているわけです。寺口さんの立場から見られて、近くて遠い、遠くて近いところから、年を追って高岡短期大学を見た場合、どのような感想をお持ちでしょうか。

寺口 同窓会発足当初から現在まで同窓会長をさせていただいていますが、最近是在学生の方と話をすることもありませんから、印象を訊かれても正直なところはきりとはいえませんね。

私が在学していたときも女性の人数を多く感じましたが、入学式や卒業式で拝見すると近年は一段と増えているように思います。

頑張り屋でしっかり者の女性がたくさんいらっしゃる印象はあります。

そして、今日出席されている3人の方々是人選されたのでしょうか、言葉にも態度にも自分の主張が感じられますので、先輩として大変心強く感心しておりました。そんなところでしょうか。

5. 新・富山大学「芸術文化学部」移行に向けての感想と激励

横田 それでは、予定時間が近づいておりますので、最後に麻生先生、出席していただいている方を代表して、今年の10月から新しい芸術文化学部として高岡短期大学が進化と言っているのでしょうか、移り変わるわけですが、そのような新しい大学に向けて何かエールを送っていただきたいと。何かごあいさつをお願いします。

麻生 私がこの短大に因縁ができたというのは、先ほど柳田先生がおっしゃったように、57年の秋だったと思



麻生三郎先生

います。5月には発令されていたのですけれども、それまでは、私の前身というのは、高岡の工芸高等学校の金工科という学科で教員をしていたわけです。それが、柳田先生をはじめ、私の仕事仲間といいますが、そういった先輩の方々から、「おまえ、今度高岡にできる大学の教員になってはどうか」という勧めといいますが、紹介といいますが、そういうものがありました。

それを聞いたときにはびっくりしました。私は単なる高校の一教員で、しかも専門の金工という狭い範囲のことだけしかやっていない人間が、大学の創設という重大な仕事に果たして間に合うのだろうか。それがあのときの実際の心情でした。それはだめだと。そんなことはとても私にはできやしないと断ったのですが、そのときは悩みましたね。とにかくどうすればいいのか、私に果たしてそんなことができるのだろうかということで、呆然として、何日か過ごしたことを覚えております。

先ほどの仕事関係の先輩の方々、金工作家の可西泰三さんや井波の彫刻家宮崎辰司先生といったの方々からも、いいチャンスではないかと。ぜひこの機会に、新大学だし、しかも中身はあなたのいちばん大好きな工芸関係ではないかと。そのような励ましの言葉といいますが、いろいろと激励を受けまして、悩んでいたことが「果たして…」というふうに徐々に考えるようになりました。何日間か悩んだ結果、そういった先輩方の励ましも含めて、ではひとつ思い切ってやってみようかという決断をして、57年の秋に柳田先生のほうへお伺いして、お受けすることになりました。

そもそも私の出発点、この短大とのかかわりというのは、そういう出発のしかたをしたわけですが、ただ、そのあと、61年の第1回の入学生を受け入れるまでの間というのは、とにかく自分では大変な期間だったなと思います。最初の専任教官ということで、私がかた一人だったわけです。そういう人間が、しかも専門は金属工芸という狭い範囲の人間が、情報関係も考え、漆やデザイン、木工といったすべての学科内容というものを



横田 勝先生



館 昌邦さん

全部キャッチして、それをどのように盛り上げていくかという、いわゆるたたき台をどう作っていくかとなると、さすがに私もこれは難しい仕事だなと。果たしてこういうことがどこまで続くのだろうか。毎日が針のむしろの上に乗っているような状態だったかと思います。そのような関係もあったからか、その当時は体調を崩しまして、相当勤めのほうも欠勤したかと思います。

そのようなこともございましたが、幸い、すぐあと黒岩先生や三船先生に来ていただいたので、57、58、59年と、そういう先生方の力によりまして私も何とか持ちこたえるといえますか、何とかまともにやっていけるような体制になったかと思っております。

その期間がちょうどこの準備室の期間でございまして、実際に大学が始まって、本当の大学の仕事というのはそのあと入っていくわけですが、これは省略させていただきます。私と短大とのきっかけというのは、そういうことだったのではないかなと懐かしく思っているのですが、ただ、あの当時、いろいろ先生方にご迷惑をかけました。そういう意味では大変恵まれていたなど、自分の恵まれた状態というものに大変感謝しておりました。

それと、今、横田先生からおっしゃった、これからの新しい大学ですね。この短大ができたときというのは、やはり地元の声、何といっても地元の人たち、伝統産業に携わっている人たちの強い要望といえますか、そういうものが基本になっているわけですね。かつての高岡における高等教育というのは、当時は高岡に高等商業学校という形で経済専門の専門学校があったわけです。それが戦時中、工業高専に変わったわけです。そういうわけで、高等教育というのは、かつて昭和の初めからあったのですが、それが今度は富山大学に統一するという形になって、工業コースが工学部が変わって、それが今度また富山に集中するという形になったものですから、高岡には最高学府の高等教育がなくなってしまうという、そういうせば詰まったような感情が高岡の市民にあったと思います。だから、伝統工芸と同時に、最高学府とい

うものをどうしても高岡に置きたいという熱望があったのが、このように短大設立に動いていったわけです。

そういうことから考えますと、今度新しい富山大学に統合されますが、やはり私は、短大の色彩といえますか、個性といえますか、いかに統合されてもしっかりと特質を持っていていただきたいということですね。先ほど職人かデザイナーかというお話も出ておりましたが、両方必要なのです。特に技術というのは技術者がいなくなってしまうと消えてしまうわけです。そういう意味では、特に私は技術という面、職人という形を、何とかしてどの学校にもないものをひとつ作り上げていただきたいということですね。それは、一方で停滞しますと、そのまま消えていってしまいます。だから、技術というのは絶対止めてはいけないわけです。これはぜひ、続けてやっていただきたいと考えております。

これからの新しい大学に対して、私の一つの願いを申し上げます。どうもありがとうございました。

横田 どうもありがとうございました。新しい大学、学部に移るに当たって、麻生先生から非常に説得力のあるお言葉をちょうだいしまして、いろいろと参考になったかと思えます。

実を申しますと、この新しい学校に向けての励まし、ご忠告のことばを全員の方にお願ひする予定でございました。けれども、時間がありませんので、最後に、学生さんから後輩に向けて励ましの言葉を進呈していただきたいのです。よろしいですか。

館 今日、本当に多くの先輩方や先生方があって、今の自分があるのだなということを強く感じました。学生生活でいちばん感じたのが、本当にこの高岡短期大学というそのもの自体を知らない人がたくさんいたことです。就職活動でも自分が外に出ていかないと何も分からないという状況なので、後輩には、課外活動をもっと大事にしなければならぬということを言いたいと思います。

あと、新大学で、学部全体の横のつながりと、先生方を含めた縦のつながりをすごく大事にしてほしいなとい



工藤桂子さん

うことを、この4年間で感じたので、この会議において自分が出席するというのをこの言葉で締めくりたいと思います。どうもありがとうございました。

工藤 今、先輩の館さんが言ったように、私も同じことを感じたのですけれども、今の私がこの高岡短大の生活を楽しんでいるのは、今の皆様の努力などいろいろあったおかげだとしみじみ感じました。

現在、私はサークル活動のほうに力を入れています。学生会などの学校の行事を仕切っていったり進めていたりすることで、さらに学生が楽しめるようにと考えてやってきましたのですけれども、この活動をしてきたおかげで今の私があるのだと思います。

私は造形の専攻なのですが、ビジネスのほうにもデザインのほうにも友達がいっぱいいるということをよく言われています。それは、今までの自分がやってきたサークル活動などがあるおかげで、さらにこの生活を楽しんでいると思いますので、これからの学生にも、自分だけのことではなくて、周りの人が何をやっているのかなという興味を持って、これからの高岡短大で生活して行ってほしいなと思います。以上です。

明石 今日は貴重なお話を大変ありがとうございました。

私は高岡短大に入学してからまだ2年しかたっておらず、皆さんのように何年間もこの大学に在るわけではないので、後輩にアドアイスというのはちょっと気が引けるのですけれども、自分の感想としては、私は高岡短期大学の生徒と教官の距離が近いところがすごく好きなのです。周りにはいろいろな大学に通っている人がいるのですけれども、高岡短期大学のように、こんなに近い距離に生徒と教官があるというのは、あまりないと思います。それはやはり小規模であるからということも一つの理由として挙げられると思うのですが、今後富山大学になったとしても、規模は大きくなりますが、大学に来る人の人数は少ないので、これからもずっと教官と生徒の距離が近い高岡短期大になってほしいと思



明石佳奈さん

います。

私は1年間、学生会の役員としてやってきたのですが、やはり短期大学というのは2年間なのでサークルの存続が難しいと思います。4年制になることで、またいろいろなサークルがどんどん活性化していくのではないかと、もう少しサークルにも力を入れてほしいなと思います。以上です。

6. 閉会挨拶

横田 どうもありがとうございました。

それでは、予定の時刻を少々オーバーしております。そろそろ終わりにさせていただきたいのですが、滝沢副学長から閉会のごあいさつを兼ねましてお言葉を頂戴したいと存じます。

滝沢 本日は創設時の当事者から現役の学生の皆さんまで、多くの方から貴重なお話を伺うことができました。伝統工芸を中心にする大学、伝統とは新しく発展するもの、という創学の趣旨に関する柳田先生のお話は、地域貢献を狙う新学部の趣旨とも通じるお話で興味深く思いました。また、先生と学生の距離が近い学生生活だった、という在学生の想いは、新学部の学生にもぜひ引き継ぎたい校風だと思います。

本当に、数々の貴重なお話を、皆様ありがとうございました。

話しは尽きませんが、これで、座談会を、お開きにしたく思います。

横田 それでは、どうもありがとうございました。

何分にも司会者としては全くの未経験者でして、多々ご迷惑をおかけしたかと思えます。どうかご容赦いただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

では、これで終わりにさせていただきたいと思えます。

一同 どうもありがとうございました。

■入学試験・入学式



第1回入学試験(昭和61年2月)



第1回入学式(昭和61年4月)



第20回入学式(平成17年4月)

■新入生合宿研修





■国際交流・教育と研究

フィンランド、ラハティ、ポリテクニクとの
交換留学生制度(工芸・デザイン)



中国、大連外国語学院での短期語学研修(中国語)



中国科学院自然科学史研究所および
中国社会科学院考古研究所との共同調査・研究
(文化財科学、技術史)

アメリカ、ウエスタンオレゴン大学での短期語学研修(英語)



創己祭



■ サークル活動



弓道部



空手部



バスケットボール部



バドミントン部



バレーボール部



よさこい部



茶道部



さんざし部

■大学開放活動

■公開講座



造形研究—人体をモチーフとして—



小型木工機械による木工入門—椅子に挑戦—



Excel VBA プログラミング講座



シニアスポーツ健康教室

■小中学生を対象とした「ものづくり体験講座」



「蠟型鑄造の体験—青銅のキーホルダーを造ろう!!」

■特別公開講演会



坂東三津五郎氏特別公開講演会
「江戸文化の華 歌舞伎における粹と意匠」
(平成16年10月19日)



第1章 高岡短期大学の 黎明期と誕生

昭和61年春、高岡短期大学では、見るもの聞くものすべてが全く新しかった。先着の横山保初代学長を初めとする7人の先生とともに、先生も学生も初々しいし、もちろん校舎のエントランスも実習室も講義室も完成したばかりの清々しい香りに包まれていた。完成したばかりの真新しい校舎は新入生を迎え輝いていた。敷地内に植えられた細く弱々しい木々には黄緑色の葉が風に揺れていた。そして、新しい短期大学の教育と地域と連携した大学を築くと言う希望と緊張に包まれていた。

第一期生の授業は、私たち教職員と学生によって手探りの状態で進められた。新しい教科が開始されると、課題の意義と内容について学生との話し合いで緊張を伴った時間を過ごすことになった。この手探りの授業は、それからの高岡短期大学の方向を決定したように思える。

高岡短期大学創設期の思い出



元創設準備室長 柳田友道

高岡短期大学が本年創立二十二周年を迎えると伺い、私はまさに感無量といった感慨にふけた。創立当時富山大学長として偶々創設のお手伝いをさせていただいたのだが、その頃無理を承知でお願いして初代学長となっていた横山保先生をはじめ、積極的協力を惜しまれなかった何人かの方々はすでに他界されている。ここにこれらの方々の霊にあらためて深甚なる謝意を表明し、ご冥福をお祈り申し上げる次第である。

私が富山大学長に就任したのは昭和54年6月で、当時富山大学にとって最大の懸案は、高岡市にあった工学部を富山市五福の本キャンパスに移転することであった。この問題は十数年越しの未解決問題であり、移転遅延のために工学部の発展が経済成長の波に乗れず、他大学工学部に著しい遅れをとったという苦々しい内情もあった。この工学部移転問題が何故に高岡短期大学創設問題と関連があるのかということについては、「高岡短期大学十年史」(平成5年)の冒頭に詳述されているのでここでは省略する。

私の学長就任当時は、後述するように高岡に短大創設の方向が決まった頃だったが、富山大学としては工学部移転についての将来ビジョンはまだ固まっていなかった。富山大学は41年に工学部移転を機関決定していたのだが、歴代学長はこのことについて堀市長との話し合いをほとんどしたことがないということを知った私は、この大問題解決の切り口はここにあると気がついた。すなわち当事者である富山大学と高岡市との間の意思疎通なしに、この問題の円満解決はありえないと判断したのである。

ところが聞くところによると、堀市長は文部省に対して高岡高商時代からの数ある仕打ち(前記十年史参照)や、工学部移転の代替施設として4年制大学を要求した

が不問に付されたことなどに強い不満の念を持っていたと同時に、富山大学に対しても著しい不信感を抱いていたことを知り、市長との話し合いの設定はただ事では済まされないこともわかってきた。そこで私はこちらから何回でも高岡市に赴いて市長と面会すれば、そのうち話は通じるようになるのではないかと考え、気軽な気持ちで、事務官を同道せずに単独で市長訪問を繰り返した。その結果、初めのうちはぎごちない会話が続いたが、少しずつほぐれていって、1年近くも経つと堀市長の口から、ざっくばらんな文部省や富山大学に対する愚痴話も出てくるようになり、双方共堅苦しさがとれて、和やかな雰囲気での対話ができるようになった。私自身も堀市長は稀にみる頑固親父だという印象は持ちながら、気の優しい好々爺であることを知り、先輩として尊敬の念をもって接することができるようになったのも大きな収穫だった。

話を戻して私の学長就任の前年、富山県と高岡市が丸丸となって文部省に対し高岡市に国立短大設立の強い要請をしたところ、文部省はこれに応じて54年度に短大設置のための調査研究に着手することとなり、佐野孝吉名古屋工業大学長を主査とした調査会を発足させた。学長就任早々の私や堀市長も委員としてこれに参加した。本調査会は同年9月に検討状況をまとめたが、その中で教育専門課程については、(1)伝統的工芸品産業の発展に寄与する美術工芸家の養成、(2)実務的な経理・経営、(3)職業人に必要な実用的法律、(4)実際生活に必要な外国語の4課程として答申することとした。

55年6月、富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」が設置され、私が室長の任についた。同時に準備調査室勤務を任命された小林武事務官は、その後高岡短大開学後まで、まさに粉骨碎身の努力を積み重ね

昭和52年(1977)

主なできごと

富山県および高岡市が「高岡地域大学設置協議会」を設置し、12月に「高岡地域大学設立に関する陳情書」を文部省に提出。

昭和54年(1979)

主なできごと

(1.11)昭和54年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)設置調査経費」が認められ、文部省において短期大学の設置調査についての具体的な検討を開始。(12.29)昭和55年度予算案で「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査費」(創設準備調査要員 教授1)が認められる。

て私を補佐して下さったが、今は亡き人となってしまった。準備調査室発足後間もなく、上記調査会の佐野主査は柳田室長に対して、上記教育専門課程のうち(1)の項目について教育内容の試案策定を諮問してきた。そこで私は漆芸、金工、彫塑、デザイン等について、東京芸術大学、富山大学、高岡市、井波町の専門家6名の方々に委嘱して検討会議を開催した。

検討会議の席上ではまず「伝統」という語についてかなりの時間を割いて討議が進められた。堀市長をはじめ高岡市当局は「伝統工芸」の文字にある種の執念を持っておられた模様だったが、慎重審議の結果、前田泰次著「現代の工芸」、岩波新書の一節に述べられている次のような伝統論が参考とされた。

「伝統は生きて流れているもので、永遠に変わらない本質を持ちながら、一瞬も、とどまることのないのが本来の姿です。伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受け継いだ優れた技法を一層錬磨すると共に、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、われわれに課せられた責務だと信じます。」

この趣旨に基づき、本校ではその看板から伝統の語をはずして「工芸」とし、その中身に本来の伝統を生かすこととした。そして本校の教育期間は2年に過ぎないので、工芸家(作家)の養成を目的とするのではなく、工芸技術者(職人)の養成を目的とすることとし、同年10月に試案をとりまとめて佐野主査に報告した。

その間準備調査室は、8月に高岡市周辺の伝統工芸産業界の関係者を集めて懇談会を開催し意見を聴取したところ、新大学ではデザイン教育に是非力を注いでほしいこと、また卒業生の受け入れには全面的に協力することなどについても発言があった。さらに新大学の施設設備等の準備の参考にするため、私は輪島の漆芸、高岡の金工、井波の彫塑の作業現場を訪れ、専門家の方々から詳細に実情を伺った。

56年度に入ると、富山大学の創設準備調査室は「創設準備室」となった。準備室には創設準備委員会を設けて、

「高岡産業短期大学」(当時の仮称)の創設準備並びに工学部移転問題解決策について検討を行った。さらに新大学の「工芸」以外の専門課程についても富山大学の人文経済系教官による専門委員会を組織して検討を行った。

57年5月、新大学初の教官要員として、室長は麻生三郎氏を助教授(金工)として発令した。一方でキャンパス敷地の選定についてはすでに検討が始まっていたが、工学部の立地していた中川町町は敷地内を鉄道が横切っているし、狭隘で発展性に乏しく、教育拠点としては望ましくないということで除外され、二上地区案が浮上した。この地区で問題となったのは予定地が下水処理場の建設予定地に隣接していること、川を隔てて立地するパルプ工場の悪臭と排煙のことなどであった。しかし前者については地下埋没式の設計計画で臭気の排出は全くないこと、また後者についてはこの地域の年間の風向き調査の結果、ほとんど問題はないことがわかったので、57年8月に二上地区を高岡短大敷地とすることに最終決定した。

57年8月には文部省に「短期高等教育機関(高岡)に関する創設準備会議」が設置され、短大の基本構想として3学科(産業工芸、経営情報、国際教養)、8専攻コース、学生定員225人と一応決まったが、本案は58年2月に現行の2学科(産業工芸、産業情報)、7専攻、学生定員200人に修正された。そして最終的に58年3月、国立学校設置法一部改正により、「高岡短期大学」の開学が決定したのである。

そこでよいよ学長選考作業に入り、学識経験者と懇談を重ねながら、県や文部省とも協議が進められた。最も問題となったのは、学長は工芸関係者か、経済経営関係者かという点であった。討議の結果、国立大学の学長職という特殊な任務に当たる人材としては、やはり作家型より学者型がよいのではないかという方向に傾き、経済学者からの選考に絞られていった。そしてある先生の提言によって、大阪大学経済学部の横山保教授の名が浮上した。同氏が理学部数学科の出身で経済学者になられたという異色の存在であることを知った私は、同氏の学問的な幅の広さに魅力を感じて、数人の方々と相談した

昭和55年(1980)

主なできごと

(5.23)「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室設置規則」の制定。(6.1)富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令を受ける。

昭和56年(1981)

主なできごと

(4.1)富山大学に「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」が設置され、同室長に富山大学長柳田友道が併任発令を受ける。(4.17)「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備室規則」および「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会規則」の制定。

上で直接お目にかかり、お人柄にも惚れ込んで、学長就任をお願い申し上げたのであった。そして数日後、快諾の報を受けたときは本当に嬉しかった。

58年8月1日付けで横山氏は、まず富山大学の高岡短期大学創設準備室長に併任発令され、私の重荷は下りた。そして高岡短期大学が同年10月1日に開学すると同時に、横山氏は初代学長に就任された。開学後も私は横山学長に乞われて、運営委員会の一員としてしばらくの間お手伝いしたが、その間、旭川東海大学の黒岩靖司教授(デザイン)の採用人事についてお手伝いすることとな

り、旭川まで出掛けて行って、中々応じてくれなかった東海大学長を説得して、ようやく割愛していただくことができた。

私はこうして高岡短期大学創設時の思い出を書き記してみたが、その間、本当に多くの方々のお世話になったことを想起し、感謝の気持ちに溢れている。そして二上山麓の美しい自然に囲まれた高岡短期大学も、間もなく県内二大学と統合することになるが、統合後もその創設時の建学の精神が先に記した「伝統」の言葉通り、末永く生かされることを願ってやまない。

思い出すまに

—「高岡短期大学十年史」より再掲—



初代学長 (故)横山 保

昭和58年(1983)4月18日夕、私は東京神田の学士会館での会食の席に呼ばれました。出席者は…柳田友道富山大学長(当時高岡短期大学創設準備室長を兼務)、新田隆信元富山大学経済学部長(故人)、阿部統東京工業大学教授とそれに私……でした。私は柳田先生にはそのとき初めてお目にかかったのですが、他のお二人の先生にはすでに面識を持っておりました。新田先生にはもともと阿部教授の紹介でお目にかかったのですが、先生が経済学部長をなさっておられた頃、4年間ほど私は富山大学経済学部の併任教授を勤めたことがあり、旧知の仲でした。阿部教授は若い時から存じあげており、特に先生が東工大に来られてからは、共同研究、翻訳書の共同監修、生産性本部経営アカデミーの仕事等を通じ、先生とは親しい間柄でありました。

この日の話題は主に『地域に開かれた短期大学』として構想されておりました高岡短期大学の創設に関するものでした。食事のあと比較的長い時間にわたって意見の交換を行いました。『地域に開かれた短期大学』の具体的なイメージをめぐり、かなりの議論を行っております。帰途、阿部先生と一緒に学士会館から神田駅辺りまで歩きながら、尽きぬ話に耽った記憶があります。若し要請

があれば、この新しく生まれ出ようとする高岡短期大学に参加しようという決意をしたのはこの直後のことでありました。

その年の7月17日の地元の朝刊は、文部省が私の高岡短期大学初代学長就任を内定し、8月1日付けで同短大創設準備室長に発令する予定であるという記事を報道しました。これには少々面食らいました。勿論それまでに柳田先生にお目にかかり、文部省の斉藤審議官とも面談しており、おおよその事態の進行を把握しておりましたが、それにしても報道の速さには驚きました。

10月1日高岡短期大学は誕生しました。3日夕刻より主に文部省の関係者を招いて高岡短期大学開学記念パーティーを霞が関ビルの東海大学校友会館で行いました。これには多くの方々に出席していただきました。当時の瀬戸山文部大臣、佐野事務次官、宮地大学局長、斉藤審議官をはじめ殆どすべての関係者の御参列を得、こもごも、この行政改革の嵐のもと、国家財政の極めて厳しいときに、規模は小さいとはいえ、独立した特徴ある短期大学として創立された高岡短期大学に対して、強い激励の言葉を頂いたことを記憶しております。6日には高岡商工ビルで富山県、高岡市、高岡短期大学共催の祝賀会

昭和57年(1982)

主なできごと

(3.5)第1回「富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備委員会」の開催。(以後、3回開催される。)(8.31)文部省の昭和57年度第1回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「短期大学(高岡)の基本構想」が了承される。〔3学科6専攻2コース、入学定員225人〕(12.30)昭和58年度予算案で「高岡短期大学(仮称)」が認められる。「短期高等教育機関(高岡)創設準備費(創設要員 教授2、事務官2)」及び「開学経費(学長1、産業工芸学科(金属工芸専攻)教授1、事務官2)」

が行われました。このときは確か文部省からは斉藤審議官が見えられたと思います。

この創設期の思い出の一つは、技術教育課の方のお世話で、民主教育協会の「IDE 現代の教育」256号、に『高岡短期大学の構想』なる一文を草したことでした。これには、それまでに折りにふれて述べてきた考え方を一応整理して載せることができました。抽象的な信念として持っていたものを、多少とも具体的な構想として展開できたものと思っています。

昭和60年(1985)4月11日に二上の建設地で起工式が行われました。これには文部省から佐川文教施設部技術課長(現文教施設部長)が参加され、佐川部長のカマ入れ、私のクワ入れ、そして佐藤工業の代表者のスキ入れを行い、工事の無事完成を祈りました。佐川部長とは、足元の悪い建設現場で、建物の側壁タイルの色を決めるために、20メートル程離れた所に、工事現場の方に二上山を背景にタイルの見本を持って立ってもらい、タイルの色について検討した思い出があります。結果としては、ブ

ラウン系の、明るいけれども渋い、落ちついた彩りになりました。

短大正面の『大学通り』(この名称は島田元副学長によるものですが)を車で通りますと、低い丸形の講堂に続き、柱廊を両側に持った角張ったエントランス・ホールが見えてまいります。この丸と角のつながりに何となくローマのサン・アンジェロ(聖天使)城とバチカン正面を連想しておりましたが、ある機会にそのイメージを持っていたことを佐川部長に伺い感銘を受けました。そして昨年6月再びローマを訪れる機会がありましたので、近くに宿を取り、散歩がてらこの感じを確かめることができました。

昭和61年春には建物が完成し、学生を受け入れ、本格的な開学を迎えることになりました。

原稿の依頼を受けて筆を執ったのですが、必ずしも長い期間ではありませんでしたが、創設期の思い出は、あたかも走馬灯のように次々と現れ、尽きぬ思い出に浸ることになってしまいました。

回 想



初代副学長 徳平 滋

開学から学生を受入れるまでの僅か二年弱の間、副学長としての創設の業務に関係したに過ぎない。その短い間にも種々の出来事があったが、特に自分が心掛けていた事柄に関連することを思い出の一端として述べる。

副学長として着任した時には、既に短大の構想は決定され、学科の名称、専攻コース、教育課程等も具体的にできており、更にキャンパス予定地も定まり、準備体制も整えられつつあった。したがって、当面は富山県(出席者は副知事等)高岡市(助役等)短大(学長、副学長、事務部長等)三者による月一回の定例連絡会で情報交換して相互の意思疎通を図ることであり、また一方で、県下

の教育関係者や個人的な知人や地元の青年会議所の方々の懇談を通じて、新しい短大について地元関係者の理解を深め地域の人々の協力を強めるよう努めることであった。その時の感触では、短大構想に直接関与された人々以外は、短大の創設については承知していても、新しいユニークな考え方に基く構想の内容等については十分に理解されていないように思われた。そこで、県教育委員会や県高等学校長会との話し合のうえ高等学校長会との懇談会を設けて短大設置の趣旨と教育研究の方向の概要を説明するとともに、県下西部地区ならびに東部地区の高校進路指導教諭との「入学者選抜方法に関する懇

昭和58年(1983)

主なできごと

(2.14)文部省の第2回「短期高等教育機関(高岡市)に関する創設準備会議」で「高岡短期大学(仮称)の基本構想」の一部修正が了承。〔2学科7専攻2コース、入学定員200人〕(3.31)「国立大学設置法の一部を改正する法律」(昭和58年法律第14号)が公布され、昭和58年10月1日に高岡短期大学を設置し、昭和61年4月から学生を受け入れることが決定。(4.1)富山大学高岡短期大学創設準備室長に富山大学長柳田友道が併任発令される。(4.2)第1回「富山大学高岡短期大学創設準備委員会」の開催。(以後、6回開催)(8.1)富山大学高岡短期大学創設準備室長に大阪大学教授 横山 保が併任発令され、富山大学長柳田友道の併任が解除される。(8.31)財団法人高岡短期大学協力会の設立。(10.1)高岡短期大学(所在地 富山市五福(富山大学構内))が開学。(10.1)初代学長に横山 保(大阪大学教授)が発令される。

談会」を開いて短大の内容の周知徹底を図った。さらに、地元の経済界や教育関係の人々を招いて「開放事業に関する懇談会」を開催して、短大構想の具体的内容を説明して理解を得られるように努めた。

昭和五十九年九月に大学設置審議会設置分科会常任委員会において、本学の教育課程等を含む構想が了承され、開学に向って具体的に動き始めることとなった。この新しい構想に基く理念や仕組み、そのことに直接携わる人間の努力によって達成できることであるから、教員の選定がいかに大切であるかを自覚して懸命に努力する覚悟を決めた。自分なりの人事構想を固めるために、学長は勿論、運営委員の諸先生をはじめ先輩、知人等との話し合いを通して意見の交換等をする一方、従来から知己を得ていた東京大学や一橋大学等の諸先生を訪ねて面談するなどの努力を重ねた。大学は、基礎となる知識、技術、ものの見方、考え方を学ぶとともに、よりよい刺戟によって自らに内在する感性等を磨き、自ら創造する意欲を育て、それを展開する能力を養うところであり、単なる技能訓練の施設でないとの認識に基づいて、教員の選考に当るようにした。新しい構想を実現させるための具体的人事としては、産業工芸学科では優れた業績のある人と教育研究に強い意欲のある若い人、産業情報学科では企業等における優れた実務経験がある人と自らを伸ばそうとする意欲の強い若い人と組合せを基本とすることが良いと考えた。

昭和六十年十月に運営委員会に人事専門委員会が設けられ、副学長がその責任者となり具体的な教官選考が進められることとなった。運営委員会や人事専門委員の諸

先生方の意見を聞く一方で候補者の推薦をお願いし、推薦された人に加えて各方面から紹介された人々については、自分なりの構想に合致しそうな人には面談し、新しい短大のあり方を説明し、本人の考え方や意志を確認するように努めた。また、現職にある人の場合は、所属長や職場関係者とも面談するなどして、人物や職場での評判等についても聴取するなどした。そのため富山県下はもとより東京、大阪、筑波などを飛び廻り、ときには吹雪などの悪天候で自動車が立往生しかかったことも今では懐かしい思い出となっている。これらの具体的人選については、人事専門委員の西大由先生(東京芸術大学教授)平田純先生(富山大学教授)藤澤俊男先生(大阪大学教授)等に大変お世話になった。工芸関係に余り縁がなかった自分は、西先生には特に助けていただいた。西先生から専門分野については自分が責任をもつが、教員としての適性や意欲等については副学長自身の眼で確かめるよう忠告され、そのうえ、当時東京芸大の学生部長職であったので推薦された東京芸大出身者を学生部長室に集めて、同室にて全員の個人面接ができるよう配慮していただき、心から感謝している。また、私自身が思い悩んでいたとき、「世の中の動きも、世の人全員が動かしているのではなく何パーセントかの人が本気になって頑張ることによって多数の人が納得し、同調してその方向に動いていくのではないのでしょうか」と励まされた。

教育は、人間の人間に対する直接の営みであるから、その適任者を選ぶ仕事は難しいのは当然であったが、その結果に大学設置審議会の判定が可と出るまでの心労も大変なものがあった。その当時に偲びながら筆を擱く。

あの頃 —開学早々の頃だった—

「雨晴し」の空に浮かぶ立山連峰

あの頃、初めて高岡に住んで雨晴の空に浮かぶ立山連峰の美しさにうたれた。この地で、万葉文化が大切にされていることには深い共感をもった。——私の出身地は

大和の国なので。

大伴家持の詠める

磯の上の つままを見れば 根を延(は)へて
年深からし 神(かむ)さびにけり



第2代副学長 島田 治

昭和59年(1984)

主なできごと

(1.25)昭和59年度予算案で副学長1、産業情報学科教授1、事務官2、の整備が認められる。(12.29)昭和60年度予算案で産業工芸学科教授2、産業情報学科教授2、一般教育科目等教授1、事務官7、の整備が認められる。

大学の中庭にも、つまま(タブの木。?)が茂っている。
それから、呉羽丘陵の西と東の違いも知った。いろいろな意味で。

また、これは全県。パーティの終りには、必ず万歳三唱をやることにも慣れた。パーティの祝儀が、一律、松竹梅(日本酒)二本と決まっていた。余計なことを考えずに済み、大いに助かった。結婚式には、蒲鉾の大きな鯛が出ることも知った。誰かさんと誰かさんは、よくその尻尾(蒲鉾だから、味は頭尾均一)をお茶受けに持って来てくれた。――

雪は、私が居る間は、大したことはなかった。大学でも雪上車を買わねばと思っていた(本当ですよ。?)が、その必要はなかった。

卒業証書は、いささか上質紙の、いささか大きいのがいい?

第一回卒業生を送り出すに当たって、そうだ、卒業証書はどんなのがよいかと云うことになった。この時のものが後をも縛る。東大その他のサンプルも取り寄せた。中には、卒業証書とは、単なる証明書と云わんばかりに、B5版のそっけないものもあった。卒業証書には、大学として学生を送り出す思いをいっぱいに込めると云うことで衆議一決。上質の大型の証書となった。当時、学長の横山先生も特に御熱心だった。

バス停は県内随一?

ある雪の日、大学の執務室から、ふと外を見ると、校庭の前のバス停で学生たちが寒さに縮んでいた。特に女子学生が気の毒にみえた。これはいかん。雪国では、囲いのあるバス停は必需品だ。早速、何とかしなければと行動開始。ところが、バス会社だけでは粗末なものしかできないと云う。では、大学のお金でと考えると、道路は県道でその上に国立大学の予算で作った国有財産のバス停は置けないと云う。では、県庁に頼んでも、このバス停だけ県のお金で作ると云う訳には行かない。結局、県の法人たる大学協働会とバス会社の御協力で当時としては県内随一のバス停ができた。バス会社の人も、自動ドアを付ける設計までして下さったが、ドアを付けるとレッキとした建築物になってしまうので、路上建築は不可として没案。それにしても、バス会社の人も、県庁の人も、市の人も、関係の人々は、挙って熱心に協力して

下さった。この大学が地域に愛されている大学と如実に感じた。皆様方に感謝を捧げたい。

また、西の方の国道から大学への曲がり角にも、確か“大学通り”なる標識を建てて頂いた。

富山県に感謝

当時、県は、この大学の誘致条件と云うか、設置が決まったときの約束の実行に並々ならぬ努力をして下さった。周辺道路の整備、橋梁の新設など、もちろん県御自身の元からの計画に基づくものであったが、着実に実行して頂いた。とりわけ中沖知事のこの大学に対する御尽力には感激した。今さらながら、厚く御礼申し上げたい。古い言葉で恐縮ながら、民主主義の現代にもいっそう必要な「真の牧民官」の称号を奉りたい。

月点心 凍てつく街を 通りけり

思わず、こんなもじり句が口を突いて出てしまう夜だった。高岡に赴任して間もない頃だった。丁度これも赴任したばかりの事務部長さんと、近くに伏木と云う街があると云うことで、一度行って見ようと、夕食に出かけたことがあった。暗い、知らない街をぼとぼと歩いた。ようやく一軒のスナックを見つけて、とにかく飛び込んだ。なにせ、私とて、その頃は、まだまだ50代半ばの青年(?)だったが、やっぱり寒かった。

創己祭

第一回入学の学生諸君が、頑張ってくれた。開学初年度。夏休み頃までは、学園祭をやらうと云う機運があまりなかった。どう云うことかと思った。でも、幾らかのサジェションが機となったのか、第一回入学の諸君が猛然と立ちあがった。夏休みも終わる頃は、当局側が随分突き上げられるようになって困ったが、嬉しかった。創己祭とは、すばらしい命名だと思った。真に新しい理念の大学、新構想大学にふさわしい、そして、決意に満ちた命名と感じた。関係学生諸君の討論の結果であった。その意気で第一回学園祭は、見事な成功を見た。当時、中心となった学生諸君の顔が、今でも目に浮かぶ。もう随分な小父さん、小母さんになったかな。いや、まだまだ若いかな。!

昭和60年(1985)

主なできごと

(10.3)昭和61年度入学選抜試験(推薦入学、社会人特別選抜)を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で実施する。(最初の学生受入れに伴う入学試験)(~10.4) (12.28)昭和61年度予算案で産業工芸学科教授5、助教授4、産業情報学科教授5、助教授4、一般教育科目等教授4、開放センター教授1、事務官11の整備が認められる。

もののふの 八十(やそ)をとめらが くみ乱(まご)ふ 寺井の上のかたかごの花

高岡の人ならどなたも御存知の万葉集は大伴家持さんの歌。この“かたかご”の花が産業デザインの小関教授制作で学章になった。近頃、我が家の庭でも、そうだ、“かたかご”の花を咲かせてみんとて、やおら、ホームセンターで“かたかご”、つまりカタクリの苗を数本仕入れて植えた。いつの間にか消えた。聞けば、この花は、丁寧に3年育てないと咲かないそうだ。思い出に浸るにも、技術と丹精が必要だ。

仮住まいの教官住宅 申し訳なかった。

開学当初、まだ大学のための公務員住宅が建っていない。遠くから御赴任の教授各位には、やむを得ず地元で斡旋願った仮住宅に入って頂いていた。しばらく、数年のご辛抱とは云え、少々粗末に過ぎ、持家率(家持率ではない。)日本一の富山県で、折角迎えた優れた人材がこの住まいとは思って、申し訳なさでいっぱいになった。実際、現地を見に行くと、愕然とした。私自身は、その当時単身赴任だったので、暫く富山市の古い公務員住宅から通い、後、大学近くの小さい民間アパートを借りて引っ越した。

開学記念式からいつも国旗がはためいている！

開学記念式に国旗と校旗がはためいた。以後、国立大学として常に国旗と校旗がはためいている。加えて、外国の大切なお客様が見える時には、その国の国旗を掲げる。非常に感激して頂くようだ。本当の国際交流は、こう云うことから始まる。でも、風にはためく旗は、一月もするとぼろけて代えなければならない。ケチるなかれ、その経費。

入学試験の面接実施

入学志願者が確か1400人程度だったか。その全員を50人ほどの教官で面接するのは並大抵のことではなかった。でも、本当に総合的な、いい選抜を行うには面接が一番だ。教官は、この学生なら本当に鍛えてやりたい、

育ててやりたいと云う学生を重んじる。学生もまた、大学と教官を選択する権利に、具体的に大学の生の息遣いの一部でも感知する場となる。教官にも選ぶとともに、選ばれる方でもあると云う緊張が走る。

これが実のある教育をモットーとする、高岡短大だと思っただことであつた。



洗心苑あれこれ

広い校庭の奥に大学会館が出来た。国の予算上は、どういう費目・名称だったか忘れてしまったが、立派なものができた。確か、中曽根内閣の時だった。財政政策上、急に大型補正予算が組まれることになった。その際、もう少し後年度建設の計画だったのを前倒して実現した。

名称は、当時の横山学長にお願いして洗心苑となった。洗心の由来・出典は、どなたか詳しい人に委ねたい。当時、この洗心苑の、第一の目的としたのは、教官各位の密接な教育交流と研究交流の場とすることであった。それも、四角ばった形式的な交流ではなく、寛いだ、気楽な、打ち解けた、それだけに率直で実り多い交流と云うか、相互刺激・相互激励を狙いとした。第二に、学外からの研究者の来訪宿泊に供する上質のホテルとすることを目的とした。それから、座敷、お茶室などは、体育館の茶室の上級施設として。ある日、課外時間、来賓の接待に、お茶クラブの学生さんに茶の席を頼んだら、双方から大変感謝された。来賓は若い学生の作法に感激し、学生は、馴れた仲間同士でない、真剣勝負の練習が出来たと喜んでくれた。

ともあれ、当時、洗心苑が出来て、やっと大学らしい思いをもった。

昭和61年(1986)

主なできごと

(1.7)高岡短期大学新営第一期工事(講義・管理棟、研究棟、講義演習棟、実験実習棟、エネルギー棟)が竣工。(2.23)昭和61年度入学者選抜試験(一般試験)の学力検査を高岡市立志貴野中学校で実施。(最初の学生受入れに伴う入学試験)(2.24)同試験の実技検査を富山大学工学部構内(高岡市中川園町)で実施。(2.28)「高岡短期大学学則」を制定。(3.2)昭和61年度入学者選抜試験合格者を大学建設地の高岡市二上町で発表。(3.6)校舎が竣工したことに伴い、高岡短期大学を高岡市二上町に移転。(4.5)短期大学開放センターの設置。(4.15)昭和61年度入学式(第1回)を挙行。(5.31)開学記念式典・祝賀会を開催。(10.3)昭和62年度入学者選抜試験(推薦入学、社会人特別選抜)を実施。(～10.4、62.1.20同合格発表)(10.31)多目的グラウンド、テニスコート整備工事の竣工。(11.22)第1回創己祭(学園祭)を開催。(～11.24)(12.12)体育館新営工事の竣工。(12.30)昭和62年度予算案で産業工学学科教授4、助教授4、助手4、産業情報学科教授2、助教授4、助手4、一般教育科目等助手1、事務官10の整備が認められる。

こなたの遠く離れた地にて想うこと



初代事務部長 江田晴夫

1. 始まりはここから

国立高岡短期大学の誕生は各方面から注視されました。他の大学・短期大学、地方公共団体などから多数の問い合わせや説明会への出席依頼がありました。「……、また社会に開かれた短大のモデルケースとしての国立高岡短期大学、……。」 — [続十年後]・グループST = 代表邦光司郎・昭和58年11月光文社刊 — と紹介されました。

これに先立つこと昭和54年頃から、富山大学工学部の富山市移転に伴う地元要望事項として、短期高等教育機関の高岡市設置が検討され始められていました。

全国的な大学紛争は漸く沈静化しつつありました。社会から距離を置いていた高等教育機関に対する批判・要請に応えながら、新構想の筑波大学などにみられるような改革が行なわれ、一県一医科大学の配置計画が推進されてきました。

いっぽう、地方における伝統的工芸文化を拠りどころとする地場産業の停滞・衰退は顕著なものがあり、このような地域背景を踏まえながらも、狭い視野から脱却した先進的・学術的かつ広域的・国際的な教育機関づくりが模索されていたのです。

2. 五福から中川へ —開学準備に明け暮れて—

この時期、私立の短期大学はかなりの数ありました。国立としては大学併設の短期大学はありましたが、単独の短期大学は皆無でした。参考となる前例がみあたりません。しかも、日本の伝統技能の振興に寄与できる地域密着型の国立高等教育機関を創設することは未知の空間に不確定なものを手探りで構築していくに類することでありました。

歴史の流れに伝承され、徒弟制度に墨守されてきた技能を、いかに学校制度のなかに位置付けて、どのように教育課程として編成するのか。このような伝統工芸を底支えするために、普遍的付加価値を創造し得るデザイン力、国外も視野に入れた市場進出を図り得るビジネス能

力などを教授する未来指向の方法が検討されました。

しかしながら、小規模・短期とはいえ単独の高等教育機関を設置することは、経費的にも定員措置の面から、諸般の事情から極めて困難な条件下にありました。

厳しい行財政状況のなかで、文部省(当時)、富山大学、東京芸術大学、大阪大学、そして、富山県、高岡市、地元公立学校、地域企業、地区住民の人々など、沢山のご支援、ご協力、ご鞭撻がありました。だからこそ、当学の建設・整備が確実に進捗していったことを思い起し、それぞれの決断に対して改めて感慨を深くするものがあります。

3. 中川から二上まで —学生受け入れに向けて—

そして、諸条件不備にも拘らず、加重な業務によく耐えて自己の職責を着実に遂行してくださった、あの時期の教職員の方々に衷心から敬意を表するものであります。

敷地は当学設置の決定時までに確定していませんでした。学舎の建設はほぼ順調でしたが、開放センターの根拠付け・位置付けなどに試行錯誤しました。教職員住宅は各人が着任した後も、暫らく確保できませんでした。試験場の設定・試験要員の派遣要請に右往左往し、学生募集要項作成などに徹夜したものでした。その他、限りなく……。

帰宅はほとんど深夜でした。真夜中に宿舍周辺の除雪作業に汗し、百足や守宮の訪問にびっくり跳ね起きたりもしましたが、窓から入ってくる風は自然がいっぱいでした。

忙中閑あり、しばしの憩いに平静さを取戻したものです。雨晴海岸から眺望する雄大な立山連峰、黒部峡谷の残雪を愛でながらの露天風呂、五箇山の深緑に佇む懐かしい合掌家屋、瑞龍寺の造形美豊かな技巧的骨組み、井波の静寂な町並に洩れ響く木彫の音、高岡大仏の優しく包みこんでくれるお顔など、峻険な景観や勝れた伝統文化に接した後、うまい酒と肴に舌鼓を打ち、時には前後不覚に酔い痴れたこともありました。

昭和62年(1987)

主なできごと

(2.22)昭和62年度入学者選抜試験(一般選抜)を実施。(～2.24、3.7同合格発表)(3.10)高岡短期大学校友会の設立。(3.25)図書館新営工事の竣工。(4.15)昭和62年度入学式を挙行。(7.15)創己会(学生自治会)の設立。

4. はらかな二上の空へ想うこと

当学在職期間は昭和58年4月から、昭和61年5月まででした。あれから二昔が流れました。20年の歳月は新生児をも成人にするものです。しかし、その出自と歴史は誰にも否定出来るものではありません。当学の創設、国立大学法人への転換、そして新しい大学芸術文化学部への変貌は時代の趨勢でありましょう。歴史と伝統を継承しながら社会の潮流に適應してゆくことは、新しいものを創造していく要諦であります。僭越ではありますが、当学『建学の理念』を忘却の片隅に埋没させることなく、

将来のさらなる充実発展の礎としていただければ幸いです。希望するものであります。

高岡短期大学の発展的再出発に満腔の祝意を表するとともに、数多ある教育機関の中にあっても特色ある確固とした地位を占められることを祈念し、現教職員の皆様のご健勝、ご活躍、ご研鑽を期待するものであります。

色褪せた頁を繕きながら、老骨が思いつくままに記述しているので、記憶違いなどによる誤りがあるかも知れません。ご宥くださるようお願いして擱筆します。

高岡短期大学の思い出



元事務部長 川崎 晃

昭和61年6月1日付高岡短期大学の事務部長の発令を受け、赴任しました。

在任期間1年10ヶ月の短い期間でしたが、事務部長として、まさに学生と同じ名誉ある第1期生でした。在職中の思い出のいくつかをお話します。

事務部長として、構内警備に多少の懸念はありましたが、在職中の事故は、まったくありませんでした。

このような特色ある建物のため、私学の関係者等が常時見学に来学し、その応接のため庶務担当者はうれしい悲鳴を上げていました。

校舎などの建物について

初めて新校舎を見た印象は、中世の西洋建築を想像させる回廊のあるこじんまりとした凛酒な建物でした。特に天井の高いエントランスホールや開放センターの建物が印象に残りました。この建物の建設は、すべて文部省の直営工事であり、赴任時には既にその大半が完成しておりました。

唯一、非常勤講師宿泊施設が建設途上であり、島田副学長ともども、設計段階で文部省に陳情したこと(箱型でなく一部を円形に)を記憶しています。

また、開かれた大学のイメージどおり、短期大学には困障がなく、路上から誰でも自由に構内に入ることができるユニークなもので、校舎正面の広場は、まさに公園のように開放的でした。

管理運営などについて

(教授会)

学長・副学長及び学科長を中心に10数人のメンバーで構成し、月1回開催されました。少人数のため、まとまりがよく、議事は短時間で終了しました。

(参与会)

新設の短大として 知事・富山大学長・経済界代表などによる第1回の参与会が開催され、大学側から近況の説明と参加のかたがたから意見をいただきました。

(公開講座)

副学長が講師として、当時としては、先進的なパソコンの公開講座を開き、夜間10数人の主婦が熱心に聴講して、大変な盛況でした。内容はベーシックなどで、今の“お絵かきソフト”とは異なり、各自がプログラムを作

昭和63年(1988)

主なできごと

(1.18)学科主任の名称を学科長に変更。(1.29)高岡短期大学同窓会の設立。(2.16)校章の決定。(3.19)昭和62年度卒業証書授与式(第1回)を挙行。(3.25)非常勤講師宿泊施設(洗心苑)新営工事の竣工。(4.1)専攻科地域産業専攻の設置。(4.8)昭和63年度入学式を挙行。(4.13)昭和63年度専攻科地域産業専攻入学選抜試験を実施。(4.16)同合格発表(最初の専攻科学生受入れに伴う入学試験)(4.25)昭和63年度専攻科地域産業専攻入学式(第1回)を挙行。

成する結構難かしいものでした。わたしも時々聴講生になり、この公開講座に加わりました。また勤務終了後副学長からベーシックの特訓を受けたりもしました。当時の懐かしいノートが、今も手元にあります。

バス停の設置について

短大前のバス停を設置する際に、かなり県に無理なお願いをしたことを記憶しています。学生のほとんどがバスを利用しており、冬季 雪の多いときは、吹きさらしのバス停で多くの学生が待機するようなことになるので、風雪を直接受けられないような箱型の停留所の設置を、県にお願いに行きました。

県の意見は、道路上に停留所を設置する場合は、「屋根と柱」で「箱型」の設置は認められないということでしたが、熱心に陳情した結果理解を示してくれました。

冬季になり風雪の強い日 学生たちが停留所で歓談しているのを見て、県のはからいに感謝したことを記憶しています。

高岡の史跡散策などについて

在職は、短い期間でしたが、仕事を離れても高岡は、思い出多い街でした。

国分寺跡や大伴家持の歌碑、勝興寺や瑞竜寺の名刹、古城公園 また義経岩や海岸に3000メートル超級の山々が直接映る雨晴海岸の絶景、日本一の銅器の街、食通には忘れることのできない氷見、新湊の新鮮な魚・ホタルイカやズワイガニ、そして伏木の夏祭りなどなど 今でも楽しく思い出されます。

休日には、よく愛犬(2匹のポメラニアン)を連れ、散歩したものでした。

いま、カメラを趣味でやっており、贅沢なくらい ふんだんにあった当時のシャッター・チャンスが恨めしく思い出されます。

以上のほか、晴れやかな第1期生を送り出したこと、後援会事業を発足させたこと等の思い出がありますが、在職から20年余を過ぎており、記憶も定かではありませんので、この程度の記録にとどめさせていただきます。

創設準備室の思い出

高岡短大が創立したのはたしか昭和58年の秋頃だったと記憶している。それ以前は「短期高等教育機関(高岡)創設準備室」という長たらしい名称で富山大学の五福キャンパスに設置されていました。私が初めて短大との出会いを持ったのは昭和57年の5月のことでした。それ迄長年勤めていた高等学校を辞し短大設置の任務に就くよう指命され富大の管理棟に出向したのが最初でした。当時の事を追憶すると実に懐かしく感無量なものがあります。ここで簡単に高岡に於ける高等教育機関の変遷についてふれてみたいと思います。昭和の初期までは高岡高等商業学校(旧)が高岡市中川に設置されていたが、第二次世界大戦の勃発によって急遽工業専門学校(旧)と改編され、更に戦後は新制度による富山大学工学部と時代の要望と共にその内容も大きく変えながら運営されて来たのである。現代社会の要請は国際環境の著しい変化と激しい競争の波に押され急速な社会構造の変革を余儀無くされ21世紀に向けての発言は独自の産業基盤が必要と特に地方の特色を出す地域産業の振興が大きなウエイト

を示し全国各地でそれぞれの伝統産業育成が声を大にしてクローズアップされて来た。富山県では高岡地区が古くから根付いていた金属工芸(銅器)と漆工芸、砺波地区の木工芸(木彫刻・挽物)の伝統産業が発達しており、全国的にも広く知られた産地を形成していることは周知の通りである。昭和50年代に至り富山大学が富山市五福のキャンパス集中を計るという国の指令に基づいて高岡にあった工学部は撤収され全学部が五福に統合される事態となり、これを機に先ほど申し述べた地域社会の発展を期し是非とも独立した大学の実現を計ろうとする運動が興ったのである。高岡地域に於ける発展の鍵はなんといっても大学を基盤とした教育機構の充実こそが根本であり大袈裟に言えばあらゆる文化文明の開化が発信されると考えられた。特に高岡ではこうした要求が背景となって国や地方の機関に対して強力に働きかけ、昭和54年には設置に関する調査会が当時の文部省内に開設され、やがて栄えある大学の創設が決定されたことは誠に喜ばしいことでした。ここまでに至る紆余曲折は言語に



名誉教授 麻生三郎

絶するものがあつたと聞いているが、地域の人たちの逞しい行動力と飽くなき熱意の結果がこれを生み出したものと評価されるでしょう。

私が最初に訪れた印象を申し上げますと、真新しい表札の掛かった部屋に第一歩を印したとき、何ともいえぬ重圧感と生々しい誕生の息吹とでもいうか新しい緊張を諸に感じたことを覚えています。室長は当時の富山大学学長の柳田友道先生で兼務され、事務職員として江田総主幹、小林主幹と他に4名の事務官の人達が執務をとっておられたと思う。担当の教官として私が最初の赴任になり、他に富大の教育学部の先生が協力の形で準備室の陣容が構成されました。草創期のスタッフはどうしても少数精鋭にならざるを得ません。

昨日まで長期に亘って勤めて来た高校教育の現場から一挙に大学の創設業務に転ずるということは私にとってあまりにも極端な方向変換であり、しかも限られた短い期間で全く新しい世界に飛び込むことの大胆な行動は正直言ってまっとう出来るのだろうか日が重なるにつれて心配になって来たのです。ともすると自分自身を見失い勝ちになったことも何度かありました。仕事と自分との葛藤をどのように理解してゆけばよいかの自問自答を繰り返す混乱期が或る程度続いたことがありました。しかしこうした日々の連続がいつしか現実的の大学像の把握に

向って近づいてゆくことが自分なりに意識するようになると、自分の存在感が大きく安定して直視出来るようになったのです。未知の偶像をどのように現実の形態に結び付けるか組み立てと破壊の繰り返しを重ねながら徐々に形成されてゆく大学像の追究に専念出来たことを自負している。

昭和58年10月待望の大学発足の日を迎えた高岡短期大学は全国で唯一の独立した短大である。初代の学長に横山保先生(故)が就任されると共に産業工芸分野では黒岩、三船、中川の諸先生が赴任され、産業情報分野には澤本、石井、木村の各先生方が着任され強力な教授陣によって準備室の機能が磐石となったのであります。一方二上山麓のキャンパスでは本格的な建設工事が始まり近代的な学園構成が着々と進められ毎日にその全容が現出されて行くと共に、準備室も五福から高岡市中川にあった元工学部の旧校舎に事務局が移され、建設促進に全力を挙げたのである。昭和61年4月の第1回入学生を受け入れるまでの準備室の作業内容は残念ながら省略させて戴くが、僅かな期間の中で教育体系から施設設備等の山積する課題を一つ一つ着実に取り組んでおられた先生方の涙ぐましいご活躍を思い浮かべながら温かい心遣いにご支援を賜ったことを感謝申し上げます、私の準備室時代の思い出とさせていただきます。

開学断想



名誉教授 阿部 統

私が、高岡短大と関わりをもつようになったのは何時からだったろうか？二十年以上も前のメモ帖を繰ってみて、昭和58(1983)年3月に富山大学経済学部長だった新田隆信先生が突然東京工大の研究室に来訪されたのがきっかけであったのを思い出した。

それ以前に富山大学に非常勤講師として出講した際ご拝眉をえてはいたのだったが、お話の内容は思いもかけぬものであった。富山大学工学部が高岡市から富山市内にキャンパスを移すことになったので、さまざまな議論の末、ようやく国立の短期大学を新設することに合意ができた。ついては開設に当たって、発足・運営の中心となって面倒をみてほしいとの依頼である。当時私は一年後に東工大の定年退官を控えていたので、それを見越してのご厚志と拝察したが、私は沖縄が本土復帰する前か

ら同地に関係があり、琉球大学にも出講して定年後は同大学に赴任することを約束していたので、恐縮しながらも辞退申し上げた。戦争の影響で沖縄には私の年齢層の男性が極端に少なかったので、そうすることが私の宿命のように感じたのも事実である。そして大阪大学教授で畏友の横山保氏をご紹介した。暫くして横山教授からお引き受けしたとの連絡があり、何よりの人事と心から喜ばしく思った。

その後間もなく、横山・新田両教授から重ねて、せめて大学が発足するまで、開学準備の委員会に参画して協力してほしいとの鄭重な依頼があった。東京から沖縄と富山に行き来するのはためらいもあったのだが、いささか責任も感じて承諾した。主として富山大学で開かれた会議で、キャンパスの位置、学部の編成はじめ大学の特

質と骨格を決める真剣な討議が繰り返された。その過程で印象深かったのは、地元の識者の委員の方々が、地域の特性と将来展望を目指して、情報・外国語・伝統工芸を専攻する学科の設置を強く希望されたことである。一見相互にあまり関連がないように見えたこれらの3専攻に、横山教授は深い理解を示した。そうこうして翌年10月1日開学のための骨子が定まって記念の集いが開かれ、昭和61(1986)年3月末に開学式を行うことが確定して具体的に建設その他の準備が始まった。

こうして昭和60年度中には無事発足の見通しが立ったので、開学とともに私と高岡短大の関わりもほぼ終了したと思っていたところ、横山教授から大学に赴任してほしいとの内々の要望があり、学長に正式に就任されて後、9月に公的に依頼をいただいた。私は詳細を知らないのだが、その間事務的にも琉球大学といろいろ折衝があったらしい。たまたま10月に綿貫民輔国土庁長官から、当時エネルギー庁の幹部をしていた教え子を通じて会いたいとの連絡があり、沖縄開発庁長官を兼ねておられたので多分沖縄に関連しての話だろうと推察して芝の某所でお眼にかかったところ、最後に「私の故郷もよろしく」と言われたのには面喰らった。あれこれのいきさつの後、私が短大に関連書類を送ったのは11月半ば、正式に移籍の辞令を受領したのは翌年の4月1日であっ

た。

短大では、同僚の方々が私の専門を超える多彩の人たちであったのでいろいろ刺戟をうけ、楽しく過ごすことができた。とりわけ、沖縄も伝統工芸が盛んな処なので門外漢的な関心をもっていたのだが、折々に耳にする関連する逸話は興味があった。ただ今でも申し訳なくかつ残念に思うのは、当時病床にあった老母を抱えていたので実質的に東京から通勤する形になり、学生諸君に個別に接する機会が少なかったことである。当初、在任期間は四年の積もりでいたのだが、横山学長から自分の任期が終わるまでつき合ってほしいと言われ、一年延長した。最終講義に「越中と琉球」と題して、北前船による前田藩の松前昆布と、琉球王朝をダミーに使っての島津藩の中国から輸入薬草が交換されて、富山の製菓業の基盤を支えていたという史実を紹介できたのも思い出である。

独りよがりの記憶に頼っての内容なので誤りも多いと思う。高岡短大が発展的に改革されて二十年の歴史を閉じると聞き、今更のように新設の理想と熱意に燃えていた当時の教官・職員の方々の意気込みを思い起こす。あらためて横山前学長への惜別の思いを深くしながら、同窓の各位の活躍を期待している。

回 想



名誉教授 中川 宏

大学構内の樹々の若葉が萌え出す頃、昭和60年に石井、木村、沢本、三船、中川の5教官が任命され、既着任の麻生、黒岩の両教授に加え7教官になった。次年度の学生受け入れの準備に毎日遅くまで懸命の作業が続いた。わが高短大の校舎の完工は一年後の来春で、それまでは富山市に移設が決まっていた高岡市中川園町の富山大学工学部の工業化学棟二、三階がしばしの仮校舎として使用された。やがて夏になり格別に暑い毎日が続いた。扇風機は一日中休むことなく回転し続けた。一方この構内では工学部本館(旧高岡高等商業学校)の立派な木造建築から、取り壊し撤去が始まり、逐次他の工学部の各学科の木造、鉄骨棟の撤去になった。しばらくそれらの撤去騒音と暑さに耐えざるを得なかった。余談ながら本館の木造物は貫碌があり、使用材料もさもありなんと

想像していた。主柱、梁、桁などさすが断面も大きくこれから再加工して記念品にならないかと考慮されていた。しかし、その樹種は北米産のダグラスファー(通称「米マツ」)と判明した。

昭和60年4月1日には学長、副学長と主要事務職員および教官7名が揃ったところで運営委員会、ついで運営委員会の補助機関として全教官による教官会議が開かれ、学内規定の整備から教育内容の検討、第一回入学試験の実施方法、教育設備機器の選定、図書館の書籍の選定作業に至るまでに及び、ほとんど毎週のように開かれた。さらに各学科、専攻ともそれぞれのカリキュラムの編成に力が注がれた。ここではカリキュラムの方向は大学設置審議会に定義した基本構想に唱えられている

(1)大学レベルに立脚し (2)豊かな美的感覚とその発

現方法を醸成する (3)自然科学、工学に基づく計画の設計製作評価などを創り出す体系 (4)審美を高める精緻な手法の体得、これらカリキュラムの内容を具体化するに先立って 1.大学レベルの産業工芸とは 2.工芸と産業とは 3.美学と理工学とは、など基本理念にも諸論があり学科教官2～4名で幾度も口に泡を吐いて論じ合った。このような理念解釈の論及は後年に行われる「大学の将来構想」を論じる手始めの一つだった。大学の将来構想の具現の第一歩として、専攻科がある。これは昭和58年に計画され、学内の諸条件の充足、短大教育の充実によって発足できることになっていた。昭和61年末から発足に係わる態勢の整備にあたり、昭和63年度から地域産業専攻科の名で発足するに至った。この専攻科の特徴は、産業工芸と産業情報両学科の単なる補足延長の教育ではなく、学際的領域を総合的に推進、最新・精新にして実践的で地域産業をも指導・主導できる教育内容とカリキュラムで構成されている。これに並行して産業工芸学科内で将来構想の取り組みの一つとして各教官から将来“かくあるべき”“かくある希望”など多くの提議を頂いた。これらの諸論を将来構想委員会に反映した。

その後、学内の教育、研究面とも年ごとに充実されてきた。一方産業界はより世界的に、産業構造の多様化、IT産業、近代造形・芸術産業の発達を予見していた。時同じくして、国立大学の独立行政法人化への制度変化が提示されている。これらの学内外の変化を見越すよう、将来構想も従来の理念・思考を止揚する構想が実現するべく(故)蠟山、西頭両学長はじめ多くの教官の努力によって、教程にのるばかりと伺っている。

昭和60年秋に戻すと、借りている工業化学棟以外の工学部の建物、施設は全て撤去され、わずかに東側通路の“いてふ”の並木が少しずつ色づいているのが、名残となっている。このころから高岡短大として学生受入れの最初の推薦、社会人特別選抜が行われた。新入学生の募集に先立って、夏頃から7教官と学校職員と組になってそれぞれ5～7校ずつの県内高等学校の進学担当教師に、本学の特徴と卒後について縷々説明し、生徒たちには是非応募を推めさせるようお願いを歩いた。ついで、昭和61年2月に、第一期生になる一般選抜試験が行われるに至った。その冬は平年よりかなり大雪と寒さで応募者の数が気遣われたが、両学科で1250名以上を迎えることになり、予定していた県立高岡工芸高校から、志貴野中学校の教室を学力検査室に変更し、ともなってその監督教官も来年度予定教官、富山大学の関係教官の応援を仰いだ。さらに産業工芸学科の受験者に対する実技検査も急遽、取り壊し寸前の仮校舎の3階の空室で間に合うよう整え、無事検査を終えた。

多くの関係者の努力によって、わが高岡短大の学舎の過半が完成した。そこで、第一回一般選抜合格者の発表の掲示がされた。ここで、予想以上の課題が後日になって判明した。それは合格者の中から入学辞退者が続出し、定数割れの状態になることが確実になったので、大急ぎで追加募集が行われた。このことは、社会一般人、特に受験年代の生徒・学生の大学(短)観、人生観、わが高岡短大の教育理念とが理解不足だったのか、検討する必要がある。当面、学科・専攻により、辞退者数に多い少ないがあるので、一般選抜においても面接を全応募者に行うこととし、次年以降その効果があるようになった。

(追録)非常勤講師用の宿舎として、洗心苑が竣工した。(昭和63年) ついで(平成2年)この東側の三角形状でそれほど広くはない敷地に、教材として利用できる樹木園が整備された。ただ埋立土壌で、そのままでは樹木の植栽には不適で、多くの客土が必要であった。植栽樹は、“うるし”のほか、5～6種を選んだ。これに関連し、多目的グラウンド、テニスコートの周辺(北、東、南側)がある。これらにかなりの良質の客土を施し、根の深い、成長のよい樹種数種を選び、これを複層多列で、生長を予想して、間隔をとり、植栽したらと勧められる。10～15年経てば、学生諸君の成長と同様、見事な風致林になるだろう。



昔々の話



名誉教授 黒岩靖司

昭和57年(1972)であったと思いますが、暮れも押しつまった12月30日の夕方、東京芸大の恩師故小池岩太郎先生から、私が住んでいた北海道旭川の家電話が掛かって来ました。先生独特のバリトンの声で「高岡短期大学が出来ることが決定したよ。富山県に行ってくれたまえ」これが私が高岡短大を自分の問題として考えるようになった始まりです。この昭和57年という年はマイケル・ジャクソンの「スリラー」が出た年です。アメリカで。当時私は北海道東海大学芸術学部デザイン学科の教授をしていました。その前身は東海大学工芸短期大学です。短期大学と四年制の学部両方を創設から経験しました。最近この大学はオリンピックのスキー女子「モーグル」のゴールドメダリストが出た事で一般に名が知られるようになりました。

私の高岡赴任は、実際には富山でしたが昭和59年4月1日です。まだ現在の高岡短大のキャンパスは影も形もなく一面のタンポでした。休日には二上山の耳の長さが6センチの野うさぎが駆けまわる中庭もまだありませんでした。私の毎朝出掛けてゆく所は富山市五福の富山大学事務棟の4階にある高岡短大設立準備事務所でした。野球場の隣です。この昭和59年は2月冒険家植村直己がマッキンリー山に消えた年です。

初代学長の横山保先生は私より半年早く赴任されておりました。他に麻生三郎先生が既に着任されておりました。名前だけ聞かされた時私は高名な油絵の画家にあえるものと思っていましたが麻生先生は同姓同名の別人で金工の先生でした。

まもなく横山学長が「黒岩先生、高岡短大のカンバンを出すから一緒に来てください」と言われまして、富山大学事務棟の玄関に、赤茶けた桧の板であったと思いますが「高岡短期大学」と墨書した看板を掛けました。なにしろ先生は3人、学生は勿論まだいませんし場所も違いますので私は不思議な気持でしたが、それでも事務官の方達と精一杯パラパラと拍手したのを昨日の事の様に憶えています。カンバンは折れ釘に掛けてありますので、風が吹きますと「タカタン、タカタン」と鳴っておりました。私はこの日が高岡短大の始まりと考えていましたが、現在の開校記念日は何故か秋ですね。

高岡短期大学初代学長の横山保先生は残念ながら故人

となれましたが、私が高岡短大で出会った最も大学教授らしきのある人物でした。先生は元々経済学部の先生で数学者です。ご本人は「わしの専門は統計学だ」と言っておられました。

横山先生は一面中々のユーモリストでした。ご自分はいささかあまりそう思っていないようでしたが、こちらの出方次第では巧まざるユーモアを体全体で振りまいておられました。

先生は食通でした。お酒も好きでしたがそれよりも甘党でした。よく設立事務所の狭い学長室に呼ばれて、直径15センチ以上ある葬式饅頭をナイフで半分に分けて二人で食べました。中はあんこで一杯です。やっとたべ終わると「それでは昼めしをたべに行くか」と先生、この人はフランソワ・ラブレーの本のガルガンチュアのような人だなあと私は思いました。先生自身はローマが好きでした。古代ローマに憧れていたのだと思います。ローマ人なら先生によく似た健啖家ですし、それに高岡短大の校舎には随所にローマ風が顔を出しています。

例えば講堂の舞台の幕です。真中から左右に深紅のビロードの幕が、チージャジャーとあきます。私は金色の房だけはやめた方がよいと進言しましたが、どうやら現代のローマで観光客向けのあのようものを鑑賞したらしいのです。意志強固な先生でした。

デザインは義理と人情とやせがまん 黒岩

(主な担当科目：色彩学・環境デザイン)



仮校舎での一年間と二上キャンパス引っ越しの頃の思い出

名誉教授 澤本正巳

どこまでも碧く澄みわたった大空を見上げながら、仕合わせの気分で高岡短期大学の仮校舎である中川園町の旧富山大学工学部校舎へ第一歩を印したのは、昭和60年4月1日である。

大半の建物は取り壊されていたが、一部事務棟と工業化学科の1棟がのこっていた。工業化学科の2階の廊下を挟んで、南側に学長室や事務スタッフ部門の部屋があり、反対の北側に産業工芸学科と産業情報学科の2教官室に2・3の会議室があった。教官室といっても、教室の机と椅子をとっぱらい、そこに事務机を三つ置いたというだけのガランとした簡素な部屋だった。窓を開けると、1階の化学実験の薬品の臭気が漂ってきて、暑い日など気分が悪くなること頻りで、お世辞にもいい環境とはいえなかった。

産業情報学科の教官室には、石井栄一、木村信幸の両先生と小生が、お隣の産業工芸学科には、中川宏、麻生三郎、黒岩靖司、三船温尚の4先生が陣取り、「七人の侍」ならざる「七人の教官」が、1年後に控えた二上キャンパス開学のための準備に入るのである。

横山学長からいただいた辞令は、「文部教官教育職(一)1等級(高岡短期大学教授産業情報学科)に採用する17号俸を給する」というものだった。任命権者が文部大臣になっていたのでいささか大袈裟で奇異な感じもしたが、それだけに重責を果せられた職位であることを改めて思い知らされたような気がした。徳平副学長からは、大学設置審で、担当科目として、経営実務概論、経営管理論、労務管理論と特別演習の4科目が認可されたことを知らされた。

高岡短期大学へ赴任するまでは、行政機関(人事院)と民間企業(松下電器)に在籍し、高等教育機関での勤務経験がなかったので、なにはともあれ、1年後の授業開始に備えて教科書づくりをしなければならぬと考えた。執筆原稿は、石井先生のお力添えで、東京の出版社から「現代経営管理読本」なる一書として刊行することができた。仮校舎時代の、小生の最大の業績といえるかもしれない。

産業情報学科には三つの専攻があり、小生は経営実務専攻を、木村先生は情報処理専攻を、そして石井先生はビジネス外語専攻を担当することとなり、各教官がそれ

ぞれの専攻の必要設備の充足や備品・図書の購入などを受け持った。小生は、いままで学問上有益な図書購入の経験をもちあわせていなかったもので、図書目録の作成や購入にはホトホト困りはてた。産業情報学科としては、和書で4600冊、洋書で1000冊所蔵する必要があった。そのうちの3分の1が経営実務専攻分であったので、非常に苦勞をして整備したという記憶がのこっている。

予算の配分と備品の購入については、吉田課長としばしば話し合ったが、なかなか意見の一致をみず、遂には口角泡をとばしてよくやりあった。返答に窮するとハスキーな声が更に高くなり、処々に文部省風を吹かせて論点をぼかすという、たわいない手段を使ってでも自説を通すという人だったが、いまにして思えば、それも懐しい思い出の一つとなっている。

小さい世帯ながら、毎月1回教官会議があった。そこで昭和60年10月に推薦入学を実施することが決った。第1回の推薦入学は、高校の内申書と小論文と面接とで判定することになり、学長からは「高岡短期大学でやる気を出して真に勉強したいという人を重点的に選んでほしい」という要望があった。小論文の題名は、7名の教官から募集することになり、たしか学長と副学長が選定されたはずであるが、はからずも小生の「私の青春と高岡短期大学での夢」が選ばれた。いささかなりとも貢献でき、うれしかった。

一般選抜入試は、翌年の2月中旬に実施が決った。入試願書の受付は諸般の事情から郵便のみとした。願書受付開始前日に、競争倍率が話題になった。はじめての入試なので、誰の口からも確たる予想が聞かれない。学長が一計を案じ「予想の当たった人にはウイスキーを進呈しましょう」と提案される。小生は、高岡短期大学に対する社会一般の期待の高さと初物であることを考えて、極めて高い倍率を予想した。経営実務は8倍、情報処理は13倍、ビジネス外語は6倍とした。これが一番実際に近似した数値となり、ウイスキーをもらった。その時、学長から「なかなか勘がいいですね」と煽てられた。産業工芸学科は、黒岩先生がもられたはずである。

これは後日談になるが、洗心苑で夕食をいただいたあと、学長とよく麻雀を楽しんだ。プレーが終ったあと、「先生は勘がいいからとてもかなわないな」とよく愚痴っ

ておられた。入試の予想的中のことが頭にあったからだろう。2代目学長宮本先生の言によると、「大阪大学時代は自分が勝つまでやめない」という無邪気さがあったそうだが、小生がメンバーの時は一度もぶら下られた記憶がない。遊びだったのだから、多少は手心を加えて学長に花をもたせてあげるべきだった、お気の毒なことをしてしまったものだ、いまになって変な反省をしている。

一般選抜入試の筆記試験は、翌年2月23日(日曜日)雪の降る中、志貴野中学で行われた。競争倍率が高かったのと、はじめての入試だったので、歩留りがよめず、合格者の中の多くが他大学へ流れ、結果として産業情報学科は、2次試験をやらざるを得ない破目に落ち入ったのである。

うらかな小春日和の曇りがり、めずらしく学長がわが研究室にこられ、3人の教官を前に、しばらくは例によってたわいない四方山話、次いで、第1回入学生の受け入れのこと、産業情報学科の教官の増員のこと、二上キャンパスの建築設計のこと(学長は、イタリアにある古代建築様式を模して設計された正面玄関に多くの柱のあるユニークな外観には大変ご満悦だった)についての話があり、最後に「この3人の中で、誰か産業情報学科長になってほしい。ところで澤本先生はどうですか」と切り出された。小生は、「行政や経営の実務経験が少なく、教育・研究の分野では素人ですから勘弁願いたい」と申しあげた。

学長が退室された後、石井先生から「私は永年文部省調査官をやってきたので文部省のことは隅々まで知悉している。文部省関連の情報はすべて流すから、大船に乗った気持ちで学科長をやればよい。学科長は、年齢の高いものからやるのが順序で、次は必ず私が引き受けるから」との有難いご託宣があり、つづいて木村先生から「教育・研究のことについて判らないことがあれば、私が神戸商科大学にいた経験から、なんでも教えるし援助するから」という話があり、両先生の助けを得て初代学科長をやらざるを得ないか、という心境に傾いていった。

それから1ヵ月ぐらいい経って、学長から「文部省に学科長手当の支給を要求してきたが駄目だった。申し訳ない」というお話。この話を聞くまで、学科長の職務の重さをあれこれ考え気掛りで仕方がなかった。学長から「手当は支給しない」という話を聞いてから、緊張感がスーッと抜けて気持ちが楽になった。「手当までもらってあんなヘマをやっている」と非難されるよりは、「手当ももらっていないのにまあよくやっているじゃないか」といわれる方が楽だったからである。その意味で「手当なし」は小生にとっては大変有難いことだった。

ちょっと余談になるが、学長のような大先生から、小生のような存在の軽い人間に、澤本君ではなく澤本先生と呼ばれるのは、いささか面映ゆかった。先生と呼ばれるのは、相手への単なる思いやりではなく、いまは半人前かもしれないが、民間企業の実務経験者第1号として任用したのだから、早く一人前になってほしいとの期待を込めて、先生と呼称されているのかも知れないと思ってみた。そう思うと、素直な心でいろいろなことを学ばなければいけないという自分自身に対する自戒の材料にもなった。

昭和61年3月になって、二上キャンパス新校舎への引っ越しがはじまった。仮校舎では、いささか不便な思いをしてきたせいもあり、新校舎はモダンで設備も万事宜行き届いており、思わず「歓喜の歌」を口ずさむくらいだった。図書館も体育館もなかったが、現にある講義演習棟・研究棟で十分だった。そして、光明と生新の気配が、その間を領していた。

新校舎へ移ってから、学長室へ足繁くかよった。学科長としての職責を果たすため、わからないことは教えを請い、右にすべきか左にすべきか判断に迷った時は相談にのってもらった。いつも嫌な顔一つみせず、こちらが得心するまで対応してもらった。学長とのやりとりの中で、広く大学運営のことや学問上の抱負経緯について話してもらったことも有意義だった。その中から、いまもなお胸底深く刻みこまれていることを紹介しよう。



・横山学長、石井先生と澤本；於氷見の旅館(昭和61年5月)

一 教官資格のこと

「大学における教授は、博士の学位をもっているのが一般ですよ」という話。企業にいたときは、学問上の研究や博士などとは縁なき衆生であった。中央研究所には、それこそ掃いて捨てるほど博士がいた。彼等には、みんなの稼ぎを食って悠然と仕事をしていると、半ば蔑み半ば羨やむ目でみていた。

学長の話聞き、当時の大学・短期大学の設置基準を調べてみたところ、教官資格の第1項に「教授となることのできるの、博士の学位を有し、研究上の業績を有

する者」とあった。ここで大学・短期大学における教授の資格と博士の重みを認識したのである。



・第1回卒業生と澤本；於高岡短大講堂(昭和63年3月)

一 研究紀要のこと

「研究は質の高いものでなくてはならない」というのが学長の口癖であった。高岡短期大学で、研究紀要の発行が話題になった頃、Osaka Economic Paper に載った学長の論文が、ノーベル経済科学賞を受賞したH. S. Simon の論文に引用されたことを例にあげ、研究内容が質の高いものであれば国内外の学者が引用するし、引用文献数が多いほど当該論文は高い評価をうけるものだ、ということを力説された。

そして「質的に低次元で、他の研究者から無視されるような論文しか出せないのなら、研究紀要は発刊しない方がましだ」という、学長の固い信念に、小生などはい

ささか後退りぎみに、恐縮してお説を拝聴したものである。

一 組織活性化のこと

第1期生が入学し、万事順調に滑り出し、関係者一同安堵の胸を撫でおろしていた、その時期、学長は「全教官が希望をもって活躍できるようにするため、組織活性化が必要である。については、短大修学2年の上に、専攻科設置の構想をいまから検討しておくべきである」と。いま目の前にある問題の処理と同時平行的に、将来にわたる問題を展望し検討しておく必要があるというのである。この話を聞いて「治にいて乱を忘れず」に優るとも劣らない発想だと思った。前景と遠景のバランスをとって対応するという、その感性のよさにおおいに啓発させられた。

高岡短期大学を定年で辞めてより、相当の歳月が過ぎたが、来し方を振り返れば、心豊かに勤めさせてもらったこともあり、思い出が多い。在籍中は、徳平副学長・島田副学長・戸田副学長をはじめ多くの教官、事務スタッフの方々にご指導とご助力をいただいた。特に、横山学長には、実に多くのことについてご教示いただいた。学長からいただいた薫陶の大なるに較べ、お報いできたことの小さなを思うと呵責が募るばかりである。横山先生が鬼籍入りされてより久しいが、改めてご冥福をお祈りする次第である。

高岡短期大学の思い出

横山初代学長のお声がかかりで、まだ建物もない、学生もいない高岡短期大学に赴任して、16年間勤務させていただきました。ほとんどゼロから新しい大学を作り上げるチームの一員に加わるという貴重な体験が最大の思い出です。私生活では家内と子ども富山の自然と人情が気に入って、富山に自宅を建てるという、人生の大きな節目を経験できたことも、横山先生が富山に連れてきて下さったことの大きな果実として今も感謝しています。

16年間の思い出も、数え始めるときりがないので、最大のものとして1つに絞るとすれば、16年のうち15年に及んだ「民間企業等との共同研究」になります。じつは私は、東京時代、神戸時代を通じて、企業内研修の講師、

コンサルタントのまねごと、学会や協会での産学共同研究など、幅広く企業との付き合いを続けていました。これは、古いタイプの教官や事務官から見ると、“国家(地方)公務員でありながら教育・研究への専念義務をなおざりにして小遣いかせぎをしている、ケシカラン”と非難の対象になりますし、当時盛んだった学生運動の活動家から見ると“国立大学の教官が、独占資本主義の権化である大企業の手助けをしている、ケシカラン”ということになります。

中曽根内閣のころから、国立大学にも「民間活力導入」が叫ばれるようになり、文部省の空気も変わってきたようです。高岡短期大学では、“地域社会に開かれた大学”



名誉教授 木村幸信

をモットーにして大学開放センターを設置し、その事業として①社会人対象の公開講座、②企業等との共同研究、③作品の展示、④コンサルテーションの4本柱を掲げることができました。私は、この①、②、④を、こんどは胸を張って(大学の正規の職務として)やれる、というのが、とても嬉しいことでした。もともと横山先生の最初のお誘いの言葉でも、大学開放事業の重要性を強調されていて、それに対する期待から、よく知らない北陸の地に赴任する決意を固めた、という背景もありました。

期待は裏切られませんでした。授業の準備と公開講座とが重なったりして忙しさをボヤいたこともありました。が大いにやりがいを感じることができました。

さて、企業等との共同研究ですが、三協アルミと15年間、タカギセイコーと2年間、竹中製作所と2年間ですが、やはり最大の成果は三協アルミとの共同研究です。

私は、神戸時代に、横山先生が副会長をされていた「関西経営システム協会」という産学協同組織の研究活動の一環として「IE 応用研究会」を立ち上げ、京阪神から滋賀や和歌山などに立地する有名製造企業の生産管理担当者の方々との実践的な研究を続けていました。当時有名になった「トヨタ生産方式」の向うを張るまではいきませんでした。いくつかの企業で効果を出すことになる「ストックレス生産」という概念をまとめ上げ、研究会発足から8年かけて同名の著書を出版できました(福田龍二、木村幸信(監修)『ストックレス生産』、日刊工業新聞社(1986))。

これをテキストとして、三協アルミの生産管理部、および関連部署の方々をメンバーとする研究会がスタートしたのです。

原則として週1回、三協アルミのメンバーが高岡短大に来られて、問題の検討、私の解説、方式の提案、効果の確認など、山のようなデータを持ち寄って会議形式で行なっていましたが、「実践」を重んじる「ストックレス生産」ということもあり、私も製造現場を見るのは大好きなので、ときどきは研究会の場を学外に移し、三協アルミのいくつかの工場や、多数ある協力工場などを視察しました。気分転換というわけではないのですが、もっと遠出をして、堺市のダイキン工業や柏崎の新潟 NEC など、すぐれた方式を編み出し成果を上げている会社を一同で見学したこともあります。

三協アルミとの共同研究での最大の成果は、案外早い時期に現われました。本社から工場への生産指示の方式を工夫するだけで、なんと50億円の仕掛り在庫削減効果が出たのです。これは、立ち会った私の手柄というよりも、①私の基本的アイデアを実践的な工場管理システム

に育て上げた三協アルミのメンバーの努力、②それ以前に進行していた営業情報管理の全国ネットワーク、本社のコンピュータと各工場のコンピュータとのオンラインシステムなどの整備が相まって、最新データでシステムを機能させたこと、③素材であるアルミ地金の単価が高く、それを使った仕掛品や製品の在庫が高価になり、在庫削減の経済効果が大きくなること、などが大きな要因です。

長く共同研究を続けて、気のおけない仲になったころ、“あなたがたの以前の生産管理方式がおソマツだったからこそ、単純な方法で大きな効果が出たんですよ。これが最大の要因です。”とイヤミを言ったこともあります。欠品(品切れ)を起こして営業部門から叱られるのがイヤで、作れるときには作れるだけ作っておこうという大ロット主義を、必要なものを、必要なときに、必要なだけ作る、という小ロット主義に切り換えたのが最大の要因です。「在庫半減、50億円浮く」という見出しで北日本新聞にも大きく掲載していただき、高岡短大の共同研究をPR することができました。その後、こうした方式を上流工程にも適用するという関係者の大変なご苦労があり、公称80億円としています(拙稿「三協アルミ「ストックレス生産」で80億円の在庫低減」、『戦略的統合生産システム：SIGMA』、日刊工業新聞社(1993)、pp. 99~100)。

この共同研究は、企業の経営情報システムを工夫・改良することで、コンピュータを使うという理由で共同研究のハシクレとして認められたのではないかと思います。というのは、今日に至っても、国立大学の共同研究のほとんどは発明・発見、試験・試作といったハード面の研究で、もっぱら工学部の教官が担当しています。私も、三協アルミの総務部長から、“ハードの委託研究なら、もっと研究費が出せるんですがねえ”と言われたことがあります。まだまだ日本では、マーケティングや人事管理、財務管理などソフト面では、産学共同研究をやろうという動きが乏しいようです。高岡短大では、私以外にもデザインや住宅建築など、ソフト面に近い共同研究が行なわれましたが、全国に有名な経営学部、商学部、経済学部がいっぱいあるのに、そういう文科系での共同研究は見たことがありません。

企業にとっては専門研究者の助言を(安く)得られるチャンスですし、研究者にとっては現実の生きた企業の問題にタッチできる貴重なチャンスになりますから、もっともっと文系の共同研究が盛んになればと思います。

この20年

産業造形学科教授 三船温尚

学生受け入れ前年の昭和60年4月に着任し、移転期の富山大学工学部(現在の高岡高校の敷地)にあった準備室で1年を過ごした。平成17年3月でちょうど20年が過ぎた。高岡短期大学教員のなかでは最も在籍年数が長くなった。これまでの想い出深いでき事をたどってみた。

■準備室と事務員の想い出

ある意味で、私は幸運だった。準備室の業務を事務員と一緒に経験できたからだ。もしあの時、苦労を共にしていなければ、大学運営や事務に対する考えは今と違っていただろう。当時、事務員が10数名ほどで、教員が7名。29歳の私が教員のなかで最年少。若いだけに(良くも悪くも)かわいがられた。研究生から準備室に入った私は、使いモノにならなかった。少し役に立つようになったのは、工学部の移転が終了し、準備室の1棟だけをポツリと残した更地に秋風が吹き始める頃からだ。それまで、事務の人たちは辛抱強く、半人前の私の面倒をみてくれた。よくお酒にも誘ってくれた。事務員はみな多忙で、朝から深夜までよく働いた。今思えば、あの頃、忙しい中で準備室の事務員と飲んだお酒が、これまでで最も楽しかったように思う。しかし、酔うと、使いモノにならない私への本音の批判も聞えてくる。使いモノにならない私も、酔って本音で言い返した。

少し働けるようになった私は、夜遅くまで残って仕事をするようになった。すると、私が帰る夜10、11時になっても、どの事務員もバリバリ仕事をしている。遅い日は深夜1、2時ころまで働いているようだった。しかし、翌朝は、いつもどおり机に向かっている。工学部跡地の準備室では、このような事務員の仕事振りが何ヶ月も続いた。全くのゼロから大学を作るといことがどれだけ大変な仕事であるのかを、昭和60年度の1年間が私に教えてくれた。

やはり第1期生の入学試験は大きな難関だった。一般入試の学力試験は、志貴野中学校校舎を借りておこなった。少ない人員で乗り切るには事務部はさぞ大変な思いをしたのだろうが、私にはその記憶がない。私に与えられた仕事は、本部から一番遠い教室の担当で、答案を回収して本部に全力疾走で戻り、直ぐに次の試験問題を

持ってまた全力疾走するという役目だった。私にはそんなことしかできなかった。応援の他大学の若い方が私の相棒で、冬の静かな志貴野中学校の廊下を無心で二人走った光景は今も忘れない。

雪がやや穏やかになった昭和61年3月ころ、それまで私を本音で厳しく批判、指導してくれた会計課長が、「もし、あなたの欲しいものがあつたらオレに言ってくれ。なんでも買うから」と酔って私に言った。突然で、その真意がすぐには分からなかった。酔うとよく言い争った厳しい課長が、新米の私のそれまでの仕事を認め信用してくれたのだと分かり嬉しかった。その時、何も買わなかったが、そんなことはどうでもよかった。

教員と事務員が信頼、協力し同じ目的に向かって大学運営に関わることが理想である。学生受け入れ準備のために目的の一つにして事務員と過ごした昭和60年度の日々は、私にとって貴重な経験と楽しい想い出になっている。

■学生と授業準備のこと

学生受け入れ直後の授業準備は、大変で果てしなく続くように思えた。金属工芸の実習に必要な道具には、市販されていないものも沢山あった。材料を購入し、学生人数分を作ることもあった。その日の授業を終えて次の授業の道具を夜遅くまで残って作らなければならない。ついには学生も見かねて、手伝ってくれる。あの時、私を助けてくれた1期生には、本当に今も感謝している。想い返せば、教員も学生もすべてに一生懸命で、お互いが高岡短期大学を創って行くという使命のようなものを背負っていた時代だった。

■研究と今後の展開

昭和60年から5年間ほど、私は研究をした記憶がない。その後、授業準備の雑務が落ち着いた頃、さて鑄金作品を制作しようと思っても、体も頭も動かない。ものづくりの感性は死んでいた。リハビリのような作品制作が始まり、まるで初心者に戻ったようだった。

そのころ、制作と並行して、「古代鑄造技法」の研究を始めた。それまでの反動もあって、一気に調査に出かけるようになった。国内から中国、韓国へと調査が広がり、今では研究を通して国内外に多くの友人ができた。

三千年前の青銅器を数多く手に取って間近に見ると、知らず知らずのうちに狭いものづくりの「常識」に自分自身が縛られていたことに気づく。一方では、卒業した学生が地場産業のいろいろな組織や研究会の委員長を務めるようになり、彼らを通じて銅器業界と大学との共同研究会を行うようになった。13年前に開始した古代技法研究が、こういった共同研究のテーマへ展開し、地場の銅器産業の商品開発や技術開発へと広がりは始めている。

私自身の20年間を振り返ると、新鮮な授業をおこなうことや、柔軟な発想で業界と共同研究をおこなうために

は、不断の研究努力が必要だと痛感する。身を持って「常識を疑い新しい価値を探る」姿勢を学生に示すことができるよう日々を努力しなければと、あらためて肝に銘じている。



本学の校章はかたかごの花

産業造形学科教授 小松研治

昭和60年に第1期生を受け入れて間もないころの本学は、中庭の石張り作業の槌の音や、グラウンドの整地作業を進める重機のエンジン音などが、授業の合間も聞こえてくるような状態でした。その初年度の夏、本学の学生が総合体育大会へ参加することが決まり、開会式の入場行進の際に校旗が必要になりました。当時産業デザインコースの教授であった小関利紀也先生(本学名誉教授)が、かたかごの花をモチーフに校旗を作成され、それに間に合わせる事ができたのです。翌年、故横山初代学長のご意向で校章と校旗を同時に作ることになり、同じモチーフで校章マークを再デザインすることになりました。

かたかごの花は冷涼な気候を好む寒冷地向きの花で、春の雪解けと共に花を咲かせ、うつむき加減でひっそりと咲く可憐な姿の花です。越中国司であった大伴家持が伏木に滞在していたころ、現在の高岡市二上山に咲くこの花を詠んだといわれています。

それは、「もののふの^{やそおとめ}八十娘子らが^く汲みまごふ^{てらい}寺井の上のかたかごの花」という歌で「大勢の若い娘たちがやってきて、わいわいにぎやかに水を汲んでいる。その井戸のそばで咲くかたかごの花の美しいことよ」というものです。かたかごの花は、数ある万葉集の中で、この一首の中にしか登場しない花です(万葉集巻18 4143)。

小関先生はこの歌を、「本学に大勢の若い学生たちがやってきて、わいわいと元気で学問に励んでいる。その大学の周辺で美しく咲くかたかごの花」と新大学に寄せる思いをこの歌に重ね合わせて、この花をモチーフに選

ばれたのではないのでしょうか。

私は、その意を受け継いで、二上山に群生するかたかごの花を撮影に出かけ、またこの花に関する資料を集めてスケッチをはじめました。3つの花卉をデザイン・工芸・情報の融合を願って描きましたが、Takaoka National Collegeの頭文字TNCを入れてほしいという学長のご意向を受けて変更を重ね、現在の紫色の形になったのです。



以来、この校章は本学の配布する多くの印刷物に、そして正面玄関のフラッグポールにたなびいて、20年間の役目をひとまず終えようとしています。かたかごの花に込めた思いとおおり、この校章はその間に卒業して行った学生たちのそばでひっそりと本学を象徴して、彩を添えていたように思っています。

ゼロからのスタート



元保健体育助手 加藤敏弘

昭和61年、高岡短期大学が第1期生を迎える直前の3月末、私は高岡市内でレンタルのトラックを借りて、それまで住み慣れた筑波の地を往復し、一人で引越しをした。設立当初は現在の約半数のベテラン教職員が勤務していたが、私は24歳という若さで尾崎秀男教授の元、保健体育科目の助手として赴任した。初めての社会人である。

当時はまだ体育館もグラウンドも出来ていなかった。それでも第1期生200余名の保健体育の授業を毎週実施した。二上青少年の家の体育館や隣接施設の駐車場、正面玄関脇の空きスペースなどを活用し、「本物を楽しく」味わうことができる体育を目指して、毎日尾崎教授とアイデアを出し合いながら、授業準備に奔走した。関東育ちの私にとって、北陸の天気は想像を超えていた。何しろ一日のうちに、晴れ、雨、みぞれ、吹雪と急激に変化するのである。徒歩での近隣施設への移動を余儀なくされていた私たちは、天候の激変で、何度も大変な目に遭遇した。こうした体験から1コマの授業を計画する際に、少なくとも3つの授業展開を準備しておくことが当たり前になっていた。

尾崎教授と2人で目指していた体育は、「やらされる体育」ではなく「自ら進んで活動する体育」である。尾崎教授も私も、学生たちができるだけ自然に思わず身体を動かしたくなるような雰囲気づくりにつとめた。二上山へ登る際にも、単1電池が10個ほど入るような大きなラジカセを担ぎながら、授業の度に往復した。軽快な音楽をかけ、いつも笑顔を決やさず、学生たちに声をかけ続けた。そして、二上山の体育館では学生たちが自発的に活動し始めるのを待った。当時は社会人入学が高岡短期大学の目玉となっており、1期生の中には私より年輩の方が多数高卒の若い学生と一緒に受講していた。若い学生は、おしゃべりに熱中していて、なかなか活動が始まらない。そんな学生たちを前に、私たちが何も指示をしないことに対して、社会人学生の一人が苛立ちながら「先生っちゃ、いったい何をしとるんかね？」と私に聞いてきた。体育の先生が指示を出すのが当たり前だと言わんばかりであったが、彼の中では若い学生たちとの距離感を多少感じ始めていた頃であったかも知れない。そんな時、尾崎教授は「いいところに気がついた

ねえ。先生っちゃ、何をするのかねえ。学生っちゃ、何をするのかねえ」と逆に問い直した。多少、戸惑っていた私は、「さすが！」と思った。彼は、その時から何かが剥がれ落ちたように若い学生たちと同じ目線で活動し始め、他の学生から頼られる存在となった。この時の体験は、今でも学生との対応の基礎となっている。

こうした授業展開の成果か、保健体育科目は学生生活に欠くことのできないものへと成長した。高岡市民体育大会への参加を契機に多くの運動部が発足し、あらゆる種目の学生たちをあっちこちの大会へ引率した。小さな大学ではあるが、学生たちは小さく縮こまらずに伸び伸びと活動した。こうした勢いが、勉学やものづくりに大きな影響を与え続けたと自負している。1年間の体育授業が終わる時に、尾崎教授のお話を聴きながら、多くの学生が目に涙を浮かべていたことは、週に1度だけの授業であっても、学生たちの心に響く何かを伝えることができることを物語っている。

今日の大学では当たり前になっているが、前述した社会人入学や公開講座、産学官共同事業、地域との連携など、高岡短期大学は精力的に取り組んできた。それだけに新しいものを生み出すエネルギーは膨大なものである。本当に真夜中まで事務職員の方と半ば喧嘩腰で議論を重ねたこともあった。半人前の私は、こうした経験を積み重ね、大学の仕組みや大学運営の難しさを学んだ。4年間という短い期間ではあったが、高岡短期大学での経験が現在、国立大学法人となった茨城大学での勤務を支えてくれている。その高岡短期大学が富山大学、富山医科薬科大学との統合を目前にして、特色GP・現代GPを獲得したことは、本当に私に勇気を与えてくれている。ゼロからのスタートであっても、日々のコツコツとした積み重ねが力を発揮する。高岡短期大学という名前が消えても、私を含め卒業生全員の身体の中には、永遠にその活動エネルギーが蓄えられている。いかなる苦境に立たされようとも、高岡短期大学での笑顔を忘れずに活動していきたい。本当にありがとうございました。

草創の頃

地域ビジネス学科教授 磯部祐子

開学間もない教室には、真新しい机が整然と並べられ、進取の気象あふれる学生の笑顔があった。しかし、何かしら物寂しさを覆うことができなかつた。図書館も不整備で、学生も教員もある種の欠乏感を抱いていたに違いない。風が運ぶ製紙工場の悪臭が、満たされぬ心に追い討ちをかけるように鼻を突いてくることもあった。

やがて、一年が経ち、少しずつ図書も整ってきた。なかでも、高岡短期大学協力会によって購入された「志村文庫」は、中国語学・中国文学の両面にわたって学生の自習や卒業論文の執筆に便宜を運んでくれた。教員も、合わせるべき照準が定まり、卒業時のレベル設定も現実を反映したものとなっていった。

少しでも中国を理解してほしいという教員側の希望は、夏休みの全員合宿や松村記念館の見学、卒業論文の製本化を提案することになった。爾来、合宿は数年経って中止になったものの、卒業論文集の製本は、今年まで綿々と続いている。合宿時の緑なす医王山の空気はどこまでも清らかだった。遠浅の千里浜で見た夕日の美しさも忘れられない。

時あたかも、中国の改革開放が勢いを見せ始め、中国語の訓練を受けた人の必要性が叫ばれ始めたころである。語学習得をめざし、初年度から数人の学生が中国留学を希望してきた。まだ一般的ではない休学留学の道をなんとか切り開こうと学長と折衝を重ねたこともあった。甲斐あってか、留学も叶い、今日、中国圏で活躍している人も生まれた。

しかし、辛い思い出もある。それは、2期生数人が遭遇した交通事故である。幸い、植物人間を宣告された学生も、ご家族の手厚い看護の下で奇跡的に生還し、社会復帰を果たすまでになったが、あの時、学生も教員もあまりのことに茫然自失し、如何にすべきかその言葉を失ったのだった。

時が経つのは速い。草創の頃、私自身とはといえば、学ぶことの意味と喜びを少し分り始めた頃でもあった。それゆえにこそ、学生には「学びて時にこれを習う、亦悦ばしからずや」の思いを自分のものにしてほしいと願った。知命も遠くない今、「楽しみて以って憂いを忘る」境地を共に持ちたいと心から願う。

卒業生の回想



「随想」
記念誌発刊によせて

情報処理専攻 昭和63年卒業
高岡短大同窓会長 寺口克己

私にとって高岡短期大学への入学は、人生の転機であったように思う。

その頃は、職場では主任という立場にあって一人身でもあったせいか、柄にも無く勉学に対するモチベーションが高かった時期でもあった。

そんな折、上司から社会人入学を勧められたときは、まさに晴天の霹靂というものであったが、職域とは別の分野の知識を得たいという思いから、二つ返事で受験を

希望した。

それから、二年という期間ではあったが、高岡短期大学の創設期にあって、少なからず学生自治活動に係わった者の一人として印象深い出来事をお話したいと思う。

ただ、二十年前のこととなると、幾分記憶が曖昧なところもあり、正確を欠くことがあることをお許し願いたい。

マスコミ報道

社会人入試の合格が発表された頃は、新設大学に対する報道が盛んに行われたこともあって、個人的にも何かと取材を受けることがあった。

当時としては、社会人入学を始めとする地域産業との結びつきを特色とした設置構想は、凄く斬新なものだったように思う。

ゆえに、地元のマスコミ報道は結構な力の入れようであった。

あるテレビ局は、特別番組を企画するような状況で、私のような数人の社会人入学生などは丁度よいターゲットとなったようで、案の定、取材の申し込みがあった。

職場での勤務の様子やインタビューなどのビデオ撮り際には、周りの人達も巻き込んでのことであったから、忙しいなか職場の仲間には迷惑をかけたなと思う。

入学式

入学式が終了して食堂で周りの人達と雑談していた時のことである。

社会人入学の私は、現役生の中に混じって九歳も違う歳の差をどうしようかと、周りの様子を伺っていた。

その気持ちを察してか、私よりは年代が上であると見受けられる方が語りかけるように話しかけてきた。

相手は私に対して敬語を使って話されるが、私は先生だと思い込んで恐縮しながら話を続け、お互いに名刺交換をした時だった。その時、初めて学生同氏であることが分かり、互いに顔を見合わせ大笑いした。

言うなれば、地域に開かれた高岡短期大学ならではの微笑ましい一場面であったのかもしれない。

その方は、井波でも有望な木彫作家であったことを後で知ったが、その時、戴いた名刺の表は、台紙に檜を薄く張り合わせたものだったことから、職人のこだわりを伺い知ることができた。

創己祭

大学生活にも幾分慣れた頃に、有志が中心となって大学祭実行委員会が活動を開始した。当初は、産業工芸学科の生徒が中心だったと記憶している。

その中に、「ガンちゃん」というニックネームで、当時のアニメ「アラレちゃん」風のメガネをかけたしっかり者の女性がいた。その時の実行委員会は、彼女がなにからなにまで取り仕切っていたが、なにせ初めての大学祭の準備ということで、ノウハウも無く実際は收拾が付かず大変苦労している状態であった。産業情報学科からも委員を出して盛り上げていこうということになり、私も十人ほどの友人と共に委員として活動させてもらうことになった。

準備期間中は、それはもう大変な作業の連続であった。パンフレット作成、広告の勧誘、ポスター作成、模擬店の配置、公演のタイムスケジュールなど等、企画・挫折・復活・達成が繰り返される中で、どうにか開催まで漕ぎ着けたような状況であった。

その中で、私が感じたことは、このようなイベントを

開催するときの高岡短期大学特有の強みである。それは、産業情報学科と産業工芸学科という異種の学科が、それぞれの特性を生かした仕事を専門的にこなしてくれるということだった。文章のワープロ打ち、予算関係などの事務処理は産業情報学科を中心に、そして、ポスター図案、看板作成などの物作りは産業工芸学科というふうに分業して行ってもらった。

彼らは持ち味を遺憾なく発揮して企画担当の発案を自在に仕上げてくれたのだった。

総合大学以外で、このように大学祭を運営できる大学は日本広しと云えども、この高岡短期大学ぐらいではないかと思う。

ここで、当時の苦労話をひとつ紹介しましょう。

パンフレット広告の勧誘に動こうとしたときのことである。とにかく、高校出たての若者が見ず知らずの企業やお店の方を相手に広告料をいただいてこなくてはならない、そのためには、しっかりした接遇態度を見に付けさせることが重要であると考えた私は一計を案じた。それは、勧誘活動を希望する人たちに練習を積んでもらい、最終審査として私の模擬面接に合格したものだけが、晴れて勧誘活動を行うというものであった。

この目的は、勧誘で印象を損なって高岡短期大学のイメージをダウンすることを避けたいのは勿論であったが、真の狙いは、彼らに高岡短期大学の名を背負わせることで自覚と責任の意識付けをしてもらい、ひいては、高岡短期大学のイメージアップを図ろうとする一石二鳥の策のつもりであった。その甲斐あって、予想を上回る成果であった。今改めて、彼らの頑張りに敬意を表したいと思う。

話をガンちゃんに戻すとするが、ガンちゃんは、今でもテレビで人気の笑福亭鶴瓶の大ファンで、是が非でも創己祭に呼ぶのだという強い思いと憧れを持っていた。

その願いが叶って、憧れの鶴瓶と握手できたときは、人目も気にせずうれし泣きしていたのを思い出す。彼女の姿を見て、それまでの苦労が二上山の彼方に消し飛んでしまったと感じたのは、私だけではなかっただろう。



同窓会記念植樹 平成元年11月

経営学

専攻は情報処理を学んだが、ご教授いただいた先生方には感謝の一言に尽きる。

その中でも経営学の授業は、消防という組織的運用を重視する職場で働いていた私にとって、自分にとって必要な多くの事を学ぶきっかけを与えてくれた。

その頃の風刺漫画に「がんばれタブチ君」いう4コマ漫画があった。

プロ野球選手の田淵幸一氏のキャラクターを面白く脚色したものであったが、これを教材にして日本人の思考・心理を講義された先生がおられた。

日本人の「新入り」観と「よそ者」観に関するものであったが、大変、面白い授業の流れで本質を理路整然と説明して下さったことに感銘を受けたのであった。

これを機会に、組織管理(マネジメント)に関する本をよく読むようになり、職場に戻っても自分流ではあるが管理意識を保てるようになった。

私の脳裏に一石を投じてくださった先生方と「がんばれタブチ君」に、そして何よりも高岡短期大学で学ぶ機会を与えてくださった方々に心から感謝を申し上げたいと思う。

ここまでお話した他にも「創己」の由来、同窓会設立の逸話など、まだまだ本学の創設期ならではの思い出があります。

しかしながら、このあたりで筆を置かせていただきました

と思います。

高岡短期大学という名は数年後には消えてしまいますが、これも時勢と割り切り、富山大学芸術文化学部として再生するキャンパスの発展を心よりお祈りしたいと思います。

略歴 昭和33年5月14日生まれ 昭和63年3月 産業情報学科情報処理専攻卒業 **勤務先** 高岡市消防本部消防司令・通信指令課第一主幹 **高岡短期大学同窓会長**(昭和63年1月の設立時より、今日まで会長の任にあたる)

回想

ビジネス外語専攻(英米コース) 昭和63年卒業
中村里恵子(旧姓 朝倉)

国立高岡短期大学、設立22周年おめでとうございます。

現在、私は英語にかなり深く関わる仕事をしています。今まで自分の歩んできた時間を改めて振り返り、現在の私がある基盤は高岡短大への入学から始まり、そして在学中に培われたものだ、と思いを廻らしております。

中学、高校と英語が大好きであった私は、何の迷いもなく「ビジネス外語英米コース」を選択しました。大学での勉強はそれまで学んできたものとは全く違い、専攻

名が語るように、本格的な実務英語を学びました。だからこそ英語への興味はつきることはなく、卒業のための研究論文は英語で書くことに決め、担当教官の先生には実に丁寧にご指導いただきました。振り返ってみて何をどう書いたのかは全く思い出せませんが、「書いた」という実感と達成感は今でも残っています。

卒業後、英語をさらに学びたいと思い、急遽、アメリカ留学を決定しました。4月も中旬を過ぎ、同級生は新たに社会人への道を歩み始めた頃に、私は全くの暗中模索、不安定な状態でした。そんな時、短大の恩師から「いろんな留学斡旋業者があるけれど、本当に行きたいのなら学校との各手続き、渡米準備など全部自分で手配なさい。それくらいできないのなら留学しても向こうで何もできない」と静かに、しかしきっぱりと言われました。その言葉で心が定まったのか、私はどこにも頼ることなく一人で手配、準備、渡米し、そして無事4年後大学を卒業して帰国に至り、現在の私があるのです。今も恩師のあの時の言葉を思い出し、何事においても通ずるものであると確信し、変わらず自分を叱咤激励する言葉となっています。

さらに、私は1期生で大学に入学するというとても貴重な体験をさせていただきました。完全とはいえない状態でスタートし、それこそ自分達が学校を作り上げるという何事にも変えがたい経験を得ることができました。高岡短期大学は、私の人生を決定する素晴らしい先生方、友人に出会うことができた場所です。これから高岡短期大学は新たなスタートを切ることとなるわけですが、高岡、富山を代表する学府として、今あるすばらしい学風、環境をこれこれからも絶やさず、後世へと受け継いでほしいと願っております。

略歴 昭和63年 国立高岡短期大学産業情報学科ビジネス外語英米コース卒業 平成5年 トロイ州立大学 国際関係学部経済学集中コース卒業 13年 富山大学大学院 経済学研究科(環境経済学専攻)卒業 在学中 Phi Alpha Theta (Honors of Society of Economics、経済分野の成績優秀者)に所属

現況 帰国後、一般企業で、貿易事務や、通訳・翻訳業務に携わった後、「財いしかわ国際協力研究機構」にて、国連大学から派遣された所長の下、秘書業務、会議通訳、社内用・対外用文書の翻訳、管理業務アシスタントに携わる。富山に引越し後、「財環日本海環境協力センター」にて、翻訳業務、特にUNEP 地域海プログラムの1つであるNOWPAP 関係の英文資料の翻訳に従事。その他、フリーランスで通訳、翻訳業務に数多く携わる。一方、雑誌記事のため取材、編集業務も行う。

酒とスルメとポップコーン

金属工芸専攻 昭和63年卒業
藪 元昭

それは毎度の光景である。夕暮れ時、鑄造室の土間には、砂ボコリと煙、そしてスルメとポップコーンの匂いがする。みんなの鑄型に湯を流し終え、鑄造のあとかたづけもまだ済まないうちから火を落とした炉の上には、きまってスルメとポップコーンが乗っかっている。

「ボン酒もってきてよ。」

「湯のみいくついるーう。」

「スルメひっくりかえしてよ。」

「みんなもうはいったあー。」

「じゃあ乾杯あーい。おっかれさあーん。」

「ねえ、みんなのがうまいこと流れたかねー。」

「いやー、シャポのがちょっとふいとったね。」

「なあーん流れとらんかもしれんわ。」

「でも出してみなんわからんけど。」

「そういやおまえきのう何しとったがよ。」

「おわバイト終ってから風呂行って、その後飲んどったが。」

「一人でか？また土曜日でも行くから飲もまいけ。そっで豪華三本立てでも見てくっか。」

「でもどうなったがよ、〇〇ちゃんと。誘ったがだよ。」

「なーん、もういいが。」

「なんでよ、けっこういい感じやったのか。おれらも協力すっぜ。」

「なーん、もういいちゃ。」

そんな他愛ない会話が鑄造の後、教官も生徒も酒を手に、空がすっかり暗くなるまで続くのである。

酒とスルメとポップコーン

それは毎度の光景である。



金工展 金工のみんなと

略歴 昭和43年1月10日 高岡市生まれ 63年 金属工芸専攻卒業
平成5年～現在に至る ヤブ原型所設立(銅像、モニュメントの原型を製造しています。平成4年に漆工芸専攻(第1期)塩田雅子と結婚。平成7年3月現在、小6、小1の男の子と女の子がいます)

「高短」の思い出

経営実務専攻 昭和63年卒業
北川真里子(旧姓 福光)

高岡短期大学、第一回卒業生として、今回このような記念誌の発刊にあたり、お手伝いさせて頂けることを大変うれしく思っております。

入学した当初は、真新しい校舎で学べる喜びと、すべてのことが初めてのことで不安な気持ちも少なからずあったような気がします。

私が、在学しておりました産業情報学科では、先生方が、新しい試みだったと思うのですが、企業で活躍されていた方等、幅広い分野から採用されて、教鞭を執られていたので専門知識を身につけて、社会に貢献したいと思っていた私にとっては、とても充実した講義内容であったと思っております。

ただ、私達一期生にとっては、いろいろ大変なこともありました。学園祭もその一つでした。露店の出店、舞台の担当、講演会の担当等、実行委員の方々はもちろん

ですが、みんなで成功させようと、一生懸命だったことは、今もすごく心に残っています。やり遂げた達成感は、よい経験になりました。

二年間は、あっという間でしたが、高短で学び、体験したことは、現在の自分にとって大切な二年間だったと実感しております。

卒業後、後輩方の活躍をメディアを通じて拝見する機会も数々ありました。その度に、うれしい気持ちになり、自分自身もがんばろうという気持ちにもなりました。今回の大学の再編により「高短」の名前がなくなってしまうのは、少し寂しい気持ちですが、名前は変わっても、今後も益々の活躍を期待しております。



現在の勤務先の職場の皆さんと新車の前で撮ったスナップ写真です。(2004年の夏頃)向って左端に写っているのが自分です。

略歴 昭和42年11月20日生まれ 63年3月 高岡短期大学産業情報学科経営実務卒業 63年4月 砺波信用金庫入庫 平成6年7月 退職 6年9月 小矢部興業㈱入社(建設業)(嫁ぎ先の父が経営している会社です) **現在** 小矢部興業㈱経理担当

高岡短大の思い出

木材工芸専攻 昭和63年卒業
片岸一利

高岡短大の思い出は、何と云っても新しい校舎で、先生・学生・職員の皆さん、全員が初めて顔を合わせ、これからこの生まれたての大学をみんなで創り育ててゆこうという前向きさと、はつらつとしてさわやかさが学び舎のここかしこに感じられたことです。

そして、地元産業界や地元伝統工芸業界からは待望の大学誕生で、期待の声が大きく報道され、将来、卒業生が地元で活躍してくれることへの思いがひしひしと感じられました。

又、校舎の図面を見ながら、校舎の周りにどんな樹木を植えようかと、木の種類・配置を考慮しておられた教官室の先生方の光景が今の脳裏に浮かびます。その樹木も今は緑豊かにうっそうと茂り、背も高く伸び枝をいっぱいに広げ学生の行きかう姿を見守り続けているようです。私は、社会人入学で入ったのですが、他にも10数名、社会人の方が各学科におられ、真剣に自分の目指すものに取り組んでおられた姿を思い出します。親しく交流させて戴いたことは今も楽しい思い出です。

先生方は、大変意欲に富んだ方ばかりで、相談に行けば親身に応じて戴き、親切に指導して下さいました。活気ある教官室の雰囲気からは、新大学への情熱が伝わってきました。特徴ある授業の他に、開放講座も大変思い出深いです。日中の授業を終えた頃からの時間帯で幾種類も行われる講座で、私は「ライフスタイル」講座を申し込みました。学生以外一般の地域の方々も受講することができ、20名以内の参加で行われました。講師は、ライフスタイルに関係する各分野の熟練されたベテランの方々でした。一言一句、熱心に語られ、どうこれから産業人として取り組んでゆくか、産業工芸に携わる者としてどう制作してゆくに



ついて、アドバイスや、体験談を聞かせて戴きました。このように卒業するまでの短い2年間でありましたが、意謝を持って、その世界にとび込めたことに悔いはなく、皆様に大変感謝しております。高岡短大の名はなくなりますが、充実した環境の学び舎はそのままで、2年制から4年生へと習得の時間が増え、自分の目指す世界へ向かって学べることは大変喜ばしいことと思います。新大学の末永いご発展をお祈り申し上げます。

略歴 昭和28年 富山県福光町生まれ 48年 井波彫刻伝統工芸士森好明氏に入門 63年 国立高岡短期大学第一期生木材工芸科卒業 平成5年 一級井波木彫刻士に認定 11年 井波彫刻伝統工芸士に認定

回想

情報処理専攻 昭和63年卒業
中村聡志

高岡短期大学創立22年、おめでとうございます。

私は1期生で入学致しました。1期生ということで、高岡短期大学では他では決して得ることがなかったであろうと思われる体験をさせていただいたと思います。また大切な友人たちにもめぐり合え、様々な体験を通して友情を深めることができました。

思いおせば20年前、高岡短大の門をくぐりました。しかし高岡短大への進学は実は当時本意ではなく、心は決して晴れやかなものではなかったと思います。その上、大学がゼロからのスタートなわけです。このような状況で私が学んだ一番大きなことは、何かを行おうとするとき、どのように組織を立ち上げ、自分が動き、人を動かし、目的を達成するか、ということではないかと思えます。例えば学園祭などもそうですが、1年目ですから前例がありません。やりたければ自分達で考え、行動を起こし、互いに協力をしないと何も始まらないのです。大学創設時に入学させていただいたからこそこのことといえるでしょう。

在学中は何もわからず、ただ一生懸命だったのですが、振り返ると社会人として今に通ずるものを短大で学ぶことができたと思います。現在、会社にて私があることの基盤は、高岡短期大学にあったのではと思います。

そして、現在に至るまで親交が続いている親友に出会えたことも、大学で得られた貴重な財産であります。互いに、大学新設時を過ごし、大学を作ってきたという自

負が心の中に共通の財産として残っていることが、友情を強くしているのではないかと信じています。今は皆、結婚し子どももいる一家庭人ではありますが、年に1回、もしくは数回、会う機会を設け、当時の話に花を咲かせることができる大切な親友達です。彼らとの出会いがあったことにも、高岡短大に感謝する次第です。

もちろん学生の本分である学業についても短大では2年間の短い間に、多くのことを学ばせていただきました。幸い、卒業後は、学科で学んだ学問がそのまま生かせる仕事に就くことができました。今にして思えば、実にたくさんのごこと、貴重なことを経験し、学び、貴重な人たちと出会い、高岡短大が私の「進むべき道」であったのだと思うばかりです。

高岡短期大学は、一旦、短期大学としては幕を閉じ、新たに富山を代表する大学として生まれ変わるわけですが、私達が学んだ大学のままの姿であることを心より望んでおります。



第2章 高岡短期大学の 成長期

昭和63年4月、第一期生の卒業と同時に1年制の専攻科、地域産業専攻が設置された。この地域産業専攻は、産業工芸、産業情報の両学科が連携交流することにより新しい領域を開拓し、地域社会に大学での教育・研究を還元し、あわせて地域文化の発展向上に寄与しようとするものである。

また、校庭の木々は、幾度かの年月を経て幹が太く大きくなり枝葉も茂り、葉も黄緑色から濃緑色へと変化し逞しく成長していた。早朝には、二上山の麓から降りてきた野うさぎや雉を見ることもあった。そして、学内の落ち着いた雰囲気、教室での学生たちの真剣な表情や眼差し、エントランスホールからの朗らかな笑い声に私たちは爽やかな幸福に浸ることができた。「創己祭」と名付けられた大学祭は、年々華やかさを増し会場からは学生の歓声がひびいていた。教職員、地域住民の参加も多くなりにぎやかなひと時が過ぎた。

第三代副学長として



第3代副学長 戸田成一

私は、平成元年十二月から同五年三月までの三年四か月間、高岡短大の副学長として勤めさせていただきました。

第三代目の副学長として、初代の横山学長と二代目の宮本学長を補佐いたしました。

それ以前は、文部省・文化庁等で教育、学術、文化の職務を担当し、ついで電気通信大、一橋大、広島大の各事務局長を歴任していました。

大学の事務局長は、事務的な側面から学長をはじめ教官をサポートする、いわば脇役にすぎず、私としてはもの足りなかったのですが、高岡短大では学長につぐ主役として教務、学生指導、教官人事、大学開放事業等すべての職務を担当することができて大変嬉しかったです。

それだけに、私なりに張り切って副学長の仕事に打ち込みました。

その経験等が次の鈴鹿工業高等専門学校中学校長になったとき、大いに役立ったことは言うまでもありません。

私が副学長に就任したのは開学してから六年目でして、高岡短大は新構想大学としてすべてが軌道に乗り順調に活動しておりました。

それだけに私は、三年あまりの在職中それぞれの職務を楽しくやらせてもらい、あまり大きな苦労はしませんでした。

しかし強いて言うならば、いくつか困難な問題があり、その解決に重点的に努力したということはありません。

ここでは、それらのうち二件だけとりあげて書きたいと思います。

一件目は、学長選考規則の制定です。

私が着任したとき、学内の諸規則等は整備されていて短大運営はなんら支障なく行なわれていました。

ただ、学長選考規則だけは、まだ出来ていませんでした。それは、創設(準備から)段階では文部大臣が選考し任命するしかなかったからです。

しかし年数の経過につれて二代目学長選考の必要性が強まってきましたので、私は学長選考規則の作成に鋭意

努力しました。

やはり小規模な新構想短大にふさわしい、適切なやり方があるはずだと思い、あれこれ考えた結果、他大学にはないユニークな選考方法を打ち出しました。

すなわち、「学長候補者の選考は教授会が行う」を基本にして、具体的には次の四段階を踏んで候補者を選ぶことにしました。

(一) 推薦委員会の候補適任者の推薦

教授会に推薦委員会を置き、学長、副学長、教授会が選出した教授九名で構成し、候補適任者候補の中から三名程度を選定し教授会に推薦する。

(二) 教授会の候補適任者の決定

教授会は、前記の推薦に基づき候補適任者を決定する。

(三) 選挙の実施

教授会は、学長候補者を選考するため選挙を実施する。

選挙資格者は、学長、副学長、教授、助教授、専任講師とし、候補適任者について単記無記名投票を行ない、過半数を得た者を学長候補者とする。

(四) 教授会の学長候補者の決定

教授会は、前期の選挙結果に基づき学長候補を決定し学長に報告する。

私は、文部省の了承も得て、平成二年三月にこの規則を制定し、翌年に二代目学長の選考を行ない、翌々年四月に二代目学長の文部大臣任命という運びまでもっていききました。

大役を果たし、ほっとした気持でした。

二件目は、開放事業に対する教官の職務意識の問題です。

高岡短大には、地域社会に開かれた大学として大学開放センターが併設(センター長は副学長)され毎年度いろいろな公開事業を本格的に行なっています。

平成元年(1989)

主なできごと

(3.20)昭和63年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式(第1回)を挙行。(4.1)学科長会議の名称を総務会に変更。(4.8)平成元年度入学式を挙行。

公開講座、テレビ講座、作品展、シンポジウム、フォーラム等として、他からの講師等もありますが、主として同短大の教官が担当しています。

ところが同短大は、小規模で教官数も少なく、開放事業の実施は教官たちに少なからず負担をかけています。

そのためもあり、この事業の取組みに消極的な教官がかなりいました。(この状況が進みますと、特定の専攻や特定の教官にだけ長期的に重い負担がかかり、不均

衡、不公平が拡大していきます。)

しかし各教官は、同短大の性格上、「教育」、「研究」、「公開事業」の三種類の職務を担当しなければなりません。

すなわち公開事業の担当は、各教官の本来の職務の三つ目のものとして担当してもらう必要があり、私はそのことを機会あるごとに各教官に説明し認識を深めてもらうよう努めました。

地域産業資料研究室の生立ち



名誉教授 後藤義雄

高岡高等商業の商品見本

平成元年6月資料研究室が発足し、旧高岡高商の商品見本といわれるものを見た。この資料は高岡工専、富大工学部と引継がれ、短大に移管されてきたものです。約50点ほどでしたが保管上の不備と埃にもまみれ、整理番号のエナメル描きなど無神経さが目立ちましたが漸く37点ほど拾うことができました。

この商品見本は流通市場から選ばれたものと思われるのですが、木製品、陶磁器、金属器、漆器などで、なかには当時の輸出見本もあったようです。私の専攻する漆芸では、目立ったものに黒漆螺鈿軸盆があり、宝相華唐草の文様を夜光の薄貝で加飾したものです。ただ永い間の環境からか青貝の一部に浮きが見られるのは残念です。産地は沖縄、奈良、高岡などが考えられます。丸形食籠は沖縄の堆錦技法による作品で立派なものです。私にはいつか図録でみた菊唐草堆錦食籠(東京国立博物館蔵)に重なって見えました。あるいは模作かも知れません。また沖縄の朱漆八角形湯庫(タークー)もあります。これは内部に錫製の容器を入れ、保温用とした中国スタイルの魔法瓶でしょう。琉球王府の時代から輸出していた品種と思います。

このように高岡高商の収集した商品見本は、産地的特色、技術技法、デザインの変遷など産業資料として多くのものを含んでいます。

話題 展示 資料

展示を目的とした会議のなかで計算機の発展過程が考えられないかと提案があった。

私には、固定尺、滑尺、カーソルを動かして演算する辺見計算尺が浮かび、更に何十年振りかで、あのやかましい音のする歯車機構による手廻し式卓上計算機が思い浮かんだ。今日の電卓までのことを考えると、その時代毎の理論、技術の変化と社会への影響を考え大賛成であったが、図表計算、記憶装置、今日の半導体による電子計算機にいたるまでの範囲の大きさと予算上から断念したのは残念であった。

公開事業として県工業技術センタ、高岡デザイン工芸センターの協力を得て、工芸三機関合同展「用と美の世界」を本学エントランスホールに展示したのは平成3年7月でした。本学は工芸三専攻の実技試料。技術センターはレーザー光による微細加工技術、デザイン工芸センターは加飾パターン試料を展示した。

資料研究室は、学生、教官の研究資料および作品、産地製品、材料と加工技術、時代とデザイン研究の蓄積が大学の歴史を作るものと私は思っています。この室に埋もれることによってこそ新しいアイデアと発見があるものと考えます。

平成2年(1990)

主なできごと

(3.20)平成元年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙げる。(3.30)高岡短期大学紀要創刊号を発行。(4.9)平成2年度入学式を挙げる。(12.25)樹木見本園工事の竣工。

中村富栄氏の作品寄贈

クラフトマンとして活動してきた中村先生がその作品49点を寄贈されたのは平成10年でした。私は既に退官していましたが、展示初日に見学し、それぞれに思い出もあり、懐かしい一日でした。

先生は88年に国井喜太郎賞を受けられ、自宅工房でも実験的な仕事を続けられました。なかでも漆の世界に縄目の造形、あるいは刷毛目や、目はじき塗りなどの商品サンプルは時代を映す資料として貴重なものと思います。

体育授業への回想



名誉教授 尾崎秀男

国立高岡短期大学と書くだけで、当時の思いが彷彿として蘇る。新設校で新しいものを生み出すその事の楽しさに明け暮れた日々であった。昭和61年第1期生の入学と同時に体育教員として赴任し、全力で走り切った10年間であった。ここでは、体育授業等の実践事例を記録を頼りに記憶を呼び起こし、簡略に回想してみたいと思う。

体育館(教室)、グラウンドやコートは勿論、用器具のない素手の授業をどうするか、新任の加藤敏弘助手と共に思案する日々が続いた。ともかく近傍の広場、運動のできる場所を尋ね、その確保に走り回った。いくつかの候補から二上青少年の家の体育館と併設の散策オリエンテーリングコース、ゴルフ場、工業技術センター広場等を主な学習活動の場として選んだ。しかし、どの場所も往復の徒歩に時間がかかり、実働時間の制限は空しいものだった。ただ、学生達のやる気、明るさ、元気とに支えられて克服していった。活動場所の確保と共に10月にテニスコート、12月に体育館の年内完成を目的に体育授業を進めながら基本的な指標を掲げ実践に移していった。指標は、次の3点からなり同時にこれらを支える方策も検討しながら授業を展開したのである。

(1)楽しい授業 体育は、笛の合図と教官からの指示で一定の運動量を強いられるのではなく、自発的で楽しい学習であれば、という考えに立ち、楽しさの原点は学習活動の中で動いているそのものが楽しいという事であろう。又、走りや苦しさ、動きの支えで楽しさが生まれるのであって、その楽しさに持続性がなければ本物ではないととらえ、この様な考え方で授業を押し進める事とした。

(2)号令と笛のない授業 かなり以前までは号令と笛は表裏一体の感があったが、ここでは共に使わない様にした。特に不用意な号令や笛は、学習活動の中断や動きが左右される場面が多々あり、学習効果があがらないという思いからである。今までの習慣上から当初戸惑いも見られたが、次第に馴化し動きの流れがスムーズに推移し、息の長い活動が随所に展開される様になった。又、号令や笛にかえて音楽を用いた事も授業の楽しさに力添えができたものと思っている。

(3)音楽の導入 運動は、自発的で楽しくなければ持続性がないという考えから、学生が音楽に合わせて自発的に授業を進める方法を取り入れた。ウォームアップはビートの効いたディスコを流し、ストレッチは落ち着いた軽音楽、競技中は軽快なポップスという具合に、活動毎に曲のジャンルを使い分けた。授業中に音楽をかける事に殆どの学生が賛成し、その理由として、リズムがあると動きの動作に入りやすい、授業が明るい雰囲気になる、気分がのって“やるぞ”という意欲がでる、休憩中にリラックスでき、疲れがほぐれる、という意見が多く、うまく利用すれば様々なプラス効果が期待できると判断し、選曲など更に吟味し学生の主体性や自信を育てる為の積極的な働きかけが大切と確認することができた。

◎ニュースポーツと創意工夫 初めて試みる種目に新鮮味と興味を示し、学習効果も大である。ルールやゲームの進め方も工夫しアイデアが多く生まれ、自分達で納得のいく授業展開をし、次第に学習能力を高めていく事が

平成3年(1991)

主なできごと

(3.20)平成2年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成3年度入学式を挙行。(12.17)初の学長選挙を施行し、次期学長に宮本匡章(大阪大学教授)を選出。

わかった。一輪車、スケートボード、フレッシュテニス、インデアカ、バードゴルフ等のニュースポーツに顕著である。その他、学習活動の個人記録の記入による意欲の向上、これらを支える体育環境の充実等大切である事は云うまでもない。

二上山散策コースは、入学当初山に入り、高台から小矢部川の蛇行の雄大さ、一望する高岡市内を眺望し、この地で学んだという意識を持つよい機会であったろう。車椅子の学生も2人の職員の力を借りて車毎高台に運んでもらった事もあった。グループ毎入山しコースを

巡るが、予定通りに集合地点に戻らず夜の暗い道を逆走し探しに出かけた事も度々、暗がりの中でようやく戻ってきたグループを見つけホッとした事を思い出す。

二上山は下から眺めるだけでなく、一回位は登って高岡の地を一望するのもいいのでなかろうか。力づけてくれる何かを持っていると思うのだが。1期生から10期生までは全て二上の高台から一望を試みている筈である。

私自身は二上山に100回以上も足を運び、二上山への郷愁は尽きない。大学を辞して九年、星霜を経て活躍する卒業生の朗報を聞くと、嬉しさと誇らしい気持が交錯する。

教えながら学んだこと



名誉教授 久保脩治

長い間民間会社にいると、齢が加わるとともに後輩を教育する必要がでてくる。日々の忙しい業務のなかで、個別に教育業務をとれず、したがって<On the Job Training>仕事を通じて部下を教育訓練をすることになる。学校の先生の職に就くにあたって、教育の先輩を訪ねると‘教育とは林業である’とおっしゃる。一年毎に収穫する農業と異なり、長い目で人間の生長をみとどけよの意味がこもっている。

これまで自分の子供の入学式卒業式に出席すらししたことのない筆者だが、自分の孫に近い学生の式に教師として出席すると、自分の子に希望と期待を託する親の気持が伝わり、新たな感動がこみ上がってくる。

文系で女子学生の多い学校のため、数が少ない理系の先生の使命は、社会に巣立つ学生に台頭してくる情報社会を支える科学、技術の常識をわかりやすく教えることとした。

1学年200人位の学生を相手にした教室で下手な話しのせいか、中には隣とおしゃべりする学生が見受けられた。しかし文明の辿った道について話した講義のなかで、<地球環境問題>大気中の炭酸ガスの増加に伴う地球の温暖化の話に移ると、顔が先生の方に向き静かに話しを聞く姿勢に変わったことが印象に残っている。

我々より2世代近い若い学生には、この課題は深刻な問題と捉るのであらう。

学生が多くて1人ずつ出欠を取ることも出来ず、講義が3~4回続くと試験を作文で行ったが、理解力のほかに考える力を養うために感想を含む問題を加えた。答案を読むと、古代文明の発祥の地チグリスユーフラテス、そうしてヨーロッパ文明の中心地のギリシャなど、かつて栄華を極めた地が何千年か経て、砂漠あるいはそれに近い荒地になった話しに高い関心があったことが意外であった。芭蕉の句の‘夏草やつわものどもが夢の跡’のような情緒的のものでなく、最近の環境考古学によれば、この栄光の大地はかつては森林植物が豊かに繁茂していたことが証明されている。

学校を退官して9年になりその間趣味に近い執筆活動をやっているが、強い関心があるのは家電や自動車の世界をリードする地位にまで登った日本のモノづくりである。

その要因に、平均教育レベルが高いこと、そうして単一民族であることが言われた。それは一面であって、仕事に対するとらえ方が欧米先進国と異なる面がある。とくに技能職のモノづくりにみられる、真面目に働き道を踏み外さない愚直性である。

平成4年(1992)

主なできごと

(3.19)平成3年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙げる。(3.31)学長 横山 保が任期満了により退任。
(4.1)第2代学長に宮本匡章(大阪大学教授)が発令される。(4.8)平成4年度入学式を挙げる。

しかし最近の若者は学校を卒業しても、まともな職につきたがらないフリータが現在問題に上がっている。豊かになり小産小子の世の中で、子供は家庭でも学校でも甘やかされながら育てられ、一方グローバル化の荒波のなかにある企業に飛び込むのに億劫になるとみるが如何であらうか。話しを本題に戻す。

産業情報学科にいた一人の男子学生に、性格も良いし素性のよい会社に就職の世話をしようと思きかけたが、なかなか首をタテにふらない。これまでアルバイトをしてきた金型屋の仕事が気に入ったとし、また雇用主もよい人だからという。これも彼の選択肢だからと無理に説

得するのを止めた。

これが頭にあったので、職人という職種をどう思うかについて、産業工芸学科の学生に聞いたことがある。数人のグループのなかの一人の女子学生はカッコがよい職業、尊敬すべき職業であると答え、意を強くしたことが記憶にある。

9年間の赴任期間で思い出も多いが、頭に浮かんだことを述べてみた。高岡短大に赴任する際の挨拶状で、郷土の富山で教育を受けながら育ち、そのご離れた郷土に再び戻って恩返しすると気負って見たが、学生から学んだことも多かった。

夢多き日々の12年



名誉教授 小関利紀也

昭和61年の雪の多い4月、赴任した頃の高岡短期大学では、どうしたら社会的要請に応える卒業生を送り出せるかを考える毎日であった。如何なる大学を創るべきか、新しい大学像を求めて将来構想検討委員会が設置され、論議は専攻科設置の後にまで続けられた。

そうした時に何時も私の思いの根底にあったのは、20年程も前の、初めて北陸の地、金沢を訪れた昭和38年の冬、今でも話題にのぼる豪雪の年のことであった。

それは高度経済成長期のまっただなか、急上昇を続ける多くの家電製品の普及率が80%を超える中で、低迷を続ける電気掃除機の問題点を調査し、商品成立の諸元を決定する研究のためであった。市場ニーズに応えることのない、商品として成立し得ない製品のデザインはあり得ないのである。

かなり前の「日経デザイン」の調査でも産業界では、デザイナーに求められる能力として従来の産業工芸の狭い考え方でなく、それを超えて市場ニーズを解明し、新たな製品を開発するデザイン開発力が重要なものとしてあげられている。そしてデザインに求められるものとして、美的造形能力は勿論のこと、経営、生産、流通、ライフ・スタイル、環境、福祉等と直接かかわる総合的デザインの能力の重要性が広く認識されているのである。しかしながら地方では産業界ばかりでなく、大学においてさえも、こうしたデザイン能力の重要性は未だによく理解されておらず、ギャップが大きいのが実情である。

こうした認識があったので通産省当時、地方産業の独

自製品開発による活性化をはかるべく『地方産業デザイン開発事業』を立ち上げ、その初年度にこの事業を山中漆器組合で実施した。その後は海外赴任したこともあり、成果を確認したのは高岡短大に来てからのことであったが、山中漆器組合は事業実施当時の昭和51年の産額200億円から、50年代末の500億円の産地に発展していたのである。

この事業が直接という訳ではないにしても、私が高岡短大に関わる動機になったのは、それは、このデザイン開発事業を進めるに当たって直面した人材難であった。かろうじて数少ないデザイン事務所を探し出したが、美的造形能力をもつデザイナーはいても、それだけではこうした事業には役立たない。カゴメ・ケチャップが何億円もの費用をかけて行ったパッケージ・デザインの開発に失敗した話は有名で、如何に美しい形を作ることができて、そのみでは不十分なのである。適切な市場情報を得る能力、それを新しい時代、市場のニーズに適った独自の製品に纏め上げる能力、またその事業を推進し得るマネジメント能力のある人材育成の必要性が明らかになったのである。

実際、市場情報を如何に入手するかという事は今日では何処の企業でも重要問題で、とりわけ産業界でデザイナーに求められている能力である。けれどもこれは旧来の図案や美術工芸の学校教育では勿論、産業工芸科でさえも教えられてはいない。美術科で経営や市場調査の方法を付加的に教えるといった話ではなく、求められてい

るのは総合能力の育成であり、ここに産業デザイン学科独立の必要性があったのである。また、この総合的なデザイン能力を育成するに当たっては、短期大学では科目数の上からも困難な事は最初から明らかで、四年制化が望めないなら専攻科の設置には何等論議の余地もなかった。コンピューターが導入されるに及んでは、全くこれは理の当然であった。

バブル崩壊後の今日、構造改革の名の下に下請け事業の海外移転が進められ、市場には安価な輸入品があふれる反面、産地問屋は疲弊し、優れた専門的加工技術を持ちながら、市場調査能力も製品企画力も開発資金もなく、仕事もない産業が増加して空洞化が進んでいる。最近、独自の技術をもった異業種の中小企業のグループが幾つか、各地で新製品開発に乗り出した話を聞いて、やや慰められる思いである。

高岡短大の産業デザインにいた頃、新しい教育の意欲

もあり、優れた指導力もあった南塚豊さんは残念ながら志半ばに亡くなってしまわれたが、学生の総合デザイン力を如何に育てるか、毎夜のように共に議論を重ね、次々と実行に移したことを思い出す。そのゆえあってか短大とはいえ、毎年開催される DAS/毎日新聞社主催の全国大学学生デザイン・コンクールでは他の四年制芸術大学に伍して常に入賞を果たし、学校の知名度を高めることもできた。また地域の企業には自信をもって卒業生達を送り出し、実社会で大いに成果をあげたこと、そして乏しいマン・パワーの力不足はやむを得なかったとはいえ、地域の地場産業の人々を対象にした新製品開発公開講座も、いまだに誇らしい思い出である。

「小さいけれども、特色ある珠玉のような大学でありたい。」開学当時の将来構想検討委員会座長の島田副学長の言葉を思い出す。

回想の断片

私は縁あって昭和61年4月に本学の教員に採用された。その年本学は第1回の学生を受け入れた。晴天に恵まれたがまだ少し肌寒い入学式当日、大学正面入り口付近で記念写真を撮った時の教職員と学生の表情は晴れ晴れとして明るかった。

なにからなにまで真新しい環境のなかで授業が始まった。新しい黒板はチョークが乗らず、字を書くとキーキー音をたてた。私は若い学生の前で授業をするのが楽しかった。

当時まだ校舎は建設途上で体育館も図書館も無かった。私は在職した14年間に体育館、図書館、専攻科棟、更に非常勤講師宿泊施設等の建設工事がしだいに進むのを研究棟の4階の窓からよく眺めたものだ。

ある時、今は亡き横山保初代学長が教職員を対象に通信技術の将来展望について講演をされたことがあった。ずいぶん専門的な内容でよく分からなかったが、素人考えの私には自分の周辺でそんなに急速な情報通信の進展があるとは思えなかった。その頃いわゆるケータイさえもまだ無かった。インターネットということばも知らなかった。情報通信革命の時代が遠い将来にいずれやってくるとは漠然と思っていた。しかし今振り返ってみると

私たちは間もなくその時代の波に洗われたのである。学内 LAN が整備され、諸連絡や情報交換が学内ネットの利用で可能になったのは私にとって新鮮な経験だった。自分の研究資料をインターネットで収集することも覚えた。海外の外国人の知己に頼んで、英米コースの学生のインターネット英文通信の相手になってもらうことも試みた。パソコンの誤操作で専門家の同僚に助けってもらうこともしばしばずいぶん迷惑をかけた。

平成7年にテレビによる放送公開講座の実施の順番が英米コースに回ってきた。できるなら辞退したい気持ちだった。関係者で9回シリーズのテーマを決め、各回の内容を検討し、担当者間及び放送局側との調整、外国人協力者への依頼などにいささか苦労した。私自身は収録の始まる前の7月、8月は毎週土、日全部を研究室で台本の作成に当てなければならなかった。9回の放送が終わって「やれやれ」という気持ちだった。準備のための時間不足で出来具合に不満な点もあったが、出演をお願いした当時の宮本匡章学長、直接の担当者及び事業課のご協力の御蔭で無事に終了できたのはありがたかった。

故蠟山昌一学長が本学の教育課程改革の本格的作業が始まる直前だったと思うが、私たち宛の文書のなかで富



名誉教授 林 暢夫

山大学との併合の可能性を示唆されたことがあった。大学の再編・統合が広く話題になるかなり前のことである。大学の生き残りが叫ばれるなか、それは私たちにある種の危機感を伝えるためだったろうが、当時の私には愚かにもあまり現実感が無かった。こんど本学が富山大学と再編・統合のうえ、新しく芸術文化学部として生まれ変わるようになったが、本学開学時には夢にも考えら

れなかつただろう。時代は変わると言うことしきりである。ともかく新しい学部の今後の発展を心から祈るばかりである。

私は本学に14年お世話になったが、すぐれた教職員の方々に助けられて勤めることができたのは大きな幸運であった。深く感謝したい。

漆への挑戦

本学創設の経緯は「高岡短期大学十年史」(平成6年3月発行)に詳しいが、開学は昭和58年(1983年)10月1日であり、同61年4月15日に第一回の入学式が挙行された。

小生に短大が高岡に設置されるので協力してくれないかとの話があったのは59年頃でなかったかと思う。61年の入学時に予定されていた化学系の授業科目は、一般教育科目では「化学」、専門教育科目では「高分子材質学」「接着理論」「化学塗料学」であった。これらの授業は担当できると考えて応諾した。

当時、在籍していた大学での担当授業科目は「有機化学」「高分子化学」、授業に関連する「演習」「実験」「実技(ガラス細工等)」であった。しかし、研究の主題目は「付加縮合樹脂の基礎と応用研究(小生個人のテーマ)」「有機スズ化合物の新規合成と利用研究」(研究室のテーマ)であった。

だから、大学から配属先が内示されたのを見て驚いた。漆専攻になっていた。当時、漆の学術的なことはほとんど知らなかったのである。いまさら辞退もできず、新分野に取り組むことにした。

漆の研究を開始するにあって、どんな研究が行われてきたか、どんな研究が必要なのかを知る必要があった。そこで「漆の化学」に関する文献調査を開始したが、その研究の歴史の古さと膨大さに驚いた。明治15年(1882年)英国学会誌に掲載された日本人 SADAMA ISHIMATSU の論文が最初であり、翌16年には HIKOROKU YOSHIDA の論文が J. Chem. Soc. に共に英文で掲載されていて、明治の人の心意気を感じた。その後も、多くの先達が続々と内外の学術雑誌に発表されていた。小生が在任中に英国留学した J. H. P. Tyman 教授もこのと

き知った。とにかく、赴任は61年からとなっていたが、とても準備期間が足りず62年に変更していただき文献調査に没頭した。

着任後、漆の実験を開始。「かぶれ」予防のために手術用手袋をして行ったが、実験器具等を扱うには不便であった。そこで、手に付いても洗い流せる「かぶれ予防液」を考案した。この液の調製法は学会誌にも掲載された。また、漆の学生の実技室等にも常備し、いつでも使用出来るようにした。

退職後、残務整理もほぼ終わり自宅で漆の最大の弱点とされる対候性実験を細々と続行している。

名誉教授 蜷川 彰



(似顔絵の説明；退職時、漆の在校生全員からなる寄せ書き集「蜷川先生への手紙」と題する冊子を頂いた。小生へはなむけの言葉が籠められていた。また、言葉とともにイラストも多く描かれていた。似顔絵はそのなかの一枚です。)

最も残酷な月



名誉教授 中野清治

大学の英語教員をしていて、心に一番重くのしかかる月は2月であった。学年末の繁忙に加え、入試の採点の仕事があったからである。以下は入試にまつわる思い出である。

新学年の慌しい一連の行事を終えて一息つくと、もう来年の入試に使う英文、つまり内容的にまとまっておらず、難易度、分量などで適切な候補文探しが始まる。学長から入試問題作成委員の委嘱を正式に受けるのはずっと後のことであるから、出過ぎたことには違いないが、平成17年度センター試験の国語の問題で生じたように、意図的ではないにしても結果的に受験生を不公平に扱ったことになるというような例は過去に幾らもある。問題文を慎重に選ぶということはそれだけ時間がかかるということなのである。また果たさなければならぬ他の責務(授業、各種委員会の出席、公開講座のテキスト作り等)や以後のスケジュールを考えれば先走っておくに越したことはない。

問題作成の過程を詳細にのべることは憚られるので、触れないことにする。ただこの点で言い忘れてはならないことがいくつかある。まず誤植がないようにすること、また受験生に誤解を与えないよう、解答方式を指示する日本語の表現に細心の注意を払うことである。さらに形式の面でも、例えば解答用紙のスペースの配分や番号・記号が問題冊子のそれらに間違いなく照応するように、念には念をいれ、厳密・細心の検討を加えた。印刷所から刷り上げてきたゲラを校正するのは時間をおいてすべてを客観的に眺めるのに役立った。おかげで今に至るまで、入試最中に訂正箇所を知らせるために連絡係が各教室を走り回るということは一度もなかった。

面接では緊張のあまり言葉が出てこなくなる受験生がいる。口下手であるほどこちらが気をつかう。面接官としてはできるだけ相手の緊張をほぐそうとして打ち解けた話し方をしてみたり、相手を傷つけまいとして言葉を選ぶ努力をする。言葉だけの問題ではない。尋ねる内容そのものも受験生が得意とする分野にふって、元気な反応が返ってくるのを期待する。あれやこれやで結構疲れる。2日間の面接終了時にはぐったりである。

採点業務で忘れられないのは第1期生に関わるそれである。採点に携わったのは、私の記憶では、問題作成に関わった富山大学の英語担当教官2人と、本学着任予定の村上恭子先生、そして富山商船高専の教員をしていた私であった。部外者だけなのは本学に正規の英語教員はまだ一人もいなかったからである。高岡市にあった旧富山大学工学部(同学部は前年の昭和60年に富山市へ移転が完了して校舎だけが残っていた。その敷地に現在高岡高校が建っている)の一室で、昭和61年2月24、25日の二日間にわたって、それまで経験したことのない大量の答案と組み討ちをした。競争倍率が高いだけに優秀な生徒が受験しているな、というのが採点しながら受けた印象である。

開学後の数年間は受験者が多く、調べる答案の枚数の多さに辟易した。採点初日、前日の面接の疲れも忘れて好調なスタートを切るのだが、時間の経過とともに答案をめくる間隔が乱れてくる。他の採点者も同様である。こつこつと行なう単調で骨の折れる仕事のことを drudgery というが、入試の採点は正に drudgery である。2日目の午後ともなると、答案を数枚めくるごとに天井を仰いでため息をついたり、窓外にぼんやりと目をやったりと、作業は遅々として進まなくなる。そうこうしながらも夕方ごろになると合計点を記入する作業に入ってくる。この段階までくれば先が見えてくるので、俄然元気が出てくるから不思議である。

作問のところでも述べたが、採点作業においても厳正を旨とし、細心な念査を繰り返した。解答用紙の各綴冊の表紙には、作業担当者がサインするための紙が貼ってあり、各問の採点および点数の記入者・その点検者、合計点の記入者・その点検者が、各作業終了ごとに該当欄に署名することになっていた。厳正の上にも厳正を要求される入試においては、複数の採点者の目でチェックすることは欠かせない作業なのである。

英国の文人 T. S. Eliot は “April is the cruellest month,” (米国式綴りでは cruelest—こういう但し書きをつけるのが英語教師の悲しい性)と詠んだが、筆者にとっては2月こそ「最も残酷な月」だった。

学生と共に



名誉教授 林 哲三

「光陰矢の如し」時の過ぎ去ることが思いのほか早く感じるたえとして使われています。

私が、昭和62年4月に高岡短期大学の教官として奉職し、平成16年3月退職するまでの17年間、今思うとあっという間に過ぎてしまった感があります。

昨日まで自宅で木工制作の仕事をしていた者が今日は若い学生の前でものづくりについて講義をしている、まさに「晴天のへきれき」という出来事でした。

新入生は木材工芸専攻希望とはいえ、木というものがどのような性質を持ったものか、また工芸とは何かほとんど知らない状態です。まあ、それを勉強するために入学してきたわけですが。

私も今まで人に木について、ものづくりについて教えた経験がなく、果たしてやれるのか当初の頃は、「暗中模索」という状態の毎日でした。

まず講義や実習を行う前に授業をどのように組み立てて進めて行けばよいのか解らない、所謂シラバスづくりが問題でした。誰に聞いてもあなたのやりたい様に考えてやってくださいという回答ばかりでした。

私は困ってしまい、そこで自分では何ができるかを考えました。その結果これまで木材を使って制作してきた経験を生かして行うしかない。講義では話だけでなく実物を見せたりまた現状を見に行くこと、実習ではものづくりの基本の技をやって見せること、学生はそれを見てそして自ら体験することによりさらに深く理解でき学べるのではないか。

このことは私の授業の根幹として17年間一貫して行ってきたことです。そしてこれを実行するには私のそれまでの知識と経験では到底間に合わないことに気付き、自分も学生と共に、いやそれ以上に勉強をしなければならぬ破目になりました。そして担当授業のシラバスには必ず一回以上の学外実習を計画し、学生と一緒に出かけました。

このときほど、みんなの顔が生き生きしていたことが印象深く思い出されます。教室での一方的な話しではなく、世間話をしながら市場調査や資料収集を行う、学生の普段見せない態度や本音の話しなどに驚かされたこともしばしばありました。そして若者がどのようなことを考え、何に興味を持っているのか知る機会でもあり、ま

た昼食時にレストランで皆と一緒に食事をするのも私の楽しみの一つでした。さらに井波、庄川への産地見学や研修旅行も楽しく有意義な授業でした。

もう一つ私にとって忘れられない行事は、毎年続けてきた「ろくろ祭り」です。

当初、産業工芸学科の各専攻で、「…まつり」なるものが行われていました。

木材工芸専攻では「ろくろ祭り」と称し、学生主体で食物を準備し、そして食べながら皆で語り合う行事です。

「ろくろ」という事で、私が関わるようになり現在も続けています。このことは普段の授業ではなかなかできない内容だと思います。

日本に古来より伝えられた、ものづくりの根源である精神や道具、素材に対して崇める心を儀式というかたちを通して現し、示すことは純粋に考えて大切なことだと思います。すべてのものが、我々の祖先から連綿と受け継がれて、今日あるわけです。

思い出せば数限りなく切りがありません。高岡短大の17年間は私の生涯にとって重要な一ページであり、この間に若者から貰ったパワーや貴重な経験や体験は私の貴重な財産になりました。今後の人生に生かして制作に励んでいきたいと思っています。ありがとうございました。



コラボレーションに明け暮れた日々をもう一度

元産業情報学科助教授 小郷直言

高岡短期大学を離れ、はや10年あまりになりました。だんだんと記憶を呼び覚まさないほど遠くになってしまったのでしょうか。辛かったこと、大変だったことは意外に少なく、充実した日々、楽しかった出来事の方が思い出として多く残ります。しかし、思い出として高岡短期大学を回想するということ以上に、現在の自分に通じる研究の基本的考え方、大学における職務についての関わり方の多くは、高岡短期大学に在職していた期間に築けたものと思っております。それと同時に今は感謝の気持ちでいっぱいです。

総合大学の学部学科に所属していますと、その中での活動は外部に開かれることは少なく、多くが閉じてしまい、自分に近い専門家、学生との関係が中心となります。良きにつけ悪きにつけ、高岡短期大学は大学全体でも、総合大学の一つの学部ぐらいの規模しかありません。当然のごとく最初、業務はそれまで経験したことがないほど山積みされ、研究上、教育上、職務上で密に接触する人々の履歴、職歴、職位も様々で、阿吽の呼吸は通じず、飛んでくる火の粉も払えず、無関心も許されない、という気の滅入る思いがしたものです。しかし、よくできたもので、当時雑事と割り切り腰を引いて関わってきた事も、繰り返しによる慣れと、気の持ちようで、私に多少の関わりへの積極性と異文化コラボレーションを楽しむゆとりとが醸成されてきました。

この影響は自分の研究面にもすぐに現れてきました。大学の規模、学生数、教えるべき内容などからして過大といえるコンピュータ設備は、恵まれてはいるが同時に設備の稼働率や教科内容面からもシステム管理上負担な存在ともなっていた。何とかコンピュータ資源の有効利用はできないものかと考えを絞っていたが、そんななか当時技官であったシステム管理者の米川覚氏と共同で「もんじゅ」というソフトウェアシステムをホストコンピュータ上に構築して、TSSにあった共同利用学習環境を学生に提供しようと努力しました。現在では当たり前になりつつありますが、当時として学習にグループウェアを利用した新しい学習環境でした。数年にわたり深夜までシステム開発の共同作業を二人で続けたのを覚えています。若かったこともあります研究とシステム

開発に夢中で没頭できたことを今では懐かしく思います。このシステムに対して京都の国際会議場で賞を頂いたことが二人の誇りです。

もう一つのコラボレーションは、分野も育った環境もまるで異なる木材工芸専攻の小松研治氏との出会いであった。一年間留学されたスウェーデンから帰国され、滞在されたカペラ・ゴーデン美術工芸学校での体験を文章化するお手伝いをする過程で様々な話題を話す内に、分野が違っても通じ合うことが多くあることの発見は実に驚くべき体験でした。これは貴重であったと同時に、その後の私の思考やものの見方の重要な転換点となりました。驚きはこれまで読んできた自身にとっての重要ではあったが少なからず距離があった人物の書籍が、新たな光の下でより明晰に理解できるようになっていったことです。これは一人で読み、解釈していたのでは決して得られない次元での感動 eureka! をわたしに与えてくれました。1 ページ読むごとに自分の解釈を伝え、彼の返事、返答からさらにあらたに読返し、再考し、再度解釈を質すということをそれこそ際限なく何年も続けてきています。この間二人で書いた多くの論文が、いま自分の財産となっています。偉人として再登場した人物には F. W. Taylor, K. Marx, G. Ryle, R. Gregory, J. J. Gibson, 田中美知太郎, L. S. Vygotsky, D. A. Norman がいます。

名前はなくなるかもしれませんが、すばらしいコラボレーション環境である高岡短期大学のキャンパスに期待することは、学習の資源として人工物環境への視点移動が、個人中心の学習概念から脱中心化させてくれ、知識の外在主義的な見方から学習・研究環境を重視する突破口になるんだ、ということでしょうか。

初代横山保学長、第2代宮本匡章学長、第3代蠟山昌一学長は大阪大学経済学部をそれぞれの分野で現在の名誉ある学部にて育て上げられた重鎮であります。幸にもわたしは大阪大学経済学部、さらに大学院経済学研究科の学生として、横山先生、宮本先生に直接指導を受けました。とくに横山先生は指導教官であり、その故もあって富山大学にいた私を短大に導いてくださいました。富山大学に創設準備室があったときから大学が創設される一

部始終を脇から観察させていただき、少しばかりのお手伝いできたことは、今から思えば希有な体験であったと思います。自身の病状悪化への危惧から横山先生は、短大の将来を託すべき唯一の人物として宮本先生を推薦されました。

私は二人の恩師の下で仕事ができることをこの上もな

く感謝しております。期待に答えられるほどの力量を持たない私に大学の運営と教育研究機関としての厳しさ、自由度から発する熱意と誠意を教えてくださいました。人生の重要な時期を高岡短期大学で過ごし、よき恩師と同僚に巡り会えた幸運を感謝せずにはおれません。

回想—坂川幸雄先生

地域ビジネス学科助教授 藤田徹也

坂川幸雄先生は、富山県公害センター(現 富山県環境科学センター)所長、富山県工業技術センター所長などの要職を経られたのち、昭和61年9月に本学教授・開放センターの初代センター主任として着任されました。当時の開放センターは61年4月に発足したばかりで、地域貢献のための大学開放事業を文字どおりゼロから構想・立案していく状態でしたが、坂川先生はその中心としてご活躍されました。特に、行政機関・地元団体との連携、公開講座の共催依頼と広報などの対外的な交渉の際には、先生が長年培われた人脈が生かされ、多くの事業をスムーズに運ぶことができました。

授業担当科目「環境科学」は、毎回の講義は詳細なレジュメと多数のスライドによる充実した内容で、毎年100名程度が受講する人気講座でした。また、研究面では、放送教育開発センター(現 メディア教育開発センター)研究協力者として、通信衛星・CATV 網を用いた双方向遠隔教育システムの研究や、放送公開講座における効果的な映像提示などの遠隔教育に関する実践的な研究を推進されました。



(故)坂川幸雄先生

先生は誰に対しても温厚な態度で接しられ、泰然と物事に臨まれる様子が印象的でした。私は平成3年に赴任し、当時は右も左もわからず戸惑うことも多かったので

すが、先生には一から丁寧にご助言・ご指導をいただきました。また、開放センターの業務だけでなく研究もできるよう、教官室の使用を促されるなど、数々の面でご配慮をいただき感謝しております。暑気払い・忘年会など事業課のみなさんとの会食の機会も多かったのですが、カラオケでお得意のレパートリーを披露されるなど、とても楽しそうにしておられていたのを覚えています。

折に触れて、お子様方の成長を嬉しそうに語られ、また、定年退官後にゆっくりできることを楽しみにしておられました。しかし、平成4年の秋頃から体調を崩され、入院されることになりました。病室では気丈に振る舞われていましたが、病状は悪化し、平成5年8月に惜しくもご逝去されました。葬儀の日、勝興寺の空は青く、とても暑い日でした。ただただ無念さだけが募る一日でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



回想—南塚先生

産業デザイン学科助教授 矢口忠憲

南塚先生と初めてお会いしたのは、早春の頃、私が採用面接の為に来学した日のことです。その時は緊張していたこともあり話しの内容などはよく覚えていませんが、それから数週間が過ぎ採用が承認された時、先生が私の会社へ割愛願ひに出向いて下さり、私の上司に対してこれまでの経緯とデザイン教育の重要性、私の必要性（これに関しては困難であったと思う）を熱く語って下さったことは強く印象に残っています。その後、大学を見学する為に二人で私の車に乗り名古屋から高岡に向う道中色々な話しをしたことも思い出されます。互いが同郷で、金沢美大の同窓であったことから共通の話題も多く、話しが尽きることはありませんでした。大学に着いたからも、学内を回りながら色々なお話を聞かせて頂き、新たなスタートに胸膨らんだことを記憶しています。

何よりも南塚先生が教育熱心な方であったことは、誰もが知るところです。学生の間では、親しみを込めて「ナンチャン」と呼ばれ、先生も時折「ナンチャット○○」「ナンにもデナイナー」などと冗談まじりに答えておられました。（当時を回想するにあたり、以後南塚先生のことをナンチャンと記させていただきます）真新しい校舎でまだ十分に設備等が整っていなかった頃（昭和61年）、第1期生を迎え入れました。各方面から集結した教官陣にとっても、全てが初めての経験であり、戸惑いながら奮闘していたそうです。その折りも、持ち前の明るさと長年の高等学校の教諭経験を生かし、先頭に立って学生指導にあたっておられました。また学生のみならず、私たち他の教官にも今までの事例などを交えて、学生心理や指導方法などを熱く語って下さいました。

卒業制作の時期は、1年生の締めとなる実習授業と重なることもあって、私たちも学生達と同じように夜遅くまで学校に残り全員体制で指導にあたっていました。終盤に近づいてくると、私たちの朝1番の仕事は、雑然とした実技室の片隅で毛布やエアークャップに蹲っている徹夜組の学生を起こすことから始まります。思考能力が低下している学生に今日のスケジュールを再確認させ、段取りをこちらが組んで指示する。その後は定期的に、脱線していないか、間違っていないかをチェックするため、実技室やモデリングルームなどを巡回する毎日でした。そんな中、ナンチャンは何時も、口癖であった「説

得ではなく、納得だ」の如く、必ず学生の主体性を尊重し、あくまでも学生自身が充分納得した上で作業が進められるよう、配慮して指導されていました。この考えはデザイン専攻全員の教官にも共通しておりましたので、学生とは膝を突き合わせてとことん話し合いをしたものです。互いに真剣であったが故に、時折思い悩み感極まって泣き出す学生もいましたが、その様なプロセス（体験）があったからこそ、自信を持って社会に羽ばたいていけたのでしょし、現在もそれぞれの現場で頑張ってくれているのだと思っています。

当時は、卒業式の後に卒業生が教官を労うために一席用意してくれ、そこで学生一人一人が順番に2年間を振り返って一言語ることが恒例となっていました。将来の夢を語る者、友達への想いを語る者、辛かったことや悲しかったこと、楽しかったことを振り返る者、先生への感謝を述べる者など様々でしたが、何れの学生も終わりのほうになると涙して言葉に詰まっていました。全員が涙している中、最後の締めは何時も小関先生の「よ・よ・よ・い一本締め」とナンチャンの「万歳三唱」でした。あの一体感と達成感、今や幻となりつつありますが、その香りくらいは今も継承されているものと信じたいです。



卒業式の後の専攻謝恩会の席にて

ナンチャンの専門は、分野としてはプロダクトデザインでしたが、高校教諭時代より、デザイン基礎教育、発想法の研究を主たるテーマにされていました。色々な発想法を研究される中、辿り着いたのが市川亀久彌先生の等価変換理論だったと聞いていました。その理論に今までの御自身の考えを組み合わせ、デザイン教育における発想法として理論構築されました。本学では「トランスフォーメーション」と名付けられ独自の授業として開講

されていました。この授業は、就職先などでも高く評価され、本学の特長ある授業の一つとして受け継がれています。現在は私が、これらの授業を担当しているわけで

すが、どのくらいナンチャンの意志を伝えられているかは自信がありません。何とか進化させ、今後も継承していきたいと思っています。

卒業生の回想

回想

金属工芸専攻 平成2年卒業
伊藤良治

私は昭和六十三年、産業工芸学科金属工芸専攻の第三期生として入学しました。

校舎は出来たばかりで美しく、先生方と一・二期生の先輩方のおかげで設備も整い、とても恵まれた環境で学生生活を送ることが出来ました。

金工の仕事はほとんどが始めて経験することばかりで、危険な作業も多かった事もあり、良い緊張感と刺激のある毎日でした。また先生方の仕事に対する厳しい姿勢が、何よりも一番の勉強になりました。特に、須賀松園・麻生三郎両先生から直接ご指導をお受けできたことはとても幸せな事だったと思います。

また、金工は何かと皆で集まっては飲む機会の多い(短大生ですが、三期生は二十歳以上の多いクラスでした)科でした。鞆まつりや鑄込みの後の後吹き等々、先生や先輩・後輩と土間や作業場に集まって騒いだことは今でも懐かしい思い出として心に強く残っています。そのおかげで、私達はいざという時には、皆で力を合わせてまとまる事が出来たのだと思います。



今は皆それぞれの道に進み、金工を続けている者、全く別の仕事をしている者といろいろですが、短大で教わった多くの事を生かしてがんばっています。私もあの頃の緊張感を忘れず、高岡短大の卒業生として恥ずかしくない仕事をしていきたいと思っています。

回想

経営実務専攻 平成2年卒業
山本美智恵(旧姓 室谷)

私は第3期生として入学しました。先生方やクラスメイトと出会い、新たな世界が広がりました。たくさん話して笑って泣いて悩んで。ボーッとしたり、一生懸命だったり。私にとってはぜいたくで、濃密で、宝物のような2年間でした。

私たちが簿記会計の授業を受けている真下の教室では、工芸科の学生がモデルを前にデッサンしている…全く色の感じが違う授業が、同じ校内で行われていることがとても新鮮で不思議でした。時々感じられる、漆や木の香り、チェーンという金属音もとても興味深くて心地よいものでした。



平成元年8月 バスケットボール部合宿中スイカを食べて種とばしをしているところ。

それから、部活動も忘れられない思い出のひとつです。縁あってバスケットボール部に入部。仲間、先輩、後輩、そして人生相談にものって下さった加藤敏弘先生。体育館を走り、筋トレをし、ボールを追う。合宿、遠征、文集づくりに金魚救出作戦。あんなに体も心も動かししたのは初めてでした。

2年という月日は、あまりにも早く短いものでした。やっと慣れ親しみ、これからもっとおもしろくなっていきそうなのに。そんな風に感じられ、卒業時は残念でし

た。あれから約15年。高短生がデザインした万葉線車両、氷見の商店・企業の広告を見かけたりすると、何ともうれしく誇らしいです。“高短”の名がなくなってしまうのは淋しいですが、さらなる発展につながるものと信じて、応援しています。関係者の皆様の幸せを祈っています。

現況 高短の前を車で通ると、食堂に行きたい気持ちでいっぱいになります。子育て、自分育て等、日々修行!の毎日です。



卒業後の私

情報処理専攻 平成3年卒業
堀野幸一

情報処理専攻を卒業して14年近くが過ぎました。長い歳月の中で、私は3度の転職を経験しました。正直なところ、社会人として就職に対する認識が甘かったのかもしれない。挫折を繰り返す自分を見つめ直すために短大の創己祭に何度か足を運んだ事もありました。現在は学校技士として働いていますが、それまでの3年間の紆余曲折は自分にとって貴重な人生勉強だったように思います。大学時代、毎日机上でコンピュータと向き合っ

いた自分からは想像もつかない程、今はコンピュータを使っていません。同じ場所でじっとしている仕事でもなく、常に職場内を動き回っています。学校技士は施設の維持や修繕を進めながら、園芸や木工作业もおこないます。11年目になりますが仕事に対する情熱はいまでも変わりません。はつらつとした子供達に囲まれながら自らが創造したものを形にし、学校環境を整えていくところにとっても魅力を感じています。自分の働く姿が成長過程の子供達や市民の日に映る事で緊張やプレッシャーを感じる事もたまたまありました。しかし、子供達や先生方そして家族の温かい励ましに支えられながら、今日まで続けることができました。大学時代に肌で感じた「創己」の精神をいつまでも持ち続け、日々努力していきたいと思います。

略歴 平成元年4月 高岡短期大学産業情報学科情報処理専攻入学 3年3月 高岡短期大学産業情報学科情報処理専攻卒業 6年5月 富山市職員に採用 17年2月 現在に至る。**現況** 富山市職員として小学校に勤務しています。元気いっぱいの子供達に囲まれながら、よりよい環境づくりと施設維持に努めております。

回 想

産業デザイン専攻 平成2年卒業
岡本博美(旧姓 牧野)

私たち産業デザイン3期生(以後産デと表記)のクラスは、先生方も含め、とても仲が良かったと思う。高岡短大に入ってまず一番印象に残った出来事。それは新入生歓迎会という場に先生も登場され、一緒になってお酒を酌み交わすということ。小・中・高校時代はまず考えられない。『先生』というのは上の立場の人で、生徒に難癖つけて叱るのが仕事だと思っていたので、いきなり隣に座って大酒飲む先生もいるんだーと、軽いカルチャーショック。その後も何かにつけ宴席が設けられ、用事がない限り必ず先生方も出席してくれていた。しかも、生徒をぶっちぎりでよく飲む。産デの先生になるには、飲酒テストがあるのかと思うぐらい、酒豪揃いだった。



授業内容もユニーク。個性的で型にはまらない斬新な課題が次々ふってくる。小学校の時「毎日図工の時間ならいいのに」と思っていたことが現実になったんだから、楽しくってしょうがない。その

割によくさぼって単位ギリギリだったけど、まあ今となってはいい思い出。

卒業してからも何かとちょくちょく顔を出し、現在に至るまでお世話になり続けている。その『高岡短大』の名称が消えるのはとても寂しい限り。それでも私の中では長い学生時代の中で一番思い出深く、誇りに思う学校であることは、これからも変わらない。

略歴 平成2年 国立高岡短期大学産業デザイン学科卒業。広告代理店のデザイン部門に就職 7年 友人と二人でデザイン会社『シード』を起す。11年 散居村にある、小高い丘の上の大きな一軒家に引っ越す。年に数回、この広いスペースを利用してJazzライブを行う。13年 自宅の横にある広い倉庫を利用して、子供のための創作教室を開校。14年 デザインの仕事をする傍ら、色彩心理学博士・末永蒼生氏主宰の色彩学校のコースに通い、『チャイルドアートインストラクター』の資格を取得。

広告企画工房シード/代表 岡本博美

わんぱくアトリエシード/チャイルドアートインストラクター

e-mail: sead@p1.tcnnet.jp http://www.tcnnet.jp/sead/

先生達と工芸棟

木材工芸専攻 平成3年卒業
本多一郎

木材工芸専攻で過した二年間、小中の義務教育及び、その延長線上のような高校の時には思いもよらない事ばかりだった。先生達はそれぞれの生きざまを見せてくれた。木材の先生達に限っても、皆、我が道を歩いてきた確固たる信念の持ち主ばかり、学生目から見ても意見を闘わせている先生方の雰囲気を感じることができた。

理論と実践、構造と形態、作為の無作為による自己表現と、決められた寸法世界における自己表現、技術力と創造力……先生方の信念のぶつかり合いを垣間見ることのできた気がする。

迷いもあったが、木材工芸にたどり着いた一年目。研ぎに明け暮れた夏を過ぎて、後悔はなかった。ここでしか知り得なかった世界、有り得なかった出会い。振り返っても自分にとっての一つの歴史がそこにある。

書ききれない思い出があるが、詩?を一つ。

「工芸棟の風」

工芸棟には風が吹いていた。

我が木材工芸と、クロスする金属工芸。

金属の槌音、木材の刻み音。カッシャーんと金属の雷神様、ヒュウウーヴォーンと木材の集塵機の風神様。

工芸棟には、よい風が吹いていた。

木材の機械室にいれば漆やデザインからの微風も感じられた。工芸棟は風の強い場所だった。

若き風のいきかう、今は心の中の思い出。

略歴 卒業後、立山町森林組合へ就職合併により、立山山麓森林組合職員 現在に至る





回想

専攻科 地域産業専攻
平成4年修了
田中早苗(旧姓 遠藤)

私が高岡短大に在籍していたのは3年間でした。朝から晩まで一日の殆どを学校で過ごし、作るという事の面白さや難しさに触れました。この経験が私には忘れられず、卒業後も漆に関わる仕事に就きましたが、あの頃ほど夢中に取り組むことはなかなか難しく感じています。とても自由で恵まれた環境の中にいたのだということを実感します。

また、その中で沢山の大切な出会いがありました。もう会うことは叶いませんが、とても大切な恩師にも巡り会えました。いつもは冗談ばかり言う先生でしたが本当に困った時には親身になって導いて下さいました。行き詰まったときには今でもよく先生の話してくれた事を思い出します。先生との思い出はきっと多くの方の心にも鮮やかに残っていることでしょう。

沢山の友達にも恵まれました。楽しい事も辛い事も一緒に味わった仲間は私にとって家族のようであり、いつも私を支えてくれています。

たった3年という短い時間でしたが、その値はとても

大きく、この先の人生にも大きな力となってくれる事と思います。

略歴 昭和45年神奈川県横浜市生まれ 平成4年 高岡短期大学専攻科卒業 8年 日本橋 TOMMY 画廊にてグループ展 9～11年 横山幸文氏に師事、富山県展奨励賞受賞 12年 山田平安堂にてグループ展(東京) 13年 天下堂ギャラリーにてグループ展(富山)、卯辰山工芸工房入所、高岡クラフトコンペ入選、ギャラリー葉っぱにてミニ個展 15年～ 自宅兼工房にて作品製作



『ロードゴーイングトリップ・ザ・青春』

産業デザイン専攻 平成5年卒業
瀧澤 理

この間、東京在中の山口君(産デ6期卒、現グラフィックデザイン事務所青山表参道勤務)が引越すから手伝いに来てとムズカルわが息子とまた遊び?と冷やかな目の嫁に別れをつけ、どうやってこの状態から今日明日引越しを終わらす気なのだろうかこの人はという山口君32歳の自宅に入ったオレの動揺も察することなく、満面の笑顔で「すげえのが出てきたケラケラケラ」とまるで少年のような瞳で一冊の日に焼けたボロ大学ノートを差

し出した。それは僕たちが大学二年の夏休みにいった初めての長旅の記録ノートだった。山本敬君(木材6期、現本人曰くフリーの建築家)と僕の3人で鈴鹿で行われる鈴鹿8時間耐久オートバイのレースを見に行く2泊3日の強行軍ツアー。クルマ一台で行けばよいのに、バイクで無いと駄目だと訳のわからん理屈をこねてバイク1台クルマ1台で下道のみ宿無しテント無しで行った旅日記を誤字脱字ひらがなそのままの文でご紹介いたします。(良)山口良一(敬)山本敬(瀧)瀧澤理

7/25(土)初日

出発

AM 3 : 00 ジジババの店前。敬と合流(瀧)

AM 3 : 04 吉野家でめし(瀧)

AM 3 : 23 吉野家、出発。マスターと合う。敬つまようじさかさまにつかうやっぱり頭が悪い(瀧)

AM 3 : 36 ふくおかのGS宇佐美で敬給油。1000円金をかしてくれという。あいつは全財産2000円だといったなんてバカなんだろう(瀧)

AM 4 : 12 敬の家(注:金沢の実家)到着。第1目標無事達成。(良)

AM 4 : 30 父母と涙の再会。オレって頭わるいが方の二人のわるい by 敬 PS ちょっと首が痛い(敬)←字が違う“他”やっぱりだら(瀧)

AM 4 : 44 敬実家出発。敬のお母さんありがとう(瀧)

AM 5 : 22 ローソン矢崎店で休けい。小松はすぎた。敬初のYMCA戦法。(良)

AM 5 : 25 理にカメラの使い方を教える涙を流して感動していた by 敬(敬)

AM 5 : 45 ローソン出発ヘンナハーレーがいた。高岡チョッパーの方がかっこいいという結果が出た。Kスモークにこうかんうれしがになつとる(瀧)

AM 6 : 43 鯖江のサークルKまたハーレーだ(良)

AM 7 : 19 今日は良い天気でもまっごうよかったばい少しねむい(良)

AM 7 : 25 出発進行(良)

AM 8 : 28 YOGO KOHGEN RESORT なんかすげえ山道峠道の途中のスキー場ごたつとこ。こやあ。でも滋賀にはなった。(良)チョットここまでねてしまった良ちんごめん(瀧)

AM 8 : 36 この雄大な自然の中での立ションはまごう気持ちよか。By りょうちん(良)

AM 8 : 55 おこられたけん出発(良)

AM 9 : 41 長浜信用金庫で金をうばった山本敬すぐ出発(良)

AM 10 : 11 びわ湖到着あついで!!(瀧)

PM 12 : 25 ひるねしたけん再び出発。あつい。あ

ちいいいいいいいい。(良)

PM 1 : 52 彦根のパチンコオメガで500円でタバコツーカートンとカートン半分+2個かったやっぱ大天才はなにをやってもすごい良一千円負け敬2千円負けハッハッハ。良ちん彦根で高速道路にのろうとして逆走(瀧)

PM 2 : 30 道 R306通行止あーもうぷんぷん(瀧)

PM 3 : 21 R421に変更 HOTSPAR にて休けいアイス買った永願寺青野店(瀧)

PM 3 : 35 出発 HOTSPAR(瀧)

PM 4 : 23 大安なばきちのさんひでえまじで。(良)

PM 4 : 28 まっごうつかれたばい。死んじまうかと思っちった。でも三重ナンバーのビートを発見鈴鹿まであと十五マイル(良)

PM 6 : 00 四日市、笹川 K。(敬) K 眠くてフラフラしとる(良)

PM 6 : 20 出発 K となりの車のドアにぶつける。キズついたしらんべ〜しらんべ〜(良)

PM 7 : 00 つかれすぎたけどやっとなつた。(良)

7/26(日)二日目

AM 4 : 22 目覚める駐車場が見つからない7km歩きに決定。滝沢はまだ爆睡している。オレはかに7つもくわれたが富山のかと違いあまりかゆくないがそれでもやっぱりかゆいものはかゆい。by K ps、メットをもう一つもってくればよかった。(敬)

AM 5 : 35 でっばつ川ぞいのベースキャンプを出て一路サーキットへ。君の未来は輝いている(瀧)

PM 7 : 05 伊藤がこけたこれで OKI のガードナーに優勝が決定したと思う。空白の12時間強はまっごう暑くて死に死にのひやひやだった。山口君はもうくるのがいやなような顔していたが口では来年も来ようと言っていた。さすが浅く広くの山口君だ。by K(敬)なっなせ俺の心を・・・おわったおわったパチパチパチ俺の応援する an がまけた(良)う~~~~んすごいすごい by T(瀧)

7/27(月)三日目最終日

AM 9 : 08 出発。家へ帰ろう熊モッズよさらば R1 を北上し一路四日市へ向かう足のジョリッパまめがいたいいたい(瀧)

AM 9 : 20 サークル K であさごはん(良)

AM 9 : 40 再び出発一路桑名へ。K がまるでライダーのようだ。めづらしくすぐウィンカーけしたけど足がいたいいたい(瀧)

AM 11 : 18 K がいない。いったいどこへ行ってしまったんだあもう K とは一生会えないかもしれない短い間だったけど楽しかったよ K 元気でなああ足がいたい足がいたい(瀧)

AM 11 : 34 K との涙の再開ああ足がいたい足がいた(瀧)



おこげと
ヘッドスライディング

専攻科 地域産業専攻
平成5年修了
矢郷清孝

金属工芸教官室内ソファ脇の床(当時～現在?)に焦がした痕がある。正確にいうと、焦がした痕を隠そうとして、木床タイル一面(45×45cm くらい)をグラインダーで削った痕だ。アトフキだったか、フィゴのアトだったかは記憶に定かではない。けれど、削られたのはその痕からも確かである。本当ならば焦げないように、七輪下に鉄板かなんか敷くのだけれど。若かった。大ボケ野郎だった。その時アカイ顔をした普段は恐～い?先生方に、彼は怒られなかった。ということは記憶している。

輔祭も佳境に入り、大盛り上がりのなか。後輩叫ぶマイクを奪い取り、さらに叫ぶ輩がいた。もっと盛り上げようとしただけ?なぜだか‘やってやる!’朦朧とした意識のなか、なにが‘やってやる!’だ。でも、彼はやってしまった。美味しそうなモノはほぼ食べ尽くされていた(そう願いたい)テーブルの上にヘッドスライディング。飛び散るビールとつまみたち。ヒンシュクを買ったに違いない。以前、彼は知らない人から‘ダイビングの方ですか?’と聞かれた。ヒンシュクはどうやら知らないトコロで、今でも酒のつまみにされているらしい。

しかも、ヘッドスライディングはダイビングという表現に進化?していた。

恥ずかしながら、両方とも私のことである。ご飯のおこげ、野球のヘッドスライディングはオイシイ。(各人の見解に違いはあろうが…)高岡短大でのこれらの苦い記憶がいつか(すでに?)オイシイ記憶となることを祈りつつ。

略歴 昭和45年 富山県生まれ 平成2年4月 国立高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻入学 4年3月 同卒業 4年4月 同専攻科入学 5年3月 同 修了 5年 高岡短期大学創立10周年モニュメント制作に参加 6年4月 財団法人富山県文化振興財団富山県民会館勤務 13年4月～ 現在同新川文化ホール勤務

回 想

金属工芸専攻 平成6年卒業
塚本京香

学生時代を振り返って心に懐かしく甦るのは寒い冬の土間の情景です。砂にまみれながら夜半まで残って制作に熱中した日々。そこで学んだのはものづくりの姿勢でした。卒業から早くも12年、現在映画制作をするに至るまでの“旅”は高短に始まりました。「本当は映画がやりたいんです」とこぼした私に「やりたいことやれよ」と鍛金の中村先生に言われたのがそのはじまりでした。その言葉は一見簡単そうですが、美を追求してやまないartistである先生からの言葉だったからこそ心に響いたのでした。英文科のアメリカ人のコービー先生は英語の勉強にと Toefl の参考書を図書館に入れて下さり、又、アメリカだけはやめておきなさいと助言されました。そして廊下で出会ったカナダ人の専攻科留学生のすすめでトロントへ行くことになりました。成り行きようですが、今思えばよい選択でした。小さなきっかけで刻まれていく人生の不思議を思います。



4年後、念願のライオンソン大学映画科に入学、“水を得た魚”の如く(!)その媒体に自分の表現を見出しました。卒業後、今度はフランスにあるメディアアートのアトリエに行くつもりで3年の夏、フランス語を学びにモントリオールへ来たところ、現在の夫、ラフランスと運命的に(!)出会いました。2004年7月、娘のKarine(香琳)が生れ、家庭を営み子を育む生活が始まり、ひたすら夢を追ってきた自己探求の旅に新たな要素が加わりました。このこともまた、今後の自分の制作に豊さを与えてくれるものと考えています。

略歴 平成6年 高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻卒業
9年 ライオンソン大学(カナダ、トロント)入学、短編映画「砂丘のある部屋」(平成11年)、「Fluid Landscape」(13年)が数々の映画祭にて上映され賞を得る。卒業後はモントリオールにて映画制作、T.V.番組編集などに携わる。

ありがとうタカタン

情報処理専攻 平成6年卒業
遠藤久美子(旧姓 中川)

今は小学生でもメールやインターネットを楽しめる時代になりましたが、ほんの10年前は時代が違いました。ワープロすら打ったことがない私が情報処理専攻に入学し、プログラム演習の課題の1つ1つが大変な作業でした。パンチミスはいつまでたっても無くならない、印刷プログラムでは私の学籍番号が大きく印字されたリストが大量に出力されたこともありました(涙)。そんな私が現在システムエンジニアとしてシステム開発に携わっているのが自分でも不思議です。

私の人生がいろんな意味で変わったのがタカタン時代です。勉強のほうは前述のとおり、そこそこついていく程度でしたが(先生、すみません…)、私生活では生まれて初めての一人暮らし、夕飯付きの夜間アルバイト。毎日が新しく、貴重な経験でした。駐輪場にバイクを並べたり、マネージャーをしていた野球部の練習中に足のじん帯を切ったりもしました(笑)。たった2年間のタカタン生活はあっという間でしたが、『高校生ほど子供でなく、社会人ほど大人でない』そんな多感な時期をタカタンで過ごせて良かったと今でも思います。

卒業後もタカタンで出会った友人と時々集まり、最近では旦那様や子供達も加わって家族ぐるみでお付き合いしています。タカタンでの出会いや経験をずっと大切にしていきたいと思います。ありがとうタカタン。



1992.11.15 野球部で企業チームとの練習試合後に撮影したもの。前列女性陣中央が自分です。

略歴 情報処理専攻 平成6年 卒業後、北電情報システムサービス株式会社に就職、現在に至る

回 想

情報処理専攻 平成5年卒業
竹田加奈子(旧姓 荒船)

初めて高岡短期大学に行ったのは、高校3年生の春でした。二上山の麓にあるそのキャンパスの近代的、且つ何か余裕を感じる趣に圧倒され、ここに入学する決意を固めました。

推薦入学制度にて受験したのですが、面接試験では思うように自己表現が出来ず、終了後、「落ちた…」と泣きながら階段を下りたことが忘れられません。

ところが、無事、合格通知を受け取ることができ、新生活が始まりました。短大での2年間というのは、思っていたよりもずっと早く、慌ただしく過ぎましたが、その間に、学業以外にも、一人での生活や、多くの友人との出会いなど様々な経験を積み、今の自分の基盤が形成できました。

卒業後就職した会社に現在も勤務しています。事務処理の効率化を図るためのシステム作りや、社内ホームページの立ち上げなど、学生時代に学んだことを生かしつつ、常に前向きに取り組む努力をしています。また、授業で経験したゴルフがその後の趣味になったりと、その時のすべてが私をとっても豊かにしてくれました。そのおかげで、現在も仕事に趣味に充実した毎日を送っています。

今、高岡短期大学が新しい一歩を踏み出そうとしています。私もこれまでの経験や、これからの新しい出会いを大切に、何事にも挑戦していきたいと思っています。

んでいく事が重要であると言う事、高岡短大で学んだ、この「ものづくりの心」が私自身を支える柱となっています。またこの事は、どの分野、デザイン、建築、でも言える事であり、共通の考えだと、私は思います。

今年、高岡短大は富山大学に合併すると聞きました。大学名が変わろうと、この「ものづくりの心」を教える、先生方がいるかぎり高岡短大は安心であると私は思います。

私の勤めている会社にも後輩がすでに2人、入って来ており2人とも仕事、作品制作にとっても前向きに取り組んでおり、逆に私が刺激を受ける事があります。

今後も、「ものづくりの心」を持った卒業生が送りだされ、多方面で、活躍される事であると思います。

私も成長途中でありますが、高岡短大で学んだ事を軸にし、今後さらに成長して行きたいと思っています。

略歴 平成4年 高岡短期大学金属工芸科入学 7年 高岡短期大学専攻科卒業 7年 株式会社ミキモト装身具入社 11年 多摩美術大学造形表現学部入学(会社勤務終了後通学) 15年 多摩美術大学造形表現学部卒業 17年現在 株式会社ミキモト装身具原型制作担当技術主任

回 想

専攻科 地域産業専攻 平成7年修了
片桐毅幸

現在、私はジュエリー制作をする、クラフトマンとして仕事をしています。高岡短大を卒業して社会へ出て10年経った今でも学生時代学んだ事が仕事や自分の作品を造る上で役立ち、また実践している事を改めて感じます。私がものづくりに於いて常に考えている大事な事は、時間的、社会的な制約の中でも自分の信念や情熱を見失わず仕事あるいは作品制作に対して献身的に取り組



第3章

高岡短期大学の 成熟期

宮本匡章第2代学長の時代、平成7年4月に、1年制の専攻科が2年制の専攻科に改組された。産業造形専攻、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻の3専攻が設置され、学生は、造形、デザイン、ビジネスのそれぞれの専門をより深く習得する教育体制が整えられた。この2年制専攻科の修了時には、学士の称号を取得できることとなった。私たちは、短期大学2年、専攻科2年の教育体制は、高等教育における新しい実践的な教育の方向性を示すものとして、その成果を地域に還元し、あわせて地域文化の向上に寄与できるものであるとの確信を持った。

横山保初代学長は、これからの大学の使命は、教育・研究とともに地域住民への大学開放活動にあると色々な会議の場で発言されていた。その発言をもとに昭和61年度から大学の開放活動が開始された。大学開放の活動には、公開講座、作品展示公開、公開講演会等が開催された。しかも、年を経るごとに公開講座や展示公開の回数も増え活気がみなぎり、地域との交流も深まりをみせた。また、学外での展示公開、講演会や交流会も多くなり開放活動の成果が現れてきている。

高岡短大での思い出



第2代学長 宮本匡章

平成4年4月1日から平成10年3月末までの6年間、2代目の学長として高岡短期大学に勤務した。その高岡短大については、誠に妙な縁で、創設の構想段階から大凡の概要を知らされていた。というのも、私が大阪大学経済学部の教授になった当初から、月1回関西の企業のトップ教人が集まる横山ゼミ(初代学長の故・横山保先生(平成8年7月30日死去))に参加していたのであるが、その研究会で横山先生が私にも、短大の構想案や二上地区のキャンパス写真などを見せておられたからである。

とはいえ、私が学長になるとは夢想だにしていなかった。全くそれらしい話がなかったわけではないが、私なりに適任者を推薦していたので、よもや指名されるとは考えていなかった。ところが、学部ゼミの最中に電話で呼び出され、選挙で決まったから拒否するな、教授会のメンバーが最終決定のために待っている、と即決を求められて高岡に着任することになった次第。

今から振り返ってみても、良くぞ勤まったなーというのが、第一の感慨である。それに加えて、苦楽を共にした短大教職員や大学関係者の皆さんとの懐かしい思い出が、次々と思い出されて胸が一杯になる。そのなかの幾つかを、以下で紹介することにした。

最初に経験した大きなイベントは、平成5年10月の開学10周年記念事業であった。着任した時には既にラフな企画ができており、その詰めの作業と実行とが私の仕事であった。恐らく別の箇所で紹介されているであろう記念事業を、なんとか無事にこなし、ホッとしたのを鮮明に記憶している。

次の、恐らく最大の仕事は専攻科の改組であった。平成6年6月に、既存の1年制の専攻科(定員10人)を、2年制の地域産業専攻科(産業造形14人、総合デザイン5人、地域ビジネス6人、の定員25人)に拡充改組することを申請し、学位授与機構の認定校として平成7年4月に設置をみた。それに伴い、本校舎と同様に当時の文部

省の文教施設部直轄事業として、平成9年3月専攻科棟が完成。それによって高岡短大の現状がほぼ確定したのであった。

大学の周辺には、4年制大学への昇格が強い希望として渦巻いていた。しかし文部省の関係者、とりわけ設置時に苦勞された方々は、高岡短大が多くの短大のモデル校として設置されたことを根拠に、4年制大学への移行は論外であるとの態度。その上、専攻科の改組についても、管轄の専門教育課短大係は、決して良い顔をしなかった。にもかかわらず、実現にこぎつけたられたのは、当時の佐藤禎二・審議官や本間政雄・専門教育課長の尽力と、冷たい仕打ちにも耐え、真剣に学位授与機構への書類作りに取り組み、忍耐強く持続的に折衝を行なってくれた関係教官や事務局幹部の努力の賜物であった。今でも、心から感謝している。

一方、楽しみが味わえる仕事もあった。海外の大学等との学術交流協定の締結である。その相手の一つは、大連外国語学院(平成8年11月19日、協定締結)で、産業情報学科ビジネス外語専攻・中国コースの学生を、単位の取得が可能な約2週間の短期語学研修に参加させるためであった。その二は、フィンランドのラハティ・ポリテクニク(平成9年11月5日、協定締結)で、産業工芸学科の学生や教員の交流を意図していた。いずれのケースも、立派な仲介役が居られたことが幸いし、中国とフィンランドに当時の事業課長(中国には岡田文之助先生が同行)と一緒に出かけ、協定書に調印することができた。

現時点でも高岡短大と両校との学術交流が続き、当時想定していた成果を挙げていると聴き、大変嬉しく思っている。海外出張したのは、いずれも酷寒の時期、しかも限られた日程であったが、それでも知らない土地への旅は、魅力的で刺激に富み、リフレッシュする絶好の機会となった。

その他にも、学外の著名人とご一緒できる、幸せな機

平成5年(1993)

主なできごと

(3.19)平成4年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成5年度入学式を挙行。(8.3)前学長横山 保氏から横山賞創設の寄附金が贈呈される。(10.1)開学10周年記念事業を実施。(記念植樹、記念モニュメント「堯」の除幕式、記念講演、記念式典、記念祝賀会、記念展)

会があった。何回かの公開講座や、毎年実施していた北日本テレビでのテレビ放送講座がそのチャンスで、少なからず役得を感じたものである。私の場合、文楽の人間国宝・吉田蓑助師匠と、将棋の米長邦雄永世棋世のお二人が、鮮烈な印象として残っている双壁といえる。

その高岡短大から離れて早くも7年。昨年(平成15年)の夏頃から、その高岡短大や高岡が、物理的には近いところに居りながら、なにか遠い世界のように思えるようになってきている。平成15年6月、極めて残念なことに、後任の蠟山昌一学長が、任期を全うすることなく他界した。彼が東京大学助手から大阪大学に赴任してきて以来、公私いずれの場面でも自然と補完し合える関係にあり、まるで兄弟であるかのように付き合い続けてきただけ

に、喪失感は絶大なものであった。その同じ年の秋、高岡時代はもちろんのこと、金沢に来ても家族の一員として付き合いしてきた、そして短大関係者が少なからずお世話になった「博美」のママ(佐藤みよ子)が、突然に死去。正にダブルパンチ。一年以上経過していても、無念の思いは消えるどころか、増幅してくるよう思える。

とはいえ、私が生きている限り、高岡や高岡短大の名を忘れ去ることはないであろう。本年10月に予定されている3大学の合併で、たとえ高岡短期大学の名称が消えようとも、創設に心血を注ぎ、開学以来今日まで維持発展のために尽力されてきた、多数の関係者の皆さんの高き理想と熱き情熱は、永遠に消えることなく持続し続けるものと信じている。

漆塗りの箸置



第4代副学長 大谷利治

「学校とは学生が自分で力をつけるところである」ということをイヤというほど身にしみて思い知らされたことが高岡短期大学での一番の思い出です。

工芸の先生方をお願いして、いろんな物づくりを教えてくださいました。

漆工芸の先生には漆塗りの箸置き作りを教えてくださいました。「材料は何で?」との先生の間への私の「鶏の脚の形と大きさが箸置きに具合がよさそうなので…」との答に先生はチョット驚かれたようでしたが「漆を塗るためには骨から徹底的に油を抜かなくては駄目ですよ」との条件付きで鶏の骨の箸置き作りを指導してもらえらることになりました。

指導してもらえらるようになった…とは言うものの先生はほとんど何も教えてくださいませんでした。

先生は漆塗りの用具を前にして「これが漆で、これが漆の溶き油そしてこれが漆塗りの筆です。そして漆は重ね塗りが必要だけど箸置きなら3回塗ればいいでしょう」と言いつつ「こうやって漆を油で溶いて、この筆で

こんなふうにできるだけ薄く塗ればいいのです」と実演して見せてくれたあとは「塗ったあとは1週間ぐらい乾燥させましょう」と言っただけで部屋に私を残したまま出て行ってしまわれました。それ以降、先生の口から出たのはほとんど「これは失敗です。塗り直しです」という言葉だけでした。

私の漆塗り初挑戦は失敗の連続でした。

1回目「これは漆を厚く塗り過ぎています。塗り直しですね」

2回目「漆に埃がついてしまいました。塗り直して埃が付かないように乾燥させるように工夫しないとダメですね。塗り直しです」

3回目「漆を薄く塗るために油を使いすぎましたね。塗り直しです」

3回塗ればいいはずの箸置きが6回塗ることでヤットできあがりしました。失敗するたびに塗り損なった漆をサンドペーパーで削らなくてはならなかったので倍以上の手間がかかりました。

完成したとき先生に尋ねました。

平成6年(1994)

主なできごと

(3.18)平成5年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙げる。(4.8)平成6年度入学式を挙げる。

「僕は色々な失敗をしましたが漆塗りの主な失敗にはどんなことがあるのですか」

「あなたがやった三つです。その失敗をしなくなれば漆塗りは卒業です。僕もその失敗を今でもすることがあります」

先生の失敗と私の失敗とはレベルが全く違いますが私は3回の失敗のお陰で先生の指導がなくても今すぐにも自分用の箸置きなら漆塗りができる自信があります。塗りの巧拙を問わなければであることはもちろんですが…

金属工芸の先生方には鑄金のピールのジョッキ型のキーホルダーの飾り物作りや白銀製の掏摸出しリングなどを教えてもらいました。それなりの作品が完成したように思います。しかし、それらの作品は要所々は先生が手出しをしてくれてしまったので私には鑄金や鍛金などの技量は何も身につけていません。

工芸学科の先生方は「今は短時間でいろんなことを教えてやらなくてはならないので、失敗をさせている時間がないので学生達が可哀そうだ」と嘆いておられました。

公開講座をのぞいたとき鑄金の先生が次のような話をしておられました。

私は卒業制作で「学校でなければ挑戦できないから」というので大物に挑んでいる高短の女学生の助っ人に来ている彼女の恋人らしい四年制大学の工芸専攻の学生を叱りつけました。「彼女の仕事に手を出しちゃ駄目だ。君は彼女を助けてるつもりだろうが彼女の学習・研究の邪魔をしてるだけなんだぞ…」と

金属工芸の先生方も時間が経つほどあれば私に何度も失敗をさせて私を金属工芸の技法の入り口ぐらいにまでは導いて下さったかも知れないと思ったりもしています。しかし、キーホルダーや指輪の失敗は、失敗した漆をサンドペーパーで削るようなことでは駄目であって、ゼロからの再出発になってしまうので、とてもそんなことは出来なかったのでしょうか。

経営学の先生の研究室の机の上にピシッと朱が書き込まれた学生の答案が積まれていました。

「えーっ。先生はいちいちこんなに丁寧に朱をいれておられるのですか」

「うん。○×△を付けただけでは学生に力がかからないからね」

経営学も学生は失敗をすることによってこそ身につけていくのですが、こちらは漆塗りと違って「駄目！やり直し！」と言っただけでは学生はどうしたらいいのか、動きがとれないでしょう。正答は教科書を見ればわかっても間違いの原因の指摘や正解への考え方の指針があつてこそ学生は力をつけてゆくのでしょう。

体育の先生は実技の授業展開だけでなく成績の評価も自己管理に任せておられました。

高短の先生方の多くは学ぶとは学生が自力で行うことだとの考えに徹しておられたように思います。

四年制の大学に移行しても、こうした考え方が持続することを祈りたい。

高岡短期大学に勤務して



第5代副学長 高橋一之

私は平成7年('95)5月から同9年('97)12月までおよそ3年間高岡短期大学に副学長として勤務させていただきました。このたびは4年制大学に昇格して富山大学芸術文化学部になられるとのことでまことにおめでとう

ございます。

高岡は私の生まれた大分県と意外に文化面でも親和性があり(大分は瀬戸内海を通して京都文化に近い)、在職中は野外劇「万葉夢幻譚」に前田利長役で出演したこと

平成7年(1995)

主なできごと

(2.10)学内情報ネットワークシステム TNC-NET(Takaoka National College NETWORK)が稼働。(3.20)平成6年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙げる。(4.1)専攻科(1年制、1専攻)が2年制、3専攻(産業造形専攻・産業デザイン専攻・地域ビジネス専攻)に再編改組されるとともに、学位授与機構が定める要件を満たす専攻科として認定される。(4.10)平成7年度入学式を挙げる。

など楽しい思い出も多いのですが以下大学について記せば次のようです。

1 4年制昇格問題

北日本新聞「副学長に就任されて4年制昇格問題にどのように取り組まれますか」

高橋副学長「現在は設置されたばかりの2年制専攻科の充実に取り組んでおりこれにより全体のレベルアップを図りたい」

以上が私のファイルに残されていたマスコミとの平成7年就任直後のインタビュー冒頭である。地元高岡市産業界の希望が強かったことを窺わせる質問であるが、答弁になってなくて冷や汗ものである。当時、この問題は文部省の意向などもあり解決が難しく答えにくかったと思う。

地元高岡市当局も4年制昇格問題には積極的に取り組まれていた。佐藤高岡市長と新年賀詞交換会で同席になったときなどはかなり詰め寄られて宮本学長に助けを頂いたりしたものである。

時代は変わり、国立大学の法人化と大学の統合再編という追い風に乗って、大学関係者の努力が実り4年制移行問題の実現となった。深甚なる敬意を表したい。課題は多いと思うが新学部へのさらなる発展を願うものである。

2 大学開放センター

大学は一般社会権力と離れて研究活動ができるよう自治が保障される反面、社会から孤立し社会の支持を失う虞がある。

高岡短期大学ではこの点に早くから思いをいたし大学開放センターを設置し地域社会に貢献するよう努めてきた。特に工芸関係の教官や学生が中心となつての展示会は工芸の町高岡ならではのものではあったと思う。思い出すのは北日本新聞社での卒展の会場で辛口の批評していたとき当の学生が後ろにいて素人なのに知ったかぶりして

いる自分に気づいた。恥ずかしくまた学生に申し訳なく思い、後で反省することしきりであった。最近坐禅会に参加しているが今なお人生の修行は遅々としてはかどらない。これからも人々に感謝し、謙虚な気持ちを大切に暮らしたいと思っている。

大学開放センターではセンター長を勤めさせていたが、社会との相互交流型のパートナーシップを築くのはなかなか困難であった。「現代の高等教育」…地域社会と大学の交流…に原稿執筆を依頼され「健筆を振るってください」と期待され、悪戦苦闘したものである。協力してくれた松田事業課長に感謝したい。

3 大連外国語学院への留学生派遣

日本地図は中部地方を中心に半径2000kmで描かれている。これを富山県中心に描けばユーラシア大陸は隣県のごとく身近になる。環日本海構想の出発点はこの中心の取り方にあると思う。富山県当局はこの構想をもとに県勢の発展を期していた。

このような背景の下、宮本学長は国際交流の一環としてまた語学教育の必要性から中国語コース学生の中国の大学への留学制度を導入すべく構想中であった(大連外国語学院からも日本人留学生の募集をすすめるため担当の先生が説明に来学されたりしていた)。

このようなことから私と中国語担当岡田助教授、会計課長が同大学をはじめ中国の留学生事情の視察に出張を命じられた。岡田先生の中国語は流暢そのものでタクシー料金を負けさせるほどであった(大連空港のタクシー料金は当時、話し合いで決まるというスタイル)。中国の大学の生活環境はいまいちの感があつたが百聞は一見に如かず中国文化の香り濃く宮本学長の決断により平成9年('97)留学制度の実現となり第一期生を送り出した。中国留学修了生の活躍と中国語コースの発展を祈りたい。

(注)役職は平成7～9年当時のものです。

回想

高岡短期大学が、この度4年制大学に衣替えされることになりましたことを、まずもって心からお祝い申し上げます。

記念誌編纂委員長から執筆依頼を受けました趣旨は、

元事務部長 木野光郎

「今まで表に出なかった本音、懐かしい思い出、辛かった話など…」ということであったことを前提に話を進めて参りたいと思いますので、読まれる方もそのつもりでお読み頂きたいと思います。

平成5年7月1日のことでした。私はこれまで勤務していた東北大学から、高岡短期大学事務部長として転勤を命ぜられた訳ですが、私は密かに「シメタ！少しはのんびり出来るかな？」と思ったのです。それは、これまでの勤務があまりにも忙しく、過酷なものだったからです。高岡短期大学については、「開学して未だ10年で、10月には開学記念式典が予定されているようだ」という程度の知識しか持ち合わせていなかったのです。着任前に事務引継ぎのため、高岡短期大学に伺った時のことです。前事務部長であった山崎さんは、「木野さんが後任として来てくれることになって良かった、良かった。宮本学長がお喜びになる」と盛んに嬉しそうに話すので、何事かと不思議に思えてなりません。良く良く話を聞いていくと、高岡短期大学では今、懸案事項をたくさん抱えていて、そのいずれもが「予算」に関係するというのです。そして、木野さんはこれまでの経験から予算関連の実務に強く、きっと懸案事項を解決してくれるであろうことから、宮本学長もお喜びになる、ということでした。

懸案事項を具体的に聞いていくうちに、楽が出来るなどと喜んでいてる場合ではないと思うようになりました。懸案事項のいくつかを列挙すれば①専攻科の修業年限を1年から2年に拡充し、学位授与機構を活用して4年制大学を卒業したと同等の学位が受けられるようにする②校舎の大幅な増築を行う③教育用コンピュータのレンタル料の予算化、などでありました。いずれの事項も予算的には困難を極めるであろうことは、過去の経験から明らかでした。そうは言っても、いまさら転勤の内定を取り消してもらえないわけでもなく、肩を落として一先ず仙台へ帰っていったのでした。

いよいよ着任して最初に待っていた仕事は、10周年記念事業の具体的な準備でした。しかしこれは既に大枠が決まっており、私の出番はほとんど無かったのです。それでは私は何もしなかったのかと言うとそういう訳でもないで、若干の事柄を記しておこうと思います。記念事業に関しては、平成5年刊の「高岡短期大学十年史」に詳細が記されておりますが、それにも出てこない程度の事柄ではありますが、当時、記念品の一つとして「テレホンカード」の配付が予定されておりました。私はあまり気が向かなかつたので、これを「紅白の饅頭」に変えてしまったのです。勿論関連する会議に諮った上での

ことですが、記念品としては立派な「朱肉入れ」があるので、あえてそれに加えてテレホンカードを作成することもあるまいと考えたのです。それよりも在学生全員に紅白の饅頭を配付して、学生と一緒に開学10周年を祝いたいと思ったのです。もう一つは売店で販売していた大学の絵葉書を増刷することでした。開学当時作成して売店で販売していた絵葉書も遂に在庫が無くなり、このままでは販売が出来なくなるというのです。しかしそれほど売れている訳でもないことから、絶版になってしまうということでした。なかなか良く出来ているし、完全に無くなってしまふのも寂しいと思ったのです。そこで、ある仕掛けをして増刷し、引き続き販売できるようにしたのです。

記念品と言えば、富山県知事からの記念品についても述べておきたいと思います。富山県庁から、高岡短期大学が10周年を迎えるに当たって、知事から何か記念品を差し上げたいと思うのが何が良いか、との非公式な打診があったのです。ある記念品を具体的に提案されたのですが、大学のある特定の専攻分野に係る品であったことから、変更して頂きました。そして最終的に頂戴したのは、高岡市在住の版画家佐竹清氏の作品で、万葉集で伴家持が詠んでいる次の歌をテーマにしたものです。

馬並(うまな)めて いざ打ち行かな
渋谷の 清き磯廻(いそみ)に
寄する波見に (3954)

作品は、大学の正面玄関に入って2階へ上がる階段の吹き抜けになった場所の壁に掲げて、大学に来られるお客様に大学の立地を説明するとともに、地域との連携を標榜する大学の開学精神の一つを説明するのに大いに役立ちました。

十年史の編纂にも随分意を払いました。着任して最初に、集中的に、かなりの時間を掛けて取り組んだのは、このことでした。どんどん原稿が寄せられて来る中、すべての原稿に目を通しました。高岡短期大学のことを何も知らない私が読んで理解できないのは、必ずしも良い原稿だとは言えないのではないかとこの考えからです。結局、随分修正して頂きました。勿論、原稿作成者には十分説明して、完全に納得してもらった上でのことは言うまでもありません。大変な作業でしたが、そのお陰で10年分の大学の歴史を短期間で理解することが出来たので

平成8年(1996)

主なできごと

(3.19)平成7年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成8年度入学式を挙行。(11.19)中国・大連外国語学院と友好協力関係に関する協定書を締結。(12.25)インターネットでホームページを開設し学内情報の発信を開始。

す。このことは、この後多くの懸案と取り組むのに大変役に立ちました。

さて、懸案であった専攻科の拡充(年限1年→2年、学位授与機構との連携)は、予想どおり大変な難問でした。まず、文部省の担当官に鋭明して理解してもらわねばなりません。当初、幾ら、どう説明しても納得してもらえません。担当官は、「トンネルの先に針の穴くらいの出口しか見えません」と言うのです。会計課長を伴って何度も何度も説明に行きました。行く度に難しい宿題が出されて帰ってくる有様です。ある日、文部省から帰って難しい宿題にどう答えればいいのか、半ば途方に暮れながら高岡市内を自転車に乗っていたところ、歩道に生じていたコンクリートの段差に前車輪を取られて転倒してしまいました。その際、額は血だらけになり、身体のうちこちにひどい痛みを感じました。あわてて宿舎の近くにある整骨院で診てもらいました。先生は、「当院でも治療は出来るが、あなたは多分西洋医学による治療をお望みでしょうから…」と言って、市内の某外科医院を紹介してくれました。早速その外科医院で診てもらうと、レントゲン写真を見ながら、「肋骨にヒビが入っているほか、左手親指の付け根が骨折している」と言うのです。胸には大きな包帯をぐるぐる巻きにされ、左手にはギブスをはめて三角巾で首からぶら下げられてしまいました。しかし文部省から出された宿題に答えなければなりません。数日して文部省に出向いたのですが、担当官は私の痛々しい姿を見て「どうしたのですか？」と言うので、どうしようかと思ったのですが「実は、文部省から出された宿題のことを考えながら自転車に乗っていて転倒したのです」と言ってしまいました。すると文部省の担当官は困った顔をしながら、「文部省に責任は無い」と盛んに弁明するのです。後になって、言わないでおけば良かったと反省しましたが、時すでに遅しです。

文部省からの宿題への対応は、事務部では私を中心になって行いましたが、各課の協力も受けたことは言うまでもありません。しかも各課は通常の仕事を処理しながらのことなので、大変な負担になったことと思います。私は、事務部全体が一丸となってこの課題に取り組む必要があると考え、ある日事務部全体の係長以上によるアフター・ファイヴの会合を持つことにしました。勿論、費用は各自負担によるものです。この日も文部省へ説明

に行き、会合には間に合うように帰る予定にしていました。しかし、列車の中で会計課長と今日も出された宿題に真剣に取り組んでいるうちに、高岡駅で停車したのに気付かずに金沢駅まで行ってしまい、慌てて引き返すというハプニングが起きてしまいました。私の提案で皆を集めておきながら、約束の時間に遅れてしまうことになり、平身低頭平謝りだったことは申すまでもありません。

その後紆余曲折がありましたが、文部省の理解がほぼ得られて、次に学位授与機構との協議が始まりました。機構との協議も大変厳しいものでしたが、教育の内容や教員の適格性に関する事柄が中心で、従って学長が実質的に対応されましたので、私は専ら連絡調整が主な仕事でした。

専攻科の拡充に当たって、文部省から出された宿題の一つに“入学志願者数を何名と予測してその根拠は如何”というのがありました。全国の公私立短期大学の関連学科・コースの情報をことごとく調べて、それぞれの進学予想などのデータをコン



自家栽培のスイカにご満悦の筆者

ピュータによる統計的処理を行い予測しました。苦勞のかがあって、後に実際の志願者数が私の予測したものと完全に一致した時には、我ながら感動しました。

このように苦勞をして誕生した現在の専攻科は、この度の4大化に伴って消滅してしまう訳ですが、無駄であったとは思っておりません。当時、地元の各方面から高岡短期大学の4大化の要望が強く、私は良く色々な会合に出る機会がありました。その度に私の基本的なスタンスとしては、「足腰を強くしておけばいつか必ずそのチャンスはやって来る」というものでした。そして、その後ほぼ10年間の、先生方を始め関係する多くの方々のたゆまぬ努力が、今日の4大化へと繋がって行ったのだ

平成9年(1997)

主なできごと

(2.22)第1回短期語学研修を大連外国語学院で実施(～3.19)(この後、毎年度実施)。(3月)専攻科棟の竣工。(3.19)平成8年度卒業証書授与式ならびに専攻科修士証書授与式を挙行。(4.8)平成9年度入学式を挙行。(11.5)ラハティ・ポリテクニクとの友好協力関係に関する協定書を締結。

と思います。そして難産だった専攻科は、足腰を強くするための環境として、その役割を立派に果たしたと思っています。私の肋骨と手首の痛みも、最近になってようやく癒えたような気がします。

次は、校舎の大幅な増築についてであります。これも大変な難題でした。文部省文教施設部の関係課へ何度も何度もお願いに行きました。しかし、開学して未だ10年でなぜそんなに建物が不足しているのか理解できない、ということでした。しかも各国立学校では未整備の建物が膨大な面積にのぼり、とても高岡短期大学にまわる予算は無いということです。結局、概算要求のヒアリングと言って、7月に文教施設部の幹部に最終的に説明する日の前日まで、担当者には納得されないまま当日を迎えました。その日、他の全国の国立大学ではほとんどが、1級建築士の資格を持つ施設部長が説明をしますが、私は恐る恐る説明会場に入り、幹部を前にしましたが、その時は腹を決めていました。学長を始め各学科から出されていた強い要望に背中を押されながら、説明を始めました。しかし、私にはある武器(?)がありました。かつて文部省に勤務していた時、全国の公共のスポーツ施設や学校の体育施設の一部を整備する仕事を、かなりの部分任されていました。整備計画の立案から大蔵省への予算要求の説明、予算の執行が主な仕事でした。その時の感覚がよみがえり、自分で言うのはおこがましいのですが“水を得た魚”のように、とうとうと鋭明を始めたのです。説明が進むうちに急転直下幹部の理解を得ることとなり、後日正式に予算が認められたのです。しかもヒアリングの際は、「全国の施設部長の誰よりも説明が上手く、大変良く理解できた」とのお褒めの言葉まで頂戴したのでした。増築が認められたのは、床面積にして約2000平方メートルです。当時、困難を極めた理由の一つに、4年制の国立大学には教員数・学生数・学問分野などによる整備の基準が定められていたことが関係していると思います。しかし、国立の短期大学は全国で2校だけであるため基準が定められておらず、「積み上げ方式」と言って教育・研究上必要な面積を個別に算出して積み上げていく方法が採られていました。そのために、必要かどうかの判断をするに当たっては、大変困難な事情があったのです。必要性を説明するための膨大な資料を作成するに当たっては、会計課のみならず各課の諸君に大変なご苦労をお掛けしたことにあらためてお礼申し上げます。

次は、教育用コンピュータのレンタル料の予算化についてであります。当時、教育用コンピュータは大学創設時に購入した機械で、かなり陳腐化していました。コンピュータというものは年々進化が著しく、レンタルをし

て一定年数経過の都度、最新の機械に更新するのが得策であることは常識となっていました。しかしそのことは、多くの国立大学や国立の研究機関のみならず全ての政府機関がレンタル料を必要としていたため、大蔵省は予算の肥大化を防ぐためにレンタル料の総量規制(個別の審査に加えて政府全体の総額でも厳しい審査を行って予算の増加を抑制すること)を実施していたのです。そのためにこの予算の確保には非常に厳しいものがありました。幸い、文部省の担当課や予算関係者の理解が得られて、レンタル料の予算化が実現しました。時あたかも簡便で性能の高いOSに加えて、各種アプリケーションソフトが世に出回り、国内が沸き立っていた時期でもあり、誠にタイムリーであったのです。



モチノキ(平成17年7月)

最後に、高岡短期大学の環境整備について若干ふれておきたいと思います。イタリア風建築様式を取り入れたと言われている瀟洒な校舎に加えて、緑地を多く確保したゆったりとした敷地が私は好きでした。ある時、国の景気浮揚策として大規模な公共工事の補正予算が組まれることを知った私は、大学の敷地の空き地という空き地に全て木を植えて、鬱蒼とした森を作ろうかと思ったことがあります。民間のある植木の専門家に相談すると、「この大学は地域に開かれた大学として、減多やたらに木を植えて外部から閉鎖的になるのはいけないのではないのか」と言われたのです。民間の人でさえ開かれた大学を目指して施設整備が行われていることを知っていたのに、そのことを理解しなかった自分が大層恥ずかしい思いをしたことがありました。結局、敷地の南西の角にある開放広場で、当初の施設計画で予定されながら予算の都合で実現していなかった場所に、大きなモチノキを1本植えることにしました。その後どうなったか、あれから約10年、今頃は枝葉も茂り夏の日差しの強い日には学生が日陰を求めて三々五々集まって語らっているでしょうか。また、大学には図書館前の中庭に大きなタブノキ(万葉集で詠まれたツマママはタブノキとも言われている)が1本あるのをご存知でしょうか。

磯(いそ)の上(うえ)の つままを見れば

根を延(は)へて 年(とし)深からし
神(かむ)さびにけり (4159)

このタブノキの大木から、開放センターと体育館の脇
を通して駐車場に抜ける小道の両側には、サザンカの生
垣とケヤキ並木があり、私にとってとても好きな道でし
た。この道は大学を開放する際、他の建物内を通り抜け
しなくても済むようにとの配慮から、地域住民のアクセ
ス道路として計画されたものと聞いております。

ところで、大学が立地する高岡の地は万葉のふるさと
としての風土と文化が、今も脈々と生きつづけておりま
す。私は大伴家持が詠んだ「かたかご(カタクリのこと)」
の花を何とかして育てたいと思い、大学の敷地の南西の
角で道路に沿って植えられている雑木林の片隅に、カタ
クリの球根を植えました。球根は高岡市役所から個人的
に購入したものです。

もののふの 八十(やそ)をとめらが
汲(く)み乱(まご)ふ(う)
寺井(てらい)の上の かたかごの花 (4143)



ツママ(平成17年5月)

毎年春になると、越中国の国庁の跡とされている勝興
寺の境内に咲き乱れるかたかごの花のようになれば良い
なと思いながら植えたのです。しかし春を待たずに転勤
することになってしまいました。平成7年12月1日のこ
とです。その後、このかたかごが定着したという話は聞
こえてきません。多分、根付かずに消えてしまったので
しょう。もう10年も前のことです。

私は転勤に伴って高岡の地を去るに当たっては、家持
が詠んだ次の歌と想いをダブらせていました。身のほど
知らずと言われても仕方ありませんが、立場も 高岡
在任年数も異なることを重々承知の上でのことです。

しなごかる 越(こし)に五箇年(いつとせ)
住み住みて

立ち別れまく 惜(お)しき宵(よい)かも (4250)

その後、私は岐阜大学を経て新潟大学において定年を
迎えました。定年退職後は、福島市で「晴耕雨読」の生
活をしています。文字通り、晴れの日には野菜を育て、
雨の日には読書三昧です。また、健康維持のために太極
拳の教室にも通っています。

近年、大学を取り巻く環境には益々厳しいものがあり
ますが、富山大学の新学部に移行した後も、「芸術文化
学部」というそのユニークさを生かして、富山大学の中
で存在感を示してほしいと願っています。「富山大学芸
術文化学部」の、そして「富山大学」の弥栄を祈りなが
ら筆を置くことにいたします。

引用；本文中の万葉歌は、高岡市万葉歴史館編集の「越中万葉
への誘い」(平成4年4月1日発行)から引用させて頂きました。

高短讃歌と単身赴任

「高岡短期大学十年史」という冊子は今も手もとにあ
る。題字は、宮本匡章学長の筆である。高岡短大(高短)
とのきっかけは、11年目の後半('94/1)に石井栄一先
生からであった。

単身赴任ならということ家族との折り合いがつき、
江村稔先生(東大教授)の推薦状を持って宮本学長にお会
いした(江村、宮本教授は共に会計学者)。その後、教授
会を経て最終的に文部大臣与謝野馨氏の辞命を受けた。

5年半の高短生活は、大伴家持の越中国府時代と同じ

元経営実務専攻教授 鶴田彦夫



期間になったが、学長の宮本先生は退職し嶺山先生と二
人の学長に仕えた。しかも、50名ほどの教官の一員とし
て過ごしたので、お金では買えない充実した期間であっ
た。教科目は、本科が「企業会計論」「税務会計論」、専
攻科は「税務会計特論」と「管理会計論」であった。

なお、会計学研究で専攻した私の研究室の学生は卒業
時は異なるが延べで、本科ゼミ生37人、専攻ゼミ生3人
であった。

高短は、誰一人私語する人もなく、質的に高い学生と

の知的交流は刺激があり、毎日が喜びであった。

校務として、平成8年度より平成10年度まで学生生活委員会の委員長を学長指名で受けたので、緊張して対処した。新入生合宿研修会・球技大会・創己祭・サークルリーダー研修会などの行事と奨学金希望者の選定会議などと結構、学生課から追い回された。しかし、新入生合宿やサークルリーダー研修の24時間行動で多くの教官および事務官のお世話になり知己を得た。また、学生生活委員会の延長で北陸地区の大学や全国の国立大学の「厚生補導研究会」に代表として参加したので、各大学の学生事情にくわしくなった。

社会的活動というより開かれた高短の一員としては、青年会議所や青色申告会での講演、商工会議所で簿記講師があったり、「藤子・Fワールド」の作品を基に街、人づくりをする「夢たかおか実行委員会」の初年度委員長役があった。これは市役所や市民、企業やマスコミをまき込んだ大掛りのものである。半年後の9月23日おとぎの森で「'99夢王国祭」が盛大に行われ、北日本テレビや富山テレビに放映、翌日の新聞にも載り一定の成果を得た。

本当に短い期間であったが、高短を中心によく動き回ったものである。飛行機があるとはいえ、東京で5回ずつ年に2度つまり10回出張の講義もあった。(富山大は、引き続いて今も集中授業をしている)。

旅行も富山ばかりではなく福井や石川にも金沢工大や金沢経理の先生のお陰で各地を出発した。北陸の神社や寺はほとんど制覇した。

スキーは、倉田先生や蠟山先生などと白馬を中心に各地へ出掛けた。テニスは、ゼミ生に立ち向いコンパの前に汗を流した。好きな映画も上映館の都合で富山市や金沢市に向った。まあ、これも単身赴任の身軽さである。

研究では、研究費予算で多くの雑誌や図書を購入し夢中で読んだ。先達の理論を勉強してから証拠集めと考察をして紀要や学外の雑誌に投稿した。宮本先生や蠟山先生からは、とき折り研究上の助言を得た。そのせいか、「日本産業が乗り越える三つの波」という論文が「実業の日本」('95/8)に掲載されたり、PHP 研究所からの「連結会計」('99/7)の図書では、日本橋丸善のベストセラーとなり日経ビジネス('99/8/9)に紹介されたりもした。

忙しさとヒマがバランスしているような5年半であったが、同僚の滝沢・森田の教授とは三人一緒の時、また二人だけで酒と魚を求め高岡近辺を彷徨した。論文査問委員会のとき「紀要」編集長の横田教授と話し合いがあっ

たのをきっかけにその後が進んだり、吉田・久保・立浪の各先生には何かと話をした記憶がある。普段は交流は少ないが、新入生合宿やサークルリーダー研修のさい話したのをきっかけに進んだ教官も多い。夢たかおか関係では、石橋・松嶋・北林・二代目委員長の垣内先生それに佐藤市長や市議の方々その他として、公認会計士の金田・浜田・広島、法人会の立浪、青色申告会の大野、商工会議所の村本・中島・川口、高岡税務署の3人(代)の署長と総務課長、三協アルミの金森、トナミ運輸の杉岡、北陸経研の酒井、ポリテクセンターの丹羽、瑞龍寺保存会の吉田彦夫(鶴と吉の一字違い)、富山新聞の深川・山本、北陸中日の大森、高校野球の川岸、評論家の松原、法科大の菅野・朴木、伏木の金子、末広の松田(敬称を省略した)と順不同であるが名前と顔が浮かんでくる。多くの人々に立ち合わせてもらったことを財産だと感じている。

さて、高短を含め国立大は平成16年4月「国立大学法人〇〇大学」として再スタートを切った。高短も富山大と統合する。誠に残念であるが政治や時代が求めたのであろう。

広く地域社会に対して開かれた特色ある高短であり、私の古里ゆえ、尚更、今後が心配である。三大学が統合した富山大学は、規模が大きく小回りが利かない恐れがある。

この5年半の富山県、そして住みよい高岡市は、地味で知名度の低い地域である。しかし、私には人に知られていないのを幸いにかけてコツコツとやって「自分たちだけでももっともっと豊かになってやるぜ。へっへっへ」と笑っているようなしたたかさを感じる。富山県民は名より実をとる堅実な人々である。

四季の変化も厳然たる事実ですばらしい。高短から二上山ラインの景観・コシノヒガンザクラの古城公園・県花であるチューリップのじゅうたん・かたかご(堅香子)の花の万葉歴史館や勝興寺・紅葉の弥陀ヶ原、さらに自慢の氷見線がある、あの雨晴海岸からの立山連峰の眺めと続く。ブリ・タラ・甘エビ・シロエビ・ホタルイカ・バイ貝・ベニズワイガニなどと銘酒の立山で飲むひととき、変化に富んだ自然と豊かな水を持つ富山県だと感ずる時である。

最後に覚えた富山弁をひとつ「鶴田先生の授業ちゃ、厳しいけ」、「なあん、厳しちゃんないけど、むずかして、聞いとっと、だやくなってくるやわ」。

(いま、松蔭大学経営文化学部教授)

思い出の中から

名誉教授 谷口義人

2004年3月に教育現場を離れて、私は自分の書籍・雑誌そして資料等の整理を始めましたが、今に至ってその作業が終わっていません。何故かと言えば、本棚や収納場所を作ってからなのです。

在職中毎日あくせくと動き回っていた生活は、本当に自分がなすべきものだったのだろうか、いま私はそれまでの生活を少し客観的に見られるようになってきました。次々と仕事に追われている限り、こうしたことを考える時間はなかなか見い出せなかったのです。教育現場から完全に切り離されたからこそ、完全に自由になり、完全に孤独になり得たからこそではないかと思います。高岡短期大学での教育実践という私の経験世界から専攻科産業造形学科について少し語ることにします。

平成7年に2年制の専攻科が宮本元学長のリーダーシップがあって設立されました。大事な産業造形学科のカリキュラムは前年に検討を行い、その後文部省とも打ち合わせた経緯から、教育目標に沿って系統的に組織された教育計画であり納得のゆくものでした。設立当初私は中村先生と、専攻科産業造形専攻をリードする重い役割を担うことになりました。もともと産業工芸学科は4専攻で出発したのですが、専攻科設立を期に金属・漆・木材三専攻は産業造形学科としてコース制になり、デザイン専攻は一つの学科として改編されました。産業造形学科は建物に例えるならば、一階建の本科産業工芸学科の母屋があって、その後二階部分に2年制の専攻科を増築したかたちですから、教師の意識は元の母屋の核に帰属し、二階部分は付加されたものとの認識ははたらく構図でした。当時、施設・設備の拡充に努力された宮本先生は私に造形学科各コースが、一体となって融合し教育効果・実績をあげて欲しいと励まされました。他方現場を担当する教師は、それまで担当している授業に、さらに専攻科の授業を担当することは負担増となること、施設が充実したもののそれには自ずから限界があって、定員オーバーの学生を受け入れることに難色を示したこと、施設の拡充が計られたとは言え、その配分には学生を受け入れた過去の実績数がひとつの目安となり、各専攻教師間に微妙な心理がはたらいたこと、さらに実習の授業において融合といっても、各専門の基礎実習を受けていない学生と受けている学生を同一の授業で指導する

ことは、教師にとって一つの授業の中で、二つの授業を展開するようなもので過分の負担になる等、現実認識には温度差が生まれました。そして指導教官制をとることから、教師間には授業担當時数のバラツキが大きくなり、その不満が残りました。こうした制度的立場は、現実的に対応し解消するしか方法はないと私は考えていました。ですから制度と担当科目の両面から調整を行いました。もとより抜本的な解決とはならず、さまざまな問題を抱え込むことになりました。

一方学生に目を向けますと、前年まで1年制の専攻科だったものが、2年制の専攻科に移行したのに伴い、他大学(主に放送大学講座)で規定の単位を取得し、文部省の面接を受け合格し申請しますと、学士の称号が授与されることになりました。この制度を活用するよう学生に何度も機会を設け指導しましたが、1期生は学士という称号よりも、純粹に自己の技術・資質を研く意向が強く、人数は覚えていませんが、学士称号取得者は少なかったと思います。しかし、2期生3期生になりますと、煩雑な制度にも理解が深まり次第に資格取得が定着して行きました。

このような状況のなかで、スムーズに実践に移せなかった物事が、多少なりとも理解されまると、徐々に教師が行動し始め学生も動き出し、それによって少し明かりが見えるようになりました。専攻科の揺籃期にもっとも大事な基盤づくりにかかわってその教育目標が、充分達成されたとは言いきれない私の反省があります。この後は、亡き蠟山元学長の本学・富山大学・富山医科薬科大学の統合をめざす新たな新大学構想が打ち出され、学内外で改革に向かって足並みがそろうこととなります。変革の波のうねりの中で、専攻科の培った実績がどれだけ評価を得たのか確かではありませんが、芸術文化学部へと転進・誕生したことは大変喜ばしいことです。

教師なら誰でも体験したことがあると思いますが、ある授業で学生の反応が至ってよく興味を持って理解されたかと思っていたものが、次年度同様な手法をとったにもかかわらず、反応は低調で興味を示さなかったケースがあります。教育の実践というのは、ある文脈で有効であったものが、別の文脈でも通用するとは限らない。ある立

場からは完璧と評価された実践が、別の立場では否定されることも少なくないのです。それを個々の学生に対応させますと更に複雑です。私の高岡短期大学での教育経験は、勉強もしましたが進路指導では挫折も味わい、難しいながらもやりがいがある仕事、一言でいえば「アポリ

ア」という言葉で言い表されるものだったように思います。それにしても、学生とは楽しい思い出が沢山あります。教師同志の友情にもめぐまれ、励まされ続けた自分であったと懐古しています。

学生と旧友と



理事・副学長 滝沢 浩

○ 高岡短大に赴任して、多くの新しい知人を得た。また、旧友の新側面を知る機会もあった。ここでは、旧友M君との新しい出会いについて述べたい。

平成8年度のことである。私は例によって、2年生の前期授業「経営情報システム」の講義時間に、進路活動での悩みを聞き、勝手なコメントを口にしていった。

中に2名、難問をメモで提出した学生が居た。全国ネットの女子アナウンサーに成るにはどうしたら良いか、芸能プロダクションに入りスターの付き人に成りたいのだが、という質問である。いずれも、私の体験や知識の範囲外であり、頭を抱えた。

ある旧友の顔が浮かび、2人に、東京へ日帰りで勉強に行くか、と問いかけた。行きたいとの返答を得て、東京のテレビ局勤務の友人に電話で聞いた。次の木曜日昼過ぎなら居るよ、という一言を頼りに、2人を連れて、東京まで往復した。

狭い執務室に導いた彼は、まず私に向かって、高校時代のことを覚えているか、と話し始めた。大学時代のこと、就職の際のこと、親の勧める大企業を断って、出来たての小企業を選んだこと、仕事が面白く、いつのまにか、成長産業となったことなど、である。

芸能プロダクション志望の学生に対しては、彼は次のように述べた。

「大都会に飛び込み、身も心もボロボロにされるのがおちだから、止めた方が良く、この先生は言うのだろうが、私の考えは違う。人生は長い、そのような無茶ができるのは若い間だ、どうしてもやりたいなら、とびこんで見たらよい。ただし、どうなっても、責任は全て自分で負う覚悟が必要だ」

もう1名のテレビ局勤務希望については、アナウンサー室長を呼び、経験を話して欲しい、と促した。約80名のアナウンサーのトップである室長は、こう言った。

「いま著名なアナウンサーは全て、なぜ私が入社できたの、と不思議に思っている。私もそうです。技術ではなく、その時期、その場、その面接官達に訴える何かを持っていたかどうかなのです」

言外に、このような世界を狙うのは勧められない、という流れであった。

しかし、友人の言葉は違った。

「挑戦したいならば、やりなさい、しかし、四年制大卒が受験の条件です」

高岡に戻り、二人は家族と相談し、芸能プロ勤務志望者は断念して、金融機関へ勤めた。

もう一人は、立命館大学へ編入し、条件を整えて、全国のテレビ局を受験したようだ。

その後、近況の連絡があった。

「思う存分努力をしてすっきりしました。今は全然異なった業界で元気に働いています」

この卒業生は、昨年暮れに、同期3人の夕食会に私を誘ってくれた。子供をご主人に預けて集まる人もいる。いずれも、私が卒業研究を指導する専攻以外の出身者である。

このようなふれあいを持てるのは、気質の良い学生が多い高岡短大に職を得たからだ、とつくづく幸せに思う。

○ 今年の正月二日、テレビで「踊る大捜査線：レインボーブリッジを封鎖せよ」を見た。終わりに制作者として、友人の名前が現れて驚いた。M君は今や社長となっていた。

数年前に、彼が日経新聞の“交友抄”に萩本欽一のことを書いた記事を読んだ。

「欽ちゃん、私はあなたの担当として、テレビの良い点、悪い点、あるべき姿、など多くを教わりました。欽ちゃんは私の大先生です。先生が最近、少し元気が無い様子が気になります。弟子に舞台を任せておかないで、

先生もまだまだ元気に登場して下さい」

政財界他に多くの交友がある彼が、敢えて欽ちゃんを取り上げたことをうれしく思った。

○ 学生と訪問したのはお台場ではなく旧社屋であっ

た。スタジオなどを案内し、帰りに土産の袋を3人分用意してあった。SMAPの写真入りTシャツや、関連グッズであった。私が買った分は、確か翌週の授業時に、ジャンケンで誰かに渡ったはずである。

尾崎秀男先生の体育観 —後継者の一人として—



保健管理センター所長 立浪 勝

保健管理センター所長として依頼された原稿であるが、保健管理センターの活動については別項目に詳しく紹介してあるので、この機会を利用して専門の体育科教育について書くことをお許し願いたい。

1 初代体育科教授尾崎秀男

犬や馬も走る、人間も走る

しかし、人間だけが

走るためのわざと

走るためのからだを

意図的につくりあげる

しかし、人間だけが

きまりをつくって走る

そして、そのことによって

人間の可能性を追求し

平等と友情とを確かめあい

人間が

人間の主人公であろうとすることに拍手しあう

(城丸章夫)

平成8年3月「鉄棒に魅せられて」と題した最終講義を最後に、尾崎秀男先生(以下尾崎先生)は41年に渡る体育教師としての仕事にピリオドを打った。

尾崎先生の体育観は、最後の勤務先となった高岡短大の授業目標に現れている。一言で言えば、城丸の詩のように、体練・教練と言われた軍隊式の体育に決別し、人類の貴重な財産としての文化として体育を捉えたことである。

2 尾崎の目標

尾崎先生は体育の授業を行うに当たって以下の目標を立てている。

- ・ 笛や号令による指示はしない(音楽を用いる)
- ・ 楽しいという気持ちを大切に(友人づくり)
- ・ いろいろな種目を体験して自分に合ったものを見つ

ける(個性を大切に)

- ・ 記録の大切さを学ぶ(動きは一瞬、記録は永遠)

本学を去るに当たり、尾崎先生は、後継者である私に目標の継承と体育科教育の発展を託された。そのために、計画をしっかり立てる・意見を堂々と正確に言う・同僚の理解を求める・行動で示す、以上4点の規範を残された。

3 その原点

「原点や経過を知らなければ”今”はわからない、だから歴史を調べる」は尾崎先生の口癖である。

尾崎先生は、昭和39年、当時鳴り物入りで教育界に導入された高等専門学校(以下高専)に富山県公立学校教員を退職して保健体育科の教官として赴任した。きわめて規制の多かった公立学校とは違い、高専は自由な裁量が許され、体育科教育の本格的な挑戦に取りかかった。

尾崎先生の立てた高専における教育目標は以下の通りである。

- 1 どんな時でも10km 走れる走力
- 2 スキーの素養を身につける、冬の野山を移動できる
- 3 海などで長く泳げる
- 4 キャンプ生活の経験(野外での協調)
- 5 クラブに所属する(仲間と共に)

速く走るだけなら馬には負ける、速く泳ぐだけなら魚に負ける、キャンプやスキーに類することは野生の動物には生きる素養である。人間が人間であるためには、悩み苦しき多様な可能性を育てながら生きることが加わらなくてはいけない。尾崎先生の5つの目標は、人間として生きる上で生活を豊かにするための「からだ育て」であった。

4 引き継がれる尾崎の体育観

本学では、これまでも本学の学生に合わせた、独自の体育授業を検討してきた。そして、2000年から「心地良い気分になりたくて、からだの緊張をほぐしたくて、そ

んな気持ちから行う運動も生活の中に根づいて欲しい」という願いから、1年次の必修科目体育Ⅰを「からだそだて」、体育Ⅱを「からだ気づき」と位置づけ、「体ほぐしの運動」にも共通する内容を随時導入している。また、2年次の選択科目スポーツ健康科学Ⅰ、Ⅱをスポーツコースと気づきコースに分け、自由にコースを選択できるようにしている。このカリキュラムには尾崎先生と共に創成期の高岡短大の体育科教育を担われた久湊尚子先生の創意工夫が活かされている。

本学体育においては下記の3つを主な目的としている。

①からだを育てる

人間の存在全体(骨格、筋肉、内臓、感覚系、免疫系、思考、欲求、感情などを含めた意味)を「(ひらがなで)からだ」と表す。心地良く生きる為に、“しなやかなからだ”を育てることを目指す。

②からだに気づく

毎日の「からだ」の変化を感じ取る方法を見につける。体調を整え、適切な運動量を知り、より深い自分自身に気づく。

③運動を楽しむ

からだが好きような運動の楽しみ方を身につける。

また、この3つの目的を果たすため、授業では以下のような工夫をしている。

・「からだ気づき」の実践

体育Ⅰ・Ⅱでは各一回ずつ「からだ気づき」の教材を取り入れた授業を行っている。またスポーツ健康科学においては気づきコースにおいて「からだ気づき」教材を中心とした授業を行っている。

・レベルに合わせた運動の工夫

球技などは興味や技能に大きな個人差がある。そのため経験の有無の影響を受けないビーチボールなどのニュースポーツを取り入れると同時に、誰もが楽し

めるようゲームのルールを工夫している。また、体力に応じ選択できるよう、ハードコースとソフトコースを設けることもある。

・学生の気づきを大切にしている。

「動きは一瞬・記録は残る」という考えから、毎時間終了後に全員が一行感想を書き、毎回教師がこれに目を通しコメントを書いている。

・仲間づくりの工夫

学科コースの枠を越えた6人から7人のグループを編成し、半年間はこのグループで活動する。グループ対抗戦なども行う。

・雰囲気づくりの工夫

授業中に学生の好む音楽を使用し、励ましや肯定的な言葉かけを心掛けている。

5 これから

2003年4月、久湊先生の後任として着任された澤聡美先生は体育科教育法が専門で、本学の体育科の理念とカリキュラムを活かし、発展させ、芸術文化学部に対応しい授業を作り上げようと研究に努めている。すでに「からだほぐし」「からだ気づき」論に基づく芸術系の学生の基礎教養としての体育科教育の指導計画を練り、授業の中で試みている。その実践の一部は、2004年度高岡短大研究紀要と富山大学教育実践センター研究紀要に報告している。

2005年10月、高岡短期大学は富山大学芸術文化学部に変わるが、高岡二上の地に蒔かれた尾崎先生の「文化としての体育」の芽は、後に続くものによって、今後も育ち続けることだろう。

執筆にあたり、尾崎秀男著の以下の資料を参考にしました。

- * 体育・スポーツ13年の記録 自家版 昭和51年
- * 体育・スポーツ8年の記録 自家版 昭和47年
- * 昭和54年教育資料 自家版 昭和55年

素敵な一期一会



元産業デザイン学科助手 久湊尚子

私は、平成2年度から14年度まで13年間体育科目の教員として勤務しました。その間たくさんの先生方や学生の皆さんと素敵な一期一会ができました。これは私の人生において貴重な宝物になっています。皆様への感謝の

気持ちを込め、いくつかの思い出をご紹介します。

体育の授業では、毎年春に大学の後ろにある万葉ゆかりの二上山でオリエンテーリングがありました。グルー

ブごとに地図を持ち、仲間の自己紹介を兼ねながら山道を歩いて城光寺球場へ向かうコースです。尾崎秀雄教授ご指導のもと、私は迷いそうになったグループをゴールにたどり着けるよう見守る役目でした。登っていく途中、二上山から眺める春の景色は本当にすばらしく、「富山県は素敵なおとこだなあ」と何度も感動しました。その後細い下り道に入ると、道なき道を進んでいくグループが出始める為、教員は先回りをしたり、追いかけて連れ戻したりと、学生達より3~4倍の距離を走りました。これを5クラス分繰り返すと、最後はもうくたくたです。さすがに「この授業はなんとすばらしく、なんとハードなのか」と驚きました。

そんな私も勤務13年目には学内外を熟知し、立浪勝教授ご指導のもと、独自のオリエンテーリングを企画しました。写真を頼りにたくさんのチェック地点を見つけてゴールするという新入生用高岡短大探検コースです。学生達にも興味を持って取り組んでもらえ、また、他教科の先生方にもお見せしたところ、わからない場所がいくつもあり驚いてもらえました。

公開講座では、平成8年度の講座「心地良いからだをつくろう」が印象に残っています。“からだって実はもっと心地良くなれる”と気づくと、“今のからだは心地悪いのはどうして”と？が生まれ、体も心も楽になりたくります。そんな体験を分かち合った受講生の皆さんと「からだからの癒し研究会」を創設し、大学を退職するまでの6年間様々な活動も行えました。

クラブ活動では、ダンス部、よさこい部とともに踊った楽しい日々が昨日のこのように蘇ります。学生達が作品やコンサートを作り上げていく過程で、葛藤や対立

など困難な問題を乗り越えていく様子は本当に人間的な成長を感じます。「全日本高校大学ダンスフェスティバル(神戸)」や「アーティストック・ムーブメント・in 富山(全国創作コンクール)」の舞台では、すばらしい内面の輝きを見せてくれました。また、「YOSAKOI ソーラン日本海」では、石川県の千里浜で真夏の照りつける太陽の下、焼けるような砂浜の上を300m 踊り歩くという、まさに限界への挑戦でした。「YOSAKOI とやま」では、たくさんの応援を頂きながら一致団結エネルギーを爆発させました。数々の賞まで頂き、嬉しさもひとしおでした。

私にとって、学生達と苦楽を共にした高岡短大での日々は本当に充実していました。この様な貴重な経験ができたのは、歴代学長をはじめ、体育科目の尾崎教授、立浪教授、総合基礎グループ、産業デザイン学科の諸先生方、関わって下さいました皆様のご指導のおかげと思っております。重ねて感謝申し上げます。

この二上キャンパスが高岡短大のすばらしい歴史を受け継ぎつつ、新しい大学としてさらに輝いていきますよう心より応援しています。



創己祭にてよさこい部と共に踊る

卒業生の回想

『高短のタッキー』

経営実務専攻 平成7年卒業
田村信子(旧姓 数間)

巷でタッキーといえばジャニーズの滝沢秀明クンのことを指すであろう。しかし高短こと、高岡短期大学においてタッキーといえば滝沢浩副学長に他ならない。私は滝沢ゼミ第1期卒業生として滝沢教授の魅力について語りたいと思う。以下、大変失礼ながら親しみを込めて

“タッキー”と呼ばせていただきたい。

タッキーは東京大学卒、野村総合研究所出身という、私から見ると今までお目にかかったことがないような超エリートである。しかし高速道路のインターチェンジをバックして降りてしまうぐらいその行動には驚かされることが多い。当時タッキーはご自身の経験を踏まえ、経営とは、企業とは、戦略とは…などと熱心に語っていらっしゃったが、私はといえば“馬の耳に念仏”状態であった。タッキーの官舎で皆と集まり、高い日本酒を全部開けてしまい、タッキーを真っ青にさせたりしていた。そんなことのほうが楽しかったのである。

実はこの原稿の依頼を受け「ハイハイ」と二つ返事で

引き受けたもののすっかり失念していた。そのときのタッキーの口調は非常に厳しいものであった。あたりまえだ。甘やかすだけでなく、厳しいときは厳しい。これがタッキーだ。

「もっとタッキーの話を聞いておけば良かった」と後悔することもある。しかしタッキーを思い出して“前を向いていこう”と思う。幾つになっても勉強はできる。

回想

木材工芸専攻 平成8年卒業
柳本久美子(旧姓 頭川)

『タビの人』という言葉。県外・他の土地から来ている人、という方言だ。高校まではその言葉の存在すら感じることはなかったが、短大で出会った友人・先輩・先生方は高岡しか知らなかった私の中の日本地図を小さくする程、各地から来ているタビの人達だった。

在学中、作品を作りその考えを話し合い、そして彼らの故郷を起点に各地を訪ねて行くうちに私の中で日本は狭くなっていき、自分のやりたい事ではなく出来そうなことを目標にしていた私の考えは広がっていった。

私の選んだ福岡県でのオーダー車いすの製作という仕事は、作業だけでなく障害のことや法律などを学び、たった一人の為の物作りと使いやすさや美しさ、耐久性と価格のバランスについて考え続けた八年間だった。

退職した今、子供を持つことで気がついた新しい視点を生かし、次は何を作ろうどこへ行こうかと楽しく考えている自分がある。今の時間、生活を常に通過点と考えるようになった、入学前とは違う自分の姿。今、富山に戻ったら私も『タビの人』と呼ばれるのだろうか。

略歴 昭和50年11月17日 富山県高岡市生まれ、富山県立高岡工芸高校卒業 平成8年3月 高岡短期大学卒業(木材工芸専攻)9期生、同年福岡県にて働きさく工房入社 16年3月退社、現在専業主婦一児の母



高短のこと

産業デザイン専攻 平成8年卒業
田中英興

高短に入学した日からすでに十年以上経過した。毎朝満員電車で揺られ意識を朦朧とさせながらも時々学生の頃を思い出す。不思議と辛かった課題や嫌だったことが何ひとつ思い浮かばない。二上さんとの会話も。ただ、あんなになりたくて仕方なかった「都会のデザイナー」となった今の自分よりはるかに贅沢な「時間」を過ごしたように思う。

高短で僕はいろんな“初めて”を経験した。「裸婦デッサン」「長髪の反骨精神むき出しの教官」「人前でプレゼン」「一人暮らし」「締め切り」「スプレーで車を全塗装」「3日連続徹夜」「泥酔」「畑で野菜&スイカ泥棒」「砂浜で野宿」「タテヤマ」「ラルレロ」。ろくでもないことばかり。とても楽しかった。講義は嫌いだったが欠かさず学校には毎日通った。

みんなとつまらない深夜のテレビ番組の話をして模型を削って、夜は飲めないお酒を山ほど飲んで。成人式も出ないでバテを削った。不衛生と不摂生がたりたり、皮膚がプルプルにただれた。

何日も放置されたカップ麺の食べ残しの横で髪を切る人。その横で何食わない顔して地べたで寝ている女の子、お菓子を食べて、楽器を吹く人。いつもジャンプだけは欠かさない子。異常な空間が不思議と心地よい教室。今思えばどんな状況でも体調を崩さない免疫力と納期のためには2~3日は寝なくても平気な体質はここで身についたようだ。あの頃は毎朝ネクタイを締めて満員電車で立って寝るという特技を身につけるとは考えもしなかった。

産デのみんなと過ごした2年間で得たものは不思議と手放せないでいる。少ないが大事な友達と「処分に困りトラウマになった先輩のサニトラ」「羨ましくてこっそり買ったモンキー」。「うちの奥さん」。他にもいっぱいいろいろなものを貰った。

高短と呼べる帰る場所がひとつ減るのは少々寂しいが、不思議と今でもあの時のままでみんなが普通に教室にいるような、そんな気がする。



回想

専攻科 産業造形専攻
平成10年修了
田村尚子

高岡短大に本科で入学した時は正直、嫁入り前の腰掛のつもりという簡単な選択だったのを申し訳なく思いますが、卒業してからというもの机上の生活から離れた事の悔いが強く、再度専攻科で入学し1度世間に出た私にとって如何に高岡短大の先生方が国内外で活躍されておられて、学内の設備、図書館が充実しているかしみじみ分かったものですから専攻科では社会人を経験した私には長く感じられた90分授業も必死にノートを取って、学士号修得の傍ら、制作に励みました。クラスが少数数の為、先生方との交流も深く、先生自らが砂肝や釣ったばかりの魚を焼かれたり、蕎麦を打って下さったことは楽しい思い出となっております。その時に先生方が話された言葉の幾つかが未だに私の中で深く考え続けるものとなっております。

高岡育ちの私には、高岡短大という名前が無くなるのは自分の拠り所をまた一つ失ったようで寂しい限りですが、再編統合によって他大学には無いものが生まれるだろうか考えたり、社会に大きく貢献する方が生まれるのかもしれないという期待があります。本科の同期には

伝統工芸で金工と漆芸で活躍している作家が居り、私は彼らには到底及ばなく恥ずかしい限りですが何とかこの世界で頑張って高岡短大の先生方に恩返しをしたいと思っております。どうぞ富山大学となっても今後ともご叱咤下さい。どうかよろしくお願い致します。

思い出を書き始めると本当にきりがありません。もうあれから約10年も経つのかと思うと時の流れの速さに驚きます。

色々な事が公私共にあり、今もまだ必死に日々を送っております。40代を迎えるのはあっという間です。

略歴 平成4年3月 高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻卒業 10年3月 高岡短期大学専攻科産業造形専攻修了 11年3月 東京藝術大学大学院美術研究科彫金専攻修士課程修了、同上大学院 サロン・ド・ブランタン賞受賞、公募文芸作品、「太宰治賞1999」(筑摩書房)に「涙雨」で入選、筑摩書房 15年5月 ・日本伝統工芸展入選 打ち出し「あげは金具」
現在 ・銀座 AC ギャラリー・彫金教室主宰・工房 "METAL-HEARTS" 代表





三十代の学生生活

情報処理専攻 平成9年卒業
寺井義則

高校を卒業後、地元の地方公務員として勤務して10年目のある日、高岡短期大学へ行ってみたいかという話が舞い込んできました。就職してからは「高校時代もっと勉強しとけばよかった」とか「大学へ行って好きなことをやってみたかった」という思いがありましたので、二つ返事をお願いし、社会人特別選抜ということで入学させていただきました。

入学当時はすでに結婚もしていましたが、産業情報学科の120名余りのなかで男性がたった4名という有様に戸惑ったことや、10年ぶりの英語の授業で四苦八苦したこと、動くはずのプログラムがどうしても動かず数日間考えこんだことなどが思い出されます。また、一年生の途中で子供が生まれ、学生生活と子育てというなかなか経験できないようなことにもなりましたが、今となっては楽しい思い出です。

考えてみますと高校を卒業してそのまま大学に入っていたなら、たぶん目的意識もなくルーズに4年間を終えていたことと思いますが、社会人を経験したからこそ、また2年間という期間限定だったからこそ、時間を惜し

んでありとあらゆることに打ち込むことができたのだと思います。この2年間は自分の人生の中でも非常に密度の濃い、忘れることのできない貴重な2年間となっています。

最後に、送り出してくださいました職場の皆さん、支えてくれた家族、そして在学中お世話になりました先生方、子持ちオヤジにも仲良くしていただきました学生の皆さんに感謝するとともに、高岡短期大学が再編後も地域に根をおろして、益々発展されますよう祈念いたします。

略歴 昭和41年6月13日 誕生 60年4月 高岡市水道局に就職
平成7年4月 国立高岡短期大学産業情報科情報処理専攻に入学
9年3月 国立高岡短期大学産業情報科情報処理専攻卒業 9年4月 高岡市水道局に戻り水道施設の設計、監督業務に従事

回想

専攻科 産業デザイン専攻 平成9年修了
谷澤 悦

専攻科の愉快的な仲間達のコメント集。専攻科での思い出、印象など。

「皆で徹夜した卒業制作も良い思い出で、とても楽しい時間でした。」

「自ら学ぼうとすれば、時間も環境も十分にあり、もっと色々なことを学べたかもしれません。」

「卒業してから、後輩達の『課題』の様子を新聞などで目にするがありますが、当時は苦勞した『課題』なのに、またやってみたくなったりします。」

「喫茶店がもう無いと聞いて、残念です。焼肉ピラフ、美味しかったのに…。」

「先生によく言われた『無い知恵しほって、ちゃんと考えろよ』という言葉が今も時々頭に浮かび、励まされます。」

「思いがけず頂いた2年間で視野が広がりました。」

「誰よりも提出物の提出が遅かった私が、今こうしてデザイナーとして働いているのは、やはり4年間学んだことが活かされているのだと思います。」

「初の2年制の専攻科で、とりあえずあてがわれた教室が物置に限りなく近い部屋だったことには驚きましたが、意外と居心地が良かったです。」

「先の2年間で学んだ様々な項目から、自分のこれからの方向性を絞り込むには絶好の機会でした。」 以上



略歴 平成9年以降 富山県内生花店勤務フラワーデザイナー
15年 社団法人 JFTD フラワーデザイン競技会全国東京大会準優勝
17年 社団法人 JFTD フラワーデザイン競技会全国長野大会出場予定



回想

専攻科 地域ビジネス専攻
平成10年修了
坂下真理子(旧姓 新保)

私が高岡短期大学に入学したのは、もう今から十二年前になります。今でも充分綺麗な校舎ですが、はじめて大学を訪れたとき、「なんて綺麗な学校なのだろう」と感動したのを今でも覚えています。新しいのは言うまでもありませんでしたが、二上山のふもとにあり、緑にかこまれ、“自然を満喫できるキャンパス”が、私は大好きでした。

「中国語コースがあるんだ、おもしろそうだなあ」と思ったのが、私が高岡短期大学に進学するきっかけでした。何となく興味本位で始めた中国語でしたが、やってみると意外にも面白く、また少人数クラスという特性もあり、一人一人文法からヒアリング、発音までとても丁寧に教えていただけて、毎日楽しみながら勉強できたのが、その後の私の学生生活を大きく変えました。

短大を卒業する同じ年に、学士を取得できる専攻科ができることになり、私はさらに二年間、専攻科に進学し、中国語を勉強することにしました。当時専攻科で中国語を学ぶのは私一人であったため、マンツーマンのご指導をして頂き、時には本科生の講義にも参加させて頂いて、語学の基本を見直すことも出来ました。だんだん中国語の魅力に惹きつけられた私は、一年間休学し中国北京に留学することになりました。思いがけず高岡短期大学には五年間も在籍したことになりますが、いま思えばあつという間の学生生活でした。

設備や学習環境が十分に整えられており、とても恵まれた環境で生活できたことを、私は大変嬉しく思い、また高岡短期大学で勉強できたことを誇りに思っております。

略歴 平成5年4月 高岡短期大学産業情報学科ビジネス外語専攻中国コース入学 平成7年3月 卒業 平成7年4月 高岡短期大学専攻科地域ビジネス専攻入学 平成8年4月 中国北京中央民族学院留学（～平成9年3月まで1年間） 平成9年10月 富山地鉄サービス(株)入社航空部空港営業所にてグランドホステス(会社の都合により途中入社のため、在学中に入社となる) 平成10年3月 高岡短期大学専攻科地域ビジネス専攻卒業 平成16年9月退職 平成16年11月 結婚(現在専業主婦です)



回想

木材工芸専攻 平成10年卒業
開 裕美子

私が花の短大生だったのは、もう7年前のことです。とは言っても、私の短大生活は、華やかさとは程遠いものでした。

私は木材工芸を専攻していたのですが、本格的に実習が始まる1年の秋頃から、段々身なりに気を遣わなくなりました。お酒落をしたところで、機械で木を加工する際に出る大鋸屑で、全身真っ白になってしまうからです。それに、実習は鉋や鑿を使った手加工が中心となるので、頻繁に刃物を研ぎます。刃物を研ぐと、削れた刃の粉が爪の中まで入り込み、黒ずんでなかなか取れません。私はその頃、スーパーでレジのバイトをしていたので、バイトのある日は、正直刃物を研ぎたくありませんでした。

けれどもそのうちに、そんなことはまったく気にならなくなりました。道具は使えば使うほど手に馴染んでいくし、大鋸屑だって木の香りが心地好くて、嫌じゃなく

なりました。

それに、クラスの友達とも、朝から晩まで同じ実習室で苦楽を共にすることで、絆を深めることができました。学校以外でも、課題に行き詰ったときには近くのカラオケ屋でストレスを発散したり、製作が一段落したときには、岐阜の山奥まで遊びに行ったりもしました。

先生方も、私が教わるには勿体無いような素晴らしい方がたくさんいらっしゃいました。

華やかさはなかったにしろ、今思えば、私の短大生活はとても充実したものでした。社会へ出る前の貴重な2年間を、あのような恵まれた環境で過ごすことができ、本当に良かったと思います。

略歴 平成8年4月 高岡短期大学産業工芸学科木材工芸専攻入学 10年3月 卒業 10年4月 株式会社安田創作に入社工場スタッフとして造作家具の製作・取付を行う 12年3月 一身上の都合により退社 12年5月 アート・ケイに採用 絵画の額装、額・画材の販売を行う 14年2月 一身上の都合により退職 14年8月 有限会社荒井建築企画に入社工務・設計の仕事に携わる 15年9月 一身上の都合により退社 15年10月 株式会社安田創作に再入社設計スタッフとして造作家具の製図・打合せ等を行う 現在に至る



回想

経営実務専攻 平成10年卒業
梅木なつか(旧姓 平野)

「二上山の桜を目指したら良いよね。」

入学当初、友人とそう言いながら自転車で短大に向かったことを思い出します。当時私は魚津駅から電車に乗り、下車した高岡駅から自転車で通学していました。そして私には、通学途中で季節それぞれの印象的な風景がありました。

まず、春の桜。高岡古城公園や二上山に咲く桜の優しいピンク色は、心を和ませてくれました。慣れない道に不安と緊張を感じつつ、「短大は二上山の麓にあるから…」と冗談混じりに笑いながら友人と自転車を走らせた記憶は今でも鮮明に残っています。

次に夏の風鈴。高岡駅では、夏になると高岡銅器の風鈴が鳴り響いていました。その涼し気な音色に耳を傾けると、何とも言えない心地良さを感じました。

そして、秋の小矢部川沿いの細い道。澄みきった空と秋風の中赤とんぼが群れ飛び、私はその道を通るのが好きでした。

最後に冬のバス。冬は天候が悪いため、ほとんどバスを利用していました。ブザーやブレーキの音、揺れ具合などバス独特の雰囲気が懐かしく思い出されます。

このように、高岡の町並みや季節の移り変わりを楽しみながら通い学び過ごした二年間は、今でも心とむ思い出です。

略歴 平成10年3月 高岡短期大学地域ビジネス学科経営実務専攻卒業 4月 YKK㈱入社 14年6月 結婚 16年6月 出産し、現在育児休暇中 17年6月 仕事復帰の予定



回想

専攻科 産業造形専攻
平成11年修了
上田由紀

当時の私は、とにかく夢中で楽しく毎日を過ごしていました。

専攻していた漆工芸の勉強や先生方・友人との交流に対して、自分の欲求を満たすのに一生懸命。しかし、不器用で要領が悪い上に我が人一倍強かったので、考えても悩んでも解決・理解できず、壁にぶつかることが多くありました。

漆工芸の技術や表現、根本的にモノをつくるとはどういったことなのか、自分の持つものづくりの姿勢や意図。自分を支えてくれている人達との関係、そして自分の夢や目標。真剣に考えるほど、よく深みにはまっていました。

今になって自分の頭の中で、少し何か解決した・理解できた……という時が度々あります。それは過去を振り返った時であったり、当時と同じような経験体験をした時であったり。学生時代の私が、現在の私にいつも繋がっているのです。そんな時、高岡短大では本当に多くのことを学び経験を積み、たくさんのよい出会いに恵まれたということを実感します。

「漆かぶれで漆をやめた人はいない、慣れる」漆をさわり始めてすぐ、漆かぶれがひどくて真剣に学校を辞めようかと思っていた私に先生がさらりと一言。あの時、医者言葉よりも先生の言葉を信じてよかったなあと、つくづく思う漆歴10年目の今日この頃です。

略歴 昭和51年生まれ富山県入善町在住 平成9年 高岡短期大学産業工芸学科漆工芸専攻卒業(10期生) 11年 同大学専攻科産業造形専攻修了(3期生)、修了後、地元の入善町にもどり、自宅工房にて制作活動をはじめ。県内の企画展やグループ展に参加(「八尾坂の町アート」「高岡クラフトマンズギャザリング」など)公募展「日本伝統工芸・富山展」、「高岡クラフトコンペ」などに出演・入選 現在～制作活動と、海に見える素敵な喫茶店の店員との二足わらじ生活。「漆」の持つ、独特の色・艶・質感を生かした、使い手の生活に溶け込む「漆器」を目指し、制作展開中。



回想

金属工芸専攻
平成11年卒業
小野周平・奈加子
(旧姓 北川)

私たちは、この大学の産業造形学科金属工芸コースに入学し、卒業した二人です。

たくさんの愉快的仲間ができました。

同じく金属工芸コースに入学した人たちも、私たちと同じように金属初心者から始まって、少しずつ金属にのめり込んでいき、金属大好きになった仲間たちです。

私の記憶では、みんなと金属で遊んでいるうちにいつしかハマっていたという感じです。

金属がというよりも自分を表現したい、ものづくりが好きな熱い集まりでした。先生たちも、私たちが表現したいものを、先生一人一人が持っている知識で表現する方法を教えてくれる、ものづくりが好きな仲間でした。また、サークルやいろんな授業でも違う学科の仲間ができました。他の学科の学生といっても、表現の方法や素材が違うだけで、自分の想いを伝えたい、自分を表現したいという同じ自己アピールの集団であり、そんな愉快的仲間にもまれて、毎日楽しかったです。

自分がおもうままに考え、生きろ大学。

その自分を表現する場所、考える時間、その考え方や生き方に刺激を与えてくれる仲間との出会い、そんなものを与えてくれるこの大学は私たちににとって最高の場所であり、大きな存在でした。自分たちの表現は無限で、自分で考え、つくり出すものには、すごく自由なところでした。

今思えば、もっと自由にもっと大胆にもっと自分を表現すればよかった、それができる場所と環境と時間があつたなと思います。

この大学で人生決まっちゃった二人。

そんなふうに大学というものが私たちに与える影響は大きく、出会いは奇跡でありました。本当に大学で人生が決まるのかは分からないけど、この大学で出会った私たちも結婚したりなんかして、それに今でも、ものづくりが好きで、作品をつくったり、男のガレージや家の内部を溶接でつくったりと、あの時、あの出会い、つながってるみたいな感じです。

みんなつながっている。

そんなすばらしい日々もあつという間に終わり、仲間とも離ればなれで、なかなか会えない人もいるけど思い出はいっぱいです。

楽しかったな。

嗚呼、またみんなに会いたいな。

回想

漆工芸専攻 平成11年卒業
川田 勉

「どんより曇った薄暗い所やなあ。」それが試験のために初めて高岡に来た時の印象でした。そして「もう来ることもないやろう。」とも思っていました。でも予想に反して合格し、バタバタと一人暮らしの準備をして再び高岡へ。二度目の高岡は青く晴れ渡り、白く雪をかぶった立山まで見えました。

学生生活は自分が何をしたいのか、どんな物が作りたいのか、目標も無く、時間を無駄にしながら過ごしていました。授業をサボったり抜け出したりして先生に迷惑をかけ、叱られてました。楽しいこともたくさんあったけれども二年間は苦い思い出です。結局やりたいことを見つけることもできませんでした。

地元に戻っても漆を捨てることができずに勉強を続けていると段々やってみようと思えることが見付き、また一年間高岡短大で勉強する機会が持てました。今から思えばもっと真面目に勉強すればよかった、遠回りしたと思っています。

高岡の生活はたったの三年間だけど自分の中ではとても重要なものになりました。出会い、別れ、後悔、目標、大切なものがたくさんあります。今はなかなか行くことができないけれどまた遊びに行きたいです。

略歴 平成9年3月 高松工芸高校卒業 9年4月 高岡短大入学
産業工芸学科漆工芸専攻 11年3月 高岡短大卒業 12年4月
香川県漆芸研究所入所 15年3月 同研究所卒 15年4月～16年3月
高岡短大研究生 16年4月～ 香川県漆芸研究所 研究員



回想

情報処理専攻 平成11年卒業
勝間田瑠美(旧姓 吉田)

正直なところ、社会に出てから仕事のあまりの忙しさに、母校に思いを馳せることはあまりありませんでした。在学中はとても楽しい時間を過ごし、また、同級生と会うことも結構あったにもかかわらずです。

そんなある日、高岡短大が富山大学等と統合されるという新聞記事を目にした時、がく然として心中に複雑な思いがよぎりました。私は以前、富山大学を受験し失敗した思い出があります。統合のおかげで以前入れなかった大学に後から補欠合格したような、でもどこか嬉しくないような、そんな捉えどころのないモヤモヤした動揺を感じました。そしてそんなことを考えているうちに在学時の記憶が呼び覚まされてきました。校舎が綺麗だったこと、広々とした前景、先生方や授業風景など…。情報処理コースに在籍し、プログラミングに四苦八苦していたとき、簡単に問題を投げ出さない仲間達の姿勢に励まされたこと、いろいろな考えを出し合って課題を仕上げ深い満足感を味わったこと…。次から次へと浮かぶ思い出に、改めて「本当にいい学校だったな」とつくづく

感じました。その時、合併されることで母校の名前がなくなり思い出がかき消されるような気がした、それが一番のショックだったのだと気づいたのです。市町村合併のような形で、大学名も消えゆく時代なのかもしれない、残念なことには変わりはありません。ただ、高岡短大が大きく成長するのが今回の統合だと信じます。

私は現在、妊娠中。将来、子どもに母校の話をする時があるでしょうが、その時には子どもに胸を張って聞かせたいと思います。高岡短大という学校があったこと。私がそこでとても良い仲間と巡り会うことができ、有意義な学生生活を送れたということ。

略歴 平成9年4月 高岡短大産業情報学科情報処理コース入学
11年3月 同卒業、4月 ソフトメーカー(金沢市)入社 12年9月 退社 10月 中日新聞北陸本社入社



第4章 高岡短期大学の 発展と進化

平成12年4月、産業工芸学科、産業情報学科の2学科体制から、産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科の3学科に改組され、すでに3専攻になっていた専攻科との一貫教育が可能な体制が整えられた。短大2年、専攻科2年の教育から新しい人材が輩出することを確信した。

平成15年6月19日、蠟山昌一第3代学長が逝去された。この日、高岡では御印祭が行われており学生が多数参加して金屋町は活気にあふれていた。蠟山学長の死去は、私たちにとって大きな悲しみをともなった。学内には暗く重い空気が漂い、空白の時は流れた。私たちは、蠟山学長が病を押して卒業式で祝辞を述べられ学生一人ひとりと握手されたことや、入学式では体力の消耗も顧みず新入生へ歓迎の言葉を述べられた姿を忘れることができない。

また、県内3大学による再編統合の困難な時期に、大学人はこのように考え、このように行動するものだということを直に教えていただいたと考えている。私たちは、蠟山学長によって大きく成長したと自負している。

入学式お祝いの言葉

—平成15年度入学式学長式辞より再録—



第3代学長 (故) 蠟山昌一

皆さん、高岡短期大学への入学おめでとう。私は教職員を代表して、さらには、皆さん方の先輩に代わって、皆さんの入学を心から歓迎し、お祝いしたいと思います。

皆さんはとうに御存知でしょうが、この高岡短期大学は国立の短期大学の第1号として、1983年(昭和58年)10月に誕生しました。人間で言えば、今年で満20才。やっと成人になる若い組織です。私が言うと笑われるかもしれませんが、若いということは素晴らしいことです。皆さんは若さを存分に発揮し、若さの素晴らしさを実証してほしい、と思います。もちろん、若さを理由に何をしても良いということではありません。振り返って見て、自分が行ったことを恥ずかしいと思うようではいけません。後から誇りを持って振り返れる行動をとらなければならないのです。



54名の産業造形学科、26名の産業デザイン学科、128名の地域ビジネス学科、そして35名の専攻科の皆さん、皆さんの所属する学科は異なりますし、専攻も様々です。しかし、皆さんは共にこの高岡短期大学の第18期生として、また、専攻科の第16期生として、このキャンパスで過ごし、学ぶのです。仲間として、ぜひ仲良く助け合い、お互いに協力して、これからの2年間を過ごし、卒業した後で、自分の学生生活を自慢できる、誇りに思えるようにしていただきたいと思います。

私は5年前の4月、皆さんと同じように高岡短期大学に加わりました。そして、あと1年で学長としての任期が満了となります。皆さんよりも1年早く、私は高短を卒業することとなります。では「この5年を誇りをもって振り返れるか。学長、答えてください。」恐らくここに居られる多くの方々が少なくとも内心はそう思っておることでしょう。「その通り。」私の答えはYESです。

私がそう思っていることを証明するのは難しいことですが、傍証はいくつかあります。そのうちのひとつをお話ししましょう。

実を申しますと、私は昨秋以来、病人です。厚生労働省が認定する特定疾患のひとつである特発性肺線維症という病気にかかっていることがわかりました。原因不明の難病です。私は苦しみました。今なお、苦しんでいます。肉体的には、ご覧の通り、私は息絶え絶えです。酸素のお世話になりっぱなしです。私は、これまで身体のことなぞ心配したことがなかった。身体が頑健なことに比較優位が、競争力があると思っていました。その私が、10月、「入院して検査の上、適切な処置があれば、それを施しましょう。」と言われてしまいました。その結果、2ヶ月半の病院暮らしと半病人の生活を余儀なくされ、現在に至っています。私の病気は直る見込みはあまりありません。肉体的に苦しいだけでなく、気持ちも弱まりました。困りました。こういう事態に立ち至るとは全く予想もしていなかったからです。頭にきて女房に当たり散らしたことも、クヨクヨしたこともありました。しかし、よく考えてみれば、こうなった以上、出来ることは余り無いのです。選択範囲が狭いのです。ですから、出来ることのなかで一番やりたいこと、2番目にやりたいこと、という風にハッキリと順序付け、大切なことに集中してやっていくしかないのです。何を本当にやりたいのか、それを決めるには自分に自信がなければなりません。そして、自分の行った結果に誇りを持たねばなりません。そう考えると楽になりました。

今、私はうまく息が出来ず、皆さんの前で皆さんを歓迎する式辞を披露しております。休んでも良いのかもしれませんが、私は皆さんの前で高岡短期大学学長として6回目の、そして、定めにより最後の入学式辞を述べたい。それが今の私にとって一番大切なことだ、と考えて、ここに立っているのです。

皆さん、高岡短期大学へようこそ。

平成15年4月7日

高岡短期大学学長
蠟山昌一

回 想

「高岡短期大学の学長にならないかという話があるんだけど、君、どう思う?」「積極的には賛成しないけれど、あなたがやってみたいのなら、もちろん私も一緒に行くわ。」こうして高岡と私たちの御縁が始まりました。



1999年

昌一は学生時代、山岳部に所属していましたが、その頃熱中していたスキーを高岡で復活させました。スキー初心者に加え、冷え性で寒い場所が苦手だからと渋る私を、昌一は温泉や美味しい郷土料理で誘惑しながら、ゲレンデへ連れて行きました。短大の教職員の方々にもたびたびお付き合いいただきました。シーズンの締めくくりは、立山での山スキーでした。当日はいつにもまして早起きし、自分でサンドイッチやコーヒーを準備して出かけて行きました。ともすれば閉ざされがちになる冬を、積極的に楽しむことを教えてくれました。

毎年6月頃になると、主に県下の高校に高岡短大のことを説明する高校訪問が行われました。我が家ではそれを「営業」と呼びました。「今年もそろそろ『営業』が始まるよ。」朝出かけるとき、「『営業』がんばってね。」そして帰ってきたときには、「今日の『営業』どうだった?」「手応えがあったよ。」「それはよかった。」などという会話がありました。朝から夕方まで一日に複数校を回ることは大変だったでしょうが、入学志願者倍率に『営業』成果が表れると大変喜んでいました。そして、昼食をとる店などに、いくつかお気に入りがあったようで、

蠟山洋子(蠟山昌一前学長御令閨)

ささやかな楽しみもちゃんと作っていたのだなと感心しました。

講演会や学園祭などの行事には、私もたびたび参加させていただきました。「こんなにいっぱい買わせちゃったよ!」と、学生さんたちから買った食券を手に、困ったふりをした昌一と学園祭へ行くことは楽しみでした。あちらこちらの模擬店から「学長、食べていってください。」「次は私たちの店に来てください。」と声をかけられた時のうれしそうな顔を思い出します。



数ある写真の中で、珍しく「ピース」のポーズをとっています。

「今年は君も卒業式へ来てほしい。」2003年の卒業式は私にとっては初めての、昌一にとっては最後のものとなってしまいました。そのときの祝辞は卒業生の方々へのものだけではなく、自分自身への励まし、そして今となっては私への手紙のように思えます。

(前略)…「矜持」(自分を押さえ、つつしみつつ、自分を誇りに思うこと)の大切さは、私自身が病を得、今なお、苦しんでいるなかで学びました。…(中略)…人知れず頭に来たことも、クヨクヨしたことも、ありました。しかし、考えてみれば、こうなった以上、出来ることは余り無いのです。選択範囲が狭いのです。そう思うと楽になりました。出来ることなかで、一番やりたいこと、2番目にやりたいこと、という風に順序付け、やっていくしかないのです。何がやりたいか、それを決めるには自分に自信がなければなりません。そして、自分の行っ

平成10年(1998)

主なできごと

(3.20)平成9年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(3.31)学長 宮本匡章が任期満了により退任。(4.1)第3代学長に蠟山昌一(大阪大学教授)が発令される。(4.8)平成10年度入学式を挙行。

た結果に誇りが持てぬようでは、病に負けてしまいます。さらに、多くの方々の協力なしには、この病と共存できません。私はつつしみ深くならねばならないのです。ボロボロになった肺臓をいたわりつつ、十分でない呼吸力を可能な限り生かし、矜持をもって、私は私の新しい道を選択してゆきます。…(後略)

「洋子さん、トライ・アンド・エラー。またがんばればいいよ。」尻込みしてやらないより、やってみて、う

まくいかなかったら考える。一歩前進したら、またそこから新しい世界が広がるかもしれない。さまざまなことに積極的だった昌一の生き方は、これからも私のお手本です。

高岡短期大学の教職員・学生の皆様とすごした6年間の日々感謝申し上げます。そして私たちの「ふるさと・高岡」で、その暖かい雰囲気や育まれ、いつまでも受け継がれていくことを願っています。

若干の裏話



第6代副学長 行田 博

私は、平成10年正月から13年3月まで、副学長として高岡短大にお世話になった。私には専門らしい専門はないので、何事をするにつけても、学長はじめ関係教職員の皆さんに大変お世話になった。今般の記念誌発刊の機会に、若干の裏話をご紹介しますこととしたい。

富山大学との単位互換協定

平成10年4月に蠟山新学長が就任され、その2～3ヵ月後富山大学の経済学部長が蠟山学長を表敬訪問された。お帰りの際、学長が学部長を副学長室に案内された。絶好の機会と思って、学長の前で僭越ではあったが、「そう遠くない時期に高岡短大と富山大学は統合する可能性が大きい。現在も非常勤講師などで教官の交流があるが、将来のことを念頭に、たとえば単位互換の実施など一層の協力関係強化をお願いしたい。」と申し上げた。これが富山大学幹部との最初の接触で、その後同大学との関係を強化し、平成12年11月に人文学部との間で、また翌月には経済学部との間で単位互換協定を締結するに至った。人文学部の場合は同学部の事務部に高岡短大事務部出身者がおり、学部内部で大いに協力してくれた。両協定とも13年4月から実施された。

学科改組

平成11年4月下旬ごろ、蠟山学長から、「1年間いろいろ検討した結果、学科2学科、専攻科3専攻という異

常な状況を改め、専攻科の専攻に合わせた学科構成に改めたい。阪大時代の経験から、文部省との学科改組交渉の難しさは良く分かっている。2年計画で実現したいので、そのつもりで文部省との関係をよろしく。」という話があった。私は、「この内容なら2年掛ける必要はないでしょう。今年やりましょう。」と応えた。学長は、いい加減なことをいうなど言わんばかりのびっくり顔であった。

正直なところ、私はこの程度のことであれば、文部省に1回話しに行けば決着すると考えていた。見通しを誤った。担当の専門教育課長が4月に交代したばかりで、高岡短大のことは何も知らないということの影響の大きさを見誤ったのである。5月中旬に文部省に行ったが、話の最中に課長は頻繁に課長補佐や係長の席のほうを見ていた。1回では決着がつかなかった。

5月末ごろ再び文部省に行った。私の対文部省交渉の基本姿勢は、可能な限り、ギブ・アンド・テイクの姿勢を貫くことである。具体的なことはいえないが、この時も、私なりに考える文部省にとってのメリットを強調して学科改組の承認を求めた。課長は「そんなことがメリットになりますかねえ。」と首をひねっていたが、絶対に専門教育課にとってメリットになると強調し、最後には学科改組の承認を得て退出した。翌日、高岡短大で蠟山学長に、「予算要求事項であるから、それなりに形を整

平成11年(1999)

主なできごと

(3.17)平成10年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.5)平成11年度入学式を挙行。

えなければならぬが、事柄としては認められた」旨報告すると、学長は啞然として、一瞬言葉が出ない様子であった。時間的制約もあり、文部省との折衝は事務的には大変であったが、12年度予算で認められ、学科改組が実現した。

専攻科修了生の学位申請要件の緩和

平成12年、専攻科は設置以来5年となり、大学評価・学位授与機構の再審査を受けることになった。その機会に初めてまじめに専攻科関係について勉強した。その結果、「大学での16単位以上の単位取得」が学位申請の要件とされていることの不自然さに思い至った。学位授与機構に対して制度の改正検討を求める書類を書いて、再審査の打ち合わせのために機構に行く職員に託した。2～3ヶ月たっても何の連絡もなかった。

毎年、昭和43年文部省入省組はお盆の頃同期会を開いていた。この年も8月半ばに開催され、幹事の1人は大学評価・学位授与機構の高石副機構長であった。高石さんに本件検討状況を質したところ、「機構内部でこれが問題になったことはなく、議論したことはない。」という。そこで、縷々説明し、機構の存廃を賭けて自分自身の問題として検討すべきではないかと問題提起した。彼は一言も挟むことなく聞いていて、最後にただ一言「おもしろい問題提起だ。」と言い、ニヤッと笑って引き取った。

主なポイントは2つ。①2年制の短大専攻科は、学位

授与を前提として文部省が設置を認めたものである。②大学での単位取得を要求するのは、機構が「短大の教育は十分には信用できないので担保が必要」と考えているからであろう。しかし一方では、機構自身が学生の試験・審査を実施しており、すでに多数年にわたる経験を有している。しかもなお、大学の単位取得を要求し続けることは、機構自身に十分な審査能力がないと公言するに等しい。この状態が続くなら学位授与は一般の大学にまかせ、機構は廃止すべしという議論も起きるのではないか。

11月半ば、高石さんから電話が入った。「例の件は決着し、大学の単位取得を必要要件とはしないことになった。ただし、規則改正は官報に搭載する必要があり、官報搭載は手続き上1月になる見込み。」高石さんに問題提起してからわずかに3ヶ月。この間に、問題意識のなかった機構内をまとめ、文部省を説得し、答申取りまとめ作業中であった大学審議会の答申に制度改正の必要性を謳った1文を入れさせてしまった。鬼神ともいべきか。この制度改正は、高石副機構長の存在があって初めて実現したものである。

翌平成13年4月、私は国立明石工業高等専門学校長に転出した。明石高専には高岡短大と同じステータスの専攻科があり、この制度改正によって弾力的な対応ができるようになったと教官の話題になっていることを知り、素直に喜んだものである。

蠟山学長の導いた3大学再編統合、そして西頭学長の下の国立大学法人化



理事・副学長 水島和夫

1. はじめに

平成13年4月赴任した高岡短期大学は、新入生合宿研修で立山へ出向くことから始まり、大学に回ってくる二上神社の祭の獅子舞を蠟山学長とともに迎えたり、友誼会で教員たちと和倉温泉に行き痛飲したりと、今思えばきわめて牧歌的なものであった。しかし国立大学の構造

改革の波が押し寄せてからは、大学創設の頃と同様と思うが、たいへん厳しい激動の4年間であった。高岡短期大学が20年余の歴史を閉じる今、4年を超えて歴代最長の在任となる最後の副学長として、この4年間の大学再編統合と法人化への対応を、学内外がどのような状況の中、どのような手順を踏みながら進めてきたかを、記録に留める。

平成12年(2000)

主なできごと

(3.17)平成11年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙げる。(4.1)学科が、従前の2学科(産業工芸学科、産業情報学科)から、3学科(産業造形学科、産業デザイン学科、地域ビジネス学科)に再編改組。(4.5)平成12年度入学式を挙げる。

2. 激動の始まり

それは6月14日突然やってきた。蠟山学長が東京での国立大学長会議へ出席したところ、遠山文部科学大臣から国立大学の構造改革の方針『遠山プラン』が示されたのだ。国立大学の再編統合や法人化を含む内容は、多くの大学関係者に衝撃を与え、富山大学(以下、「富大」という。)では、たまたま時を合わせて入試ミス問題が公になり、一層の波紋が広がった。

高岡短大内では、『遠山プラン』を伝えたTVニュースの中で「短大の他大学との統合」が入っていたと大騒ぎになり、文科省に確認したところ、「単科大(医科大など)についての他大学との統合等」の読み間違えという事で、一応収まった。

しかし、後に、蠟山学長は、国立大学長会からの帰りの車中同席した富山医科薬科大学(以下「医薬大」という。)高久学長と、大学の将来を考えて統合の方向を真剣に検討する必要性について意見を交わしたと言う。さっそく7月12日の学内運営会議と教授会で、学長は、「高岡短期大学の将来をどう描くか」と題した資料を示して意見交換を行い、同18日には、来学した富大小澤学長に3学長の意見交換会を提案した。賛同を得、意見交換会は夏休み中の8月、本学で行われ、9月初めには、この経過について、3学長から文科省や中沖県知事に報告された。県のこの問題に関する関心も高く、11月には県内各界の有識者を集めて「国立大学の改革等に関する懇談会」(以下、「県有識者懇談会」という。)を発足させ、中間提言「国立大学の改革再編について(平成13年11月26日)」を3大学と文科省に示した。

本学では、9月6日、教職員集会で学長から説明があり、ついで同13日の教授会で、①伝統工芸の継承、よき社会人の育成等本学の果たしてきた使命の継続、②高岡での高等教育機関存続・拡大、③短期高等教育機関としての実績・ニーズに基づく準学士制度の活用、の3原則の下、再編統合の協議に入ることが了承され、「再編統合のためのプロジェクトチーム」編成の運びとなった。

3. 3大学統合協議

この秋から始まり、蠟山学長が全身全霊を傾けて取り組んだ3大学統合協議は、平坦ではなく、長く、また多くの曲折を経た、まさに命を懸けてのものとなってし

まった。

3大学の間では、基本的に、人文社会系では富大と本学、自然科学系では富大と医薬大との間で意見交換を進めていくこととなっていたが、富大では、6月以来もめていた入試ミス問題に関連して小澤学長が退任することとなり、10月の学長選で瀧澤学長が選ばれ、11月初めに新しい執行部体制が発足した。

意見交換会で本学から提案していた学部の大膽な再編を含む蠟山学長の統合構想、「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」に対して、新執行部から、「学部の再編にはふみこまない(いわば『ホッチキス型』)統合」の提案があった。中身のある統合を目指す蠟山学長が反論の書簡を出し、これに対し富大側からも書簡が来るといふ、富大新屋事務局長が「紙つぶての応酬」と呼んだやりとりが続き、両大学噛み合わないまま年を越してしまった。

平成14年の新年早々、2大学間の意見交換に加え、3大学による「県内国立大学の再編・統合に係る懇談会」が始まったが、医薬大側から、統合協議に入る前提としての「基本的確認事項」が提案され、新大学運営の基本的あり方など重要な内容に関わる確認事項をめぐっての調整は難航し、6回の会合を数えた後ようやく、3月16日、「再編・統合への協議開始についての合意書及び基本的確認事項」の調印式が行われた。

この間、県有識者懇談会は、その小委員会に3大学を招き、「各キャンパスを残し県民にとって魅力ある大学を」や、「本学を含む再編統合で特色ある大学に」などの要望を寄せ、教員養成機能についての関心にも大きなものがあつた。また、富大との間でも、再編統合構想全体の中での本学と教育学部との関係が焦点になっていた。

4月8日、3大学の懇談会で合意に基づく統合協議の進め方についての話し合いが行われ、正式の協議機関として各大学の執行部や学部長を集めた「新大学構想協議会」を発足させることとなった。本学では、同11日、教授会及び全学教職員集会を開いて状況の報告等を行った。

新大学構想協議会は4月22日の第1回から毎月2回程度開催され、9月の第7回からは、各大学の運営諮問会議委員と県関係者がオブザーバー参加することとなった。これらの協議会のほか夏休み時期には、3大学学長・副学長による非公式な話し合いや、富大教育学部との懇談

平成13年(2001)

主なできごと

(3.16)平成12年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.1)保健管理センターの設置。(4.5)平成13年度入学式を挙行。(8.16)高岡短期大学において、「第1回富山国立3大学長意見交換会(非公式)」を開催。(8.24)富山医科薬科大学において、「第2回富山国立3大学長意見交換会」を開催。(9.13)教授会において、3大学が協議に入ることを承認。(10.2)富山大学において、「第3回富山国立3大学長、副学長、事務局長意見交換会」を開催。

も行われた。また、8月30日には富大黒田講堂に3大学の教職員数百人を集めて3学長による「再編統合に関する説明会」が開催され、本学からは教職員の2/3が出席した。新大学像等について理路整然と説明する蠟山学長の口調は際立っていた。一方、協議の中で争点の一つとなっていた新大学の教養教育のあり方を検討する教養教育WGが8月から本学を会場として始まったが、3大学の溝は容易には埋まらなかった。

4. 蠟山学長の入院と統合協議の行方

10月16日蠟山学長が突然入院した。病名は間質性肺炎、肺の機能が大きく損なわれていく難病で、高岡短大のあらゆる面で先頭に立って大学を牽引してきた学長の思いがけない入院に全学は大きな衝撃を受けた。学長によれば病気の兆候は春過ぎ頃からあったようだが、上述の統合関係の用務に加え、5月からの富山・石川の50校を越える高校訪問、2回のオープンキャンパス、2ヶ月を要した教員の処分問題などが続き、また、国立大学の法人化が固まりその準備作業が始まって10月初めには学内に正式な法人化準備委員会を発足させていた。このような忙しさに加えて、蠟山学長は、金融庁関係の「日本型金融システムの行政と将来ビジョン懇話会」座長、金融審議会金融分科会長として8、9月は毎週のように上京していた。際立った体力と気力の持主であった蠟山学長にしかできぬ超人的な仕事ぶりであったが、これらの激務が病状に影響したのではないかと思う。

当初1ヶ月を予定していた入院は延び、退院したのは年末になってしまった。この間学長は以前と変わらぬ気力と頭脳で、頻繁に病床を訪れる我々学内関係者に、学長を欠いて行う新大学構想協議会への対応等種々細やかな指導をいただいた。また、高岡まで足を運んでいただいた瀧澤、高久の両学長と病床での3学長協議も行われた。統合問題に大きな関心を寄せている地元からの要望で、高岡市役所に佐藤市長をはじめ市、市議会、商工会議所などの関係者数十人を集めて11月22日行われた説明会や12月19日の全学教職員集会上に蠟山学長は病床から酸素ボンベ持参で出席して説明した。11月7日学内で突然倒れ、日ならずして帰らぬ人となって学内に第2の大き

な衝撃を与えた横山幸文教授の井波瑞泉寺での通夜にも学長は病床から出席された。

平成15年の新年賀詞交換会、復帰して挨拶に立った蠟山学長の姿に教職員一同安堵の胸をなでおろした。しかし、統合協議の方は、デッドロックにのりあげた状態にあった。教養教育WGは11月の第5回を限りに破綻していた。新大学構想協議会から学長、副学長等に人数を絞って11月下旬から動き出した新大学構想策定委員会も、暮れの御用納めの日を含め毎週協議を重ねたが進展はなかった。1月7日の第7回構想策定委員会から学長は酸素ボンベの入ったナップサックを背負って出席した。協議を前進させるため、学長は、新大学における人文社会系学部的大幅な再編や、準学士制の活用という本学の主張について、あきらめたわけではないがすぐに実施は求めないという譲歩を決断した。また、医薬大も「基本的確認事項」実現に関しての微妙な問題点について強くは言わなくなっていたが、主要な問題は、対立が埋まらない教養教育のあり方と、本学と教育学部とでどのように再編して新学部(芸術文化系学部)を作るかであった。この問題を解決するために教育学部と本学、さらに医薬大からも加わって芸術文化系学部WGを設け、2月まで4回の協議を持ったが、特に新学部の中身として重要であると考えられた音楽分野をめぐる問題で容易に結論は出ず、本学としては、別の組合せも視野に入れた選択肢も考えざるを得ないような状況であった。

事態が急に進展しだしたのは3月下旬からであった。3月に4回開かれた構想策定委員会のほか非公式の3学長による協議も行われた中で、教育学部の美術系教員と富大から提供される定員をもとに現高短と同規模の芸術文化系学部を作る方向が浮かび上がり、構想を詰めるための「芸術文化学部(仮称)タスクフォース」が、3学長と、本学教員4名、教育学部から学部長と美術教員3名により設けられた。また、教養教育については、当面基本的には各キャンパスで行うという妥協に至った。こうして第15回目となった4月22日の構想策定委員会で話し合いがまとまり、連休明けに再編統合合意の調印式が行われることになった。

そして翌23日から蠟山学長は休みをとり、28日から再

平成14年(2002)

主なできごと

(1.8)富山医科薬科大学において、富山県内国立大学の再編・統合に係る懇談会を開催。(3.20)平成13年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙げる。(3.26)富山医科薬科大学において、再編・統合への協議開始についての合意書及び基本的確認事項に調印。(4.5)平成14年度入学式を挙げる。(4.22)高岡短期大学において、第1回新大学構想協議会を開催。(8.30)富山大学において、3大学の教職員に対し、再編・統合に関する説明会を、3大学長がパネルディスカッション形式で開催。(10.1)平成14年度第1回法人化準備委員会を開催。(11.11)富山大学において、第9回新大学構想協議会を開催し、学部編成等について協議を行い、今後、構想策定委員会を開催し、学部、大学院、教養教育、管理運営について協議していくことになった。(11.20)富山医科薬科大学において、第1回構想策定委員会を開催。(12.19)第1回教職員集會を開催し、3大学統合に関し、経緯と今後の方向性について学長から説明。



入院となった。1月以來学長は常に小型酸素ボンベの入ったナップサックを背負い、数メートル歩くにも息が切れるという状態であった。学長官舎は3階にあり、帰宅で公用車を降りてから階段を上るのは、「毎日チョモランマ(エヴェレスト)へ登っているようなものだよ。」と言われた学長の言葉を忘れることはできない。このような中で蠟山学長は本学の将来を決した上述の統合協議(1月以降、構想策定委員会、芸術文化学部 WG その他学長が加わった話合は17回に及んでいる。)に主役を勤め、県有識者懇談会や教職員集会で報告するとともに、北陸国立大学長懇談会、教授会、運営諮問会議等の学務もこなした。3月20日の卒業式には本学を巣立つ全員に卒業・修了証書を手渡し、『矜持』について話した式辞は出席者すべての心に残るものであった。入学式は、車椅子で壇上に上がって勤めた。

5月1日朝、古屋事務部長、深津課長と共に主治医に面談し伺った病状は厳しいものであり、前回入院時のように病室で相談したり指示を仰いだりできるようなものではなかった。7日に予定されている統合調印式になんとしても出たいと言う学長の希望に、医師は付き添って行くから可能だと言ってくれたが、結局叶わなかった。

調印式の翌日、統合合意について、学長に代わって全学集会で教職員・学生に報告し、翌9日には2学長と共に上京して文部科学省に報告、さらに12日には、県有識者懇談会小委員会に報告した。学内では、特に、統合後に設置する芸術文化学部について教員懇談会で構想案を説明するとともに、新学部構築の準備作業を全学挙げて



取り組む体制として、3学科長、タスクフォースメンバー、関係教員による『芸術文化学部(仮称)設置準備委員会』を設置し、第1回を6月13日に行った。

5. 蠟山学長の逝去と大学の難局

蠟山学長の容態は日々深刻なものとなり、5月半ばからは肺炎を併発、集中治療室に入り面会もできない状況であった。そして、6月19日、金屋町の御印祭の夕、とうとう帰らぬ人となってしまった。多くの教職員もそうであったと思うが、学長、そして数ヶ月前には横山教授を失っての心の痛手は例え様もないものであった。23日、柳沢前金融担当大臣、中沖知事など県内外から駆けつけた人々を含む500人が参列した葬儀が終わり、大学正門前を通る霊柩車をお見送りしていた佐藤孝紀教授が路上で突然倒れた(幸い大事には至らなかった。)のを見た時には、まさに胸がつぶれる気がした。

しかし、心の痛手で呆然としているわけにはゆかない。学長事務取扱となり、新たな学長が着任した11月まで数ヶ月の繁忙と重圧は私にとって実に厳しいものであった。厳しさの中で何とか勤めをまっとうできたのは、今振り返れば、教職員の、大学の最大の難局に立ち向かう団結と協力があったからだと思う。

この時点で高岡短大が直面する主要な課題は次のようなものであった。①蠟山学長の大学葬、②新たな学長候補者の確保、③新大学創設準備のための大学間協議、④芸術文化学部の構想固めとその要員の確保、⑤国立大学法人化への準備作業、さらに、⑥この年から始まった文

平成15年(2003)

主なできごと

(1.23)富山大学において、第1回芸術文化学部WGを開催。(3.5)米国ウエスタンオレゴン大学との友好協力関係に関する協定書を締結。(3.20)平成14年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.7)平成15年度入学式を挙行。(4.8)高岡短期大学において、第1回芸術文化学部(仮称)タスクフォースを開催。(5.2)臨時教授会で3大学の再編・統合に合意することを機関決定した。(5.7)名鉄トヤマホテルにおいて、第10回新大学構想協議会を開催し、3大学が再編・統合に合意することを了承し、併せて調印式を行った。(5.30)富山大学において、第1回新大学創設準備にかかる懇談会を開催し、今後のスケジュール等について協議。(6.13)新学部の設置に向け、高岡短期大学内に芸術文化学部設置準備委員会(仮称)を設置し第1回目を開催。(6.19)蠟山昌一学長の逝去に伴い、水島和夫副学長が学長事務取扱となる(～H15.10.31)。(7.1)富山大学内に創設準備事務室を設置。(7.8)富山大学において、第1回新大学創設準備協議会を開催。(8.20)第1回英語海外研修をウエスタンオレゴン大学で実施(～9.14)(この後、毎年度実施)。(10.21)富山医療薬科大学において、第1回創設準備推進委員会を開催。(11.1)第4代学長に西頭徳三(愛媛大学副学長)が発令される。

部科学省「特色ある教育支援プログラム」への応募作業もあった。

①については、学葬委員会を設け、式の進行・内容、案内状送付先の検討等の準備作業を連夜のように行った。7月24日、本学で行われた大学葬では、文部科学省から工藤文部科学審議官以下3人、知事、市長以下県・高岡市関係者、産業界関係者、県内外の多数の大学関係者、教職員OBなどで講堂が埋まり、会場に入りきれなかった参列者のためにエントランスホールに中継ディスプレイも用意した。③については、調印式以降3大学執行部による懇談会を3回行った後、「新大学創設準備協議会」を設ける体制がまとまり、7月8日、第1回が開かれるとともに、その下に各大学から人を出しあって準備事務を行う新大学創設準備事務局や新大学の管理運営、事務組織、機構センターのあり方等を協議する多数の部会が設けられ、それぞれ検討作業が始まった。他大学に比べマンパワーの乏しい本学は、委員の選出が容易ではなく、多くの教員に負担をかけることとなっている。④については、新学部には設ける五つのコースの内容等話し合うWGを設け各WGでの検討が始まった。また7月末から8月にかけて3回の設置準備委員会を開くとともに、8月12日には教職員に芸術文化学部の骨子案について説明する懇談会を開いた。さらに10月からは、新学部は学外から新たに迎える教授陣を募るための作業等が始まり、毎週会合を開かねばならぬ状況となった。⑤については、国立大学法人法が10月から施行となり、いよいよ新法人の中期目標・中期計画を作成する作業が始まって、この10月、2回の法人化準備委員会を開いた。⑥のいわゆる「教育COE」（翌年からは「特色GP」の通称となった。）については、蠟山学長葬儀の翌24日から関係教員等による検討委員会を設けて何回も検討を重ね、取組名称「融合と地域連携に基づく実践基礎教育の展開」で8月1日応募書類を提出した。1次関門を突破して同25日の東京でのヒヤリングまで進んだが、残念ながら採択には至らなかった。

さて、一番の難問は②の学長候補者探しであった。学科長、学長補佐等による学長候補者選考委員会を設けて7月初めから検討作業を始めた。学外から適任者をさがすこととし、委員会の検討で浮かぶ複数の候補者について、私と委員1名が出向いて本学の状況を説明して可能

性をあたっていった。近隣県や東京、大阪など何回も足を運んだが、どの大学も抱える国立大学法人化への対応問題に加えて、本学は再編統合への対応と4年制学部の新たな立上げという課題を持ち、学長任期も統合までのわずか2年間という条件もあって、いずれの候補者からも積極的な返事はいただけなかった。9月に入っても候補者が決まらず困りぬいていた時、愛媛大学に教養教育の改善等に手腕を発揮された副学長がおられる、しかも富山県出身、という情報を得た。さっそく松山に飛び、お会いして本学の状況を説明のお願いしたところ御快諾をいただくことができた。現学長の西頭先生である。9月25日の学長選挙、臨時教授会で学内手続きを済ませ、翌日委員会メンバー達と酌み交わした酒は実にうまかった。11月5日の西頭学長着任式までは千秋の思いであった。

6. 西頭学長の下での統合準備と国立大学法人化

新学長の下、学外から募る教官の選考など新学部設置に向けた準備作業や、国立大学法人化へ向けての準備作業が加速し、平成16年を迎えた。

前年秋以降統合再編準備への3大学間の協議は各部会レベルの話合いが頻繁に行われており、学長・副学長等による協議は少なくなっていた。暮れ近くになって、実は医薬大高久学長が入院しているということを知った。しかも病名は、なんと「間質性肺炎」との由。さっそく医薬大病院にお見舞いに何うと、重症ではなく近く退院できるとのお話で、思ったよりお元気であった。一時的に退院されたが、3月まで入院は続き、病気が病気だけにたいへん心配したが、卒業式も無事勤められ、3月末の学長任期満了とともに退官されて、現在は快癒してお元気であるとのことである。

3月26日、第2回新大学創設準備協議会が行われ、4月からの国立大学法人化に伴う各大学の執行部体制の改変、特に医薬大については高久学長から交代する小野新学長の新体制に基づく統合協議メンバーの変更について検討され、新たな構成員による新大学創設準備協議会が4月9日開催された。本学でも滝沢理事及び古屋事務部長から代わった棚山新部長が委員に加わった。

以後、新大学創設の準備作業は、協議会からメンバーをしばった新大学創設準備推進委員会や、管理・運営、入試、教養教育など各種の部会で具体的な検討が精力的

平成16年(2004)

主なできごと

(3.19)平成15年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙る。(4.1)国立大学法人法の施行によって、国立大学法人高岡短期大学となる。(4.5)平成16年度入学式を挙る。(6.30)文部科学省へ富山大学芸術文化学部設置計画書を提出。(11.10)衆議院調査局文部科学調査室による実情調査が富山大学で実施される。(11.30)大学設置・学校法人審議会における審議で新大学の設置を可とする回答を得る。

に行われている。新大学の名称は検討の結果、6月、「富山大学」と決定された。また、本学の位置する二上地区の名称も、「高岡(芸術文化系)キャンパス」に決まった。本学の「大学開放センター」は、機構・センター部会で議論の末、新大学地域連携推進機構の「地域づくり・文化支援センター」となることに落ち着いた。

4月からの国立大学法人化へ向けての準備は、法人諸規則の制定、特に新たな枠組みとなる会計関係や、就業規則・労使協定を含む人事関係での膨大な起草作業、学外者が加わる法人役員、経営協議会や教育研究評議会委員等の人選、安全衛生管理体制の整備などに関し繁多を極める事務作業、毎週のように開く法人化準備委員会、そして2回の全学教職員への説明会を要した。

いよいよ国立大学法人高岡短期大学が発足した4月1日は、新役員等への辞令交付、法人諸規則の制定等の重要事項を諮る第1回の役員会と教育研究評議会を開き、翌日は、午前中の入学式リハーサルの後、第1回経営協議会、そして第1回学長選考会議という慌ただしさであった。

一方、以上のような新大学への準備や法人化への対応作業と並行して、今度こそは教育COE(特色GP)を獲得しようと、年明け早々から対策委員会を始動させて検討を進めた。西頭学長の指導を得ながら構想・内容・特色に知恵をしばった「学生作品で学内を埋め尽くそうプロジェクト」の取組を4月上旬取りまとめて応募し、7月のヒヤリングも突破して採択に至った。さらに、この年から始まった現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)にも、西頭学長が命名した『「炉端談義」方式による地場産業活性化授業』の取組により地域活性化へ貢献を深めようと関係教員による委員会で検討を重ねて、7月応募し、これも10月初め採択が決まって、2重の栄冠と貴重な外部資金を勝ち取ることができた。

7. 芸術文化学部の設置へ向けて

一年半の短期間であるが、国立大学法人となった高岡

短期大学の最大の課題は、待たなしで迫った芸術文化学部の設置準備作業である。特に、新たな学部を大学設置審議会へ申請するための作業、すなわち、申請書類作成のための芸術文化学部の教育方針、内容等の詰め、また新学部にも所属することとなる教員の教育・研究業績等の審査書類の作成を進める必要があった。新学部が平成18年4月からの新生受入れを目指すには6月中に申請を行わなければならない、遅れは許されないものであり、また、新学部の授業を担当する教員に審査で不可が出れば学部の構想全体に影響が及ぶことになる。

申請は予定通り6月30日新大学創設準備事務局を通じて文部科学省に提出された。申請書類は、芸術文化学部の内容等については、芸術文化学部タスクフォースメンバー、設置準備委員会による検討作業および、同委員会に設けたカリキュラム、入試等各種検討部会及び新学部には設ける各コースのWGにより重ねられた検討を経て作成し、また、新学部担当教員の審査資料については各教員に依頼した研究業績等について取りまとめて事務的な整理を行った。この間、4月と5月には、全教員に芸術文化学部についての理解を得るための説明会を実施し、さらに、7月23日には全学集会を開いて、主として学生に対し新学部の内容を説明した。また、新学部について地域の十分な理解を得るために、8月9日、高岡市役所において、市、市議会、商工会議所関係者等に対する説明会を行った。

9月初旬文部科学省より大学設置審議会審査の途中経過についての連絡があり、申請資料に若干の補正を加えて再提出した。11月30日、審査結果について待ちかねた連絡があった。結果は、無事審査を通り、芸術文化学部は予定通り17年10月発足の運びとなった。以後、新学部の広報や入試方法等について具体的検討を進め、翌年4月からの学生受入れを目指して学内一丸となって走り始めている。

高短での思い出



前事務部長 古屋 勇

3大学の再編統合化がほぼ固まった頃、高岡短期大学が歩んできた22年間の足跡を編纂しようと本委員会が立ち上がったと記憶しております。私は平成13年10月から

平成16年3月までの2年半の勤務した思い出ですが、様々な出来事がありました。

3大学の再編統合の合意、横山先生の突然の死、蠟山

学長先生の死去、国立大学の法人化の決定、西頭新学長の就任など大学を揺るがす出来事が次々に起こりました。

平成13年9月11日に前地(国立民族学博物館)で異動の内示がありました。この日は、皆様もご承知の世界中を震撼させた米国同時多発テロ事件の起きた日です。今顧みると、高岡短期大学で起こることとなる出来事の前後ではなかったかと思っております。

当時、大学を取り巻く環境が非常に厳しい状況下でありました。平成13年春に文部科学省は「大学の構造改革の方針」を発表し、大学の再編統合を進めることを打ち出し、更に法人化への強風が吹いていた頃でありました。

私が赴任した頃から3大学の再編統合問題の動きが活発化しようとしていました。当時の蠟山学長は、再編統合に当たり3つの堅持すべき条件を掲げられた「富山総合大学(仮称)の創設をめざして」を策定されており、このペーパーを何度も読み返しました。年明けの1月に文部科学省の組織廃止・転換に係わるヒアリング(短大としては初めて)に向けて、この基本方針を踏まえた想定問答を作成し、蠟山先生に壁に入れていただいた記憶が残っております。おかげさまで初めてのヒアリングでしたが、無事終えることができました。

この年の春(平成14年3月26日)には、3大学の再編統合化に向けた協議の場が設置され、この下に協議会、策定委員会(大学の執行部で構成)などを設けて動き出しました。協議会は、月1回以上の頻度で開催され、又適宜学長による懇談会も開かれましたが、各大学の思惑が絡み議論が進展せず3大学による協議の難しさをしみじみと体験させて頂きました。しかし、晩秋の11月頃からは協議の遅れを取り戻すために、策定委員会が毎週のように開かれました。これら関係者のご努力の結果、再編統合化に向けた協議の場の設置から1年後の平成15年5月7日に、3大学は再編統合することに合意いたしました。

その後、新大学創設準備委員会の設置や統合担当の事務部署の立ち上げ、芸術文化学部(仮称)設置の準備委員会などが設けられました。高岡短期大学にとっては、新大学の新しい学部に移行することから、蠟山学長の学部構想を踏まえ、水島副学長や秦、野瀬両学長補佐を中心に具体的な詰め作業が行われ、時として衝突が起き学内対立を生むこともありました。私は、新学部構想を文部科学省へ上申手続きすることなく異動しましたので、設置の審査会を通過したとの知らせを受けたときは「ほっと」致しました。

もう一点は、やはり蠟山学長先生との出会いでした。「部長 おさきに」と帰宅の際には部長室をのぞき声をかけていただきました。学長の声で赤倉スキー場に出かけたことや氷見の民宿に連れて行っていただいたこと、

また、ダウン帽をかぶり高岡市内を自転車で走っておられたことなど、事務への心遣いや気さくな一面の状景が思い出されます。

反面、学長として強いリーダーシップを発揮してこられました。3大学の再編統合問題では、蠟山学長が終始舵取りの役を担ってこられましたし、学内においても意見の集約化・一本化に手腕を発揮されました。このような学長がある日「検査を兼ね1カ月程入院します。皆さんにはご迷惑をかけますがよろしく願いいたします。病名は間質性肺炎。」と言われました。それは平成14年10月16日の入院の10日程前でありました。投薬の効果がなかったのか、12月末まで病院生活を送られることとなり、新年から大学に出勤されましたが、酸素ボンベを携帯され、あの山男でスポーツマンの先生のお姿とはかけ離れていました。しかし、日々の業務指示や再編統合への取り組み姿勢は衰えることなくボンベを持って3大学の再編統合に関する協議の場にも出席され続けられました。

また、卒業式は、卒業生一人ひとりに学長から卒業証書を授与することが慣例となっており、これについても壇上で椅子に座りボンベを携え、卒業生全員に対して直接手渡されました。この卒業式において贈られた言葉「矜持」は忘れぬ言葉となっています。

その後、病状は進行し再入院され病床からのご指示をいただくことになりました。蠟山先生が口火を切り情熱を傾けられた再編統合は、5月7日合意に至りましたが、その合意書への署名は残念ながら病床で行わざるを得ませんでした。それから僅か12日後に帰らぬ人となりました(合掌)。正に命をなげうって取り組まれました再編統合問題でありました。新しい芸術文化学部が、高岡短期大学の礎を基に大いに発展することを切に願っております。高岡短期大学は、私にとって一番想いで深い勤務地となっております。



高岡短期大学でのスキー



名誉教授 倉田久敬

個人的なことをいうと高岡短期大学での大きな楽しみの一つにスキーがあった。いろいろな先生方、また事務部の方々とスキーの思い出は尽きることがない。小松研治先生とは私の富山初期のスキー行とは切り離せないし、鶴田彦夫先生とは白馬周辺によく滑りに行った。長山信一先生とはスキー場トップの雪上で広げた昼食を思い出す。退職前数年は蠟山昌一先生、近藤潔先生と共に、テレマークスキーで山に入ったことを懐かしく思い出す。また、前田一樹先生とは立山弥陀ヶ原の春スキー、堀江秀夫先生とは高谷池から火打山への山スキーを思い出す。事務部では小路隆さん・田中輝和さん・山本さん・安土さんほかの方々が懐かしい。今でも近藤先生とはテレマークスキーでお付き合いを頂いているが、ここでは個人的レベルでの思い出ではなく、高岡短期大学でのスキー行として、多くの方々と共通の思い出を語ってみたい。

1 スキー同好会のこと

私が高岡短期大学に奉職したのは平成3年からであったが、その当時事務部の職員の方々を中心としたスキー同好会という会があった。今となってはスキー同好会というのが正式の名称であったかどうかは定かでないが、学生課の方々を中心となって毎月積立を行っていたようである。学生課は日常的に学生が入り出して忙しい部署であるが、2月は入学試験があり多忙を極める。したがってスキー行は1月中旬の連休ということに決まっていた。

平成4年のスキー行は信州の梅池高原であった。その冬は雪の多い年で、私の車は4WDでなかったこともあり、宿舎では駐車場への車の出し入れに苦労したことを記憶している。早朝短大の駐車場に集合して数台の車に乗り合わせて出発するのであるが、スキーを積んだ車で高速道路が渋滞して、梅池高原スキー場についたのは正午過ぎであった。当時はまだスキーはメジャーなウィンタースポーツで、スキー場でのリフト待ち30分などは普通のことであった。今昔の感一入である。当時はモーグルも始まったばかりでやる人はほんの一握りであり、八方尾根スキー場の兎平や黒菱も未圧雪の急斜面というだけで滑りやすかった。ただ、梅池高原スキー場の馬の背コースは、今ほど広くなく当然圧雪してないため、ず

いぶん滑りにくい難コースであったと記憶している(コース幅が広げられて一時は滑りやすくなったが、最近のコブがひどくなって昔に増して難しいコースになったようである)。教員の参加者としては藤田徹也先生の名前を思い出す。

その後同好会は志賀高原や梅池を中心に4年余り続いたが、学生課の方々の転勤等で旗振りをする人がいなくなって自然消滅するにいたった。

2 歩くスキー(クロスカントリースキー)

高岡にきて驚いたことのひとつに、富山県の人でスキーをする人が非常に少ないということであった。富山県出身の学生の多くがスキーをやらず、むしろ他県出身の学生のほうがスキーに積極的であったように思う。そんなこともあって歩くスキーをやってみてはということ、平成7年であったかと思うが学生課にお願いして歩くスキーを20セットばかり準備していただいた。学生に興味を持たせるにはやって見せなければと思い、何人かの先生方を誘ってグラウンドで滑走を始めた。そのとき誘いに乗っていただいた先生が近藤先生、長山信一先生であった。

毎日昼休み30分あまりの時間、グラウンドに付けたトレースに沿って滑走した。そのうち産業工芸学科の小林君という学生が興味を示してくれて一緒に滑ったが、ほかの学生はほとんど興味を示してくれなかった。思えば北陸の人たちは毎冬豪雪に痛めつけられ、雪=除雪という図式が出来上がってしまったのであろうか。富山県出身の学生に尋ねても小中学校で体育の時間にスキーをやったという者はほとんどいなかった。雪国に住んでいてその雪を活用しないのはもったいない話だと思うのは私だけであろうか。

その後年々雪が少なくなり、グラウンドに雪が積もらなくなって、歩くスキーもできなくなった。

3 蠟山先生とのスキー

蠟山昌一先生が第3代学長として高岡短大に赴任されたのは平成10年4月であった。

新しく着任された教職員の歓迎会を食堂で行うようになったのは、いつ頃からだったのだろうか。その年も例

年のように、例年のような食べ物で開かれた。その席上 蠟山先生は自己紹介で、自分はアウトドア派であり山登り・釣りを楽しみに高岡に来たと話された。スキーのことは話されなかったと記憶しているが、5月連休の立山春スキーにお誘いしてみた。蠟山先生はすぐ話に乗って来られ、「女房を連れて行っても大丈夫だろうか」といわれた。雪が腐って重くなっているがシュテムボーゲンが確実にできれば大丈夫ですと答えたが、ご都合がつかなくて結局奥様は参加されなかった。参加者は教員ばかりであったが、鶴田彦夫先生、近藤潔先生、長山信一先生、小松研治先生、藤田徹也先生、内藤裕孝先生ほかのお名前を思い出す。

弥陀ヶ原から天狗平の間を途中美松(地名としての美松坂ではなく関学ヒュッテ近くの臨時バス停)を經由して1時間に1本の割でスキーバスが運行されていて、これをスキーリフト代わりに使って遊ぼうというものである。

当日朝6時ごろケーブル立山駅に着いたが既に駐車場は満車で、称名川沿い奥の臨時駐車場に置いて、スキーを担いでの歩きを覚悟したものである。その時、ふと「登山研修所に置くことができれば便利なのだが」と漏らすと、蠟山先生が「よしそこに置こう」と言われた。「でも先生一般車は駐車禁止ですよ」「わしが話をつける」というわけで、研修所への坂道を登ったのだが研修所の門は閉まっている。「やっぱりだめですね」「その門脇に置けないか」「置けば置けますが」「わしの名詞を貼っておけばよい」という蠟山先生の決断で、ダッシュボードの上に名詞を置いて、片道20分の歩きを免れることがで

きた。蠟山先生の茶目気たっぷりの人柄を知ることができた懐かしい思い出である。翌週事務部の職員の方々から、「遅くとも朝5時には着いていなければ駄目ですよ」とからかわれたが、ケーブルの始発時間が7時半発という事を考えると当時は随分と客が多かったことになる。ちなみにスキーバスは1台に乗り切れず、2台3台と増発されたことを考えると今昔の感を深くする。

蠟山先生の発声で一時途絶えていた事務部のスキー行が、その次のシーズンから赤倉の上越教育大学ゼミハウスを使って復活した。参加者は庶務課、事業課、会計課、学生課の方々、教員では前述の先生方のほか学長夫人、副学長であった行田博先生や小松裕子先生のお名前を思い出す。最初のシーズン(平成11年1月)はナイターに行こうというわけでスキーを担いで「くまどスキー場」までの上り坂を30分余り歩いたが、時間が遅かったのでナイター照明が終わってしまっていた。さて帰り道、蠟山先生をはじめ数名の方々が下り道を滑るということで滑走を始めた。私はカリカリに凍った坂道が怖くてゼミハウスまで歩いて帰ったが、帰り着いてみるととっくに着いているはずの滑走組が着いていない。おかしいなと思っていたところ10分あまりして帰ってきて、道を間違えて下のほうまで滑り過ぎたという事であった。道路を滑ることが可能であった当時とはいえ、ここにも蠟山先生の茶目気を見る思いであった。

赤倉でのスキーは3シーズン続いたが、蠟山先生の健康から中止の止む無きにいたった。今となっては貴重な思い出として懐かしく思い起こされる。

出会い、出会う。

名誉教授 根本曠子

私が高岡短期大学に就任した平成9年は、専攻科棟が竣工し大学の設備が完成した年でした。しかし周知の通り、その後、再編統合にむけて大きく変って行くこととなります。16年3月までの7年間は、宮本学長、蠟山学長、西頭学長と、敏腕でご誠実な先生方にご指導をいただきました。ことに西頭学長には、わずか数ヶ月のご縁でしたが、「物作り」の立場をご理解いただき、退官間際の忙殺の日々ではありましたが、充実した高岡での最後の時間を過ごすことができました。

大学での任務は「忙しかった」の一言に尽きますが、

今になればすべてが良い出会い、経験の連続であったと実感しております。昨年4月に帰省し早一年たちましたが、まだついこの間のことのように、時々、会議に遅れた夢などを見て、はっとする事もある状態です。作品の制作をしながらも、新しい役職(文化財団理事)、仕事場の整備、物の整理にと、相変わらず忙しい日々は続いております。

さて、楽しかったこと、辛い思い出などは、とりあえず夥しい資料や記録とともに、箱に詰めて持って帰りました。懐かしむ前に、これからじっくり時間をかけ、反

省も兼ねながら、新しい技法や授業内容などを纏めようとしている所ですので、この度は私が、高岡短期大学と「出会う」ことになったいきさつからお話させて戴きます。

平成8年8月に58歳という年齢で大学教授のお話を頂いた時には、大変光栄ではありましたが、何しろ経験がありません。半世紀に近い年齢差の学生さん達を指導するのも、会議で発言するのも、まったく別の世界の事と言う認識しかありませんでしたから、直ぐに辞退申し上げました。「唐突な事でしたので、多分そう言われると思いました。まだ時間はありますので、もう一度ゆっくり考えて下さい」と漆芸の教室の先生方からのお言葉をいただきましたが、改めて考えるほどに身に余るお話で、世間ではリタイアの時期に、今更国立大学の教授になるなど、予測も想像もつきません。今度は一字一句に気を使いながら「せっかくではありますが……」と再び辞退の手紙を書きました。

当時の私の状況とは言いますと、24歳から創作活動は続けてはいたものの、子育てや老人介護の兼業主婦でもあり、それに40代の終わりに大病をして、物を造ることは、心の安らぎを得るため、元気になるための拠りどころでした。おりしも父を見送り、息子が世帯を持ち、主人が退職、私も何とか健康を取り戻して、誰に憚ることなく、ようやく本腰で仕事が出来る日が廻ってきたとばかりに、仕事部屋の増改築をしたところでした。

しかし運命といったら大げさかもしれませんが、同年10月18日のこと、金沢で所要を済ませた後、帰りは山道を通って、紅葉でも見ながら何処かに宿泊して……と車を走らせていたところ、スーパー林道の標識が目に入りました。思いがけず素晴らしい景色に出会い、山道を降りて白川郷に出ました。そして福光から高速道路に乗ると高岡方面と能越道路の案内が出てはおりませんか。「ここまで来たのだから挨拶だけでも」ということになり高岡へと。大学に着いた頃はもう夕方でしたが、乳白色の校舎に、紅葉が美しく映え想像していたイメージとはだいぶ違いました。蜷川先生や横山先生には初対面でしたが、穏やかなお人柄で、学生さん達も明るく素直に「こんにちは」と人なつこく挨拶してくれました。実技棟やコンピューター室を案内していただくうちに、漆工芸の地盤である北陸の、最新の設備を持つ新しい大学で、若い人達と仕事をして見たい、一から出直すつもりでやれば出来るかも知れないと、半分夢気分でした。

11月に入り、辞退の手紙も出してしまっていただけに大学の話は忘れかけていた頃、「考え直していただけましたでしょうか」と林暁先生から電話がありました。返事を口籠っていると、いきなり「書類は実積の写真入り

のファイルが3冊と……」と矢継ぎ早にいわれ、いつの間にか「はい」と言っている自分に気がついたときには、「えらい事になってしまった、もう後には引けない」と複雑な気持ちでした。漆コースの先生達には、本当に誠心誠意助けていただき、無事定年まで勤めることが出来ました。



ことに平成15年度は、再編統合も大詰めになり、蜷川先生の退官記念パーティー、卒業生の展覧会、蠟山学長のご逝去、横山先生の遺作展、地域を繋ぐ漆芸展、私の退官記念展と、盆と正月とお祭りが一度に来てしまったような年でしたが、少ないメンバーで結束し、学生さん達の力もかりて、本当に良くしていただきました。

大学では、会議や年間を通しての行事だけでも多くの時間が費やされますが、私の一番の仕事は学生達の実技指導。後期の卒業制作や学士修得の制作の期間は、土日返上でした。ドカ雪が降り、毎年成人式に出られない学生さん達とささやかなお菓子でお祝いをする頃には、意志の疎通が出来てお互いに真剣勝負になります。物造りのありがたいところは、時間はかかるけれど、言葉はいらないこと。言い訳がましいことを並べている段階では何も進まないと思えるあたりから急に集中力が出てきます。教える側も楽しくなり、達成感と喜びを分かち合えるのは、教師冥利につきました。一石二鳥と言うわけには行きませんが、物造りの楽しさ辛さを知り、素材と技法に謙虚でさえあれば、どんな職についても、家庭に入っても、常に充実した人生を送れるのではないのでしょうか。

「一生懸命やった事に無駄はない」と自分にも言い聞かせながら、私の制作は宿舎に帰り仮眠をとってからでした。食卓をかたづけて、シートを敷き、なるべく音を出さないようにしながら、時には明け方になってしまうこともあり。富山に来て新しく出会ったモチーフや素材に感動し、造りたい、造られずには居られない気持ちになり、その気があれば何時でも何処でも、出来ることも実感しました。大学には才能豊かな先生が沢山おられ、種々な分野の方々とふれあう事が出来て、視野が広がり、パワーを沢山戴きました。また毎年行われた公開講座や伝統工芸富山支部の研究会、デザインセンターの講習会などで高岡週辺の「工芸を愛する人々」と、同じ目的を持って意見を交換し合えたのも、楽しかった

し、北陸ならではの、人情やうまいものは、忘れられない思い出になりました。

就任前の秋に見た大学は、一年中で一番美しく見える時期でありました。7年の在任期間中は山あり谷ありと

いろいろありましたが、高岡短期大学で過ごした年月は、これからも私の中で輝いていくことでしょう。学生さん達にも、大学生活が一生心の支えになる事を念じて、新学部のより一層のご発展を願うばかりです。

横山幸文先生からの思い出

横山先生は漆工芸コースの中で、なくてはならない存在でした。何より、学生たちのことを親身になって思い、面倒見もよく、学生たちからも父親のように慕われていました。

そんな先生が亡くなられたのは、平成十四年の十一月十一日でした。その四日前の十一月七日は大変寒い日でした。学内の会議を終えて、さらに、学外での懇親会へ向かわれようとして、慌しく準備をしておられるときに学内で倒られました。私たちにとって、大切な先生の死は受け入れがたい悲しみでありました。突然の訃報に多くの卒業生も驚きと深い悲しみで、後日の井波瑞泉寺での告別式には何百人の参列者が訪れ、その中に多くの卒業生の姿がありました。各学年で同窓会のような輪が講堂一杯に広がっていた光景が今もはっきりと思い出されます。

また、一年後、平成十五年の十一月五日から十一日にかけて、先生の制作を通してその作品に向かう姿勢に触れ、追悼する遺作展が本学ホワイエと展示室に於いて開催されました。その作品の中に広がる風景は、先生が肌で感じ、こよなく愛された富山の自然が鮮やかに表現されていました。先生の漆芸作品は漆の持ち味を生かしながら、鮮やかな色使いで、すがすがしい自然の風景を色漆や金銀螺鈿等の工芸材料を駆使しながら行う、明快な面構成による叙情的な空間表現です。見ていると誰もが心の中に持つ原風景の中にいるようで深い安らぎと懐かしさが伝わってきます。同時に、先生の優しいあの笑顔が浮かんできます。

その折に刊行された作品集の巻頭に、先生の漆芸の道における恩師である東京藝術大学名誉教授で日本芸術院会員の高橋節郎先生から頂いた言葉があります。その中の一文に産業造形学科の教授として、多くの学生に囲まれながら情熱を燃やし誠意を尽くして指導に当たられていた横山先生の姿について、「このことは、我が家に立

産業造形学科助教授 齊藤晴之

ち寄り芸術について語り合っている折に学生について話をする時の幸文君の手つきや笑顔が一段と印象的であったことから教育現場に立った経験を持つ私にはよくわかった。」というところからも、その姿が懐かしく思い浮かびます。



(故)横山幸文先生と学生たち

富山の自然風土をこよなく愛す。特に山登りが得意で富山県の体育大会のでは競技委員を長く勤めておられました。春になると井波の周りの山々に若葉が芽吹き、その声を聞くと朝早く山菜を摘みに行く。秋になると地元ではコケ採りと称して、近くの山へきのこを取りに出られる。そんな折に、山々の眺望が開け、朝日の中にシルエットが浮かび上がる山並みの稜線、遙かに見下ろす砺波平野の散居村の有り様は、まさに横山先生の作品そのものであります。今でもそのような風景を見るたびに先生のことを思い出します。

また、先生は大変な美食家で、(といっても豪華な料亭で外食されるわけではなく)自然で新鮮な、おいしいものしか食されない。そのほとんどが地元の食材を使った奥様の手料理で、そんな心のこもったお弁当を暖かい日差しの中で学生たちとキャンパスの周りに広がる芝生に出て会話を弾ませながら食べておられた姿が今も思い出されます。そのようにして、漆制作のこと意外でも学生たちが生活全般についての悩みなどを相談していたようです。

富山県においても工芸美術のいろいろな役職についておられ、大変忙しそうでした。しかし、そのような場においても温厚な人柄は周囲から人望が厚く、日展や現代工芸美術展といった制作活動の場においても、多くの地元若手作家たちが展覧会前になると先生のお宅を訪れ指導を受けました。そんな折も快く、自分の制作の手を止めて、親身になって指導されました。技法のことや発想のまとめ方についての的確な指摘を受け、行き詰った考えに光明を得たことが幾度あったことか。そんな時、先生の

アトリエには展覧会出品に向け、今まさに制作中の漆屏風の原寸大図案が壁面一面に張っており、これから塗られよとする、ブルーや朱の色がグラデーションに何色も調合され、そんな色漆の絵皿が所狭しと並んでいました。

高岡短大において先生から頂いた思い出は皆さんの心のなかにも印象深く尽きることなく思い浮かぶことと思います。本学が二十周年を迎え、その中で横山幸文先生から頂いた多くの思い出や感動を心から感謝します。

シロウトが語る『映画芸術論』 —高岡短期大学における最後の入学式式辞から—

高岡短期大学長 西頭徳三

小学校高学年の頃のこと、映画を観た夜寝床に入っても、あるシーンが頭から離れない。やがてそれが黒澤明の作品だと分かった。以来、私は監督名で映画を選び、黒澤映画を繰り返し観るようになった。

高岡短期大学エントランス・ホールの作品展で、ある芸術系の先生から次のように諭された。「芸術の分野では誰もが素人。各自の『芸術論』を語ればよい」と。そして、平成17年度本学最後の入学式で、私は近年のアニメ映画の台頭について話した。ここで、ひとりのシロウトが語る『映画芸術論』と題して、黒澤明、宮崎駿の作品をめぐる三つのテーマについて書いておきたい。

●映画監督の要件：「真の自由人」

映画の醍醐味は、時空をひょいと飛び越えられる点にある。過ぎ去った出来事が目の前で生きいきと再現される。全く想像もできない未来の姿が具体的に描かれる。観客はその映像が真実に近いほど深く感動する。反対に、その映像が現実離れし奇想天外なものであればあるほど、観客は大いに満足する。とにかく映画は、面白くなければならない。

映画監督とは、夢に耽る能力に長けた人だ。なにげない当たり前の風景に、人工的なシーンを組み合わせて、自分の夢を映像化する。シナリオはそのための基本的な設計図だ。演出は出演者たちが最も本当らしく演ずるための一手段に過ぎない。個々の映像は最後の編集作業を経て、一本の映画に結実する。とにかく映画には、夢がなければならない。

映画監督はまた、あらゆる思想や表現方法を自由自在

に駆使できなくてはならない。そのため、歴史、哲学、文学、絵画、演劇、音楽、写真など、芸術文化百般に通じ、政治、経済、世間ばなしなど、常に世の中の動きに敏感でなければならない。その意味では、映画監督には、もの知りで総合芸術家としての高い資質が求められる。とにかく映画は、知らないことを教えてくれる先生でなくてはならない。

そして最も重要なのは、夢を映画化できる強い意志が必要なことだ。黒澤明は、何ものにも囚われず、妥協をせず、とことん映像美を追求した。そのため、ある時期「完全主義者」「黒沢天皇」と揶揄された。彼は映画づくりで「真の自由人」を貫徹した。

世界の映画界を変えた映画監督として、私は三人を挙げることができる。エイゼンシュテインは、『戦艦ポチョムキン』『イワン大帝』などモンタージュ理論により、見世物だった活動写真を「映画」に変えた。チャップリンは、『街の灯』『モダンタイムス』『独裁者』などの警世的な演出と表情豊かな演技により、映画を「大衆化」した。そして、黒澤明は、大衆のものとなった映画を『羅生門』『七人の侍』『赤ひげ』などにより、「芸術」にまで高めた。

ところが、三人の監督の強固な創作意欲にも関わらず、政治的な干渉や経済的な制約がその制作活動を阻んだ。エイゼンシュテインは、スターリンから「芸術家はマルクシズムを研究すべき」と忠告され、内容の変更を求められた。チャップリンは、非米活動委員会の召喚を拒否し、1952年アメリカを去った。黒澤明も、観客の急減と映画産業の縮小により活動の場を著しく狭められた。

映画芸術は、社会的矛盾を暴露し批判することで大衆から支持され、芸術分野の中で一橋頭堡を築いてきた。その反面、政治的影響力の大きさや経済的コスト負担の莫大さのため、制作活動が規制されるようになった。これは総合芸術である映画の宿命かも知れない。

●黒澤映画の創作基盤：「日本の伝統文化」

黒澤明は、世界の映画界に計り知れない衝撃を与えた。スティーブン・スピルバーグ、フランシス・F・コッポラなど、数多くの海外の監督は、黒澤作品から影響を受けたと公言してはばからない。ジョージ・ルーカスは語る。「『七人の侍』は私に途方もない衝撃を与えた。私はそれまであのような力強く、しかも映画的なものを観たことがなかった。その瞬間から、私の創造的なインスピレーションの最も力強い源泉のひとつになっている」と。ケビン・コスナーも『七人の侍』を30回以上観たと告白する。

黒澤明も、ドストエフスキー、ゴーリキー、シェークスピアなど外国文学から大きな影響を受けた。黒澤は自らのテーマを映像化するため、その原作を自由に外国文学に求めたが、まず原作の模倣に始まり、やがてそこから完全に脱却して自分流の作品に変えた。シェークスピアの四大悲劇の一つ『マクベス』は、「人間の弱さ」を物語る戦国時代の『蜘蛛巣城』に変わった。『リア王』も、「人間の愚かさ」を繰り広げた戦国時代の『乱』となった。彼は換骨墮胎の名人だった。

1950年に製作された『羅生門』は、戦後日本映画が欧米を越えた画期的な作品だ。翌年、ヴェネチア国際映画祭金獅子賞、米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した。当時外国の批評家は、日本映画と聞くだけであくびをする始末だった。しかし、この黒澤作品が上映されると、雰囲気はがらりと変わり、終わったときには、みんな雷に打たれたようだったと伝えられている。この原作は芥川龍之介が12世紀の説話集『今昔物語』から題材を得て書いた『藪の中』だ。そのため、黒澤明は、この日本映画の芸術的価値を認めながらわが国の批評家たちと闘わなければならなかった。海外での受賞理由を「日本的、東洋的エキゾチズム」に求めたからだ。

黒澤作品は、「日本的」であったがゆえに、「世界的」に高く評価された。映画に限らず、いかなる芸術作品も制作者の現在の生き様や生まれ育った環境を無視して語れない。芸術文化的な創造とは、制作者が寄って立つ歴史的・文化的・風土的な基盤の上で、ゆっくりと醸成された作家の知性と感性の融合作用だ。黒澤明は映画制作の場に日本の伝統文化を大胆に導入し、その成果を世界に発信し続けた。

●宮崎アニメの美しい警鐘：「身近な自然対話による感性の回復」

宮崎駿監督『となりのトトロ』をはじめて観た時、私は1950年代後半の東京郊外の風景や二人の女の子のいる家族の姿が詩情豊かに描かれていて感動した。ある新聞で二歳の幼女が毎日、しかも一年中「猫バス」のシーンを繰り返し観て、ニコニコしているという記事を読んだ時も、さもありなんと思った。しかし、この映画に対する私の評価は、レベルが高いという程度であった。

ところがその後、トトロの数年前に制作された『風の谷のナウシカ』『天空の城ラピュタ』を見た時、私はびっくり仰天した。内容の斬新さもさることながら、宮崎監督が私と同年代であったからだ。あのような明るく夢想的な創造力は、私の身体のどこからも湧いてこない。同世代にあのような発想ができる人がいる。私は愕然とし、数日間、ショックは治まらなかった。

宮崎アニメは世界の映画界を一変させた。『千と千尋の神隠し』は2002年度ベルリン映画祭金熊賞を受賞し、2003年度アカデミー賞長編アニメ賞に輝いた。宮崎駿と云うたった一人の監督の才能が新たな映像文化を創造した。この驚きは50年前の十代の後半、黒澤明『七人の侍』に出会った時の衝撃に似ているが、自分の創造力の衰微、限界を見せつけられたようで実に複雑な気持ちだ。

私のもっぱらの関心事は、創造力に対する知性と感性の関わり方にある。宮崎アニメに出会ってから、私は、特に現代人の感性のあり方に問題があるように思われてならない。映画は時代の風潮を反映し、観客はそれに敏感に反応する。宮崎アニメに対する観客の強い関心は、日常生活で満ち溢れる情報・知性過剰への反動とも考えられる。バーチャルな世界で生きる人々が、自然に育まれた人間の本来の感性の枯渇を感じはじめ、それを宮崎アニメに求めているように、私には思える。

われわれ現代人は、人間の本来の感性をどう取り戻すべきか。それには自らの「五感」を最大限度まで活用するしかない。最低一日・五回の小さな感動を体験する。春の立山連峰を遠望して感動し、川のせせらぎに耳を澄まし、雪解け水の冷たさに触れて感動する。春野菜のがみや香りに感動する。小さな感動の積み重ねが、われわれの知性と感性のバランスを回復させる。

宮崎アニメは、身近な自然との対話で感性を回復することの大切さを映像化した。黒澤映画は、創作基盤としての日本の伝統文化の重要性を映像化してくれた。いずれの作品も、最後まで映像美を追求する、芸術家の自由で強固な意志から生まれたことは云うまでもない。

私には、このような創作姿勢はあらゆる場に共通するものと思われるが。

回 想

事務部長 榎山登志雄

平成16年4月1日に高岡短期大学の第10代目の事務部長を拝命いたしました。高岡短期大学と富山大学、富山医科薬科大学の統合により、高岡短期大学最後の事務部長となります。

高岡短期大学に赴任しました時には、既に「富山県内国立大学の再編・統合合意書」が締結され、「再編・統合による新大学像」による「新しい大学の基本理念」の実現にむけた組織と運営方法の体制を確立することに焦点が当てられていました。また、高岡短期大学では4年制の芸術文化学部の設置準備が同時に進められていました。

新学部の設置には、文部科学省に置かれる大学設置・学校法人設置審査会において、新学部の理念・目的・教育方針、授業実施体制、カリキュラム、授業担当予定教員の研究等実績等の審査を受けなければなりません。設置審査会に提出する書類は、文部科学省の指導を受けながら作成する段取りであったようでしたが、文部科学省においても本学においても16年4月に文部科学大臣が設置する大学から国立大学法人が設置する大学への移行が優先課題であったことも影響して、設置関係書類の準備に遅れが生じていました。

作業の遅れを取り戻すため、4月から5月の連休期間中にも、また、5・6月の休日にも作業を続けるなど精力的な頑張りによって6月末の提出期限に間に合うことができました。私はこれらの作業を見守るだけで、ただただ担当職員には体調を壊さないで作業が終了することを願うだけでした。

また、新学部の設置と3大学統合の経費については、国の予算要求のスケジュールに沿って行われ、大学から文部科学省に対する17年度予算要求のヒヤリングが7月上旬に設定されました。設置関係書類の作成を始め新学部の基幹的などりまとめがこの時期に集中して行われました。経費要求については、担当職員は8月まで文部科学省の予算担当官に個別説明を行うなど精力的に動きました。

この時期の頑張りにより、設置審査関係書類に大きな変更も無く「設置を可」とされました。また、芸術文化学部のための設備費・施設改修費もほぼ認められました。

5・6月頃に集中して行われた教職員の会議・打合せは、学生には特別なものと感じていたのではないでしょ

うか。昼休み時間に開催した会議を終え廊下を歩いていましたとき、「このごろ会議ばかり開いている」と学生の話し声が耳に入りました。この言葉の意味をあれこれ考え複雑に受け止めました。

昨今の就職状況はとても厳しい状況に置かれ、各大学ともとても苦心しています。本学では幸いにも平成15年度卒業生の就職希望者は、全員就職できました。また、16年度の就職希望者も99.4%に達しました。これは学生の努力によるところではありますが、一方では、卒業生が企業内で評価されていること、また、学生定員が少ないことで個別指導ができることではないかと思えます。学生課職員は全学生の顔と名前を覚え、学生の特徴を掴み、接しています。また、常に進路指導担当教員と就職担当事務職員が学生の希望職種や就職内定状況に関する情報を交換し、未内定者には事務職員が精力的に個別指導をしたことなどの取組みが現れているものと思えます。

「地域に開かれた特色ある国立短期大学を目指す」ことが本学の建学の趣旨であり、ものづくり(木工、造形絵画、アクセサリー)、パソコン操作、外国語会話、簿記、教養等の講座や研究者・技術者のための講座を提供しています。

また、エントランスホール(TSUMAMA-HALL)ではしばしば、伝統工芸士の実演・作品展示、教員・学生の木工、漆、アクセサリーなどの作品展示、学習成果の発表など行い、本学関係者を始め、地域の方々にもそれらの作品を紹介しています。素人の私には学生の作品をプロの作品と比べても遜色ないでさえ感じられます。

幸いにも平成16年度には、文部科学省が公募しました「特色ある教育プログラム」には「学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト」が、また、「現代的教育ニーズ支援プログラム」には「炉端談義方式」による地場産業活性化授業」が採択されました。「現代的教育ニーズ支援プログラム」では、「地域活性化に役立てる」ことを本学のカリキュラムに反映させるため、地域の職人や行政機関と本学の教職員・学生による委員会を設置し、地域ビジネス、デザイン及び産業造形の各学科のカリキュラムの組み立てを紹介し、また、地域が抱える問題等も議論されています。

このほかにも、日本とフランスの専門家と市民が景観

について考える国際会議「日仏景観会議・高岡」が行われました。これには高岡市の行政・経済界、建築関係団体、地域住民が参加し、事務局は本学に置かれました。

平成16年度は3大学の統合と新学部への設立に向けた準備が進められるなか、作品展示、教育プロジェクト、国

際会議を通じて大学から地域への情報を発信し、地域との連携が活発に行われました。地域にまかれた種を組織としてどのように収穫するかにより、高岡短期大学が4年生大学学部として発展するかの試金石となるものと思えます。

卒業生の回想

第一回上野座談会レポ

専攻科 産業デザイン専攻 平成12年修了
野田由紀子×升井チサ

升「元気ですかァ〜！」(猪木口調で登場)

野「ガハハハ〜久しぶりー。わざわざ病院まで来てもらってすまんねー。」(出産準備のため都内病院に入院中)

升「遅ればせながらおめでとうございます。」

—久々の再会のところ申し訳ありませんが…いきなり本題です。お二人が卒業されはや5年、当時流行っていた物や事といったら何を挙げられますか？

升「パフィとか？当時、牛乳配達のパイトしてたんだけど、スパイラルパーマのアイロンヘアーでお客さん宅周りしてたな。そういえば、ある家を開けた途端『うわ！パフィ！』って言われたのを思い出した。」

野「うわ！パフィ……。そうだったね、今の黒髪じゃ想像つかないけどあの頃は皆何かに憧れて色変えてたなァー、赤とか緑とか。」

升「ヒラキストアで安いのが買ってね(笑)。私はピンクに。まずいよ、ホント。」

—では、印象に残っている人物は？

野「フィンランドの留学生達はヤキシバ UFO にお湯入れてすすってたよね…。」

升「あれはキョーレツだった！作り方を説明しても聞く耳もたないし、逆ギレされたよね。」

野「でもお陰様でこれが異文化交流の第一歩となったわけだ。」

—4年間の学生生活を振り返ると？

野「専攻科では放送大学で学位取得もあって、課題は多いわ、試験は難しいわで…超ハードだけにハーバードだったよねえー。あ！でも最終試験は東京大学でやったんだっけ？ガハハハ〜。」

升「ええと…ボケ倒しは放置。もたついていますね。」

野「こらあ〜。(笑)」

升「社会人になって思ったのが、美術系大学のカリキュラムにしては結構実践的だったとを感じるな。いきなり担当任されてもさほど抵抗なく初仕事に取り組めたかも。もちろん学生の時に学んだ事がまんま社会で活かされたわけではないけど。」

野「そうそ！良いこと言うねえ！どうせなら場所変えて久々に呑みながらとことん語っちゃう？」

升「…ってかアンタ、妊婦だし。しかも入院中だし…。」

話は尽きない様子のお二人。また何年後かに第二回目が開けると良いですね。



略歴 野田由紀子 平成12年 株式会社メガハウス入社【第一事業部 OEM チーム配属】 憧れの BANDAI グループで憧れのお菓子のオマケの企画を担当すること4年と10ヶ月。天使のマークでおなじみの某菓子メーカーの OEM 商品を主に手がける。(主な商品)・一斉を風靡した対戦式コマチョコスナック・ゴム船長率いる海賊団チョコスナック・5色の特撮ヒーローウェファーチョコ etc. 17年 株式会社メガハウス退社 玩具を創るつもりが、子供を作って一月末に退社。主婦&育児にこの身を捧げる…。 升井チサ 平成12年 株式会社コア・アド・インターナショナル入社 (グラフィックデザイナー)【デジタルメディア部所属】 映像、WEB等デジタルメディアコンテンツ全般のグラフィック映像、WEB等デジタルメディアコンテンツ全般のグラフィック制作。限定された媒体の狭さに限界を感じ、不完全燃焼。【海外制作部移動】 SONY、KENWOOD、VICTOR等の海外向けポスター、カタログ、POP等、紙媒体のグラフィック制作。国内で自身の制作物が見られないと、また不完全燃焼。14年 有限会社ユナイテッドデザイン入社 (アートディレクター) 紙媒体にとらわれず、空間スペース、コンサート、イベントキャンペーン等 幅広いデザイン・企画のディレクション。いっちょまえに芸能人と仕事するようになるも、これまた不完全燃焼。

回想

専攻科 産業デザイン専攻 平成13年修了
清水亜利沙

以下の文章は神田川：かぐや姫 のメロディでお読みください。

(デザイン科の方は1年最後のクリーナーもしくはドライヤー制作を思い出しながら…)

貴方は もう忘れたかしら…
白い手拭い 頭に巻いて
二徹で行った 小さな購買
「ワリカンで払おうね」って 言ったのに
いつも私が 払わされた
長い髪が芯まで冷えて
小さなラッカー カタカタ鳴った
あなたはわたしの顔を見上げて
「眠たいね」って 言ったのよ

若かったあの頃 何も怖くなかった
ただ最終プレゼンが 怖かった…

貴方は もう捨てたのかしら
無色透明の メディウム買って
徹夜で刷った シルクスクリーン
なぜかみんな 無言で作業
締め切り直前 三徹過ぎた
窓のむこうには 二上川
23人一部屋の 小さな教室
貴方は 私の顔を見上げて
「お腹減ったね」って 言ったのよ

若かったあの頃 何も怖くなかった
ただ最終プレゼンが 怖かった



『産デは体力！』学生の頃はそう言っていた。怒涛の二年間。金曜日に課題を出され、月曜にはチェック。そんなバカな?! 休みの日にやれってことか?! と内心憤慨していた(のは私だけじゃないはず!)。そう。体力の無い者には続かないのである。

しかし社会人4年目の今となっては『デザイナーは体力！』だと思っている。実はデザインの世界って、ものすごく体育会系! 結局思うところは学生の頃も今も変わっていなかったりする。

現実社会とのギャップを埋めてくれた先生たちに感謝! する今日この頃。

略歴 平成10年度産業工芸学科産業デザイン専攻卒業生。産業デザイン専攻科卒業後平成13年4月(株)DUO プロダクション入社。現在コンテンツディレクターとして、生きたWeb制作に励む日々。



回想

専攻科 産業造形専攻
平成13年修了
藤田いづみ

木材工芸学科に入学して、私が初めて作成したのが、これからの木工作业に使用する道具をすべて収納してくれる道具箱作りでした。クラス全員で製材された材木から、選ぶポイントを聞きそれぞれ作る道具箱の材料を選び出しました。そして、加工が始まりました。初めて使用する大型の機械や作業に最初は戸惑いましたが、機械の使い方を覚え、自らが使用して材料が次々と変化していく様子に感動しました。

一番大変だったのが、刃物の研ぎ方でした。すぐには使えない刃物達を仕上げるまでが大変でした。力を均等にかけることの難しさ、なかなか思うように平には出来ません。時間もかかりましたし、手も真っ黒になりました。夏休みにも刃物を研ぎに学校に通った思い出もあります。そのうちに慣れてくると、この刃物を研ぐ時間が気分転換にもなり、気持ち落ち着けられる時間になって行きました。

道具箱の完成が近づくにつれて、細部にも気にかける様になり、なかなか、完成と思えるまでに時間が掛かりました。もの作りの時間のかかる事を知り、市場に出ているものの価値観が変わりました。そして、自分の挑戦してみたい事もでき、大変に満喫した学校生活を送ることが出来ました。その中で、同じ興味を持った仲間達と

出会うこともでき、共に勉強できて良かったと思います。そして、今も交流が続いていることに感謝しています。

略歴 産業工芸学科木材工芸専攻、その後、専攻科産業造形専攻に在籍。現在、石川県にある株式会社竹松家具に就職。



思い出

ビジネス外語専攻(中国コース)
平成13年卒業
宮本久美子

「うっやバイ…中国語の前に富山弁がわからない…(泣)」

そんな不安を抱えて始まった学生生活でしたが、そんな不安も何のその、すぐ友達もでき、楽しい二年間が過ぎました。

思い出に残っていると言えば、やはり中国での語学研修のこと。二月だったのでまだ寒く、眠い目をこすりながら毎日早起きを試みみんなで太極拳をしました。毎日続けていたわりにはいっこうに便○には効果をなさず、人知れず悩んでいたのは私だけではなかったと思いま

す。また、最終日に先生への感謝の気持ちを込めてみんなで歌った“あの素晴らしい愛をもう一度♪”はとても感動的で、研修の良い締めくくりとなったと思います。

ほかには“炊飯器でホットケーキが作れる”ということで、Y子、J子、K奈と試してみたけどうまくできず、半分ドロドロのまま食べたのも良い思い出です。

まだまだたくさんあり、あげていったらきりがなくらいたくさん思い出でいっぱいです。

今でも連絡をとりあい、悩み相談したり遊びに行ったり…私はここで素敵な友人達と巡り会えたことをとても幸せに思っています。また、いろんな面で相談にのっていただいたりアドバイスしてくださった先生方にもとても感謝しています。そして何より、ここで勉強でき、ここで学生生活を過ごせたことを誇りに思っています。

もうすぐで高短の名は無くなりますが、良い歴史と思い出を残し、また新たなスタートをきり、皆に愛される大学となることを願っています。

略歴 長野県長野市出身 平成11年4月 高岡短期大学入学(中国コース) 13年3月 高岡短期大学卒業 13年4月 嘱託社員として日本興業銀行(現在みずほ銀行)入行 14年2月 職位転換試験合格により行員へ 現在 みずほ銀行富山支店勤務(モルモットのマロンとともに楽しい日々を送っています)

回 想

経営実務専攻 平成13年卒業
北島のり子

私が短大を卒業してから4年が経とうとしています。今、思い返してみると様々な経験ができ、自由がある時だったと感じます。その中で努力していたことは、自分の知識を増やすことだったように思います。短大に入学した当時の私は、高校の同級生の多くが4年生の大学に入学する中で短大に入学した自分に劣等感のようなものを感じていました。だから誰からでも認められる資格などを取りたかったのです。

そこでまず始めに挑戦したのが英検準2級です。英語は中学3年生位から成績が振るわなくなり、高校時代は最も苦手とする教科でした。また英検は中学3年生の時に3級に落ち、高校3年生の時に2級に落ちといい思い出はありませんでした。その英語の資格を取得することにより、少しは自分に自信が付くように思えたのです。試験は見事に合格、4年ぶりに英検を取得できたのです。これにより自分に自信が持てるようになったと同時に勉強して何かを身に付けるということが楽しくなってきました。

そして、次は高校時代より勉強したかった心理学を放送大学の科目履修生として勉強することにしました。人

間がどのように考えたり、行動したりするのかを勉強し、自分という存在を知りたかったのです。この時には、心理学に関連した本も色々読みました。半年、勉強して4単位を取得することができましたが、これによりますます興味が沸き、現在も仕事を続けながら学んでいます。この他にも短大で必修教科であった簿記では、3級と2級を取得しました。

このように短大時代は自分の興味を持ったこと、疑問に感じたことに次々と行動を起こしていきました。様々な情報を得て、知識を増やせたことは、非常に良かったと思っています。また、資格を得ることにより自信が付き、自分を堂々とアピールすることができるようになりました。本当に充実した日々でした。

最後になりますが、この回想録への掲載機会を与えてくださった高岡短期大学の皆様方に感謝しております。ありがとうございました。

略歴 平成11年3月 新潟県立高田高等学校卒業 11年4月 国立高岡短期大学産業情報学科経営実務専攻入学 13年3月 国立高岡短期大学産業情報学科経営実務専攻卒業 13年4月 日本道路公団入社日本道路公団東京第三管理局佐久管理事務所勤務 現在日本道路公団東京管理局佐久管理事務所勤務(平成14年2月東京第三管理局から東京管理局に名称変更)



学生生活を振り返って

専攻科 地域ビジネス専攻 平成16年修了
竹内麻美

私は高岡短期大学で4年間お世話になりました。4年間の学生生活の中でたくさん思い出はありますが、一番心に残っているのは大連・北京へ行った中国語学研修です。私は学科と専攻科で二度行く機会がありました。

学科では初めての海外ということもあって、不安と期待が入り混じりながら大連へ行ったのを覚えています。大連外国語学院で初めての授業は日本語のわからない先生に教えてもらうという新鮮な環境の中で、自分の思いを伝えられないもどかしさを味わいました。

専攻科のときは後輩と一緒に混じって大連へ行きました。自分の中国語が上達しているか試したかったからです。先生とのマンツーマンの授業は緊張の連続でした。ある先生は紙にいろいろ書きながら授業を進めていき、文法や発音をよく直されました。そして授業の合間の先生との雑談が楽しく、一緒に中国語の歌を歌ったりしました。その歌は『朋友(ポンヨウ)』と言って、中国では有名な歌手の歌らしく、お世話してくれた中国人学生に

教えてもらいました。

また、友人たちと過ごした時間と同じくらい先生方と過ごした時間も私にとっては貴重な思い出です。専攻科に入学してからは先生方とお話しする機会がぐんと増え、よく研究室にお邪魔しました。特に中国語コースの4人の先生には大変お世話になりました。私が壁にぶつかったときにはそっと手を差し伸べ、導いて下さいました。

社会人になってもうすぐ一年が経ちます。仕事で失敗することもたくさんありますが、周りの方々に支えていただいているのでがんばっています。二上山の麓でのびのびと過ごした4年間は今も鮮明に甦ってきます。高岡短期大学が新学部の「芸術文化学部」に名前が変わったとしても、私にとっては高岡短期大学に変わりはありません。地域に根ざした学校として今後ますます発展していくことを願っております。

略歴 富山県立呉羽高等学校卒業 平成12年4月 地域ビジネス学科国際・中国語コース入学 14年3月 地域ビジネス学科国際・中国語コース卒業 14年4月 専攻科地域ビジネス専攻入学 16年3月 専攻科地域ビジネス専攻卒業 16年4月 第一生命保険相互会社入社



回想

国際・英語コース 平成16年卒業
小橋千賀

着慣れないスーツに身をつつみ、大きな希望と新たな生活への不安を両手に抱えて高岡短期大学へ入学してから、はや数年が経ちました。あっという間に過ぎた2年間ですが、短大での生活は、とても充実し、自分を大きく変えることのできた時間となりました。

その理由の1つは、目標を持った、たくさんのよき友達に出会えたことです。ある友達は、造形作家になるという夢を叶えるために、毎日遅くまで納得のいく作品造りに集中していました。同じクラスでは、私と一緒に資格取得のために勉強し、時にはめげそうな私を励ましてくれた友達や、旅行好きという趣味を職業とするため努力をしていた友達にも出会うことができました。そんな目標高い友達と話すたびに刺激をもらい、私も見習おうと自らを鼓舞することができました。もう1つの理由として、以前から興味があった比較文化についての研究ができたことがあります。教授のご指導のもと、様々な文

献で、日本文化と西洋文化についてのより詳しい情報と精度の高いデータを調べました。さらに英語での執筆に挑戦したため、1年間かけて書き上げた論文はとても納得のいくものに仕上がりました。こうした授業での取り組みがあったからこそ、1つのものに対する集中力や勉強することの楽しさを知ることができ、そして何よりも、自分にもできるという自信を持つことができました。私は現在、社会人として働いていますが、短大時代に専攻した英語や新たに興味の出た分野についての勉強を、これからも続けていこうと思っています。

今、高岡短期大学は、富山大学、富山医科薬科大学との再編統合に向け、大きく変わろうとしています。しかし、学内にベンチやごみ箱といった、本学学生の作品が設置されたり、学園祭で手作りのものがあふれたりという高岡短期大学ならではのよき特色は、これからも受け継がれていくことを願っています。これからも、高岡短大の学生であったという思い出と誇りを持って、自分の進むべき道を歩んで行きたいと思っています。

略歴 昭和58年9月1日生まれ 富山市出身 富山南高校卒業
16年3月 本学地域ビジネス学科国際英語コース卒業 16年4月
日本銀行金沢支店入行

短大生活を振り返って

経営コース 平成16年卒業
古戸美佳

私は現在、JR 西日本の京都駅で勤務しており、早1年が過ぎようとしています。私が携わっている鉄道サービス業という仕事は、特殊なイメージがあり、短大で学んだ事とはあまり関係性が無さそうに思われるかもしれませんが。しかし、私にとっては卒業研究で学んだマーケティングの知識や視野を広げる為に受講することになっていた「デザイン」で学んだ知識、「プレゼンテーション」の知識、「パソコン」のパワーポイントでのプレゼンテーション資料作りの知識など全てが現在の仕事に役立っています。

例えば、私は1月頃に「お客様が利用しやすい自動券売機にする為にはどのように改善していくべきか」を考える研究プロジェクトに参加しました。私は、デザインの授業で学んだ知識を活かして自分の意見を出したり、プレゼンテーションで発表しなければならないパワーポイントでの資料作りを担当し、私達のグループは見事優秀賞を頂きました。

私は高岡短期大学で社会に出ていく為に必要な基礎能力や知識が学べて本当に良かったと感じております。また、人生経験を語って下さったり、就職活動時に親身になって相談にのって下さったそんな温かい教授方や、大切な友人に出会えて充実した2年間でした。

これからも仕事の上で、体力的にも精神的にもつらいことが多くあると思います。しかし、仕事で与えられる課題に対し、短大生活で学んだ知識を活かして自分の力を発揮していく面白さもあります。

私は短大生活で学んだ誇りと自信を胸に、「もっと自分を試す」姿勢を持ち続けながら自分を成長させていきたいと思っています。

現況 現在、西日本旅客鉄道株式会社で勤務しております。仕事内容は、みどりの窓口で切符を発売したり、旅行業商品を発売したり、自動券売機を管理しています。同期と励まし合いながら、仕事も一人暮らしも頑張っています。



平成15年9月ごろ 吉田ゼミのメンバーで in 太閤山ランド

回 想

国際・英語コース 平成17年卒業
田澤友里子

実家のある岩手県から富山の高岡短期大学に入学してはや二年。あっという間に卒業の時を迎えることとなりました。国立で、しかも評判の良い学校でしたから、親元を離れる不安よりも期待の方が大きかったのを覚えています。

社会人枠で受験した姉と同時に入学し、もともと英語を勉強していた姉は中国語コース、私は英語コースを専攻しました。初めての二人暮らしも、また、様々な土地から集まった同級生達との交友もとても楽しく、得るところの大きいものでした。

そして、私が一番この短大に期待していた勉強面、この点は残念ながら期待通りのものとはなりませんでした。数ある短大の中で偏差値も高く、少人数制を提唱しているこの学校でのハイレベルな英語の講義を受ける事ができるものと思っていましたが、高校の内容とさほど変わらず、パンフレットに提示されていた専門性の高い講義は二年次の後期の最終部分だけであったような気がします。また、年間を通して4ヶ月もの長期休暇や、突

然の休講などで満足な授業を受ける事ができなかったのも残念でなりません。この有料の二年間を使って自分自身で英語学習を進めることができたという点では、大いに有益な時間を過ごせましたが、肝心の短大ではいまいち煮え切ることができず、両親に対しても申し訳ないような気持ちです。

残る短大最後の一学年と二学年の皆さんには私と同様に感じる事が無いよう願わずにはられません。



略歴 平成12年3月 岩泉町立岩泉中学校卒業 15年3月 岩手県立岩泉高等学校卒業 17年3月 高岡短期大学地域ビジネス学科国際英語コース卒業



回想

国際・中国語コース 平成17年卒業
布目祥子

私は国際・中国語コースに所属して二年間を過ごしました。他のコースに比べると人数は少ないけれど、だからこそ仲良くなれたし、思い出もみんなで作ることができました。うちのコースは中国語に興味のある子、ない子含めて総勢18名。みんななかなか個性が強いのが特徴です。まじめか…？おとなしいか…？まともは…？この質問の答えはうちのコースのみんながよ〜く知っているはずですが。そんな私たちですが、実はなかなかバランスがとれたいいコースだったように思います。この二年間を振り返ってみて『楽しかった！』と思えることがその証拠になるのではないのでしょうか。みんなと参加したソフトボール大会や御印祭、おいしく出来たけど大変だった創己祭での恐怖のエンドレス餃子作り、文化の違いに戸惑いがいっぱいだった中国への海外語学研修、そして学校生活、毎日が充実していました。中国語コースは先生方もつわもの揃いで、授業ではおもしろい話をしてくださったことが印象に残っています。この学校にき

て、いつも一緒に笑っていられる友達とめぐり合えたことを本当にうれしく思います。春からの新生活がみんなにとって幸せでありますように。

短大の卒業が目前となったことを寂しく思うのと同時に、もうすぐ一人の社会人として働くことに対し、不安と期待を抱いて生活しています。4月からは、仕事もプライベートも充実した生活を送れるように頑張りたいと思います。

略歴 大門中学校卒業、県立小杉高校卒業、国立大学法人高岡短期大学卒業、日本損害保険査定株式会社入社



第5章 高岡短期大学の閉学と 富山大学・芸術文化学部 への移行を控えて

平成17年10月、高岡短期大学は、県内3大学の再編統合により富山大学・芸術文化学部に移行し4年制の大学になることとなった。蠟山昌一第3代学長の急逝により多難な時期の学長の任に当たったのが現在の西頭徳三第4代学長である。

国立大学は、独立行政法人化への動きとともに、全国各地での再編統合と、高等教育機関の大きな改革の流れの中にあった。そして、高岡短期大学では、平成16年4月に国立大学法人となり、それと平行して県内の国立3大学による再編統合への会議が持たれた。再編統合の会議の当初には、本学の特徴を生かした短期大学2年、専攻科2年、大学院2年の「2+2+2」構想もあった。しかし、数々の議論の末、新しく4年制の学部とし教育・研究と地域貢献、社会貢献を理念とする芸術文化学部をもって芸術・文化の向上に大きく寄与することを教育と研究の目標としている。

平成18年4月に、新学部の第1期生を迎えることになる。高岡短期大学が、22年の歴史の中で培ってきた多くの教育・研究の成果や実績、それとともに地域住民との交流による地域文化の向上と信頼をもとにした社会貢献等が継承され、さらなる展開と発展により高岡が芸術文化の発信地になることを祈念する。

産業造形学科は高校生にどのように見られていたのか

産業造形学科長 堀江秀夫

平成17年度入学生の卒業を最後に高岡短期大学が幕を閉じるにあたり、全国の高校生には産業造形学科はどう映ったのだろうかと思像してみました。

最近3年間(平成14・15・16年度)の産業造形学科と産業デザイン学科の受験生の出身県別人数を調べたものが表1です。なお、これは第一志望を基準にしており、東京都、京都府、大阪府の受験生が多いのは、東京都立工芸高校、銅舵美術工芸高校、大阪市立工芸高校の存在に拠っています。

高岡短大の自宅通学の範囲は富山県と石川県ですから、この両県を「地元」、それ以外を「全国」と定義すると、産業造形学科の受験生は地元43%に対して全国57%、産業デザイン学科は地元67%に対して全国33%です。産業造形学科が全国から注目されていることが分かります。

この理由は、全国的に工芸関連の学科が少なく国立のため学費が最も安いことが評価され、短大ではあるもの全国から学生が集まり、また社会人入学や外国人私費留学生も多くなっているのでしょう。一方、短大ゆえに平成16年度入学生の場合、51名中39名が女子学生(76%)となっています。

もう一つの理由は、1学年50人の学科定数に対して19人の専任教員が指導し、一般の4年生大学では見られない驚くほどのマンツーマンの実技指導が行われていることだと思われます。授業は、美術・デザイン教育およびものづくりの実技教育が主体ですが、ものづくりを「製作」ではなく「制作」と書き、単なる製造技術教育ではない総合的なものづくり文化教育を目指していることが評価されているのでしょう。

また、高岡短大は、3学科と専攻科3専攻で構成され、学生数約500人、教員数約60人です。所帯が小さいゆえにきめ細かい教育が行われ、学生・教員・職員の顔が見

える規模といえます。全1年生へのアンケート結果では、学内で「おはよう」の挨拶ができる家庭的な大学であることも魅力となっています。

一方、私の目からみた産業造形学科の学生は、ものづくり・デザイン好きで、大都市から見ると刺激に欠ける北陸の小都市に集まった青年なので、素朴で粘り強い学生が多く、授業態度は皆まじめです。汗まみれ・埃まみれになって実習を行う女子学生の姿は、テレビや新聞でみる若者像とは対照的で、感動的でもあります。

表1 出身都道府県別受験者数

都道府県名	産業造形	産業デザイン	都道府県名	産業造形	産業デザイン
北海道	5	3	滋賀	2	1
青森	0	0	京都	17	7
岩手	0	0	大阪	21	6
宮城	1	1	兵庫	10	10
秋田	0	0	奈良	2	2
山形	0	3	和歌山	2	0
福島	1	0	鳥取	0	0
茨城	0	0	島根	0	1
栃木	0	0	岡山	9	2
群馬	1	0	広島	1	5
埼玉	8	0	山口	5	2
千葉	5	1	徳島	0	3
東京	18	5	香川	7	3
神奈川	6	0	愛媛	0	3
新潟	7	9	高知	0	0
富山	79	121	福岡	8	4
石川	50	108	佐賀	1	2
福井	5	9	長崎	2	0
山梨	1	0	熊本	3	2
長野	4	9	大分	0	1
岐阜	3	5	宮崎	0	0
静岡	3	1	鹿児島	0	5
愛知	6	2	沖縄	0	0
三重	3	4	大学入学	3	0
			計	297	340

平成17年(2005)

主なできごと

(3.18)平成16年度卒業証書授与式並びに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.5)平成17年度入学式を挙行。(5.25)国立大学法人法の一部を改正する法律が公布され、三大学の再編統合が認められ、新・富山大学が10月1日に創設されることが認められる。(6.10)芸術文化学部創設記念東京シンポジウム開催。(6.15)合同学長選考会議で国立大学法人 富山大学の学長となるべき者の候補者として国立大学法人高岡短期大学学長の西頭徳三を選出。(7.21)初代芸術文化学部長候補者として産業デザイン学科、前田一樹教授を選出。(9.20)国立大学法人 高岡短期大学閉学式。(9.30)国立大学法人高岡短期大学閉学。(10.1)国立大学法人富山大学芸術文化学部に移行。)

回 想



産業デザイン学科長 森田 力

11年前、平成6年の7月に思いもかけず高岡短期大学産業工芸学科(当時)の教員になった。そして、その短大が富山大学と富山医科薬科大学と再編・統合する大きな節目の年度に定年になる。小生が生まれたのは皇紀2600年(1940年)、独立してデザイン事務所を作ったのが満30才、還暦を迎えたのは丁度2000年という節目の年、なぜか小生の年回りが節目の年に当たり不思議な因縁を覚える。デザイン界に関して昭和15年という年は、C. イームズ、E・サリネンがNY近代美術館において世界で始めて成形合板と金属パイプで製作した椅子を発表し、また、シャルロット・ペリアン女史が来日して当時の日本のデザイン界に大きな影響を与えたエポックメイキングな年でもあった。

着任の平成6年より数年前、平成元年に当時富山県に全国でもかなり早く設立された富山県インダストリアルデザインセンター(現、富山県総合デザインセンターで、当時富山県工業技術センター内にあった)の初代デザイン部長として着任していた。隣の高岡短期大学には小生の先輩の南塚豊先生(故人)、中学時代からずっと同級の宮崎先生、また、横山(故人)、矢口、沖先生など後輩が教員としておられた。昼食時間や休憩時間に度々訪問して珈琲を飲んだり、昼食を共にしたり、また、小関先生(名誉教授)が主催されていた中学、高校教員とのデザイン教育研究会についての議論に参加した。それから数年後、先輩の南塚先生がお亡くなりになり、急遽専門も年令もほぼ同じである小生に声がかかった。平成5年の大晦日の夜突然小関先生から電話があり、とにかくすぐに高岡にくるようにとのことであつた。そして次の年の7月には心の整理のつかないまま高岡短期大学への着任となってしまった。その後たった11年と短い期間であったがこの再編・統合という大きな節目の年度に退官となった。

その間、専攻科棟の施設・設備の計画、専攻科産業デザイン専攻のグループ長、平成12年の学科再編によるデ

ザイン学科の独立、デザイン学科学科長、小関先生の退官、蠟山前学長の死など、楽しかったこと、悲しかったことなど本当にいろいろなことに携わってきた。何にもまして今回の3大学再編・統合に関して新学部設置準備委員会の一委員として参画できたこと、そして新学部の理念、教育目標、カリキュラム、施設・設備、新採用教員の人事、高校に対する広報など多くのことに微力ながらも携れたことは小生にとって大変幸運であった。その中でも蠟山前学長の死に関しては本当に辛いものがあった。蠟山学長とはよくお酒を飲んだり、山にスキーに温泉にと御一緒させていただき、多くのことを学ばせていただいた。いまだにその死が信じられない。

一方、教育面において、着任後デザイン専攻だけでも300名近くの学生とふれ合ったことは、人生の内でも最も楽しいものであった。着任当初の小生は、もちろん若かったためではあるが、特に卒業制作時になるとよく徹夜して学生の手伝いをしたものである。つつい制作に熱が入ると自分で学生の道具を取り上げてしまっており、気がつくとき当の学生は横で寝ているといったこともしばしばであった。また、早朝大学に来ると段ボールにくるまって寝ている女子学生も多く、気をつけないと踏みつぶしかねない状態であった。現在は、学生の健康管理、大学の防犯・防災などから許されなくなっており致し方ない面もあるが、大学教育において何かが失われたような気がする。

小生は幸いにも企業、デザイン事務所に勤務し、自身のデザイン事務所の経営、地方自治体におけるデザイン振興のお手伝い、そして国家公務員として大学で教えるといった多方面の仕事に携わることが出来たという大変な幸運に恵まれた。小生にとって最後の職場であると思われる高岡短期大学での11年間は、今振り返るとあつという間であったが、実にいろんなことに携わることができて楽しい時間であった。

高岡短大の思い出

地域ビジネス学科長 近藤 潔

最初の印象

高岡短大には平成7年3月1日付けで赴任しました。千葉から富山まで冬の曇天に車で走ったことがなつかしく思い出されます。古い手帳をひっぱりだして見ると、2月27日でした。私はもともと造船が専門で、日本鋼管(現JFE)の造船部門(現ユニバーサル造船)の研究所に16年間勤務し、その後、コンピュータ関係の仕事を7年間行ってから高岡短大へ来ました。ほとんどが研究所勤務とはいえ、教壇にたった経験は一度もなく、また、富山県に来るのははじめてで、不安と期待のまじった複雑な心境でした。

高岡短大へは2月28日にはじめて行きました。このときの印象は「すばらしく美しい場所」というもので、この印象は現在も全く変わっていません。造船業の研究所は大体が工場の中にあり、設備・環境や勤務時間なども工場を基準にできていました。作業服にヘルメットをかぶり、安全靴をはいて朝早く全員で体操をすることから一日がはじまるのが普通でした。居室は大部屋でいろいろな人がいそがしく行きかうといったそれまでの環境から、ゆったりとした二上山の麓に建てられた静かで美しい校舎の中に移ったわけで、ある種のカルチャーショックを感じました。

自然を楽しむ

富山県人は身近にある雄大な自然についてあまり意識していないように見えます。身近にあるものよりも手に入りにくいものに憧れるという意味では、都会育ちの人が自然に憧れるのも富山の人が大都会に憧れるのも同じかもしれません。二上山がその一部であるかのような景観のキャンパスにはたくさんの樹木が植えられ、中でも中庭の都麻々(タブ)の木はその立派さに圧倒されます。また、あまり話題にもなりません。高岡短大の敷地には野性のキジが住んでいます。二上山周辺や小矢部川の河原、氷見線の敷地などかなり広範囲に渡って毎年春にはあの特徴のある声を聞くことができます。これはいまどき大変めずらしいのではないかと思います。ある春の日に二上山を歩いていると山道にキジの尻尾が落ちていました。めずらしいと思い、近づいて良く見ると、それは人が近づいたのであわてて道端のくさむらへ頭を

つつこんだキジが「頭かくして尻かくさず」の格言通りに尻尾を隠しきれなかったようでした。こんな風景が見られる大学の周辺は本当に自然が豊かなところですよ。

こちらでは、休日に3000メートル級の立山連峰に十分日帰りが可能で、山歩きの帰りに温泉に立ち寄る楽しみに魅せられました。また、学生時代以来30年ぶりにスキーを始め、北陸の暗いと嫌われる冬も、雪が降るのが待ち遠しい冬になってしまいました。特に立山の春スキーは本当に雄大で、こんなに手軽に山スキーが楽しめるのは全国的にみてもめずらしく、一級品だと思います。その証拠に、立山に春スキーに行くと、麓の駐車場にとめてある車のナンバーの多くは東京や大阪の都会のナンバーで、その中に富山ナンバーを見つけるのは難しいくらいです。このような全国レベルの自然の価値を地元の人が再認識し、自分達がまず楽しむことができればいいのにと感じてしまいます。

融合教育

次に、急に硬い内容で恐縮ですが、高岡短大へ来てからいつも問題となり、新芸術文化学部の理念にもなっている「融合」について書いてみたいと思います。建学時に「地域の多様な要請に積極的にこたえる」ために「伝統的工業製品の発展に寄与する工芸技術、実務的な経理・経営及び情報処理、並びに外国語及び国際問題等の分野における職業に必要な能力を育成すること」が目標として掲げられて以来、芸術的な分野とビジネス的な分野の融合が常に模索されてきました。平成11年度に作られたカリキュラム改革案をベースとしてまとめられた高岡短期大学改革案の中では、上記建学の趣旨を「現在われわれが有する人的資源の状態を考慮しつつ、それぞれの専門を『融合した』カリキュラムを作成し、社会の多様な需要に可能な限り応えること」と言い替えています。

融合をめぐる議論でいつもその反対意見としてだされるものは専門能力の低下と広く浅薄な知識に対する危惧です。スペシャリストを育てるのかゼネラリストを育てるのかという議論もこれに似ています。このような方向へ議論を持っていくと、どちらも必要だということにな

り、議論がそこで止まってしまいます。これは論点が静的・分析的であり、ダイナミックでないためだと思います。そうではなく、上記の建学の趣旨や改革案にもあるように地域や社会の「需要」に応えるということを論点とするならば、もっと柔軟な方向が可能になるのではないのでしょうか？事実、高岡短大のウリの一つは高い就職率です。これは、大学を人材育成機関として見る地域や社会のニーズに応えると同時に、確実に就職したい学生・受験生のニーズを満たしています。高岡短大は融合した教育を実施することでこのようなニーズを満たして来たと言えると思います。

これからは4年制の大学となり、卒業生の専門性は短大以上に高いレベルが求められるようになります。しかし、教育期間も倍となり、専門教育の時間も増えるわけです。ここでも建学の精神を生かし、社会や学生のニーズに応えるべく融合教育の理念を柔軟に貫くことが肝心であると思います。



高岡短期大学 2 冠達成

文部科学省公募事業 教育 GP

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択と今後の展開

—学内を学生作品で埋め尽くそうプロジェクト—

特色ある大学教育支援プロジェクトとは、文部科学省が平成15年度から実施している事業で、大学教育の改善に役立つ取組の中から特色ある優れたものをコンクール形式で選択して、この事例を広く社会に情報提供し、高等教育を改善することを目的としています。

高岡短期大学の取組は、平成16年度の公募において534件の応募の中から採択された58件の中の一つとして選定されました。その取組は「学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト」と題して、模擬社会としての大学環境を舞台に、生活者の視点をもった「作り手」と、自ら提案できる「使い手」の両者を育成することを目指したものです。

平成4年度に「指物法」という授業において学内食堂厨房のスツール作りをスタートとして、平成11年度には「家具制作」「造形工芸実習」「複合造形」等の授業で実践型制作と融合教育に重点をおいた授業を展開してきました。特に評価された点は、このような授業が全く新しい形式の教育形態であることや、履修学生の制作意欲・就職意欲を向上させ、実社会からの制作依頼など地域連携の誘発、教員のFDへの貢献、大学構成員全体の大学への愛着心・生活者意識の醸成などの効果をもたらした点です。また、こうした成果を導くために、実社会と同スケールの課題作り、大学が発注者となる模擬の受注制作、コンペ形式での競争原理の導入、学内外の第三者による評価等の工夫を行った点も高く評価されました。

採択された大学にはそのプロジェクトを推進するための支援として重点的に予算が配分され、さらなる展開が期待されています。本学ではこの支援事業費を使って本プロジェクトを継続し、これを持続的に進化させる学内環境装置の設計というべき案を計画しました。それは本学20年間の教育成果を効果的に運用し、学内教育環境の充実と学外との連携を推進することを目的とした案です。具体的には、学生作品写真のパネル、制作工程見本や優れた教材、学生が工夫したジグや固定具等の技能の具体物等を「教育の資産」として捉えて展示し、新しい発想や工夫を促す道具として活用する計画です。また地域の特殊技能者や企業のデータベースを構築し、これを媒体として学外との連携を推進する企画です。芸術文化学部として生まれ変わった後も、この取り組みが新学部の特色として引き継がれ、学生に対して誇れる財産になることを願っています。

最後に、今回の申請・採択そして支援事業を進める中で、日々実施している一つ一つの授業を魅力と話題性に富んだものに工夫し、その成果は大学全体としての大きな特色になるように蓄積して、次の飛躍のために活用していこうという意図が必要だと思いました。それは、こうした戦略的意識を持たない限り、大学は地域や学生から求められる存在として生き残る競争力を高めることができないのではないかと思えるからです。

産業造形学科教授 小松研治



文部科学省公募事業 現代 GP

平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択決定！

— 炉端講義プロジェクト —

国公立私大学等がテーマの趣旨・目的にそって確実な計画のもとに新たな大学教育改革を図ろうとしているもので、我が国の大学教育改革に資する取組を対象に重点的な財政支援を行うもの。

・平成16年度現代 GP…応募総数559件、採択数86件、採択率15.4%

- (1) 応募 部門 地域活性化への貢献テーマ
- (2) 申請 課題 『炉端談義』方式による地場産業活性化授業
—地域と一体となった授業計画・実施・評価委員会によるものづくり教育—
- (3) 実施責任者 産業デザイン学科教授 長山信一
- (4) 取組の概要

本学周辺地域の銅器・漆器など伝統的地場産業はここ数十年停滞気味である。本取組はこの停滞の原因が企業・自治体その他関係団体・大学間の連携の脆弱さにあると考え、地元関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」を組織して、地場産業振興に寄与できる授業展開を考えた。

鑄込み場の端に関係者が集まって実際にものにふれながら議論を深めるような形態を目指し、これを「炉端談義」方式と名づける(図1、写真1)。本取組では、一つの授業の成果が次の授業の素材となって活用される連鎖型授業を展開してゆくが、中間段階でも当該委員会が授業内容を点検評価して必要に応じ軌道修正を行う(図2)。また、地場産業の生の声を授業に反映し、大学の取組姿勢を地元へ説明することで公開性が高められる。

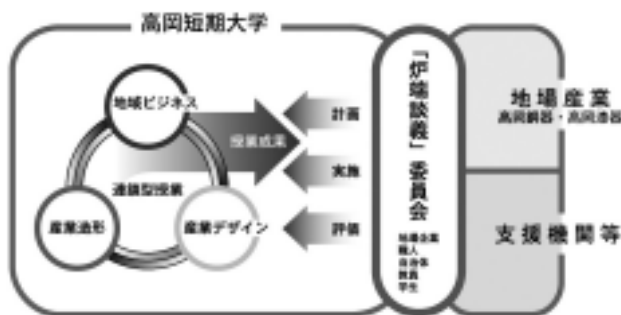


図1 「炉端談義」委員会の概念図

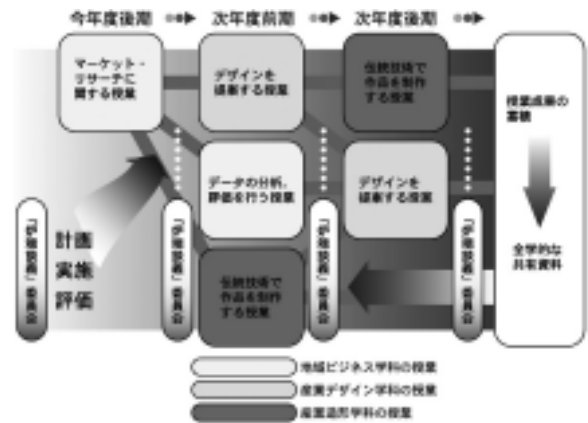


図2 「連鎖型授業」の概念図



写真1 「炉端談義」委員会のイメージ写真

本取組の申請・採択に関しては、西頭学長、水島副学長をはじめとする、本学教官・事務方の総力を挙げて取り組んだ結果が評価されたものである。

現在、2年間の授業計画の1年目を無事遂行しつつあり、前半部分である「炉端談義」プロジェクトの運用基盤となる、HPや共有データベースを立ち上げることができた。平成17年度は授業とプロジェクトをコラボレーションし、いかに成果を上げるかが課題である。

産業デザイン学科教授 長山信一

新・富山大学芸術文化学部創設記念

「東京シンポジウム」—日本の未来と、地方・芸術文化・教育—



新「富山大学芸術文化学部」創設にむけ、広報活動の第二弾として、6月10日(金)「東京シンポジウム」を開催した。長崎県立美術館長の伊東順二氏をコーディネーターとして、パネラーには、解剖学者で東京大学名誉教授の養老孟司氏、日産自動車常務デザイン本部長の中村史郎氏、建築家・慶応義塾大学教授の妹島和世氏、セイコーエプソン取締役相談役の安川英昭氏をお迎えした。

シンポジウムに先だち、西頭学長が500人を超える出席者に対して挨拶し、このシンポジウムは、パネラーの出演依頼から出席者の招待、ポスターの作成等、すべてが教職員の手づくりで行われた事を報告し、このイベン

ト自体が「芸術文化学部」がめざす教育の一環であることを強調した。引き続き、前田学長補佐から「芸術文化学部」の五つのコースとリテラシーの説明、高岡市という自然豊かで、伝統産業が生きづく街自体がキャンパスであり、この地から世界に向けて文化を発信する旨が述べられた。その後、新学部と高岡市の紹介ビデオが会場に流れシンポジウムが始まった。

最初に伊東氏が、この4月にオープンした「呼吸する美術館—長崎県立美術館」のコンセプトについてプレゼンテーションを行い、生活の中でアートにふれる機会が増えた今日、芸術の意味や領域をあらためて問い直す必要があると問題提起した。

養老氏は、芸術というのは、それぞれの個性に基づく身体感覚の世界と、言語のように共通認識を基盤とした概念の世界を、行き来し両者を結ぶものであるとし、都会には概念の世界が優先されているため、自然豊かな地方での芸術教育を行う優位性について語った。

日産自動車のデザインチームを率いてきた中村氏は、芸術は自分の世界を表現するもので、使い手の生活を豊かにすることを目指してきたデザインの世界とは違うと考えてきたが、最近では人に喜ばれるものを創るのがアートというふうに変化してきている。両者の境界があいまいになり、共に、人に対してメッセージを送るという点においては、アートもデザインも同じであることを強調した。



平成17年 6月10日(金)

世界中でプロジェクトを遂行中の妹島氏は、作品を紹介しながら、各地の風土や文化の違い、様々な人々とのコラボレーションの結果、自分の作品が変わってきたと語りつつ、各地域の固有の価値を認めてゆくことの大切さを指摘した。

長年、教育問題に取り組んできた安川氏は、学力だけではなく豊かな感性や礼節を兼ね備えたトータルな意味で人間力を向上させることが、国際化してゆく日本にとって重要であり、日本人の精神面の弱体化、学力の低下からくる国際競争力の低下という不安材料を挙げた。



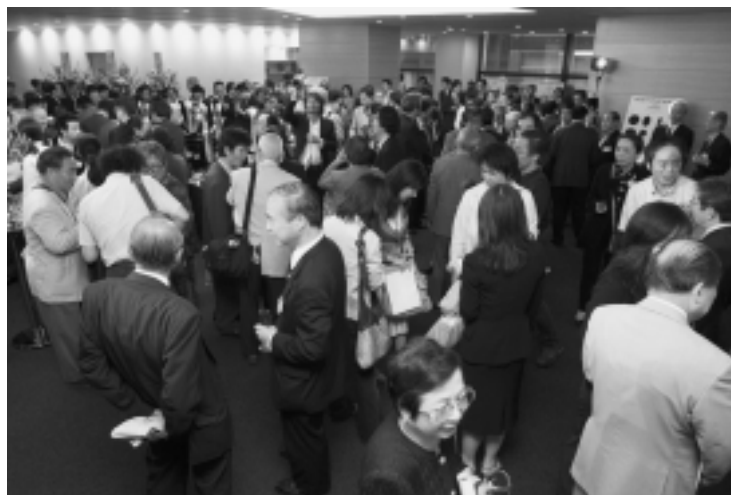
伝統的な技術は残っているが、地域や人の精神的な部分が疲弊しているという伊東氏の発言を受け、妹島氏は伝統産業が根付いた高岡に新学部ができる意義として、学生が直接、現場で職人と触れ合うことのできる環境にあること、それは、学生と職人の両者にとって有意義であると述べた。中村氏は、日産の人気車キューブのデザインは、走っていても止まっているように見えるという、車は速く走るといふ従来の価値観の転換から生まれたことを例にあげ、地域の独自性や美意識を大切にしてほしいと注文をつけた。養老氏は教育を料理にたとえ、包丁の使い方さえ知っていれば、何でも切ることができると基礎教育の大切さについて話した。人間力を向上させ、地域のもっていたスピリッツを形としてよみがえらせることが大切という伊東氏のまとめにより、新学部での教育と芸術文化創造に期待を寄せシンポジウムは終了した。

一部のシンポジウムに続いて二部の交流会を、隣接する会場で、パネラー、参加者や本学の教職員をまじえて催した。国会議員をはじめ様々な来賓の方の出席があり、6名の方にスピーチをお願いした。

村上光一氏(フジテレビ社長)、前田常作氏(武蔵野美術大学元学長)、谷公士氏(人事院人事官、元郵政省事務次官)、伊勢彦信氏(イセ文化基金理事長、イセ食品(株)会長)、濱田一成氏(地域文化デジタル化推進協議会顧問、元自治省消防大学校長)、佐藤孝志氏(前高岡市長)

その他、多数出席いただいた各界のオピニオン・リーダーの方々に、本学の教員が新学部の広報をおこなうとともに、卒業生の就職先としての人脈形成につとめた。会場には数多くの生花や祝電が届けられ盛会のうちに幕を閉じた。

産業造形学科教授 貴志雅樹



速 報 高岡短期大学 GP 第3弾達成！

文部科学省公募事業 現代 GP

平成17年度 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に8月5日採択決定！

平成16年度の教育 GP、現代 GP に引き続き、平成17年度の現代 GP に採択

現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)とは

文部科学省が平成16年度から実施している事業。社会的要請の強い政策課題に対応して設定されたテーマについて、各大学等から申請された取組の中から特に優れたものを選定、推進することにより、高等教育の活性化を目的とする。

・平成17年度現代 GP…応募総数509件、採択数84件、採択率16.5%

(1)応募部門

地域活性化への貢献テーマ

(2)申請課題

「非言語と言語の融合による地域国際化教育」－世界に開かれた高岡まちづくり－

(3)実施責任者

地域ビジネス学科教授 渡邊康洋

(4)取組の概要

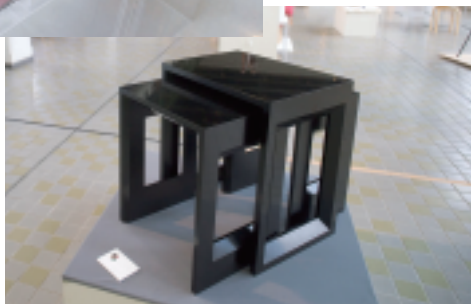
「グローバル観光戦略」(H14国交省)は、地域社会も国際化・外客誘致に向けて具体的に行動することを求めている。高岡短期大学では開学以来、地元の高岡市と密着した教育を行ってきたが、この取組は、地域づくりに関連した授業に地域組織・住民の参加を求め、さらに世界に開かれた教材「グリーンマップ」を導入することにより、この新たな地域ニーズに応えようとするものである。具体的には、これまで別学科、別区分で実施されてきた授業群を「国際化」という共通テーマで結んだ融合教育で実施し学生の国際感覚を育む。特に授業では地域に埋もれた文化資源を発掘した後、在住外国人や市担当部署との共同作業により、地域情報の国際的発信を可能にする。さらに地元ボランティアガイドの指導の下で、英語・中国語による観光資源の紹介体験をすることにより言語、および非言語でのコミュニケーション能力を育成する。この取組により、高岡短期大学は、高岡市を真に世界に開かれた都市へと発展させ、また国際的人材養成によりその国際化に総合的に貢献する。

■卒業・修了制作展



ビジュアルデザイン
・BI計画

漆工・指物作品
(ネストテーブル)



木工・建築モデル



金工・鍛金作品



漆工・挽物、髹漆

■ 学生作品



金工・彫金作品



漆工・挽物作品(上)と割物作品(下)



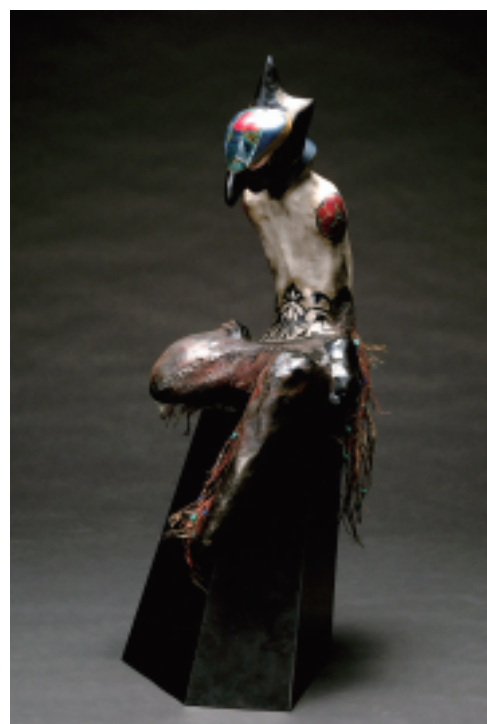
金工・込型铸造作品



漆工・乾漆(蒔絵箱)



金工・鍛金作品



漆工・乾漆彫刻

■ 学生作品



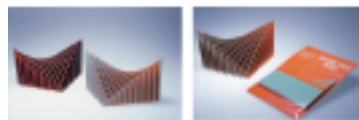
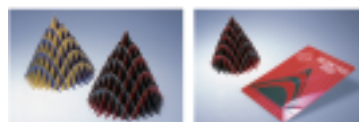
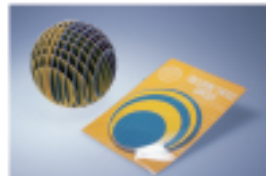
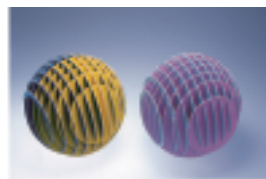
木工・指物作品



木工・指物作品



木工・木彫作品(上) 挽物作品(下)



プロダクトデザイン・ジオメトリックグリッド



プロダクトデザイン・マガジンラック



インテリアデザイン・一人暮らし用ダイニングキッチン

卒業式



第1回卒業式(昭和63年3月)



第18回卒業式(平成17年3月)



■ 祝賀会・謝恩会



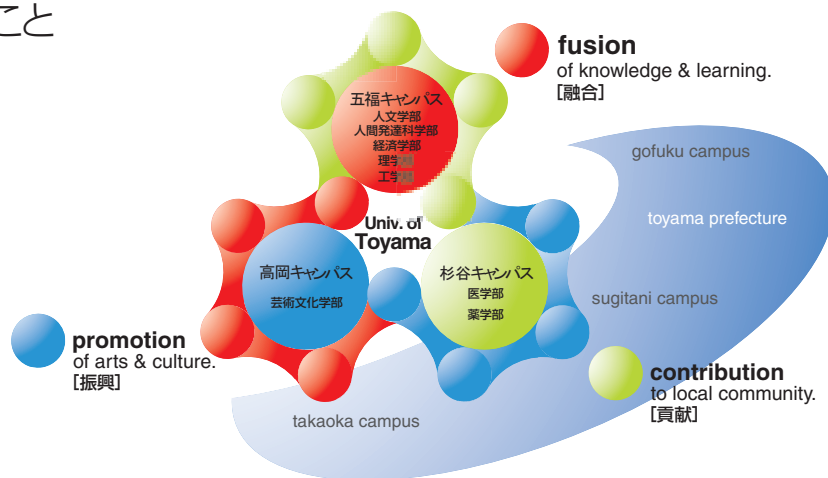




「知性と感性の融合」

21世紀社会が求めること

それは芸術文化の振興です。
 新大学は、8学部を有する総合大学。
 各専門領域の拡充と有能な人材の育成、
 そして芸術文化面での生涯教育と
 産学連携の充実を図ります。



新富山大学

富山大学+富山医科薬科大学+高岡短期大学

「芸術文化学部」 高岡キャンパスに誕生

21世紀社会が求める人材

それは、ひとつの専門性の習熟を超えて、
 柔軟な発想で物事を捉え、それぞれの関係性を踏まえて、
 新たな提案ができる“総合力”を持った人材です。
 新学部を構成する“融合教育プログラム”を実施し、
 21世紀を支える人材の育成を行います。



芸術文化学部 5コースの特徴

主な進路

●1 造形芸術コース Fine arts

POINT!
世界と交流。
メディアアートが
学べます。

造形美への鋭い感性と斬新な発想

- インタラクティブアートを中心としたメディアアートの研究
- 伝統的表現技法と情報技術を融合した創造活動
- 芸術を社会に生かせる人材の育成
- ▶ 主な教育対応分野
絵画・彫刻、アーティスティックイラストレーション、パブリックアート、メディアアート、映像、高い芸術性・伝統の技に力点を置いた造形、インタラクティブアート、映像など

伝統と時代の先端を担う芸術家

画家、彫刻家、造形作家、絵本作家、メディアアーティスト、イラストレーター、ゲームクリエイター、映像制作、美術科教員、生涯学習指導者、画廊経営、美術館・博物館学芸員など

●2 デザイン工芸コース Crafts & Design

POINT!
創作するだけでなく
マネジメントできる
アーティストを
育てます。

工芸とデザインの融合

- デザインとの融合による工芸素材と技法の革新
- 工芸を生活者の視点からとらえ、新しい生活用具の提案
- 伝統的工芸を生かした、プロダクトデザインへの提案
- ▶ 主な教育対応分野
クラフトデザイン、プロダクトデザイン、インテリア・家具デザイン、アクセサリデザイン、照明デザイン、日常生活における使い易さ、生産、流通、販売に配慮した工芸、素材や手作りの良さを活かしたプロダクトデザインなど

工芸作家、デザイナー

工芸作家、クラフトデザイナー、インテリア関連企業、生活用具メーカー、自動車業界、家電業界、建材メーカー、住宅メーカー、アルミ製造、樹脂製造、モデル制作、福祉機器製造、医療機器メーカーなど

●3 デザイン情報コース Design & Communication

POINT!
レッスンのいらない
デザインコース。
コンセプト考案力を
育てます。

構想・発想力とコミュニケーション能力

- デザインを創り出す力、構想・発想の川上を重視
- あらゆる状況に対応するコミュニケーション能力を育成
- 国際感覚を持つジャパンデザインの指導
- ▶ 主な教育対応分野
デザインマネジメント、コンセプトメイキング、サステナブルデザイン、エコデザイン、パッケージデザイン、サインデザイン、WEBデザイン、構想やシステムに力点を置いたプロダクトデザインなど

情報化社会の旗手

グラフィック・パッケージデザイナー、プランナー、WEBデザイナー、企業の企画・開発・戦略部門、映像制作、出版・宣伝広告、印刷、インターネットプロバイダー、自動車関連企業、家電メーカーなど

●4 造形建築科学コース Architectural Design & Product Technology

POINT!
富山初。
待望の建築分野
ついに誕生。

富山県内大学初の建築系・製品科学系コース 建築家、インテリアデザイナー

- 芸術的感性と工学に基づく建築空間と製品の提案
- 美しさ、機能性、安全性、環境・持続性、経済性の総合的視座
- 芸術文化に根ざした建築設計能力、製品設計能力の育成
- ▶ 主な教育対応分野
建築設計、構造設計、環境工学、人間工学、金属材料、高分子材料、製品設計・製造技術、ユニバーサルデザイン、環境デザイン、インテリアデザインなど

建築士、建築施工技師、家具・インテリアデザイナー、住宅、建材、建築設備、金属製品、プラスチック製品などの製造および販売企業、バリアフリー関連企業など

●5 文化マネジメントコース Arts Management

POINT!
文化マネジメントは
新しい分野で
将来性の
高い職業です。

文化行政、文化産業の柱となる専門性

- 日本文化の魅力を発掘し活用する視点を育成
- 地域の文化振興を担う行政を推進する人材を養成
- 広く芸術文化の継承と発展を図る人材を育成
- ▶ 主な教育対応分野
語学を活かしたコミュニケーションビジネス、企画力が求められるマーケティング、文化事業プロデューサー、文化行政、アーツマネジメント、博物館学、美学、伝統文化、保存・修復、観光事業、地域活性化、まちづくりなど

創造系マネージャー

文化事業プランナー、ビジネスコンサルタント、プロデューサー、文化施設、官公庁、NPO・NGO、旅行代理店、流通、製造、マスコミ、出版など

■思い出の断片







結言

記念誌の刊行、そして新たな旅立ち

高岡短期大学長 西頭徳三

『高岡短期大学二十二年の歩み』は、多くの執筆者のご協力により、他の類誌に決して見劣りしない、充実した内容のものとなった。私は幸運にも、高岡短期大学運営の最後の時期に参画し得たものの、本学創設時の困難な状況やその後の血の滲むような努力については、推測の域を出なかった。

記念誌の企画に当たり、二つの狙いがあった。ひとつは、本学22年間の歩みの「資料」を出来るだけ収集すること。もうひとつは、本学関係者のみならず、誰もが「楽しく読める」ものにすること。今、本誌を手にして、執筆者各位の情熱のこもった記録を読むことで、その22年間の紆余曲折が、時間的な流れとして、また社会的な横の繋がりをもって、より深く理解できた。

この記念誌は、所期の目的を十分達したものと思う。本誌(第一分冊回想編)と第二分冊をあわせ読むことで、高岡短期大学の教育研究の展開を少しでも理解していただければ幸いである。改めて、当時の状況についてご執筆いただいた皆様に厚くお礼を申し上げたい。また、本学の記念誌編纂委員会の横田勝委員長をはじめとする委員各位に深く感謝したい。

記念誌の刊行は、決して高岡短期大学の終焉を意味しない。平成17年10月1日、高岡短期大学は、新・富山大学の「芸術文化学部(四年制)」に生まれ変わり、再出発する。新・富山大学は、人文、人間発達、経済、理工、医、薬の7学部に加え、新・芸術文化学部を加えて8学部から構成される。芸術文化学部は本学の22年間に及ぶ教育研究上の実績を踏まえ、新たな教育研究分野に挑戦する。ちなみに、「文化マネジメントコース」では、潜在的な地域文化を掘り起こし、新たな地域文化を構想できる人材の育成を目指す。また、県内初の「造形建築科学コース」では、芸術的感性と工学的知識・思考力を併せ持ち、新たな建築文化を提案できる人材を社会に送り出す。

高岡短期大学では、新たな旅立ちに向けて、大学院の設置など教育研究体制の充実について議論を深めている。その意味で、この記念誌は、新学部の出発点における「教育研究実績の記録」であり、今後における芸術文化学部の発展度合いを測る「評価基準」になるものと位置づけている。

編集後記

高岡短期大学が誕生してから平成17年で満22年が経ちます。今年の9月30日には高岡短期大学の看板が下ろされ、10月1日から富山大学芸術文化学部として再出発することになっています。今年の4月には高岡短期大学最後の入学生・第20期生を受け入れましたが、この学生達は10月から富山大学高岡短期大学部に在籍し、一部の学生で専攻科に進学する人達が4年後に専攻科を修了すると同時に、基本的には同短期大学部は幕を閉じることになります。このように高岡短期大学に取りまして今年には大きな節目を迎えることになりました。これを機会に22年間の高岡短期大学に色々な形で関わってこられた方々や学生たちの思い出話、そして色々な出来事を記念誌として後世に残そうとの話が持ち上がり、記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」を編纂することになり、平成15年の暮れに委員会が発足した次第です。記念誌は第1部、回想編、第2部、資料編の2分冊にすることが決定されました。初期の予定では記念誌の発刊を平成18年3月とすることになっていましたが、平成17年9月に高岡短期大学の閉学式を挙げる計画が持ち上がり、急遽記念誌の第1部、回想編だけでも閉学式に間に合うよう、そしてこれを参列される方々に進呈してはどうかとの声が上がりました。記念誌の発刊を半年間短縮することにより多くの難題が出てくることは予想されましたが、敢えてこれを実現するべく予定変更に踏み切りました。この予定変更に伴い、回想文を執筆していただいた方々や編纂作業に携わられた編纂委員各位の積極的なご賛同・ご協力の下で辛うじて、予定通り記念誌、第1部が9月30日に刊行されることになった次第です。なお、第2部、資料編につきましては予定通り平成18年3月の発刊を目指して編集作業を進めております。

何分にも限られた期間内での作業のため記念誌の内容に付きまして、編纂委員会の責任に帰します訂正すべき点が多々出てくるかと予想されます。その節は訂正箇所等をご指摘いただき次の機会にこれらを改めまして皆様方にお伝えいたしたいと考えています。

高岡短期大学の閉学と新しい富山大学芸術文化学部への移行の時期を契機に編纂されました、この記念誌を末永く座右の書としてお留め頂き、高岡短期大学時代の思い出を懐かしんで頂けましたならば記念誌編纂委員一同この上ない喜びといたすところであります。

学内外に渡る多方面の多くの方々、西頭学長を初めとする学内教職員の皆様、そして卒業生や在学生の皆様からのご協力・ご支援を頂きましたことに心から感謝いたしております。(横田記)

記念誌編纂委員会

(委員) 安達博文 磯部祐子 岡田文之助 沖 和宏 久保欣五 高橋誠一
立浪 勝 堀江秀夫 ○宮崎雅司 村上恭子 ◎横田 勝 吉田俊六
(◎委員長、○副委員長)

(編集補佐) 長柄亜希子

高岡短期大学二十二年の歩み

第1部 回想編 ― 二上キャンパスへの想い ―

平成17年9月30日発行

編集 記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」編纂委員会

発行 国立大学法人 高岡短期大学

〒933-8588 富山県高岡市二上町180番地

電話 0766-25-9111(代表)

印刷 能登印刷株式会社

表紙デザイン 専攻科 産業デザイン専攻1年生 岸本万由子

イラスト 産業デザイン学科 平成17年卒業生 武田 翼

産業デザイン学科 2年生 小瀬真利子



平成17年度
高岡短期大学入学式

武友 隆
高岡短期大学
入学式
平成17年度

高岡短期大学
TAKASAKI UNIVERSITY